

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化的景観に関する調査研究 ((1)-①-ア)		
【事業概要】 文化的景観の概念整理など基礎的な研究に資するために、ケーススタディとして高知県四万十川流域を対象とした文化的景観の調査研究を行うとともに、景観の体系化や保護策に関する研究を行う。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	文化遺産部長 山中敏史
【スタッフ】 平澤 毅、清水重敦、恵谷浩子 [以上、文化遺産部]、宮城俊作 [奈文研客員研究員]			
【主な成果】 四万十川流域において実施した文化的景観に関する調査研究によって得た内容の整理・考察や、開催した研究集会等を通じて、文化的景観の在り方や調査研究法、保護施策等に関する検討を行った。また、文化的景観に関連する国内外の情報の収集を行い、その成果を資料集としてまとめ、関係者、関係機関等に配布した。			
【年度実績概要】 1. 四万十川流域の文化的景観に関する調査研究 四万十川流域の文化的景観に関する現地調査を行うとともに、調査対象地域である津野町・橿原町・中土佐町・四万十町・四万十市の各行政担当者等との協議を通して、各地域個別の文化的景観保存活用計画を作成した。以上の作業の過程で、調査や保存計画立案の手法や在り方について検討した。 2. 情報の収集 文化的景観の基礎的・体系的な調査研究の一環として、文化的景観に関する基礎的な情報（国内外の関係法令、各重要文化的景観選定地の概要、文化的景観に関連する文献等）の収集を行った。収集した情報は『文化的景観基礎資料集【未定稿】』としてまとめ、文化的景観研究集会（第1回）で参考資料として配布した。 3. 研究集会の開催 「文化的景観とは何か？－その輪郭と多様性をめぐって－」というテーマで、2009年2月20・21日に平城宮跡資料館講堂で文化的景観研究集会（第1回）を開催し、計195名の参加を得た。発表は、基調講演2件（1.都市保全学と文化的景観、2.景観生態学と文化的景観）基調報告2件（1.文化庁の取組、2.国土交通省の取組）、重要文化的景観に関する取組の実績と課題に関する事例報告5件の計9件である。発表後、これらの講演者及び報告者、並びに座長の計9名による総合討議を行った。これに合わせ、『文化的景観研究集会（第1回）講演・報告資料集』を作成した。			
			
研究集会の様子			
【実績値】 研究集会等開催数：1回（資料集①、②）、参加者数：地方自治体職員（文化財、都市計画、企画ほか）等、195名。 論文数：5件（③～⑦） 研究発表件数：5件（⑧～⑩）			
【備考】 ①文化的景観プロジェクトチーム編『文化的景観研究集会（第1回）講演・報告資料集』、2009.2 ②文化的景観プロジェクトチーム編『文化的景観基礎資料集【未定稿】』、2009.2 ③恵谷浩子「川に関わる信仰の地形－四万十川流域を対象として－」、『奈良文化財研究所紀要』2008、2008.6 ④恵谷浩子「輪島市三井町の『アテ』－林業の文化的景観－」、『遺跡学研究』第5号、2008.11 ⑤平澤毅「重要文化的景観としての森林」、『日本林学会大会学術講演集』2009、2009.3 ⑥恵谷浩子「『四万十川流域の文化的景観』における林業の評価」、『日本林学会大会学術講演集』2009、2009.3 ⑦恵谷浩子「世界遺産と文化的景観」（京都市文化史民局主催「世界遺産登録における現状と今後」についての勉強会）、2008.12 ⑧恵谷浩子「四万十川流域の文化的景観」、文化的景観研究集会（第1回）、2009.2 ⑨平澤毅「重要文化的景観としての森林」、第120回日本森林学会大会、2009.3 ⑩恵谷浩子「『四万十川流域の文化的景観』における林業の評価」、第120回日本森林学会大会、2009.3			

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4115-10

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No. 1

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 「四万十川流域の文化的景観」に関する調査研究の一環として行った保存計画の策定を通じ、文化的景観の調査から保存計画立案までの在り方や手法に関する検討ができた点が高く評価できる。また研究集会等を通じ、関係者間で文化的景観の情報を普及・共有するとともに、様々な観点からの議論を通じて文化的景観の有効性と課題についての検討を進めることができた。当研究を通じ、未だ視点、論点が定まらない「文化的景観」の概念を、各地域の関係者と検討できたことは、文化財保護行政を遂行する面で有効であり、将来に結びつく重要な成果を上げることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				
備考 研究成果については、学会や学術雑誌等への公表を順調に行うことができた。本年度開催した研究集会には195名の参加を得、文化的景観の課題等に関する活発な議論ができた。また参加者の内97%の参加者から有意義であったという評価を得た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	四万十川流域を対象とした調査研究や情報の収集、研究集会等の実施、学会や学術雑誌等での研究成果発表などを十分実施できた。これらの成果を踏まえつつ、今後も文化的景観に関する調査研究を通じて、文化的景観の保護を図る上での課題を見極めて、その解決策等についての検討を引き続き図っていく。特に、文化的景観研究集会に関しては、地方公共団体や専門家等からの評価も高く、次年度以降もこれを開催していくべき事業であると判断される。文化的景観は地域住民の視点・意見を把握することが必要であるが、さらに、住民に対する普及・啓発も重要な視点であるため、今後は住民を対象とした場での研究成果の公表等も目指していく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化的景観に関する事例調査や研究集会等を通じて、文化的景観の課題等に関する検討を当初の計画通り進めることができた。本年度の成果を受け、次年度以降は、文化的景観基礎資料集の刊行や四万十川流域の文化的景観に関する調査研究のとりまとめを進めていく。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4115-20

(様式 1)

業務実績書

研究所 No. 2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	民俗技術に関する調査・資料収集 ((1)-①-イ) 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 ((1)-④)		
【事業概要】 風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等についての調査研究を行い、その成果をデータベースとして構築する。さらに研究協議会の開催を通じて各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。 また文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった民俗技術に関する基礎的な調査研究を実施し、保護施策に資するデータを提供する。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	部長 宮田繁幸
【スタッフ】 俵木 悟（無形文化遺産部）、大島暁雄、服部比呂美（客員研究員）			
【主な成果】 無形民俗文化財の伝承実態調査として民俗芸能・民俗行事の現地調査を実施し、公開の実態調査としては、各種芸能大会の調査を実施した。無形民俗文化財研究協議会では、民俗技術をテーマに取り上げ、関係者と協議することができた。無形文化遺産の記録情報データベースについては、すでに 3000 件以上のデータを収集・整理済み、現在も補足調査が進行中で、着実に実現に向かっている。			
【年度実績概要】 無形民俗文化財の伝承実態の調査として、鹿児島県いちき串木野市大里で行われる国指定重要無形民俗文化財「市来の七夕踊」について、とくに稽古を中心とした伝承過程と、それを通じて形成される社会関係に重点を置いて調査を行った。また、埼玉県鶴ヶ島市脚折に伝わる民俗行事「脚折雨乞」について、とくに造り物の龍蛇の製作、その材料の収集等に注目して調査を行った。さらに、近年継続して行っている安房地方のみこの踊りについて、千葉県伝統文化伝承事業実行委員会の映像記録作成事業に協力するかたちで現地調査を行った。 公開の実態調査としては、関東、九州の各ブロック別民俗芸能大会、京の郷土芸能祭、秋篠音楽堂伝統芸能公演等の公開確認調査を実施した。 新たに保護の対象となった民俗技術に関する調査としては、三河地方の伝統的な花火の一種である「立物花火」について、愛知県新城市東新町を中心に、立物花火に関する技術と、伝承主体である「立物花火保存会」の実態調査等を行った。 無形民俗文化財研究協議会は、その第 3 回を「無形民俗文化財に関わるモノの保護」をテーマとして、2008 年 11 月 20 日に開催した。その成果は報告書として刊行し、関係者に配布するとともに、HP 上で広く一般に公開している。 さらに、無形文化財・無形民俗文化財・文化財保存技術に関して作成された記録類の所在情報データベースを構築することを目指し、伝統文化活性化国民協会と協力して全国の地方自治体にアンケート調査を実施した。			
【実績値】 論文等掲載数 1 件 (①) 研究会等発表件数 2 件 (②、③) <参考指標> 報告書刊行 1 件 (④)			
【備考】 ①俵木 悟「無形文化遺産の映像記録作成の意義と課題－無形の民俗文化財を中心に－」 『地域政策研究』45 地方自治研究機構 08.12.1 ②宮田繁幸「日本の無形文化遺産の保護と普及」 富川世界無形文化遺産 E X P O 国際学術会議 08.10.11 ③俵木 悟「日本の無形民俗文化財の映像記録事業」 韓国国立文化財研究所ワークショップ（韓国国立文化財研究所） 08.10.16 ④『第 3 回無形民俗文化財研究協議会報告書』 2009.3.31			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4115-20

自己点検評価調書

研究所 No. 2

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	無形民俗文化財研究協議会では、民俗技術をテーマとして取り上げ、時宜に適ったテーマとして大きな反響を得た。実地調査としては、無形民俗文化財の伝承状況の調査の一環として、単なる学術的な調査にとどまらず、映像記録作成事業に協力するなど、伝承に実質的に貢献する、応用性のある試みも行った。また、無形文化遺産の記録情報データベース構築作業に着手し、公開へ向けての準備を進めるなど、記録作成事業の現場で役立ててもらおうことが期待できるという点で、応用性ある成果と言える。以上の状況を総合的に判断して、Aと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、目的を順調に達成した。調査研究活動については、今後もこのペースを維持していきたい。平成 21 年度は、通常の調査研究活動に加え、無形文化遺産の記録情報データベースを完成させ、公開することを予定している。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4125-10

(様式 1)

業務実績書

研究所 No. 3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東アジアの美術に関する資料学的研究 ((1)-②-ア)		
【事業概要】 日本を含む東アジア地域の美術を対象に、人とモノとが複雑に絡み合って多様に展開する価値形成のしくみを解明することを目指す。研究にあたっては、より質の高い資料の提示が求められる時勢に対応して、新しい技術・精度・信頼性・網羅性など必要な条件を満たすこれからの美術資料のあり方や可能性を探り、資料の収集・蓄積・公表等においてそれを具体的に実現することに留意している。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長 塩谷 純
【スタッフ】 中野照男（副所長）、勝木言一郎、山梨絵美子、田中 淳、津田徹英、綿田 稔、皿井 舞、江村知子（以上、企画情報部）、相澤正彦、吉田千鶴子、三上 豊、森下正昭（以上、客員研究員）			
【主な成果】 (1) 情報資料の収集のための調査：大村西崖・黒田清輝に関する国内外での調査。 (2) 美術史研究のためのコンテンツの形成：『日本絵画史年記資料集成（15世紀）』のデータ入力。『日本美術年鑑』所収の古美術文献データの校正作業。 (3) 研究会の開催：「満谷国四郎デッサンに関する研究会」「平安時代の彫刻史と建築史の学際的研究会」の開催。オープンレクチャーの開催。			
【年度実績概要】 (1) 情報資料の収集のための調査 美術批評家・美術史家の大村西崖に関する資料調査（塩谷・吉田）。洋画家黒田清輝に関するフランス、ベルギーでの現地調査（田中）。 (2) 美術史研究のためのコンテンツの形成 平成 22 年度に『日本絵画史年記資料集成（15世紀）』を刊行すべく、古美術展カタログ等に散在する情報を抽出して統合するための仮登録作業を継続して行っている。事業の発展性を考慮し、絵画に限らず 15 世紀の年紀を有するものすべてを登録することを旨としたため、今年度は約 1,000 件（うち絵画は約 500 件、ともに重複データをふくむ）の情報を集め、統合作業にとりかかった（綿田）。また『日本美術年鑑』所収の古美術文献データの校正作業を行った（皿井）。 (3) 研究会の開催 企画情報部研究会として、5 月 7 日に「満谷国四郎デッサンに関する研究会」を角田拓朗氏（神奈川県立歴史博物館）・廣瀬就久氏（岡山県立美術館）を発表者、赤木里香子氏（岡山大学）、杉野文香氏（倉敷市立美術館）をコメンテーターとして開催、5 月 28 日に「平安時代の彫刻史と建築史の学際的研究会」を富島義幸氏（滋賀県立大学）・皿井舞を発表者、山本勉氏（清泉女子大学）をコメンテーターとして開催した。またオープンレクチャーを本研究と関連させ、「人とモノの力学」というテーマのもと 10 月 3・4 日に開催した。			
【実績値】 学会誌等への掲載論文数 2 件（①②） 学会等での発表件数 3 件（③～⑤）			
【備考】 ① 綿田稔「自牧宗湛（下）」 『美術研究』395 2008.8 ② 綿田稔「聚光院の成立時期についての一仮設—障壁画作期議論の前提として」 『美術研究』396 2008.11 ③ 皿井舞「『国風文化論』再考のための試論」 企画情報部研究会 2008.5.28 ④ 勝木言一郎「鬼子母神の源流をたずねる」 企画情報部オープンレクチャー 2008.10.3 ⑤ 田中淳「写真のなかの芸術家たち—黒田清輝を中心に」 企画情報部オープンレクチャー 2008.10.4			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4125-10

自己点検評価調書

研究所 No. 3

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は「満谷国四郎デッサンに関する研究会」および「平安時代の彫刻史と建築史の学際的研究会」と、テーマを設定した研究会を二度開催し、所外の研究者を交えて新たな知見を得ることができた。また黒田清輝の足跡に関するフランス、ベルギーでの現地調査を行い、その知見をオープンレクチャーで発表するなど、調査研究の成果の公開にも努めたため、Aと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	『日本絵画史年記資料集成(15世紀)』刊行に向けてのデータ入力も順調に進み、また『黒田清輝関連フランス語資料集』の次年度刊行に向けても、フランス、ベルギーでの現地調査を行い、有益な成果を得られた。また黒田清輝のような美術家にくわえ、今年度より着手した大村西崖をはじめとする美術批評家・美術史家の調査研究も、今後積極的に推進していきたい。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4125-20

(様式 1)

業務実績書

研究所 No. 4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近現代美術に関する総合的研究（(1)・②-イ）		
【事業概要】 多様化する現代美術の動向の調査研究を含め、日本近代美術の研究資料のあり方、研究の手法の開発、研究成果の公開の仕方を研究し、文化財行政に寄与することを目的としている。そのため、具体的には、第1にこれまで未公開の基礎資料の収集整理の上、データ化等の公開にむけた調査研究を行う。第2に資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開を進める。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 山梨絵美子
【スタッフ】 田中 淳、塩谷 純、山梨絵美子（以上、企画情報部）、三上 豊（客員研究員）			
【主な成果】 未公開資料の調査研究として、黒田清輝関連資料、笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進め、既刊の『日本美術年鑑』所載データをウェブ上に公開するための校正を行った。資料にもとづく研究協議、成果公開としては、『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』をまとめ、また、研究会を通じて近現代美術に関する研究協議を行った。			
【年度実績概要】 1 未公開資料の収集整理とデータ化に向けた調査研究では以下の3件を行うことができた。 （1）平成18年2月、および19年10月に黒田清輝夫人である黒田照子のご遺族である金子家から寄贈を受けた黒田清輝関係写真等の資料を整理し、画像をデータ化し、保存公開に向けて準備を進めた。その成果の一部を黒田記念館で「写された黒田清輝Ⅱ」として展示公開した。 （2）笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理を進めた。 （3）既刊の『日本美術年鑑』の文献データの校正を行い、ウェブ上で公開するための作業を行った。 2 資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開促進としては、以下を行った。 （1）『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』の刊行に向け、編集、校正作業を行った。 （2）近現代研究協議として、以下を行った。 平成20年5月7日 「五姓田派デッサン群の明滅 黒田記念館蔵満谷国四郎デッサン群を支点として」角田拓朗（神奈川県立歴史博物館）、「満谷国四郎の画業における、黒田記念館蔵デッサン群の位置について」廣瀬就久（岡山県立美術館）コメンテーター：赤木里香子（岡山大学）、杉野文香（倉敷市立美術館） 平成20年7月23日 「有島生馬とフォトグラファー田中敏男」田中淳、「藤雅三《破れたズボン》再発見報告」 高橋秀治（愛知県美術館）			
【実績値】 研究会等発表 3件（①～③） 論文掲載数 3件（④～⑧） 報告書刊行 1件（⑨）			
【備考】 ①山梨絵美子 「五姓田派の位置—江戸と明治のはざままで」神奈川県立歴史博物館 08.9.14 ②山梨絵美子 「失われゆくものの自覚—高橋由一、小林清親を中心に」国際基督教大学 09.1.31 ③山梨絵美子 1920—40年代日本近代洋画における東洋美術の再評価 韓国国立中央博物館 09.3.25 ④塩谷 純 「菊池容斎—雅俗を越えて」『激動期の美術』ぺりかん社 08.10 ⑤塩谷 純 「床の間の上の裸婦—小林古径「髪」より」 『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』東京文化財研究所 09.4 ⑥田中 淳 「「統制」と「国際」の時代—戦中期の有島生馬を中心に」 同上 ⑦山梨絵美子 「渡辺豊次郎／豊洲—「画家」になれなかった「絵師」」『激動期の美術』ぺりかん社 08.10 ⑧山梨絵美子 「黒田清輝のフランス留学」 特集陳列「黒田清輝のフランス留学」図録（東京国立博物館、09.3） ⑨『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』 東京文化財研究所 2009.4			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4125-20

自己点検評価調書

研究所 No. 4

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研究会発表数	論文掲載数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	未公開資料の収集整理とデータ化、および近現代視覚芸術に関する調査研究ともに順調に推進することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	報告書の印刷・刊行に遅れを生じたが、全体としては中期計画に従って実施することができた。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4125-30

業務実績書

研究所 No. 5

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	美術の技法・材料に関する広領域的研究 ((1)・②・ウ)		
【事業概要】 文化財にかかわる諸分野との提携による作品の多角的研究を目指す。具体的には作品を構成する材料や用いられた技法、制作の過程・作品の成り立ち、生成されてから今日にまでそれがどのように受容され、あるいは伝来してきたかなどを、関係の文献史料や、あるいは作品そのものに対する科学的分析（X線撮影など）を援用しながら解明し、文化財についてより深く考究していくことを目的としている。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 綿田 稔
【スタッフ】 田中 淳、山梨絵美子、勝木言一郎、津田徹英、塩谷 純、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部）			
【主な成果】 本研究は美術作品が基盤としている材料・技法・制作の過程等を文献史料あるいは作品に対しての科学的手法による分析を援用しながら解明することを目的とする。本年度は天平時代の脱活乾漆像、近世の絵巻などについて実地調査するとともに、諸々の関連資料の調査を行い、情報収集に努めた。また、奈良時代史料にあらわれた彩色語彙の収集につとめ、データベースをホームページ上で公開し、逐次、その更新に努めた。			
【年度実績概要】 本年度は脱活乾漆技法の解明のため大阪市立美術館蔵の作例を調査した。また近世絵画の作例として「虫の歌合絵巻」（兵庫県個人蔵）を調査した。その他、山口県立美術館蔵の雲谷派縮図を精査し、大津市歴史博物館において仏教彫刻関係の情報収集を行った。また「東アジアの美術に関する資料学的研究」と共同で黒田清輝滞欧期関係資料の現地調査をおこなった。また、美術工芸品の彩色を考えてゆくうえで、史料にあらわれた関係語彙とその使用例を総覧することを目的に彩色関係資料データベース（語彙・史料編）のデータ集積を行った。集積に際しては『大日本古文書』などの公刊史料（活字本）をもとに、その中から奈良時代史料にあらわれた彩色関係の語彙を抽出し、分類したうえで、彩色語彙データベースをホームページにおいて公開するとともに、逐次、更新して精度を上げることに努めた。さらに前年度に寄贈を受けた資料のうち、技法材料研究ととくに関わりの深い柳澤孝旧蔵資料の公開に向けての整理に着手し、当面の暫定的な整理を終えた。			
【実績値】 彩色関係資料データベース 入力件数 1,285 件 論文掲載数 1 件 (①) 発表件数 2 件 (②,③)			
【備考】 ①津田徹英「滋賀・錦織寺不動明王立像の周辺―不動明王彫像の額上髪にあらわれた花飾りへのまなざし―」『仏教芸術』299号 pp.53-87 08.7 ②津田徹英「天平の脱活乾漆技法をめぐる二、三の問題」 総合研究会 東京文化財研究所地階セミナー室 08.9.2 ③皿井 舞「仏像の修理・修復―サンフランシスコ・アジア美術館の脱活乾漆像をめぐる―」 第32回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「“オリジナル”の行方―文化財アーカイブ構築のために」東京国立博物館平成館大講堂 08.12.7			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4125-30

自己点検評価調査書

研究所 No. 5

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	論文掲載数	発表件数	データ集積数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明を行うべく、実作例と史料の双方からアプローチを行っている。計画3年度としては十分な成果を得られたため、Aと判断した

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に計画通りに進捗したと考える。次年度以降も一層の深化が期待でき、計画的に調査研究・史料収集・データ整理を継続したい。

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4125-40

(様式 1)

業務実績書

研究所 No. 6

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究 ((1)-②-エ)		
【事業概要】 古都に所在する寺社が所蔵する歴史資料や書跡資料について継続的、悉皆的に整理・写真撮影・調書作成等の調査を行い、現存資料の実態の把握に努め、その調査成果を目録、データベース等により、また重要資料については翻刻を行い公開する。このような調査は文化財の総合的研究の基礎をなすものであり、その上で記載内容を分析して文化財の歴史的・特徴等を研究し、日本の歴史、文化の研究に資する。調査にあたって撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者等の研究に供する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	歴史研究室長 吉川 聡
【スタッフ】 渡辺晃宏、馬場 基、市 大樹、山本 崇、浅野啓介、古藤真平〔以上、都城発掘調査部〕、綾村 宏〔奈文研客員研究員〕			
【主な成果】 興福寺については、数年にわたり準備を進めてきた『興福寺典籍文書目録第四巻』を発刊した。東大寺についても、先年の調査で発見した東大寺大勸進文書集についての研究成果を、『南都仏教』に掲載した。これは重源以後の東大寺大勸進に関する基礎史料である。大宮家については、「大宮家文書データベース」のデータを追加し、成巻文書分すべてを公開した。また、当研究所所蔵の「関野貞日記」の釈文を公表した。			
【年度実績概要】 本年度は、興福寺・薬師寺・東大寺・唐招提寺・氷室神社大宮家所蔵の書跡資料・歴史資料調査を行った。興福寺調査は、調査した資料について再確認・写真撮影を進め、第 71 函～第 80 函、長持函、東金堂文書、国宝重要文化財指定資料の目録を『興福寺典籍文書目録第四巻』(奈良文化財研究所史料第 83 冊)として刊行した。写真撮影は、マイクロフィルムで第 89 函・第 90 函を、またブローニー版、一部は赤外線写真で長持函の一部を撮影した。薬師寺調査は、第 31 函～第 53 函の調書作成と、第 24 函の写真撮影を継続して実施した。 東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第 4 号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。第 5 函・第 15 函の写真撮影を実施し、また中村準一寄贈文書の第 98 函・99 函を調査して、目録データをパソコンに入力した。また、第 2 函 1 括 1 号の「東大寺大勸進文書集」について調査研究を行い、その成果を『南都仏教』に掲載した。 唐招提寺所蔵資料については、惣倉所在の近代書類を調査し、全体の再分類作業を行った上で、第 2 函のラベル貼り・目録データのパソコンへの入力作業を実施した。氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で共同研究を行い、未成巻文書の調書作成、写真撮影を実施した。また、公開データベース「大宮家文書データベース」のデータを追加し、成巻文書分すべてのデータを公開した。 当研究所所蔵の資料については、「関野貞日記」の翻刻作業を進め、関野貞研究会編『関野貞日記』(中央公論美術出版、2009 年)の一部として出版した。 その他調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査などに協力した。			
【実績値】 論文等数：論文 3 件 (①～③)、発表件数 1 件(④) 収集資料点数 興福寺：調書原本校正資料点数 511 点、写真撮影資料点数 301 点 薬師寺：調書作成資料点数 328 点、写真撮影資料点数 47 点 東大寺：調査データ入力資料点数 1265 点、写真撮影資料点数 584 点 唐招提寺：調査データ入力資料点数 62 点 大宮家：データ入力資料点数 403 点、写真撮影資料点数 92 点			
【備考】 ①奈良文化財研究所『興福寺典籍文書目録第四巻』奈良文化財研究所史料第 83 冊、2009.3 ②吉川聡・黒岩康博・清水重敦「世路之志保里」「当用日記」(明治 32 年～38 年)『関野貞日記』関野貞研究会編、中央公論美術出版、2009.2 所収 ③吉川聡・小原嘉記・遠藤基郎「東大寺大勸進文書集」の研究『南都仏教』91 号 2008.12 所収 ④吉川聡「東大寺大勸進文書集」奈良文化財研究所第 19 回総合研究会口頭発表 2009.1			



東大寺大勸進文書集

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4125-40

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No. 6

1. 定性的評価

観点	正確性	適時性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		
備考 古都に所在する寺社には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、極めて適時性が高い調査である。そのため、着実に中断なく全容を把握する調査を実行しており、正確性・継続性に優れている。このような調査が今後の所蔵者の管理の基礎となり、また研究の基礎となるものであり、発展性がある。今年度は特に、数年来の調査成果を目録・翻刻・論稿等の形で公表できた。以上より A と判定した。						

2. 定量的評価

観点	調査対象箇所数	論文等数	発表件数	データ入力件数		
判定	A	A	A	A		
備考 調査対象箇所数は、年度計画に掲げた寺社をすべて調査した。論文等数・発表件数・データ入力件数は、それぞれ目標値 1 件・1 件・500 件であり、実績値はそれと同等または上回っているため、A と判定した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺、東大寺、薬師寺、氷室神社大宮家の調査は計画通り実施した。その成果の公表も、興福寺は『興福寺典籍文書目録第四巻』、東大寺は「東大寺大勸進文書集」の研究、大宮家は「大宮家文書データベース」の追加、という形で実現することができた。また、関野貞関係資料についても、日記の調査・翻刻を進めて、『関野貞日記』の中にその成果を収めることができた。以上の進捗状況を総合的に判定して A とした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は堅調に実現し、その成果も多く公表できた。特に、『興福寺典籍文書目録第四巻』では永年の調査研究成果を公表できた。しかし、興福寺には、まだ目録刊行に至っていない資料・未調査の資料が多く存在するので、今後はそれらの資料の調査を積極的に推進していく必要がある。他の寺社についても、成果の公表ばかりではなく、地道な調査研究を継続的に推進する必要がある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究 (1)-②-オ)		
【事業概要】 わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復元に資するため、古代建築の諸構法についての再検証（調査研究）を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	建造物研究室長 窪寺茂
【スタッフ】島田敏男、箱崎和久、黒坂貴裕、大林潤、番 光、渡邊晃宏〔以上、都城発掘調査部〕、清水重敦〔文化遺産部〕、西田紀子〔企画調整部〕、速水侑子、山下秀樹〔以上、奈良県〕他計 19 名（但し古代建築の諸構法に関する研究協力者として）			
【主な成果】 文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像をデジタルデータ化し、一般公開を推進した。また、古代建築の諸構法に関する再検証作業を継続的に実施し、研究成果を研究集会等で公表した。このほか、昨年度実施した出雲大社境外社建築等の調査研究成果を報告書として刊行・配布した。			
【年度実績概要】 1. 所内で保管している文化財建造物保存修理時の「建造物現状変更説明」資料のうち、1962 年度から 1964 年度分のワード文書化、図版調整を行い、その成果を本文編と図版編に分けて刊行・配布した。また、同じく所内保管の文化財建造物等の撮影ガラス乾板（長野県分）を整理して、画像をデジタル化した（デジタル化は外注）。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。なお、建造物の基礎データ収集等を目的とした京都府近代和風建築総合調査を受託し、この報告書刊行にあたり、編集及び原稿執筆・図面調整を担当した。 2. 古代建築の諸構法に関する調査研究では、殿堂構造に関する建築遺構資料の収集・整理・研究と、扁額形状と建築構造との相関を究明するための調査研究などを行い、2009 年 3 月 8 日開催の研究集会で発表するとともに、参加した研究協力者等と討議した。これらの研究成果については、次年度以降に報告書として刊行する予定である。 3. 上記の扁額に関する研究成果を、現在工事中の平城宮第一次大極殿の復原扁額に反映させ、この意匠設計作業について協力した。なお、この件で、2008 年 5 月 26 日に所内検討会を開催した。このほか、同復原工事の施工に関する技術面での援助・助言を随時行った。 4. 昨年度実施した出雲大社境外社建築に関する調査研究内容を取り纏めた報告書の刊行・配布を行った。 5. 海外関連事業として、日中韓の 3 国の文化財研究所における共同研究の一環として、2008 年 5 月下旬に韓国ソウル市等で、次年度国際シンポジウム開催へ向けた会議に参加した。また、一昨年度刊行したベトナム・ドゥオンラム村集落調査報告書の英語版報告書を刊行し、海外関係機関等にこれを配布した。			
【実績値】 論文等数 13 件（公刊図書 5 件①～⑤、論文等 8 件⑥～⑬） 学会等発表件数 1 件（⑭） 保管建造物関係資料整理：写真乾板デジタル化 918 枚、現状変更資料入力等 1962～1964 年分 古代建築研究現地資料収集：扁額現地調査 9 件 古代建築勉強会・研究会等開催件数 2 件 保管建造物資料の外部者利用数：乾板写真 4 件 118 枚、建造物保存図 4 件 64 枚、摺拓本 2 件 49 枚			
【備考】 ①Nara National Research Institute for Cultural Properties『Hamlet Survey Report Duong Lam Village』2009.2 ②奈良文化財 研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1962～1964（本文編）』2009.2 ③奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1962～1964（図版編）』2009.2 ④奈良文化財研究所『出雲大社境外社 社殿等建造物調査報告』2009.3 ⑤京都府教育委員会『京都府近代和風建築総合調査報告書』2009.3 ⑥山下秀樹ほか 3 名「扁額の意匠と構造—平城宮第一次大極殿正殿扁額の復原考察」⑦清水重敦ほか 2 名「古代寺院建築における特異な基壇・平面とその構造」⑧大林潤「境外社の造替と建築形式—出雲大社境外社の調査より—」 ⑨西田紀子「高知県中芸地区の森林鉄道遺産」（⑥～⑨『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6） ⑩清水重敦「古社寺保存会草創期に作成された建造物等級表について」『日本建築学会計画系論文集』2008.9 ⑪清水重敦「伊東忠太と『日本建築』保存」『明治聖徳記念学会紀要』2008.11 ⑫窪寺茂「日中韓における文化財建造物の保存—建造物修理の昨今」『NPO 木の建築 22』風土社 2008.12 ⑬清水重敦「奈良県における古社寺保存と関野貞」『関野貞日記』中央公論美術出版 2009.2 ⑭清水重敦「古代の寄棟造構造と加守廃寺六角堂 加守廃寺六角堂復元研究その 2」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2008.9			



研究集会の開催風景



研究集会の開催風景

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4125-50

自己点検評価調書

研究所 No. 7

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	S	A	A	A	
備考 文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「建造物現状変更説明」「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は近年継続的に実施しており、地味な作業ではあるが高く評価できる。古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づきつつ、これを発展させるため、新たに「技術・技法」等の視点を加え研究するもので、独創性のある研究内容といえる。たとえば、扁額の研究では、古代における扁額形状の特徴を建築構造との関連で究明し、この成果を現在復原工事実施中の大極殿の扁額復原に直接反映させた。これまでの扁額研究は額字を中心とした研究に留まっており、これを建築構造と関係付けた研究ははじめてのものである。よって、独創性の観点からSと評価できる。受託業務として行った京都府近代和風建築総合調査では、近代化の中で発展した諸建築の具体相を解明することができ、わが国の近代和風建築の研究と保存に対する多大な貢献をなす成果をあげた点は、高く評価してよい。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	資料整理数				
判定	A	A				
備考 論文等数では、目標値の6件に対して14件に達し、Aと判定した。資料整理数は特に目標値を掲げていないが、十分に成果が認められるので、Aと判定した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施でき、この継続的な実施によって、本事業の重要性が認知されるようになっている。受託の形態で行った京都府の近代和風建築総合調査において諸建築の具体相を究明できたことは、委託者はもちろん、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できるとともに、将来実施する建築調査に反映できる。古代建築の研究に関しても、予定通りの成果をあげている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は地味な作業であるが、これを継続させることの重要性をさらにアピールさせたい。後者の研究は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究として、今次中期計画に掲げたものであり、研究成果をより高める必要がある。今年度の成果を元に、次年度においては本研究の実施にさらに力を注ぎたい。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4135-00

(様式 1)

業務実績書

研究所 No. 8

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究 (1)-③)		
【事業概要】 わが国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成をおこなう。 また、無形文化遺産分野についての国際的研究交流として、アジア地域を中心とした諸外国の関係機関との具体的交流を推進するための協議を行う。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	部長 宮田繁幸
【スタッフ】 宮田繁幸、高桑いづみ、飯島 満、俵木 悟、菊池理予（以上、無形文化遺産部）			
【主な成果】 文化財保護委員会が作成した音声資料、各地の博物館が所蔵する龍笛・能管のX線透過撮影、文化財保護法による工芸技術の保護の実態等について調査研究をおこない、無形文化遺産部所蔵音声資料の整理をおこなった。無形文化遺産分野での国際的研究交流では、韓国国立文化財研究所の無形文化遺産研究室と合意書を結び、研究員の相互派遣を実施した。			
【年度実績概要】 文化財保護委員会が作成した音声資料について調査を行い、能楽囃子の記録について、第3回無形文化遺産部公開学術講座で「音声資料からたどる能の変遷—文化財保護委員会作成の音声資料をめぐって—」と題して発表した。 徳川美術館、岩国市吉川史料館、下関市立長府博物館、愛媛県村上水軍博物館などが所収する龍笛・能管についてX線透過撮影調査を行い、従来とは異なる工法を発見した。従来の工法から、龍笛の破損箇所を修理する過程で能管が派生した、という説が生まれていたが、この説に再考を要する発見である。 無形文化遺産部所蔵の音声資料、昭和期の歌舞伎写真を整理し、写真家梅村豊氏(1923－2007)撮影の歌舞伎舞台写真の整理を進めた。 工芸技術に関しては、特に染織分野に関する文化財保護法における工芸技術の保護の変遷について調査した。また、名物切の一種として室町時代に舶載された黄緞と海気の受容、葛布製造の現状、明治以降の京焼について調査研究を行い、成果を公表した。 近年の伝承に変化が著しい宝生流と喜多流の謡曲について、昨年度にひきつづき、流儀の最長老今井泰男師による番謡、近藤乾之助師ほかによる番謡、喜多六平太師による番謡の音声記録を行った。 無形文化遺産分野での国際的研究交流では、韓国国立文化財研究所の無形文化遺産研究室と合意書を結び、研究員の相互派遣を実施した。			
【実績値】 論文等掲載数 4 件 (①～④) 研究会等発表件数 7 件 (⑤～⑪) ＜参考指標＞ 記録作成数 38 件 (宝生流謡曲 25 喜多流謡曲 3 講談 10) 公開講座の開催 1 件			
【備考】 ①飯島満「文楽忠臣蔵四段目の由良助」『歌舞伎 研究と批評』40 pp28-44 歌舞伎学会 08.9.10 ②飯島満「文楽の映像資料」『国文学解釈と教材の研究 臨時増刊』 pp56-61 至文堂 08.10.25 ③高桑いづみ「X線透過撮影による能管・龍笛の構造解明」『無形文化遺産部研究報告』第3号 pp.1-20 09.3 ④菊池理予「無形文化遺産としての工芸技術 - 染織分野を中心として -」『無形文化遺産研究報告』第3号 pp.37-60 09.3 ⑤菊池理予「黄緞と海気に関する歴史的研究」 第 23 回国際服飾学術会議 08.8.21 ⑥高桑いづみ「X 線調査から判明した能管・龍笛の制法」東洋音楽学会第 59 回大会 08.11.16 ⑦菊池理予「無形文化遺産としての工芸技術 - 染織分野を中心として -」第 3 回総合研究会 08.12.2 ⑧飯島満「古典芸能の伝承と変遷—人形浄瑠璃文楽の場合—」第 32 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 08.12.7 ⑨高桑いづみ「能島村上家伝来横笛の歴史的意義」 瀬戸内しまなみ大学「水軍講座」08.12.14 ⑩飯島満「日本の音声資料と SP レコードの五十年」 第 3 回無形文化遺産部公開学術講座 08.12.16 ⑪高桑いづみ「明治・大正・昭和の名人たち」 第 3 回無形文化遺産部公開学術講座 08.12.16			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所
自己点検評価調書

処理番号 4135-00

研究所 No 8

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表数等				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	プロジェクト3年目で、文化財保護委員会作成資料の調査、選定保存技術の調査も成果をあげつつある。文化財保護委員会作成記録に関しては調査結果の一部を公開学術講座で公表した。これは他の機関が行っていない調査で独創性が強く、公共性も高い。また、管楽器のX線調査は、地方での講演会も開催されるほど地域の高い関心をよんだ。今後も、この調査を継続する予定である。以上の観点を総合してAと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、その進捗度、内容において一定の水準を維持しつつ、比較的堅調に実現できたと考える

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究		
プロジェクト名称	平城宮跡第一次大極殿院地区南面回廊跡（第 431 次）の発掘調査（(1)-⑤-ア）		
【事業概要】 平城宮第 1 次大極殿院地区における発掘調査。調査地は第 1 次大極殿院を区画する南面築地回廊の東端部にあたり、調査面積は約 630 m ² 。調査期間は平成 20 年 4 月 1 日～同年 6 月 26 日である。調査成果は平成 20 年 6 月 7 日に開催した現地説明会で公表し、約 700 名の参加があった。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 森川 実、深澤芳樹、島田敏男、山本 崇 [以上、都城発掘調査部]、牛嶋 茂 [企画調整部]			
【主な成果】 平城宮第 1 次大極殿院南面築地回廊の発掘調査で、南面における最後の調査である。既往の調査成果を参考に発掘調査を進めたところ、回廊の基壇上で礎石の痕跡を確認し、基壇縁では雨落溝などを検出。大極殿院の広場では奈良時代前半に敷設された礫敷を検出し、それらが 2 度にわたり敷き直されていたことを再確認した。また、築地回廊基壇では掘込地業を確認し、回廊芯を掘り残していることも明らかとなった。			
【年度実績概要】 平城宮第 1 次大極殿院南面築地回廊の発掘調査で、南面築地回廊（SC5600）における最後の調査である。調査範囲は東楼 SB7802 の東隣に残っていた未調査地で、調査面積は約 630 m ² 。発掘調査は平成 20 年 4 月 1 日にはじまり、同年 6 月 26 日に終了した。調査成果は次のとおり。 ① 第一次大極殿院南面築地回廊の礎石の痕跡を、推定どおりの位置で確認。南側の礎石据付痕跡は水田の拡張によって大きく損なわれ、一部は完全に失われていたが、北側は良好に遺存。築地回廊の柱間が従来説（4.55m）どおりであることを再確認した。また基壇の南北縁では、雨落溝や基壇外装の抜取溝などを検出した。 ② 築地回廊の基壇が、掘込地業と版築とで築成されていることを再確認。掘込地業は回廊芯を掘り残していることも判明し、東面築地回廊と構造が類似することが明らかとなった。 ③ 大極殿院内庭部では、下層礫敷～上層礫敷に対応する混礫層・砂層を確認。隣接地における既往調査（第 77 次）の所見と一致。 なお、遺物量はきわめて少なく、土器類はごく少量である。 瓦は回廊廃絶時に廃棄されたもので、築地回廊の所用瓦とみられる。			
			
南面築地回廊の基壇近影（第 431 次）			
【実績値】 論文等数 (論文 2 件①②) 発表件数 (現地説明会 1 回、報道発表 1 回) 出土品 (軒瓦・丸・平瓦 50 箱、土器（整理箱） 5 箱、木製品 5 点) 記録作成数 遺構実測図 19 枚、遺構写真 20 枚			
【備考】 ① 森川実「平城宮第一次大極殿院（平城第 431 次）の調査」『奈良文化財研究所紀要 2009』（予定） ② 「平城宮第一次大極殿院の調査（平城第 431 次）」『奈文研ニュース』No.30			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-10

自己点検評価調書

研究所 No. 9

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				
備考 適時性・・・現地説明会を開催し、調査成果を迅速に公表した。 継続性・・・既往の調査成果を踏まえ、大極殿院回廊の構造解明に寄与した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考 論文等数・・・『奈良文化財研究所紀要 2009』において調査成果を報告 発表等件数・・・現地説明会（平成 20 年 6 月）にて今次調査の成果を速報						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	大極殿院回廊の構造解明に寄与し、その成果を論文・発表で迅速に公表した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	適切かつ順調に調査を行い、南面築地回廊の調査を終了させた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮跡第一次大極殿院地区西面回廊跡（第 432 次）の発掘調査（(1)-⑤-ア）		
【事業概要】			
平城宮第 1 次大極殿院地区における発掘調査。調査地は第 1 次大極殿院を区画する西面築地回廊の南端部にあたり、調査面積は約 940 m ² 。調査期間は平成 20 年 4 月 1 日～同年 10 月 26 日である。調査成果は平成 20 年 9 月 28 日に開催した現地説明会（第 436 次と合同）で公表し、約 730 名の参加があった。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】			
森川 実、深澤芳樹、島田敏男、山本 崇、和田一之輔、浅野啓介、高橋千奈津〔以上、都城発掘調査部〕、牛嶋 茂〔企画調整部〕			
【主な成果】			
平城宮第 1 次大極殿院西面築地回廊の発掘調査。既調査範囲に挟まれた未発掘地での調査で、築地回廊の基壇及び雨落溝などを検出。この調査に続いて実施した第 436～438 次と併せ、西面築地回廊の全容を明らかにした。			
【年度実績概要】			
平城宮第 1 次大極殿院西面築地回廊南端部の発掘調査。調査範囲は西面築地回廊における未調査地のひとつで、南は第 296 次、北は第 192 次に接している。調査面積は約 940 m ² 。発掘調査は 2008 年 4 月 11 日にはじまり、8 月～9 月下旬までの中断を経て同年 10 月 22 日に終了した。調査成果は次のとおり。			
④ 第一次大極殿院南面築地回廊の基壇を約 50m にわたり確認。基壇上の礎石据付痕跡は水田時の削平によってすべて失われていたが、奈良時代前半に比定される掘立柱塼 SA13404 の柱穴を検出。このうち 1 基には柱根（コウヤマキ材）が残っており、柱の下には瓦や埴を礎板として据えた状況を確認した。			
⑤ 調査区北東部で築地回廊の東雨落溝や基壇外装の抜取溝などを検出。雨落溝には上層・中層及び下層のものがあり、都合 2 度の改修を受けている。一方、基壇の西半部では削平著しく、西雨落溝および外装の抜取溝はすでに失われていた。			
⑥ 平城宮初の埴仏が出土。原位置を失っているが十二尊連坐埴仏の一部で、山田寺出土のそれと同原形品とみられる。			
なお、遺物量はきわめて少なく、土器類はごく少量である。瓦は回廊廃絶時に廃棄されたもので、築地回廊の所用瓦とみられる。また、埴は掘立柱塼の柱穴に礎板として用いられたものである。			
			
第 432 次全景（南西から）			
【実績値】			
論文等数	（2 件①②）		
発表件数	（現地説明会 1 回、報道発表 1 回）		
出土品	（軒瓦・丸・平瓦 175 箱、土器（整理箱）8 箱）		
記録作成数	（遺構実測図 39 枚、遺構写真 30 枚）		
【備考】			
① 森川実・和田一之輔・今井晃樹・大林潤「平城宮第一次大極殿院西面回廊（平城第 432・436・437 次）の調査」『奈良文化財研究所 紀要 2009』（予定）			
② 「平城宮第一次大極殿院西面回廊（平城第 432・436・437 次）」の調査『奈文研ニュース』No.31			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-11

自己点検評価調書

研究所 No10

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				
備考 適時性・・・第 436 次と併せて現地説明会を開催し、調査成果を迅速に公表した。 継続性・・・既往の調査成果を踏まえ、第 436～438 次と併せて大極殿院回廊の構造解明に寄与した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考 論文等数・・・『奈良文化財研究所紀要 2009』において調査成果を報告 発表等件数・・・現地説明会（平成 20 年 9 月）にて今次調査の成果を速報						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第 436～438 次と併せて大極殿院西面築地回廊の構造解明に寄与し、その成果を論文・発表で迅速に公表した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	適切かつ順調に調査を行い、後続の調査（第 436 次・437 次）と併せて西面築地回廊の調査を完了した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮跡第一次大極殿院地区西面回廊跡（第 436 次）の発掘調査（(1)-⑤-ア）		
【事業概要】 平城宮跡の整備構想のひとつである第一次大極殿院地区の復原整備事業に先立ち、復原に必要な基礎資料を得るために発掘調査を行う。調査対象地は西面築地回廊の中ほどにあたる（平城第 28 次調査区と平城第 315 次調査区の間）。 調査面積は 880 m ² で、調査期間は平成 20 年 6 月 26 日～同年 11 月 18 日である。調査成果は現地説明会や紀要などで公表した。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎 信二
【スタッフ】 西口寿生、和田一之輔、浅野啓介、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部〕、牛嶋 茂、中村一郎〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 西面築地回廊の東雨落溝、掘立柱塀、凝灰岩暗渠を確認した。これらの遺構の重複関係を詳細に検討した結果、西面築地回廊の変遷や改修の具体的な様相などを明らかにすることができた。			
【年度実績概要】 西面築地回廊に関連する遺構として、東雨落溝を検出した。東雨落溝は拳程度の大きさの河原石を使ってつくられており、その石の大きさなどから 3 時期に分けられ、具体的な様相を把握することができた。すなわち、雨落溝の造り替えは前段階の雨落溝を破壊するといった大きな改変ではなく、その上に石を詰めたりあるいは石を組んだりするのみであり、改修という表現が適当である。 奈良時代中葉には西面築地回廊は取り壊され、かわりに掘立柱塀がつくられる。この塀の柱穴を検討した結果、柱穴の底には地盤沈下を防ぐために礎盤として磚や瓦を敷いているといった地業の具体相が明らかとなった。さらに、柱根が 3 本遺存していたので、柱の直径が約 50 cm であること、樹種はコウヤマキであることなどがわかった。 以上、築地回廊の様相解明及び今後の整備復原事業にとって有益な基礎資料を多々得ることができた。			
写真 東雨落溝(南から)			
東雨落溝の改修の様子がよくわかる。すなわち、側石には拳大の円礫を用いるいっぽう、溝の中には小礫を敷き詰める。さらに、その後の改修時には、溝を埋めるように拳大の円礫を詰めている。 なお、東雨落溝に東接する礫敷きは、大極殿院内部の内庭バラス敷きである。			
【実績値】 論文等数（論文 1 件④、解説等 2 件①②、その他 1 件③） 発表件数（記者発表 1 回、現地説明会 1 回） 出土品（瓦磚類コンテナ 240 箱分、土器類コンテナ 5 箱分、柱根 3 点） 記録作成数（実測図 35 枚、写真（4×5）315 枚）			
【備考】 ① 都城発掘調査部「平城第 432 次・436 次調査-記者発表資料-」2008.9 ② 都城発掘調査部「平城第 432 次・436 次調査-現地説明会資料-」2008.9 ③ 和田一之輔「平城宮第一次大極殿院西面築地回廊の調査」『奈文研ニュース No.31』2008.12 ④ 森川実・和田一之輔・今井晃樹・大林潤「第一次大極殿院西面築地回廊（平城第 432・436・437 次）の調査」『奈良文化財研究所紀要 2009』（予定）			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-12

自己点検評価調書

研究所 No11

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考 適時性：第一次大極殿院回廊の復原整備に寄与 発展性：平城宮の全体像解明への手がかりを得た。 継続性：平城宮における発掘調査成果の蓄積						

2. 定量的評価

観点	公表数	調査概報				
判定	A	A				
備考 公表数：記者発表及び現地説明会を開催 調査概報：迅速に調査成果を公表						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第 436～438 次と併せて大極殿院西面築地回廊の構造解明に寄与し、その成果を論文・発表で迅速に公表した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、目的を順調に達成した。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-13

業務実績書

研究所 No12

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮跡第一次大極殿院地区西面回廊跡（第 437 次）の発掘調査（(1)-⑤-ア）		
【事業概要】 第 1 次大極殿院築地回廊 S C 1 3 4 0 0、掘立柱塀 S A 1 3 4 0 4、築地回廊東辺の雨落溝、内庭部の礫敷き、土坑などを検出し、大極殿院西面の遮蔽施設及び周囲の関連施設の構造や変遷を明らかにした。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 西口寿生、渡辺晃宏、和田一之輔、国武貞克、今井晃樹、浅野啓介、大林 潤、高橋知奈津、鈴木智大、加藤雅士〔以上、都城発掘調査部〕、石村 智、牛嶋 茂、中村一郎〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 第一次大極殿院西面回廊の基壇本体、基壇にともなう雨落溝、回廊基壇をこわして造営した掘立柱塀、回廊基壇を破壊した土坑などを検出した。回廊の規模や構造、西面基壇の変遷が明らかになった。			
【年度実績概要】 今回の調査区は南北を平城第 217 次と第 315 次の調査区にはさまれた未発掘地で、南北 24m、東西 18m、調査面積は 390 m ² である。調査は 2008 年 7 月 3 日に開始し 11 月 26 日に終了した。調査区の中央には南北方向の第一次大極殿院西面の築地回廊 S C 1 3 4 0 0 が検出された。断割調査の結果、東西幅約 12m の掘込地業部分を検出した。厚い整地をしたのち、厚さ 10 cm ほどの土を何層かにわけて積土している。築地回廊の東側には雨落溝と大極殿院内庭部の礫敷きを検出した。この部分は少なくとも 3 回の改修があった。築地回廊の西辺では築地回廊をこわして造営した掘立柱塀 S A 1 3 4 0 4 の柱穴を 4 基検出した。柱間寸法は約 4.5 m（15 尺等間）。柱穴は地山面を掘り抜き、底部に磚や瓦を置いて礎盤とし柱を立てていた。柱間が約 9 m（30 尺）のところは塀にともなう門遺構である。以上から大極殿院西面の回廊や塀及び関連施設の構造や変遷が明らかになった。			
 全景写真(南西から)			
【実績値】 論文等件数：2 件（論文 1 件①、その他 1 件②） 出土品数：土器 4 箱、軒瓦 20 箱、丸平瓦 400 箱、金属製品 14 点、石器 3 点 記録作成数：実測図 22 枚、写真 4×5 138 枚			
【備考】 ①渡辺晃宏・森川実・和田一之輔・今井晃樹・大林潤「平城宮跡第一次大極殿院西面回廊（平城第 432・436・437 次）の調査」『奈良文化財研究所紀要 2009』（予定） ②森川実・和田一之輔・今井晃樹・大林潤「平城宮第 1 次大極殿西面回廊の調査」『奈文研ニュース』2008.12			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-13

自己点検評価調書

研究所 No12

1. 定性的評価

観点	発展性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			
備考 発展性：第一次大極殿院西面回廊の全容が明らかになった。 継続性：計画通りに調査を実施している。 正確性：従来明らかになっていた点をさらに詳細に追究した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	記録件数				
判定	A	A				
備考 論文等数…「奈良文化財研究所紀要 2009」において調査成果を報告 発表等件数…報道発表で、調査成果を速報						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第一次大極殿院西面回廊の全容が明らかになった。西面回廊の構造や変遷について従来より詳細な資料を得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り行われており、目的を順調に達成した。

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-14

(様式 1)

業務実績書

研究所 No13

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮跡第一次大極殿院地区西面回廊跡（第 438 次）の発掘調査（(1)-⑤-ア）		
【事業概要】 本年度は、第一次大極殿院地区南面・西面回廊の未発掘部分の調査を計画し、合計 5 つの調査区を設定した。第 438 次調査は西面築地回廊の北部にあたり、Ⅰ～Ⅲ期の西面回廊の遺構と、Ⅲ期殿舎地区内の遺構の検出が期待された。 調査区は、295 次調査（1998 年度）、316 次調査（2000 年度）の調査区と重複する。調査面積は約 550 ㎡（南北 25m、東西 27m）。調査は 9 月 24 日より開始し、12 月 22 日に終了した。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 渡辺晃宏、今井晃樹、大林潤、鈴木智大、国武貞克、加藤雅士〔以上、都城発掘調査部〕、石村智、牛嶋茂、中村一郎〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 （１）Ⅰ～Ⅲ期の遺構を確認し、各時期がそれぞれ東西対称に計画されていることが改めて確認された。 （２）合計 3 面の礫敷き面を良好な状態で検出し、回廊内部の礫敷きの変遷を確認した。大極殿と後殿のみが建っていたⅠ期と、生活空間として利用されていたⅡ期とでは、礫の大きさが異なり、区画内の機能に合わせて舗装を変えている点は注目される。 （３）Ⅲ期の東西排水溝で凝灰岩の石組暗渠を良好な状態で検出した。			
【年度実績概要】 第 438 次調査は、第一次大極殿院地区西面回廊における最後の調査となり、これまで当研究所で継続して行ってきた当地区の調査研究の成果を追認した。 当地区の遺構は、大きく 3 時期に分けられ、Ⅰ期はさらにⅠ-1～Ⅳの 4 時期に区分される。本調査では以下の遺構を確認した。 Ⅰ-1 期：築地回廊基壇とその雨落溝、回廊内部の礫敷舗装（下層礫敷） Ⅰ-3 期：掘立柱塀と、回廊内部の礫敷舗装（中層礫敷） Ⅱ期：築地回廊礎石抜取穴と礫敷舗装（上層礫敷）、Ⅰ期の雨落溝を破壊する南北溝、瓦溜まり Ⅲ期：築地塀基壇外装、回廊内部の掘立柱塀、暗渠をとまなう排水路 以上の成果は、過去の周辺調査と齟齬はなく、特に礫敷舗装面は、これまで 2 時期のみを検出していたが、新たに中層礫敷面を確認するという成果を得た。また、Ⅲ期の遺構は、過去の当地区の東側の対称地でも同様の遺構を検出しており、当地区が奈良時代当初より、8 世紀の初頭まで、東西対称の配置計画の下使用されていたことが判明した。このほか、中世の鋳造遺構や井戸を検出している。 遺物は、土器・瓦・金属器などが出土した。 検出した掘立柱の埋土について、有機炭素含有量と粒度について、応用地質株式会社へ分析を依頼した。 調査の記録は、20 分の 1 の実測図を作成し、且つヘリコプターによる垂直写真を撮影し、図化を行った。			
【実績値】 論文等数：3 件（論文 1 件③、解説等 1 件②、その他 1 件③） 出土品：土器整理用コンテナ 27 箱、軒瓦 8 箱、雑瓦 244 箱、木製品 4 点、金属器 22 点、石器 4 点、木炭 236.1g 記録件数：図面 31 枚、写真 35mm フィルム 26 本、4×5 フィルム 133 枚、航空撮影フィルムアルバム 1 冊、図化図面筒 2 本分土質分析報告書 1 式			
【備考】 ①森川実・和田一之輔・今井晃樹・大林潤「平城宮第 1 次大極殿西面回廊の調査」『奈文研ニュース』2008.12 ②「平城第 438 次調査（第一次大極殿院西面回廊） 記者発表資料」2008.12 ③「第一次大極殿院西面回廊の調査 ―平城第 432.436.437.438 次調査」『奈文研紀要 2009』（予定）			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-14

自己点検評価調書

研究所 No13

1. 定性的評価

観点	発展性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			
備考 発展性：第1次大極殿院地区において、奈良時代前半より8世紀初頭の西面回廊の全容が明らかになった。 継続性：計画通りに調査を実施している。 正確性：従来の成果を追認したうえで、新たな知見を得ている。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	記録件数				
判定	A	A				
備考 論文等数…「奈良文化財研究所紀要 2009」において調査成果を報告し、記者発表を行っている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第1次大極殿院西面回廊の全容が明らかになった。西面回廊の構造や変遷について従来の成果を追認したうえで、新たな成果を得ている。また、土壌分析という科学的視点からも調査を行っている。以上の成果を評価し、Aとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り行われており、目的を順調に達成した。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-15

業務実績書

研究所 No14

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮跡東方官衙地区（第 440 次）の発掘調査（(1)-⑤-ア）		
【事業概要】 本調査は、平城宮跡中枢部の 1 つ東区朝堂院地区と東院地区の間に位置する東方官衙地区において、遺構の広がり、区画単位の解明及び遺構深度などの実態を解明する目的で実施した。昨年度からはじまったこの地区における調査の第 3 回目である。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 渡辺晃宏、今井晃樹、大林 潤、鈴木智大、国武貞克、加藤雅士〔以上、都城発掘調査部〕、石村 智、牛嶋 茂、中村一郎〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 木簡が出土する土坑の全容が明らかになり、土坑に前後する掘立柱建物などが確認された。土坑からは大量の土器片、瓦片のほか、金属器、木器、木簡、木屑などが出土した。			
【年度実績概要】 昨年度の第 429 次調査区の南側で検出した土坑の全容を明らかにするために、東西 17m、南北 15m、調査面積 255 m ² の調査区を設定し、平成 20 年 11 月 19 日より開始した。昨年度に実施した第 429 次調査区の南で検出した土坑の全容を明らかにすることを目的とした。土坑は東西約 10m 南北約 7 m の不整形で、深さは検出面から 1 m ほどである。土坑内からは土器片、瓦片、金属片のほか、大量の木屑、自然木などがあり、この木屑層から木器や木簡も出土した。木屑層には大量の木簡や木簡の削り屑があると予想されるため 2600 箱ほど土ごととりあげた。木簡の内容は人名や習書が多く、そのほか宝亀年間の紀年や衛府にかかわる木簡などが目立つ。このほか、同様の土坑が 3 基確認されたほか、土坑によって壊された東西棟の掘立柱建物が数棟、便を溜めたと思われる穴が数基検出された。 以上の成果は、東方官衙地区における官衙の配置や規模、性格を把握するだけでなく、東方官衙全体の構造を解明するうえでも重要な資料となる。			
			
土坑全景(北東から)			
【実績値】 論文等数 (論文 1 件①、その他 1 件②) 出土品 (土器 60 箱 軒瓦 11 箱 丸平瓦 260 箱、木簡および木器 2600 箱) 記録件数 (実測図等 23 枚、写真 (4×5) 175 枚)			
【備考】 ①今井晃樹「東方官衙地区（平城第 440 次）の調査」『奈良文化財研究所紀要 2009』（予定） ②今井晃樹「平城宮第 440 次 東方官衙の調査」『奈文研ニュース』2009.3			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-15

自己点検評価調書

研究所 No14

1. 定性的評価

観点	正確性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考 正確性：検出遺構・出土資料の 性格な検討、資料化による貢献を行った。 発展性：新たな調査成果をうけ、平城宮及び東方官衙地区の構造解明にむけた基礎データを提示できた。 継続性：5 カ年計画の中で継続的に調査を行い、調査面積の蓄積のみならず、より集約的効率的な成果の検討を行った。						

2. 定量的評価

観点	発掘調査箇所数	出土遺物数				
判定	A	A				
備考 発掘調査箇所数：年度計画に従い調査を行った。 出土遺物数：これまでにない量の貴重な遺物を大量に取り上げた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査によって東方官衙地区の構造解明や遺構変遷を明らかにすることができた。また、今後の継続調査に大きな指針を与えることとなった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画に従い発掘調査が行われ、着実に成果をあげてきている。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-16

業務実績書

研究所 No15

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城京右京三条一坊八坪（第 448 次）の発掘調査 （(1)-⑤-ア）		
【事業概要】 平城京遷都 1300 年祭に伴う平城京歴史館（仮称）建設に際する事前調査である。調査面積は 1100 m ² で、調査期間は平成 21 年 1 月 6 日から 3 月 23 日である。			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 林 正憲、難波洋三、馬場 基、高橋知奈津、鈴木智大〔以上、都城発掘調査部〕			
【主な成果】 右京三条一坊八坪の状況を明らかにすることができた。具体的には、奈良時代後半の遺構の検出と、近代以降の土地利用の変遷を把握することができた。			
【年度実績概要】 調査区中央において建築廃材等を大量に投棄した池を検出した。これは 1929 年に当該地に設けられた競馬場に関連する施設である可能性が高い。出土した廃材は、戦時中に存在していた興亜機械工業の建築廃材と考えられる。埋め立てたのは興亜機械工業接收後、基地施設を造営した米軍と推定される。なお、この池はさらに西側に広がっていた昭和以降の大きな池を一部埋め立てて造られている。 したがって、調査区内で検出された奈良時代の遺構面は、調査区東側と北側にわずかに残されている状況であった。 東側では、L 字状の溝とその周囲に広がる瓦溜まりを検出した。L 字状の溝の内側では整地土が確認されるのみで、遺構等は検出されなかった。このことから、溝は基壇外装の抜取で、整地土上面に基壇建物が存在していたものと類推される。 北側でも瓦溜まりが検出されたが、東側に比べて土器の出土量が多いため、性格の異なるものと考えられる。遺構等で特に顕著なものはなかった。 出土した瓦から、今回検出した遺構面は奈良時代後半のものと考えられる。念のため、奈良時代前半の遺構面を探したが、検出されなかった。 なお、池の底からは弥生～古墳時代の流路が確認されている。			
【実績値】 論文等数 1 件 出土品 軒瓦 65 点、丸・平瓦 100 kg、土器（整理箱）10 箱 記録作成数 遺構実測図 28 枚、遺構写真 74 枚			
【備考】 林 正憲「平城京右京三条一坊八坪（第 448 次）の調査」『奈良文化財研究所紀要 2009』			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-16

自己点検評価調書

研究所 No15

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 これまで情報のなかった右京三条一坊八坪の状況を明らかにすることができた。特に、奈良時代後半の基壇建物の痕跡を確認できたことは評価できる。また、近代以降の土地利用の変遷についても明らかとなった。						

2. 定量的評価

観点	調査概報					
判定	A					
備考 発掘調査の成果について、『奈良文化財研究所紀要 2009』に掲載し、広く公表する。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで不明な点が多かった右京三条一坊八坪の状況を明らかにすることができた。特に、奈良時代後半の状況を確認できたことは評価できる。また、近代以降の土地利用についても知見を得ることができた。今後も周辺の調査を重ねることによって、さらなる情報の蓄積が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平城京の調査研究は着実に前進しつつある。今後も発掘成果を定期的に公表するとともに、周辺の調査状況などを手がかりに全体像の把握に努めたい。

【書式B】

施設名 奈良文化財研究所

処理番号

4155-17

(様式 1)

業務実績書

研究所 No16

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査 ((1)-⑤-ア)		
【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は、わが国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、平成11年度から中枢部の実態解明のための計画調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 玉田芳英、小田裕樹、高田貫太、番 光、木村理恵、次山 淳、黒坂貴裕、関広尚世、若杉智宏〔以上、都城発掘調査部〕、井上直夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 大極殿院南門の前面にあたる朝堂院朝庭北端部の発掘調査を実施し、礫敷きの広場と排水施設など朝庭部の構造を明らかにするとともに、幡にとまなうと考えられる遺構など朝庭で行われた儀式に関連する遺構を確認した。また、下層遺構の調査では、藤原宮造営時の運河や建物建設に関わる排水溝などを検出し、それらの変遷から、藤原宮の造営過程の解明につながる重要な手がかりを得た。			
【年度実績概要】 本研究は、藤原宮朝堂院朝庭部の空間利用の解明、朝庭儀式に関わる遺構の確認、藤原宮造営に関わる遺構の検出などを目的として実施した。藤原宮の朝堂院では、これまでの調査により朝堂の周囲などで一部礫敷きが検出されていたが、朝庭内部の本格的な発掘調査は今回がはじめてである。調査期間は2008年4月1日～11月11日。調査面積は1250㎡。 藤原宮期の朝庭部に関する調査では、朝庭が礫敷きの広場であったことが判明し、広場は調査区内で南から北へ低くなるが、大極殿院南門周辺では基壇状に高まる。南門の前面から南へ向かう通路状施設とその側溝を設けており、東西・南北方向の暗渠が排水のために設置されていた。朝庭内の儀式に関連して、幡にとまなうと考えられる遺構群を検出した。東西1.6～1.8m、南北0.8m、深さ0.5mの柱堀形に、大小2つの抜取穴が東西にならぶ構造で、東西に3m間隔で8本ならぶ。藤原宮における幡遺構の検出例としては初例であり、他の古代都城にあっても朝庭部における幡遺構の検出例は初例である。藤原宮における朝庭儀礼の実態を明らかにするうえで重要な資料である。 礫敷き面の下層の調査において、藤原宮の造営に関わる遺構を検出した。造営のための物資を運搬したと考えられる運河は、幅3～4m、深さが2mあり、過去の調査も含めると、藤原宮内を南北500m以上にわたり直線的に設けられていたことが判明した。さらに、運河埋め立て後の排水溝や大極殿院南門建設時の排水施設なども検出した。 なお、2008年6月30日から7月2日（3日間）の現場公開で1025人の見学者、9月27日の現地説明会に952人の見学者があった。			
【実績値】 論文等数 3件（論文1件、その他2件） 発表件数 4件（現地説明会1件、現地見学会1件、報道発表2件） 出土遺物 軒瓦207点、丸平瓦353箱、土器42箱、木簡26点、木製品・獣骨など 記録作成数 遺構実測図106枚、写真（4×5）255枚			
【備考】 ① 小田裕樹ほか「朝堂院朝庭の調査―第153次」『奈良文化財研究所紀要2009』2009.6 ② 玉田芳英「藤原宮朝堂院朝庭部の調査（飛鳥藤原第153次）」『奈文研ニュース30』2008.9 ③ 小田裕樹「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第153次）」『奈文研ニュース31』2008.12 ④ 奈良文化財研究所「藤原宮朝堂院朝庭の調査 現地説明会資料」2008.9			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-17

自己点検評価調書

研究所 No16

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：藤原宮中枢部（朝堂院）の全体解明への寄与 発展性：藤原宮中枢部の造営過程を復元するための手がかりを得た。 独創性：幡遺構をはじめとする朝庭儀礼に関わる遺構を確認した。 継続性：藤原宮中枢部に対する計画調査の継続						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査は、藤原宮朝堂院朝庭部における初の本格的な発掘調査であり、朝堂院における朝庭部の構造を明らかにするとともに、藤原宮の造営過程に関する運河、排水溝などの各種遺構を検出し、変遷過程の詳細を明らかにした。また、調査成果の公開も適切に行い得たので、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、かつ目的を順調に達成した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	石神遺跡の発掘調査 (1)-⑤-ア)		
【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、わが国古代国家成立期の歴史的な舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存活用についても取り組んでいる。石神遺跡は、飛鳥の宮殿遺跡として重要な遺跡であり、この遺跡の実態解明のため、1981年度より継続的に計画調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 青木 敬、市 大樹、豊島直博、石田由紀子〔以上、都城発掘調査部〕、山崎 健〔埋蔵文化財センター〕、井上直夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 19年度の第20次調査で確認した遺跡中心部の東限施設の延長を検出し、7世紀中頃における石神遺跡の東限を確定した。東限の区画施設は掘立柱塀で、南北棟建物が併設され、区画に沿って外郭の通路がめぐむる状況を明らかにした。また、東限施設は二度にわたる建て替えが行われていたことも判明した。7世紀後半になると、それまでの東限よりさらに東側に建物等が展開することを確認し、土地利用が大きく変化することを明らかにした。			
【年度実績概要】 石神遺跡は、7世紀中頃には外交上の饗宴施設があったと考えられている。19年度の第20次調査において中心部の東限となる施設の有力な候補とみなされる南北方向の建物を確認し、この東限施設の延長線及び周辺状況を確認することを目的として、その南側に対して発掘調査を実施した。調査面積は480㎡。調査期間2008年10月2日～2009年3月3日である。 調査の結果、第20次調査で検出した南北棟建物と筋をそろえる総柱建物、及び南へ延びる掘立柱塀を確認した。また、ほぼ位置を同じくして、これらの建物に先行する南北方向の掘立柱建物及び掘立柱塀を確認した。さらに、この遺構群に先行する瓦葺建物の存在を確認した。瓦葺建物以外の遺構群のうち後の二時期の遺構は、いずれも7世紀初頭までの土器を含む整地土上に展開し、それより東には遺構が展開しないことから、7世紀前半から中頃にかけて営まれた東限施設と判断できる。その後、調査区一帯を7世紀中頃の土器を含む土によって大規模に整地し、その上面で前述の東限施設を越えて遺構が展開する状況を確認した。これらのことから、7世紀中頃の石神遺跡は、第20次調査によって想定されていた東限ライン上に、整地の後二回にわたって東限施設を建て替えていたことが明らかになり、遺跡の東西規模が約130mであることが確定した。また、7世紀後半以降再度整地した後に、それまでの東限ラインよりもさらに東側に建物が造営され、遺跡範囲が東側へ展開し、遺跡の性格が大きく変化することを確認した。 なお、2009年2月14日に現地説明会を実施し、1611名の見学者があった。			
【実績値】 論文等数 2件（論文1件、その他1件） 発表件数 2件（現地説明会1件、報道発表1件） 出土遺物 軒瓦2点、丸平瓦14箱、土器52箱、金属製品17点、石製品223点など 記録作成数 遺構実測図35枚、写真（4×5）23枚			
			
石神遺跡第21次調査区全景（西から）			
【備考】 ① 青木敬ほか「石神遺跡の調査―第156次」『奈良文化財研究所紀要2009』2009.6 ② 青木 敬「石神遺跡の調査（第156次）」『奈文研ニュース32』2009.3 ③ 奈良文化財研究所「石神遺跡第21次調査現地説明会資料」2009.2			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-18

自己点検評価調書

研究所 No17

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：石神遺跡中枢部の東限解明への寄与 発展性…石神遺跡東部に対する今後の調査への見通しを得た 継続性…石神遺跡に対する計画調査の継続 正確性…飛鳥の都市構造復元にかかわる数値・データを得た						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査で、計画調査の目的である石神遺跡中心区画の東限施設を確認したことにより、その四至が確定した。また、7世紀における二度の大規模な整地を確認し、遺構変遷や時期決定に関する良好な資料を得ることができた。区画堀や通路状施設の確認は、飛鳥の都市構造を解明するうえで、重要な発見といえる。調査成果の一般への公開も適切に行い得たので総合的に A と判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、課題であった石神遺跡中心部の東限施設をほぼ確定したことで、石神遺跡の規模や全体像の解明へ向けて目的を順調に達成した。なお、7世紀後半には、土地利用の変化に伴う遺跡範囲の拡大が考えられるため、遺構の広がりを追究すること、及び東限施設北部の様相を明らかにすることが今後の課題である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	甘樫丘東麓遺跡の発掘調査 (1)-⑤-ア)		
【事業概要】			
「飛鳥・藤原」地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。甘樫丘は、蘇我氏が邸宅を構えたことで知られ、本遺跡はその関連遺跡として実態解明のための計画調査を2006年度より実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】			
豊島直博、丹羽崇史、市 大樹、青木 敬、石田由紀子、箱崎和久、若杉智宏、木村理恵、加藤雅士〔以上、都城発掘調査部〕、山崎 健〔埋蔵文化財センター〕、井上直夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】			
7世紀代のものと推定される整地層、石敷、柱穴、土坑及び整地層を掘り込む幅3～4mの溝などを検出した。整地層に埋め立てられた人頭大の礫群を確認したが、これは第146次調査で確認した石垣状遺構の一部と考えられる。また、中近世の墓と考えられる底部に炭を敷いた土壌1基を検出した。以上のように今回の調査では、遺跡の性格及び甘樫丘における土地利用の変遷を考えるうえで重要な資料を得ることができた。			
【年度実績概要】			
甘樫丘は、飛鳥川の左岸に位置する丘陵で、その麓にはいくつかの谷地形が形成されている。甘樫丘東麓遺跡は、東麓にある谷地のひとつに立地し、2006年度の造園修景に先立つ遺跡確認調査によって、7世紀の建物群の存在が明らかになった。2007年度より全面的な学術調査に着手し、これまでに石垣状遺構、掘立柱建物群、炉跡などを検出している。本年度の調査区は、2007年度の第146次調査で検出した石垣状遺構の全容の解明、大型建物・居住空間の有無の確認、遺構群のより詳細な変遷の解明を目的として、第146次調査地の南に接して谷の北東部に設定した。調査面積は、1150㎡。調査は2008年12月16日に開始し、2009年3月10日現在継続中。 調査区西部を中心に、複数の柱穴、土坑等を検出し、調査区東部では、石敷遺構を部分的に確認した。石敷遺構は、第146次調査で検出した7世紀中頃の石敷との関連が注目される。調査区中央付近では、幅3～4mの南北溝を検出した。第141次調査では、調査区壁面で整地層を掘り込む溝状の落ち込みが確認されており、今回検出した溝はその延長部にあたる。さらに、整地土に埋め立てられた人頭大の礫群を検出した。これは第146次調査で確認した石垣状遺構の一部と考えられる。また、中近世の墓と考えられる底部に炭を敷いた土壌1基を検出した。 出土遺物には、整理箱29箱分の飛鳥時代から近世にかけての土器類、瓦類、鉄製品、鉾滓、基石、紡錘車、土馬、漆付土器などがある。			
【実績値】			
論文等数	1件 (①)		
出土遺物	土器類29箱、瓦類1箱、金属製品、石製品等		
【備考】			
① 丹羽崇史ほか「甘樫丘東麓遺跡の調査―第157次」『奈良文化財研究所2009』2009.6			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-19

自己点検評価調書

研究所 No18

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 適時性：蘇我氏邸宅推定地の解明に向けた調査 継続性：計画調査の継続による遺跡全容の解明 発展性：今後の調査への見通しを得た。						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、計画調査の目的である遺跡東北部分の遺構のありかたを確認したことにより、遺跡の全体像解明に向けての良好な資料を得ることができた。また、遺構の展開状況から、次年度の調査への見通しを得ることができたため、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、課題であった石垣遺構の東南方向への延長部の状況を確認するとともに、周辺の土地利用を確認したことで、甘樫丘東麓遺跡の性格及び全体像解明に向けての目的を順調に達成した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等 ((1)-⑤-イ)		
【事業概要】 20 年度の発掘調査による平城宮・京跡出土の木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、出土遺構の整理・分析研究、出土遺構の図面及び写真作成・分析研究を、年間を通じて実施し、昨年度以前の調査において出土した遺物について、報告書刊行またはその準備作業としての再調査を行う。また、出土遺物の科学的保存処理を継続して実施する。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 難波洋三、和田一之輔、城倉正祥、国武貞克、西口壽生、神野 恵、森川 実、加藤雅士、深澤芳樹、今井晃樹、林 正憲、渡辺晃宏、山本 崇、馬場 基、浅野啓介、島田敏男、大林 潤、高橋知奈津、鈴木智大〔以上、都城発掘調査部〕、牛嶋 茂、中村一郎〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 本年度の発掘調査に伴う出土遺物・遺構の整理・分析研究、図面・写真の作成などの基礎作業を行い、平成 21 年度刊行の『奈良文化財研究所紀要 2009』の報告を準備し、発掘調査成果速報展を実施した。昨年度以前の調査に伴う出土遺物についての調査を継続して実施し、報告・展示も行った。『第一次大極殿復原に関する調査研究』基壇編、『同』屋根編、『近世瓦の研究』を刊行した。また、『地下の正倉院—長屋王家木簡の世界』を開催した。			
【年度実績概要】 ・本年度の発掘調査による出土遺物について 平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、出土遺構の図面・写真作成・分析研究、及び出土遺物の科学的保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり年間を通じて発掘調査と併行して遅滞なく実施した。このうち昨年度末から本年度初めにかけて実施した平城宮東方官衙地区の発掘調査の成果について、発掘調査速報展「平城宮跡東方官衙の調査」を文化財情報課と協力して平城宮跡資料館において開催した（平成 20 年 7 月 1 日から 8 月 31 日まで）。 ・平成 19 年度以前の出土遺物について 『平城宮発掘調査報告（第一次大極殿院）』、及び『平城宮木簡七』の刊行に向けての再整理・分析を重点的に実施した。平成 18 年度の調査で検出した西大寺食堂院跡の井戸の遺物の整理過程で、正倉院宝物に類例のある刀子山形金具を発見し、報告した。平城宮内出土の類例の調査も行った。 出土から 20 年になる長屋王家木簡の優品を広く公開するために、「地下の正倉院展—長屋王家木簡の世界」を平城宮跡資料館において実施した（平成 20 年 10 月 21 日から 11 月 30 日まで）。 ・報告書などの刊行について 平城宮第一次大極殿院復原整備研究に伴う報告書として、『第一次大極殿復原に関する調査研究』基壇編、『同』屋根編を、また『近世瓦の研究』（山崎信二著。奈良文化財研究所学報 78）を刊行した。			
			
			展示リーフレット表紙
【実績値】 論文数等計 6 件（報告書等 4 件①～④、解説等 2 件⑤・⑥）			
【備考】 ①『第一次大極殿復原に関する調査研究』基壇編、2009.3 ②『第一次大極殿復原に関する調査研究』屋根編、2009.3 ③『近世瓦の研究』（奈良文化財研究所学報 78）2008.11 ④『奈良文化財研究所紀要 2009』2009（予定） ⑤『地下の正倉院展—長屋王家木簡の世界』2008.10 ⑥「西大寺食堂院井戸跡出土の刀子山形金具」（『奈文研ニュース』32）2009.3			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-20

自己点検評価調書

研究所 No19

1. 定性的評価

観点	継続性	発展性	適時性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究 発展性：新たな資料提示方法の追究 適時性：新出土資料についての知識供与による文化財活用 正確性：蓄積されている資料の正確な資料化による貢献						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					
備考 論文等数：当初予定の刊行物を順調に刊行できたことに加え、新しい成果を適時公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京跡で出土した膨大な考古・文字資料を継続的に整理・分析し、それぞれの研究に東アジア的視点で検討を加えたことで、総合的にみてAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎として、さらに新しい方法を加味・活用して、研究を深化した。

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-21

(様式 1)

業務実績書

研究所 No20

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等 ((1)-⑤-イ)		
【事業概要】 本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品・瓦埴類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 豊島直博、青木 敬、廣瀬 覚、木村理恵、玉田芳英、小田裕樹、丹羽崇史、関広尚世、若杉智宏、次山 淳、中川あや、高田貫太、石田由紀子、箱崎和久、黒坂貴裕、番 光、市 大樹〔以上、都城発掘調査部〕、井上直夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品・瓦埴類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、成果の一部を公表した。前年度までの発掘調査成果を公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行い、『飛鳥藤原京木簡二―藤原京木簡一―』等の公刊図書に取りまとめた。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。			
【年度実績概要】 ① 本年度の発掘調査による出土遺物・遺構について 本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品・瓦埴類、木簡などの整理、分析研究、発掘遺構の図面及び写真資料の整理・作成、分析作業、及び出土遺物の保存と保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じて野外での発掘調査と並行して、各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2009』等で公表した。 ② 前年度までの出土遺物・遺構について 発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。木簡については、2006 年度に実施した石神遺跡の出土品を中心にまとめた『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（二十二）』、奈良文化財研究所調査の藤原京出土木簡を集成した『飛鳥藤原京木簡二―藤原京木簡一―』を出版した。			
【実績値】 公刊図書等数 4 件 (①②③④)			
【備考】 ① 奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要 2009』2009.6 ② 奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』2008.11 ③ 奈良文化財研究所『飛鳥藤原京木簡二―藤原京木簡一―』2009.3 ④ 奈良文化財研究所『古代瓦研究Ⅲ―川原寺式軒瓦の成立と展開―』2009.3			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-21

自己点検評価調書

研究所 No20

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	独創性	発展性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：新出土資料の迅速な公開と活用 継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究および保存 独創性：新たな資料分析方法の追究 発展性：蓄積された歴史資料の正確な資料化						

2. 定量的評価

観点	公刊図書数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と併行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行い得たので、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、ほぼ予定通り進めることができた。出版物の刊行も計画通りに行い得た。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究 (1)・⑤・ウ)		
【事業概要】 A：漢長安城桂宮発掘調査報告書の作成、唐大明宮太液池発掘調査出土品の整理、漢魏洛陽城跡の共同発掘調査を実施し日本の都城との関連を追究し、調査・研究の成果を公刊する。 B：朝陽地区隋唐墓出土副葬遺物を共同で整理・比較研究し、日本都城成立期の交流を考察しその成果を公表する。 C：鞏義市黄冶唐三彩窯跡及び製品の共同研究を実施し、日本の奈良三彩との関連を考察し、成果を公刊する。 D：日本と韓国の都城・王京形成の共同研究を実施し、古代における両国の文化交流を跡付ける。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二等
【スタッフ】 A：山崎信二・今井晃樹〔以上、都城発掘調査部〕他 9 名（王巍・銭国祥他）、 B：小林謙一・小池伸彦〔以上、企画調整部〕他 11 名（田立坤・呂学明他） C：西口壽生・玉田芳英〔以上、都城発掘調査部〕他 6 名（孫新民・趙志文）、 D：松村恵司、次山淳、高田貫太〔以上、都城発掘調査部〕他 20 名（崔孟植、金甫相）			
【主な成果】 A 漢魏洛陽城において 2400 m ² の共同発掘調査を実施。B 遼寧省における唐代墓出土品の調査を実施。C 黄冶窯跡及び白河窯跡生産された青磁・白磁・唐三彩・唐青花の系譜的系統的把握の基礎となる視点が明確になった。D 日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展に関する共同研究を実施。			
【年度実績概要】 A：漢魏洛陽城については延べ 11 名の研究員を中国に派遣し、2008 年 4 月～6 月、11 月～12 月の約 5 ヶ月間、漢魏洛陽城宮城内において 2400 m ² の共同発掘調査を実施した。 B：2008 年 10 月に 8 名、3 月に 6 名の研究員を派遣し襖布廠唐墓・紡績廠唐墓など出土遺物を調査した。11 月には遼寧省文物考古研究所他の 6 名を招聘し研究会を開催した。 C：2008 年 5 月・11 月に研究員を中国河南省文物考古研究所に派遣し、鞏義市水地河・白河地区にて出土した唐三彩・北魏青磁などを調査した。同年 10 月には中国側から 5 名が来日し、学術講演を実施した。 D：大韓民国国立文化財研究所との共同研究では、17 名の研究者が参加し、7 名の派遣、9 名の招聘を実施した。慶州国立文化財研究所との共同発掘調査では、各 1 名 2 ヶ月間の相互派遣を実施した。			
 河南省の遺物調査風景			
【実績値】 論文等数 6 件（①～⑥） 記録件数：A 遺構平面図断面図等 30 枚、B 写真、3D の記録多数、C 遺物調書約 250 枚、遺物写真約 300 枚			
【備考】 ①今井晃樹「漢魏洛陽城における日中共同調査」『奈文研ニュース』29、2008.6 ②城倉正祥「漢魏洛陽城・北魏宮城 2 号門の調査」『奈文研ニュース』32、2009.3 ③小池伸彦「隋唐墓出土副葬品の調査」『奈文研ニュース』30、2008.9 ④小池伸彦「遼寧省隋唐墓出土品秋の調査」『奈文研ニュース』31、2008.12 ⑤李柱憲・兪洪植「日韓発掘調査交流に参加して」『奈文研ニュース』30、2008.9 ⑥青木 敬「2008 年度日韓発掘調査交流」『奈良文化財研究所第 18 回総合研究会資料』2008.1			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-30

自己点検評価調書

研究所 No21

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	適時性			
判定	A	A	A			
備考 独創性：最新情報提供による古代史の再検討 発展性：日本文化の源流を探る基礎的研究 適時性：成果報告の発表						

2. 定量的評価

観点	成果報告	記録件数				
判定	A	A				
備考 成果報告：速報性を重視した報告を行った。 論文件数：これまで未公開の貴重な学術資料について多くの記録調書を作成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国および韓国で、遺跡・遺物を共同で調査し、相互の研究を向上させたほか、計画どおりに事業を実施できたので、総合的に A と判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施、成果をあげることができ、次年度には発掘調査にある程度長い期間参加する準備ができたため。国際共同研究は都城発掘調査部が担当し、4本の研究を総合的に組み立て、古代史の解明に資する成果の達成を目指す。

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-40

(様式 1)

業務実績書

研究所 No22

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	庭園に関する調査研究 ((1)-⑤-エ)		
【事業概要】			
五カ年計画では平安時代庭園を取り上げており、平安時代の発掘遺構・現存庭園・史料等について情報収集・調査研究を行う。平成 20 年度はその一環として、関係する研究者を集めて研究会を開催するとともに、発掘庭園データベースの内容の更新を行う。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	景観研究室長 内田和伸
【スタッフ】			
平澤毅、栗野隆、恵谷浩子〔以上、文化遺産部〕			
【主な成果】			
「平安時代の禁苑と離宮の庭」と題して開催した研究会では、奈良時代の宮廷の苑の系譜や園池配置の思想的背景、唐長安城禁苑の影響などに関する報告の他、具体的な庭園遺構として長岡京北苑、平安京神泉苑など計 4 件の事例報告があり、平安時代庭園の理解を深めた。なお、昨年度開催の研究会の報告書を刊行した。また、平安時代前期と中期の庭園遺構のデータを中心に収集・整理を行い、公開している発掘庭園データベースの内容の更新を行った。			
【年度実績概要】			
「平安時代の禁苑と離宮の庭」と題する研究会を平成 20 年 10 月 31 日に開催した。参加者は 25 名で、討論を行った。			
内田和伸（奈良文化財研究所）「宮殿・苑地配置の思想的背景」、北田裕行（奈良女子大学）「隋唐長安城の後園と三苑」、國下多美樹（向日市埋蔵文化財センター）「長岡京北苑研究の現状」、長戸満男（京都市埋文研）「神泉苑の調査」、吉野秋二（奈良女子大学）「日本古代の禁苑と離宮」、古閑正浩（大山崎町教育委員会）「河陽離宮と周辺の景観」、鈴木忠司（京都文化博物館）「雲林院跡の調査」。			
古代の文献に「園」や「苑」など庭園を示す名称は散見されるが、六国史の中での「苑」は王宮に隣接・付属し、天皇や大王が領有する“禁苑”として使用されており、『日本書紀』にみえる「白錦後苑」、『続日本紀』の「松林苑」「南苑」「城北苑」、『日本略記』の「神泉苑」は意識して区別する必要があることが共通認識となった。隋唐長安城では太極宮の北部に四海を意匠した庭が設けられるなど禁苑の園池の意匠をみる上で示唆に富む事例が報告された。北苑と呼ぶ、長岡宮北方で検出された池の遺構については庭園ではない可能性が高い一方、物集女車塚古墳に隣接する箇所では回廊状の遺構が検出され、松林苑内で古墳が苑地に転用されている状況を思わせ注目された。神泉苑は発掘調査だけでなく立会調査・試掘調査も含めて検討すると八町分の敷地の内、約半分が池沼など湿潤な地形状況であり、造営当時を考察する上で有効なデータが示された。河陽離宮については立地の多面的な意味、雲林院庭園については園池に張り出す亭の遺構が平城宮東院庭園の建物と似た地下構造をもつことなどが注目された。なお、研究会に合わせて昨年度の研究会報告書を刊行した。			
平安時代前期・中期の発掘庭園データの収集・整理をする一方、発掘庭園データベースについては新規データ 45 件、追記データ 25 件を更新した。			
【実績値】			
刊行図書件数：1 件（①）			
論文等件数：論文 2 件（②・③）、学会発表等：3 件（④～⑥）			
発掘庭園データベース更新：新規データ 45 件、追記データ 25 件			
【備考】			
①奈良文化財研究所『平安時代庭園に関する研究 2』2008.10.31、②内田和伸「平城京松林苑の保存と風致」遺跡学研究第 5 号 2008 日本遺跡学会、③内田和伸「古代の思想と平城宮第一次大極殿院」奈良女子大学 COE プログラム報告集 2009.3 奈良女子大学、④内田和伸「藤原宮の儀式・政治空間としての庭」日本庭園学会関西研究会 2008.9.13、⑤内田和伸「宮殿・苑地配置の思想的背景」古代庭園研究会 2008.10.31、⑥内田和伸「藤原宮の儀式・政治空間としての庭」日本庭園学会シンポジウム 2009.2.8			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-40

自己点検評価調書

研究所 No22

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	収集資料数	発表数				
判定	A	A				
備考 研究会報告：一冊、論文発表数：2件、学会等発表数：3件 発掘庭園データベース更新：新規データ45件、追記データ25件						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平安時代の寝殿造り庭園に大きな影響を与えたと考えられている神泉苑を含め、六国史で苑と記される禁苑の系譜などを整理し、古代都城に附属する禁苑と離宮の庭園という側面で、最新の発掘成果などを共有することができた。また、隋唐の宮廷園池の意匠に関する文献史料の提示もあり、今後、平安時代の庭園遺構の意匠の見立てなどを考える上で有効と思われる。さらに、発掘庭園データベースでは新規分・追記分ともに多数を更新することができた。今後は、掲載可能な図や写真を加え、さらなる充実を図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平安時代庭園を考える上で重要な神泉苑や、禁苑の系譜を考える上で重要な長岡京の園池に関するデータも収集することができ、他の平安時代初期の庭園と合わせて検討を進めることができた。これによって先の五カ年計画で実施した奈良時代庭園との空白期を埋めることができ、都城制と庭園研究の関連性を深めることができた。来年度は平安時代中期・後期の庭園に関するデータの収集・研究を進めたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-50

業務実績書

研究所 No23

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究 (1)-⑤-オ)		
【事業概要】 重要文化財山田寺出土部材の展示を第二展示室で行っており、その経年変化の計測研究を行う。アジア史の中の飛鳥文化の研究として飛鳥地方壁画古墳の研究を行う。飛鳥時代の工芸技術の研究として飛鳥・奈良時代の金工品の研究を行う。なかでも展示中の重要文化財高松塚古墳出土海獣葡萄鏡を中心とした唐式鏡の研究を行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 杉山 洋
【スタッフ】 加藤真二、西田紀子 [以上、企画調整部]			
【主な成果】 山田寺出土部材の展示においては、経年的に計測調査を行っており、本年も計測を継続した。その結果大きな変化がないことを確認した。飛鳥地方壁画古墳の研究としては 12 月に中国河北省文物研究所において、河北省出土壁画墓のはぎ取り壁画の調査を行った。飛鳥時代の工芸技術の研究としては、東京都武蔵国府跡と長野県榎垣外遺跡出土の同型小型八花鏡の調査を行った。また奈良国立博物館所蔵霊安寺出土唐式鏡 4 面の調査も行った。			
【年度実績概要】 出土部材展示の経年変化の研究：当館では 1982 年に出土した山田寺東回廊の出土部材を、保存処理後に復元展示している。日本においてはこうした出土建築部材の出土処理後の展示公開は当館が初めてであり、木材の経年変化の遺跡研究が必要とされてきた。そのために展示後にセンサーを設置し、計測を続けてきている。その結果、大きな変化がないことを確認し、引き続き展示を行っている。 壁画古墳の研究としては、飛鳥地方の壁画古墳についての資料を収集すると共に、特に中国における壁画古墳の現状と、その保存に関する資料収集を行った。 飛鳥時代の工芸技術の研究としては、当館保管の高松塚古墳出土海獣葡萄鏡にちなみ、唐式鏡の研究、わけても海獣葡萄鏡を中心とする研究を継続している。本年は東京都武蔵国府跡と長野県榎垣外遺跡出土の同型小型八花鏡の調査を行った。また奈良国立博物館所蔵霊安寺出土唐式鏡 4 面の調査も行った。			
			
榎垣外遺跡出土鏡(左)、東京都武蔵国府跡出土鏡(右)			
【実績値】 山田寺出土回廊部材 経年変化計測値 中国河北省出土古墓壁画調査 写真 40 点、集成写真 1 点 研究図録 1 冊 長野県岡谷市教育委員会における調査結果の発表			
【備考】 「同型鏡の研究」飛鳥資料館研究図録第 11 冊 2009.3			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4155-50

自己点検評価調書

研究所 No23

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：需要・必要性、公共性、国際性、緊急性、公開性 独創性：オリジナリティ、発想・着想、新規性、卓越性 発展性：多様性、応用性・汎用性、影響性 継続性：期間、質・内容、量、基礎性						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初研究計画通り、金工品の調査を進め研究図録を刊行することができた。また壁画古墳の研究は春期特別展示として成果を公開することができた。山田寺の出土部材についても、継続的な調査を推進し、保存内容についての問題点を見いだすこともなく、順調に継続展示が進行している。以上の進捗状況を総合的に判定してAとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定とおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究 ((1)-⑥-ア)		
【事業概要】 遺跡の保存・整備・活用に関する研究の一環として、遺跡の保存・整備計画段階から整備後における管理・運営と公開・活用に至るまでの調査研究を行うとともに、遺構の露出展示を伴う整備例の資料収集とデータベース化を進めるほか、露出展示の成果と課題に関する研究集会を開催する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 平澤 毅
【スタッフ】 山中敏史、栗野 隆〔以上、文化遺産部〕黒崎 直、高瀬要一〔以上、奈文研客員研究員〕			
【主な成果】 遺跡等における遺構露出展示について、基礎的な情報収集を行うとともに、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室と合同で研究集会を開催し、調査研究上の具体的課題を検討した。また、昨年度の成果について、報告書を刊行・配布するなど、その普及等を行った。			
【年度実績概要】 1. 遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。 2. 2009年1月30・31日に、「埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題」のテーマによる平成20年度遺跡整備・保存修復科学合同研究集会を平城宮跡資料館講堂で開催した。発表内容は、「研究集会開催趣旨及び『遺構露出展示に関する調査研究』について」のほか、『遺構露出展示の意義と計画』に関する基調講演1件、『様々な遺構露出展示の実績と課題』に関する事例報告5件、『遺構露出展示のための調査法』に関する技術報告4件で、講演・報告を踏まえた総合討議を行った。なお、研究集会参加者からアンケートの回収率は出席者の77%で、うち97%から有意義であったとの回答を得た。 3. 研究集会開催後、来年度にこの研究集会の報告書を刊行する準備として総合討議の内容の整理等を行った。 4. 昨年度の研究集会「遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度」の成果について、「奈良文化財研究所紀要2008」に報告するとともに、報告書を編集・刊行した。 5. 遺構の露出展示に関する整備状況についての情報収集を継続するとともに、データベース化を進めるにあたっての項目の見直しや、露出展示における問題点の把握と今後のあり方について検討を進めた。 6. 遺構露出展示の実例に関して、都道府県教育委員会文化財保護主幹課に対し、遺構露出展示事例の把握について協力を求め、現段階における把握状況を一覧表にまとめた。 7. 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主幹課及び埋蔵文化財センター等に対して平成19年度に刊行した報告書、発行したCDの配布をおこない、昨年度の成果の公表に努めた。			
			
遺跡整備・保存修復科学合同研究集会			
【実績値】 1. 研究集会等開催数：1回（資料集①）参加者数：地方自治体職員等約180名。（現地見学会参加者数：約50名） 2. 刊行図書数：1件（②） 3. 論文等数：10件（論文4件③～⑥、発表6件⑦～⑫）。			
【備考】 ①文化遺産部遺跡整備研究室・埋蔵文化財センター保存修復科学研究室編『平成20年度遺跡整備・保存修復科学合同研究集会 講演・報告資料集』、2009.1 ②奈良文化財研究所『遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度 ー平成19年度 遺跡整備・活用研究集会（第2回）報告書ー』、2008.12 ③平澤毅「遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度」、奈良文化財研究所紀要2008、2008.6 ④平澤毅「日本における近代造園遺産の保護」、『遺跡学研究』第5号、2008.11 ⑤平澤毅「遺産保護に関する国際的枠組み」、『遺跡学研究』第5号、2008.11 ⑥栗野隆「コンクリートと近代造園」、『遺跡学研究』第5号、2008.11 ⑦平澤毅「文化遺産の保護の歩みと整備・活用をめぐる近年の動向」、平成20年度兵庫県埋蔵文化財調査成果報告会、2008.10 ⑧平澤毅「名勝地としての文化財庭園」、第5回文化財庭園フォーラム、2008.10 ⑨栗野隆「洋風庭園と日本近代」、奈良文化財研究所第103回公開講演会、2008.10 ⑩平澤毅「文化財としての景観」、平成20年度鳥取県文化財保護行政担当者会議、2008.12 ⑪平澤毅「世界遺産委員会における近年の動向～遺産の評価・登録と保全状況のモニタリングをめぐって～」京都市文化史民局主催「世界遺産登録における現状と今後」についての勉強会、2008.12 ⑫平澤毅「研究集会開催趣旨及び『遺構露出展示に関する調査研究』について」、平成20年度遺跡整備・保存修復科学合同研究集会、2009.1			



遺跡整備・保存修復科学合同研究集会

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4165-10

(様式2)

自己点検評価調査

研究所 No24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 19年度開催した研究集会のテーマである「指定管理者制度」については、遺跡の保存管理・公開活用の観点から包括的な検討を行った事例がほとんど皆無であり、また、制度導入後の見直しの時期が迫っていることから、19年度実施した研究集会の報告書を取りまとめた全国の関係機関等に配布したことは極めて高く評価できる。また、遺跡における遺構露出展示に関する検討については、全国に展開する事例の把握を行い、研究集会を通じて、取り組むべき具体的課題を検討した意義は極めて大きい。さらに、平成20年に公布・施行された『地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律』など、近年の動向を把握し、遺跡整備における今後の課題等を検討しつつ、講演会等での解説等を通じて取組の方向性等について検討を行ったことなどを含め、調査研究の取組の成果は極めて良好であると評価できる。						

2. 定量的評価

観点	研究会等の開催回数	論文等件数	事例調査等件数		
判定	A	A	A		
備考 遺構露出展示に関して検討すべき課題を網羅的観点から検討するために埋蔵文化財センター保存修復科学研究室と合同で開催した研究集会は、全国各地及び様々な分野から約180名もの参加が得られ、その情報や課題の共有等において高く評価できる。また、都道府県教育委員会文化財保護主管課等の協力の下、遺構露出展示に関してさらに調査すべき事例について700件余りの所在を確認できたことは、今後の調査研究を進める上で不可欠の情報を把握した点で重要な意義を有する。また、論文・講演等を通じて、遺跡整備に関して、保存管理対象の理解、保存管理手法及び技術的事項を含む遺跡整備に関わる観点から近年の動向や調査研究成果等の解説・普及を行った件数も高く評価できる。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、第3回を迎えた研究集会については、はじめて他部局（埋蔵文化財センター保存修復科学研究室）との合同の下で実施したことにより、今後の学際的検討の具体的な基礎を築くことができたことが有意義であり、参加者の評価も高く、文化財保護と地域活性化の観点などから最新の動向を踏まえつつ、さらに充実を図っていくべき事業であると判断される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	遺跡整備に関する情報の収集・整理・公開に関する検討を様々な観点から進めることができた。特に、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室と合同で遺構露出展示について開催した研究集会は、遺構露出展示における今後の取組の方向性を検討し、関係する文化財保護行政機関、研究者等と情報の共有を深め、また、今後の情報交換体制を構築していく上で極めて有効な機会のひとつとなったと評価できる。次年度以降、全国の実情をさらに詳細に把握し、遺構露出展示に関する調査研究として包括的な取組を進め、中期計画における成果の取りまとめ、公表の適切かつ効果的な在り方について検討を進める必要がある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究 ((1)・⑥・イ)		
【事業概要】 遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究の一環として、遺跡の水分状態や石材の劣化状態を把握する技術の応用研究、平城宮跡遺構展示館等における遺構安定化薬剤の実地試験に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子 [都城発掘調査部]、脇谷草一郎 [企画調整部]			
【主な成果】 遺跡の水分状態を調査する方法を開発するため、宮畑遺跡において気象観測ステーションを設置するとともに、遺跡断面に地中温度センサーと土壤水分計を設置して、データ収集を行った。また、水分特性と不飽和透水係数を求めるための実験装置を導入し、実験を開始した。さらに、遺構土壌を安定化させる土壌安定化剤を試作して室内実験を行い、土壌を良好に安定化させる効果があることを確認した。			
【年度実績概要】 1) 遺跡を露出展示するためには、遺跡の土壌中において水がどのような状態で分布しているかを知る必要がある。遺跡の水分状態を把握し、その変化を予測する方法としては、当該環境での気象観測を行い、実際の土壌における地中温度や土壤水分量を測定してパラメータを求め、地中の3次元的な水分状態をシミュレーションにより求める方法が有効である。このような手法を確立するため、福島市宮畑遺跡において、気象観測ステーションを設置し、断ち割り調査などで検出された遺構断面に地中温度センサー、水ポテンシャルセンサー及び土壤水分計を設置し、データ収集を行った。設置後半年間のデータからは、遺構面直上に降雨による水分量の変化を示す層が存在すること、遺構を構成する土壌はきわめて飽和度が高いことが明らかとなった。 2) 遺構土壌中での水の挙動を把握するためには、土壌の不飽和透水係数を求める必要がある。本年度は東京大学大学院農学生命科学研究科及び東京農工大学大学院共生科学技術研究院の協力を得て、不飽和透水係数を測定するための実験装置を導入し、実験を開始した。そして、平城宮跡などで採取した土壌などを用いた実験により、不飽和透水係数を求めることが可能となった。 3) 遺構を露出展示する際には、土壌表面からの蒸散による乾燥の進行とひび割れの発生、塩類析出による遺構の崩壊、湿潤状態での蘚苔類の繁茂などの問題が生じることが多い。これらの現象を抑制するために、ポリシロキサンを骨格成分とする土壌安定化剤を新たに試作し、その効果を確認するための水ポテンシャルの測定実験を行った。その結果、この土壌安定化剤を適用した土壌の水ポテンシャルは、無処理の土壌の水ポテンシャルよりも低下し、安定化していることが明らかとなった。今後は、土壌安定化剤の配合比などを検討し、土壌の水分特性に柔軟に対応できるデータの集積を行っていく必要がある。			
【実績値】 発表件数： 2件 論文等数： 4件			
【備考】 論文発表・学会発表等については別添統計表参照			



宮畑遺跡における気象観測

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4165-20

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No25

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 宮畑遺跡及びガランドヤ古墳などにおいてフィールド調査を実施することにより、遺跡保存の具体的な問題点の抽出を行い、それに対する検証としての室内実験及び解決策としての遺構安定化実験を繰り返すなかで、効率よく適切な遺構保存の方法を検討することができた。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	A	A				
備考 日本文化財科学会第 25 回大会において発表 2 件を行い、同大会研究発表要旨集に 2 件及び奈良文化財研究所紀要 2008 に 2 件の、合計 4 件の論文を発表した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価を A と判定した。遺跡土壌を安定化させるためには、個々の遺跡土壌の物性に適した土壌安定化剤を適用する必要がある、21 年度には、土壌安定化剤の配合比を種々に変えた実験にも取り組む予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調であると判定した。21 年度は、このペースを維持しつつ、遺跡保存に関する調査法についてフィールドにおける試験を重ねるとともに、新たな手法の開発に取り組む予定である。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4165-30

業務実績書

研究所 No26

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言 (1)-⑥-ウ)		
【事業概要】 平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究のため、文化庁の行う平城宮跡第一次大極殿院地区の復原整備計画に沿った実践的調査研究を実施するとともに、『特別史跡平城宮跡保存整備基本計画推進計画』に基づく具体的整備に対して専門的・技術的な援助・助言を行うため、復原に関する資料の整理、新たに行うべき調査研究の計画案などを提示するとともに、文化庁記念物課や文部科学省文教施設企画部の主催する会議等に参画し、専門的・技術的な援助・助言を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 山崎信二、島田敏男、渡辺晃、深澤芳樹、西口壽生、大林潤、高橋知奈津、鈴木智大、箱崎和久、黒坂貴裕 〔以上、都城発掘調査部〕、窪寺茂、清水重敦 〔以上、企画調整部〕、今西康益 〔管理部〕			
【主な成果】 長年にわたって行ってきた第一次大極殿に関する諸研究を、報告書に纏めた。また、文化庁が行う第一次大極殿復原事業に伴う文部科学省文教施設部主催の会議等に参加し、専門的な観点から、助言を行った。さらには、平城宮跡の国営公園化に伴って、国営飛鳥歴史公園事務所が主催する『平城宮跡 基本計画検討委員会』及び『国営平城宮歴史公園第一次大極殿院広場設計検討業務検討委員会』開催にあたり事務局に資料提供するとともに委員会に参加した。			
【年度実績概要】 約12年間にわたって行ってきた大極殿復原に関する諸々の研究成果を4冊の報告書として出版する予定で、今年度は4冊のうち『Ⅰ 基壇・基礎』と『Ⅳ 屋根』を出版した。報告書の内容は、大極殿復原に直接関わる研究のみならず、古代建築復原に資する数多くの論考からなる。また、可能な限り、基礎データを示すこととし、本報告書は大極殿の復原根拠及び復原の経緯を示すだけでなく、各地で行われている古代建築復原検討に資するような基礎データ及び研究成果を提供し得た。また、本研究で明確となった課題について、今後の古代建築研究につながるものとする。			
第一次復原事業に関しては、連絡会議等を通して、専門的な見地から助言を行うとともに、施工監理者・施工者の要請に基づき、随時指導・助言を行った。また、工事工程の写真撮影を行い、工事記録の作成に努めた。			
また、平城宮の整備に関しては、平城宮の国営公園化に伴って、今年度5月に文化庁が策定した『特別史跡平城宮跡保存整備基本計画推進計画』に基づいて今後の平城宮の整備計画を策定する国営飛鳥歴史公園事務所が主催の『平城宮跡 基本計画検討委員会』及び『国営平城宮歴史公園第一次大極殿院広場設計検討業務検討委員会』の開催にあたり事務局に資料提供するとともに委員会に参加した。			
【実績値】 刊行図書 『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 Ⅰ 基壇・基礎』 『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 Ⅳ 屋根』 文化庁事業への協力 ・『国営飛鳥・平城宮跡歴史公園 平城区域 基本計画検討委員会』 出席 4回 ・『国営平城宮歴史公園第一次大極殿院広場設計検討業務検討委員会』 出席 3回 ・『大極殿復原事業に関する連絡会議』 出席 11回 大極殿復原事業にかかる指導・助言 25回			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4165-30

自己点検評価調書

研究所 No26

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 第一次大極殿復原に関する研究は、これまでにない視点での研究も行い、出版した報告書では、古代建築の復原研究に資する数多くのデータを掲載した。また、第一次大極殿の復原及び大極殿院の復原整備計画に向けて、発掘遺構の再検討及び整備事業計画者への資料提供を積極的に行った。						

2. 定量的評価

観点	協力回数					
判定	A					
備考 会議出席のみならず、様々なかたちで協力を行い得た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第一次大極殿の復原について、現在進行中の工事に際して随時適切な助言を行ったこと、復原の根拠となった研究成果を整理して報告書の刊行を行ったこと、また、平城宮の整備に関して、度重なる資料提供及び会議出席を行い、事業の目的を十分に達したと考え、総合的評価をAとする。次年度も引き続き、第一次大極殿に復原根拠となった研究成果の公表に努めるとともに、平城宮の整備に関わる諸資料の提供及び研究を継続する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究事業は、継続的に行っているもので、研究の段階も順調に進み、同時に文化庁事業への協力も順調に行っており、今後もこのペースを維持しつつ、研究内容の向上に努めたい。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4215-00

(様式 1)

業務実績書

研究所 No27

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究 ((1)-①)		
【事業概要】 前の中期計画5カ年中に開発した高精細デジタル画像形成の手法を用い、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵などの美術品を対象とし、それぞれについて、1) 光に対する物性の検討、2) 光物性の画像化に関わる技術開発、3) 形成画像の汎用的な活用法(表示・出力)に関する条件整備を行い、広範な文化財研究を支援するために不可欠な研究画像を形成し、それらを応用・利用する方法を探ることを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 津田徹英
【スタッフ】 田中 淳、山梨絵美子、勝木言一郎、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕、城野誠治、中村節子、中村明子、井上さやか、鳥光美佳子(以上、企画情報部)			
【主な成果】 脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財の高精細な画像や特殊撮影画像の公開と多目的な利用に供すべく、平等院と行った共同研究成果を『平等院鳳凰堂調査資料目録—カラー画像編—』として刊行した。また、国立故宮博物院(台湾)との共同研究の成果として『孫過庭書譜光学検測報告』の成果報告書を刊行した。他機関との共同調査研究として宮内庁三の丸尚蔵館と「春日権現験記絵巻」「動植彩絵」の調査撮影を、奈良国立博物館との共同調査研究として「春日権現験記絵巻披見台」および「法隆寺金堂釈迦三尊ならびに薬師如来台座羽目板」の調査・撮影を行った。			
【年度実績概要】 1.他機関との共同研究：本研究は、先の中期計画において開発した画像形成技術を用いた画像の汎用的な活用・運用を行う方法・技法の研究に重点を置いている。脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。デジタルコンテンツの多目的利用の一環として、平成17年度に行った平等院当局との鳳凰堂仏後壁の共同研究成果のうち『平等院鳳凰堂調査資料目録—カラー画像編—』を刊行した。また、平成17年度に国立故宮博物院(台湾)との共同研究として行った孫過庭筆「書譜」の成果報告書を刊行した。 2.今年度他機関との共同調査研究：宮内庁三の丸尚蔵館(「春日権現験記絵巻」「動植彩絵」の調査・撮影(5/19-23,6/16-27, 9/1-3,8, 11/25-28,12/1-5,10-12,17-19,1/20-23,26-30) 奈良国立博物館(「春日権現験記絵巻披見台」および「法隆寺金堂釈迦三尊ならびに薬師如来台座羽目板」08.11.4-7)を行った。 3.デジタルコンテンツの多目的利用の一環としての画像展示：東京文化財研究所エントランスパネル展示「洛中洛外図屏風(ロイヤル・オンタリオ美術館蔵)の展示について」(4/1-8/26)			
【実績値】 報告書の刊行 2件 (①、②) 学術雑誌等への掲載論文数 2件 (③、④) 学会研究会等での発表件数 2件 (⑤、⑥) 画像展示の件数 1件 (⑦)			
【備考】 ①『平等院鳳凰堂仏後壁調査資料目録—カラー画像編—』08.12 ②故宮博物院『孫過庭書譜光学検測報告』08.10 ③城野誠治「文化財を捉える撮影の方法と特殊性 多様な文化財にいかに対応するか」『国宝鳳凰堂の仏後壁 平等院王朝の美』(09.2)pp.82-83 ④城野誠治「謎解きが始まろうとしている 新たな歴史を刻む発見」『国宝鳳凰堂の仏後壁 平等院王朝の美』(09.2)pp.14-19 ⑤江村知子「彦根屏風の表現について—日本絵画史の視点から」総合研究会 08.7.1 ⑥城野誠治「光学的手法による彦根屏風の調査」総合研究会 08.7.1 ⑦東京文化財研究所エントランスパネル展示「洛中洛外図屏風(ロイヤル・オンタリオ美術館蔵)の展示について」(4/1-8/26)			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4215-00

自己点検評価調書

研究所 No27

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	調査箇所数	論文数	発表数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的にも定量的にも目標を達成する成果を得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高精細デジタル画像の文化財への応用研究について関心は高く、それに応えての報告書・論文・発表によって、その成果についての認知度・注目度は大きい。今後も積極的に成果公開に努めたい。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4225-00

(様式 1)

業務実績書

研究所 No28

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化財の非破壊調査法の研究 (2)-②)		
【事業概要】 文化財の材質調査をその場で行うことを目的に、小型可搬型機器の開発研究およびその応用研究を行う。金属文化財や顔料などの無機化合物に対して、その場での元素分析および構造解析手法の確立を行う。また、染料など有機化合物の物質同定を目的とした新たな非破壊調査法の調査・研究を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 早川泰弘、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英 (以上、保存修復科学センター)			
【主な成果】 非破壊調査手法に関して実験室規模での基礎的研究を推進するとともに、ポータブル蛍光X線分析装置や反射スペクトル測定システムなどを用いて博物館・美術館等の所蔵作品の彩色材料調査を実施した。			
【年度実績概要】 5年計画の第3年度として、下記の2点に重点をおいて研究を実施し、以下の成果を得た。 1) 可搬型機器による彩色文化財の材質調査とデータ解析 ポータブル蛍光X線分析装置による絵画の彩色や工芸品などの材質調査を行い、その材料や技法を明らかにする研究を推進した。適用作品の地域・時代を拡大し、より広範囲の資料を対象とするとともに、高精細画像や反射分光法などによる調査データとの連関を図り、より信頼性の高いデータの蓄積を行った。 2) 有機染料分析に関する検討とその応用 ファイバー送受光型紫外・可視反射スペクトル測定システムによる染料の非破壊分析に関する研究を引き続き行った。基礎的検討として、実資料での使用を想定したハンディ型顕微鏡との併用による微小部スペクトル測定の実用性について検討した。応用研究としては、国立公文書館に所蔵されている重要文化財「天保国絵図」などの彩色調査を行った。			
【実績値】 論文等数 2件 (①,②) 発表件数 2件 (③,④) 報告書 1件 (⑤)			
【備考】 ①早川泰弘：「銅系緑色顔料の多様性とその使用例」 『保存科学』 48、pp.109-118、09.03 ②吉田直人：「可視反射分光スペクトル法による染料分析ー近世絵図資料彩色調査への応用ー」、歴史学研究、841、35-42、08.06 ③早川泰弘、城野誠治：「国宝彦根屏風の彩色材料調査」 日本文化財科学会第25回大会、鹿児島国際大学 08.6.14-15 ④吉田直人：「ハンディ型光学顕微鏡との組み合わせによる彩色材料の可視反射分光分析」 日本文化財科学会第25回大会、鹿児島国際大学 08.6.14-15 ⑤早川泰弘：「国宝伴大納言絵巻蛍光X線分析結果」 東京文化財研究所編 pp. 76、09.01			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4225-00

自己点検評価調書

研究所 No28

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	学術雑誌等への 掲載論文等数	学会研究会等での 発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎研究の着実な遂行、ならびに応用研究として実施した各博物館・美術館などと協同した作品調査研究、さらに速やかな成果公開を果たし、高い調査研究水準を保つことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第3年度として、基礎的研究を進展させるとともに、応用的研究として多くの作品調査を実施し、貴重な調査データの蓄積を図った。論文・学会発表などで速やかな成果公開も果たし、計画通りの研究進捗状況である。

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4235-01

(様式 1)

業務実績書

研究所 No29

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開 (2)-(3)-ア)		
【事業概要】 官衙関連遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、新たに寺院遺跡発掘調査において抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析を行う。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	文化遺産部長 山中敏史
【スタッフ】 森本晋 [企画調整部]、志賀崇、清野陽一 [京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程]			
【主な成果】 官衙関係遺跡の建物データについて、建物群の性格などの属性項目を新設し、柱穴の形状・柱筋の通り具合の属性を数値化する方法を検討し、データベースの更新及び公開を行った。また、寺院遺跡の属性分析を踏まえたデータベースを新規に作成し、九州から中国地方の一部までのデータベースを公開した。			
【年度実績概要】 - 各地の官衙関連遺跡について、建物群の性格に関する属性項目を新設し、データを追加入力した。 - 平成18年度以降刊行の報告書のめくり作業を行い、国府・郡衙・城柵遺跡やその他官衙関連遺跡等の資料を収集整理した。 - 掘立柱建物の柱掘方の形状について、建物単位での方形・円形等の形状のばらつき具合を把握する方法として、形状毎に柱穴数を数え、また、桁行柱筋、対向側柱の柱筋通り具合については、各柱列の柱穴数の内、柱筋にのる柱穴数を分数で示して数値化する方法を考案し、データ入力した。 - 上記の新たな属性分析法を取り入れてデータベースを補訂し、新出資料も追加して一般公開した。 - 官衙関連遺跡の研究に関しては、昨年度の研究会「地方行政単位の成立と在地社会の成立」の論文報告集を編集・刊行した。 - 古代寺院遺跡の建物遺構を中心とした属性分析を進め、それに基づいて寺院遺跡データベース構造を作成して資料収集・整理を進め、中国地方以西のデータについて、奈良文化財研究所ホームページで一般公開した。			
 古代寺院建物データ入力画面(部分)			
【実績値】 官衙関係遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡マスタ約160件、文献データ約1,800件、建物データ約1,400件、画像データ約1,800件 古代寺院遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡マスタ約300件、文献データ約2,100件、建物データ約430件、画像データ約900件 公開データ数：官衙関係遺跡：遺跡マスタ約1,200件、文献データ約11,000件、建物データ約14,000件等 古代寺院遺跡：遺跡マスタ約260件、文献データ約2,200件、建物データ約370件等 刊行図書：論文報告集 1 件 (①) 論文等数：論文 2 件 (②③) 講演件数：1 回 (④)			
【備考】 - 山中敏史編『地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所、2009.1 - 志賀 崇「畿内と龍角寺の文字瓦」『房総と古代王権』高志書院、2009.2 - 山中敏史「古代藤枝地域における田租と出挙」『藤枝市史研究』10 号、2009.3 - 山中敏史「奈良に都があった頃の遠江と地方の役所」浜松市、2008.10.			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4235-01

自己点検評価調書

研究所 No29

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	効率性	正確性	独創性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 データベース作成を継続し、さらに新たな属性表現の導入を試みるとともに、各地で情報共有化が要望されてきた古代寺院遺跡のデータについてもデータベース作成を本格的に開始したという点で、適時性と発展性も増した。						

2. 定量的評価

観点	データベース 入力件数	論文数	講演数		
判定	A	A	A		
備考 毎年増加する官衙関係遺跡のデータの追加入力とあらたな寺院遺跡データの収集・入力作業を進め、目標値を上まわる入力作業を達成できた。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データベース入力件数の定量的目標値を大幅に上まわったほか、新たに属性項目の数値化を試み、客観的な建物データ分析の基礎を築いた。 また、新たに古代寺院遺跡のデータベースを作成し、西日本の一部ながら一般公開できたことは、特に各地で寺院遺跡の調査・研究にあたっている者にとって、情報の共有化につながるるとともに、遺跡から抽出すべき遺構の属性についての指標を提示するものもあり、寄与するところが大きい。今後、新発見の官衙関係遺跡データの継続的な収集・整理とともに、全国に及ぶ古代寺院のデータベースを作成し公開していくことにしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡のデータベースの作成が順調に進んでいる。そして、官衙関係建物遺構の属性の一部について、定量的分析を進めるための数値化を進めるなど、遺跡調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができた。また、新たに寺院遺跡のデータベースを構築し、官衙遺跡と合わせてデータ収集・整理を開始し、当初計画より早い段階で一部公開もでき、各地の寺院発掘調査における指針を提示できたことは大きな意義を持つ。今後は、官衙関係遺跡の新出資料の追加及び各データの補充、寺院データの収集・データベース化を継続し、利用しやすい形での一般公開をさらに推進していくことが必要である。

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4235-20

(様式 1)

業務実績書

研究所 No30

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究 ((2)-③-イ)		
【事業概要】 遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法を研究し、全国の遺跡調査の質的向上と発掘作業の効率化に資するべく、方法の検討と実地での実践によるデータの収集と分析を行う。本事業は、現在の遺跡調査の実態に鑑み、従前の方法との乖離を埋めつつ、新たな技術の有効利用法を研究・提示することで、当該分野における指針としての役割を果たすことを目的としている。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤 毅
【スタッフ】 金田明大 [埋蔵文化財センター]、西村康、西口和彦 [以上、奈文研客員研究員]			
【主な成果】 遺跡の測量・探査技術の向上と有効利用法の研究を推進し、大学・自治体と連携して実践を行った。測量では、三次元レーザスキャナ及び写真測量の技術的検討と実践を行い、石造物や考古資料の図化法の検討や摩滅資料の判読、安価で導入可能な機器の試験を実施した。探査では、GPR の走査方法の改善と新たな機器の試作と試行、GPS による位置精度向上実験を行い、柱穴の確認に成功した。			
【年度実績概要】 測量・計測分野では、京都国立博物館蔵の安祥寺盤竜石柱を計測し、複雑な形状をもつ対象物の三次元計測の有効性を確認した。また、生駒市の森家墓所を計測し、摩滅して判読不能な碑文の解読に成功した。このほか、中国遼寧省の隋唐期墳墓出土資料についても継続してデータを取得し、図化の方法を検討した。さらに、既存機器の 1/10 以下の経費で導入可能な機器の導入と精度の検証作業を実施して、その有効性を明らかにした。また、遺跡用の三次元レーザスキャナの機種選定を行い、導入することができた。今後、実地試験を通じて使用法に習熟したのち、実際の利用を進める予定である。 探査分野では、大学や自治体と協力して、各地で GPR・磁気・電気による探査を実践した。水戸市台渡里遺跡では正倉の区画溝や倉庫の地業・柱穴を確認し、建て替えを判読することができた。そして、低周波のアンテナによる柱穴の確認に初めて成功した。また、平城宮東方官衙地区では木簡廃棄土坑の範囲を確定し、発掘計画の立案に寄与した。並行して、既存の探査データについても整理とデータ化を進めている。 埋蔵文化財担当者研修では、遺物観察調査過程と遺跡測量過程を担当し、遺跡地図情報過程の講師として出講した。 国内の学会においては、日本文化財科学会、日本文化財探査学会で研究成果を発表したほか、大韓民国文化財 GIS 国際会議において、日本の地理情報システム利用に関する報告を行った。また、2009 年に予定している CIPA 会議の準備をすすめ、DDCH（文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ）を共催した。			
			
電気探査作業状況（綾羅木郷遺跡）			
【実績値】 発表件数： 5 件 論文等数： 6 件 遺跡探査実施件数： 12 件 三次元計測資料数： 72 点 遺跡測量実施件数： 1 件 研修実施件数： 3 件 大学講義： 2 件			
【備考】 論文発表・学会発表等については別添統計表参照			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4235-20

自己点検評価調書

研究所 No30

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：技術革新が進行するなかでの確かな指針を欠く現況の改善 発展性：全国の遺跡調査への応用性と影響力 効率性：時間的投資・人的投資の効率化 継続性：事業中断以前を含めた、黎明期以来のデータの継続的収集						

2. 定量的評価

観点	探査実施件数	発表件数	研修件数	計測実施件数		
判定	S	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	測量・探査ともに、課題としているワークフローの確立や機器の開発が進展し、それに対応して作業の迅速化や結果の向上、自治体などへの協力と成果の還元が達成できたため、Aと判定する。反面、多方面からの要求に応えるために、研究補助者やその作業空間の確保が必要だが、現状では充分対処できていないことから、研究スタッフの負担が大きくなっている。したがって、これ以上の研究の拡大は事実上困難であり、スタッフの拡充と作業空間の確保、他機関との連携の見直しなど、早急な改善を必要とする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	新しい方法・機器の導入と試行、他組織との連携による成果の蓄積という点では、当初の予想を超える進展をみせており、全国各地からの依頼や問い合わせも急増している。三次元データや探査データの処理は時間がかかる作業であるが、研究補助者の雇用と育成により、三次元データにおいては一定量の処理が可能になった。しかし、現在の作業環境では新規の試行は困難な状況にあり、RTK-GPS など調査研究上必要な機器の導入においても、周辺諸国と比べていまだ立ち後れている現状が懸念される。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	年輪年代学研究 ((2)-④)		
【事業概要】 遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代測定を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究室で開発した X 線 CT やデジタル画像を用いた測定方法は、非破壊を原則とする文化財調査にとって理想的なもので、実施事例の拡充を図る。また、年輪画像計測技術のさらなる進歩と普及を目指し、技術開発についても取り組む。これらの研究成果を、学会、学術論文、各種報告書として発表する。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	年代学研究室長 肥塚隆保
【スタッフ】 大河内隆之〔埋蔵文化財センター〕、光谷拓実、伊東隆夫、藤井裕之〔以上、奈文研客員研究員〕、児島大輔〔日本学術振興会特別研究員〕			
【主な成果】 3 府県下 8 遺跡から出土した考古学関連の木材試料、国宝 1 棟・重文 3 棟を含む 7 府県下 8 棟の建造物、国宝 1 点を含む 7 府県下の 15 躯の木彫像並びに 1 点の工芸品、2 府県下 2 点の歴史資料に対して年輪年代調査を実施した。また、年輪のデジタル画像計測に関する技術開発に取り組み、特許取得を果たした。以上の研究成果の一部を、論文等 8 件、学会発表等 9 件として発表した。			
【年度実績概要】 考古学関連：3 府県下 8 遺跡から出土した木材試料の年輪年代調査及び樹種同定を実施した。 建築史関連：国宝 1 棟・重文 3 棟を含む 7 府県下 8 棟の建造物に対して、年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、国宝法隆寺金堂の修理に伴う年輪年代調査である。調査対象とした内陣天井板と支輪板の中に樹皮を剥いだだけの板材が含まれており、667 年と 668 年に伐採されたヒノキ材が用いられていることが明らかになった。この結果は、2004 年度に実施した法隆寺西院伽藍の年輪年代調査成果をあらためて裏付けるものである。 美術史関連：国宝 1 点を含む 7 府県下の 15 躯の木彫像並びに 1 点の工芸品に対して年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、山口県長徳寺薬師如来坐像の年輪年代調査である。解体修理に際してマイクロフォーカス X 線 CT とデジタル画像計測による年輪年代調査を行った結果、1067 年の年輪年代が得られた。この像は心材のみからなるので、造像に際して切削された辺材や心材に含まれていた年輪数を考慮すると、11 世紀末ないし 12 世紀頃とする美術史学的な視点からの所見に矛盾しない。 歴史関連：2 府県下 2 点の文字資料の年輪年代調査及び樹種同定を実施した。特筆すべきは、滋賀県栗東歴史民俗博物館に寄託されている延徳三年(1491)と墨書された金勝寺制札の年輪年代調査である。この制札は心材のみから成り、調査の結果、1438 年の年輪年代が得られた。原木から製材する課程で切削された辺材や心材に含まれていた年輪数を考慮すると、年輪年代と制札に書かれた年代が整合し、年輪年代と歴史資料との関係を示す好例となった。 技術開発関連：年輪のデジタル画像計測に関するコンピュータアルゴリズムの日本国特許が成立した。発明者が奈良文化財研究所に入所する以前から手がけてきた技術なので、この特許の出願人の名義は発明者となっているが、奈良文化財研究所で年輪年代学研究を進める上で欠かすことのできない重要な技術である。			
【実績値】 論文等数： 8 件（うち 1 件は原著論文査読あり） 発表件数： 9 件（うち 3 件は国際学会） 工業所有権件数： 1 件			
 マイクロフォーカス X 線 CT 装置に設置した長徳寺薬師如来坐像の背板			
【備考】 論文発表・学会発表等については別添統計資料参照 工業所有権：特許「木材の年輪箇所検出方法および年輪幅計測方法」（発明者・出願人：大河内隆之）特許第 4218824 号			

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4245-00

(様式2)

自己点検評価調査

研究所 No31

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性	独創性	効率性	正確性
判定	S	S	S	S	S	S
備考 適時性: 解体修理や博物館での展示替などの機会を逃すことなく調査を実施し、考古学・建築史・美術史等に関連した木材から得られた年輪年代情報を、速やかに多くの研究者に提供した。 独創性・発展性: マイクロフォーカス X 線 CT による非破壊年輪年代測定技術やデジタル画像計測は、当研究室で開発した新規性を伴う独創的な技術であり、特許出願や特許取得を果たすことで、今後さらに発展する可能性がある。 効率性: 年輪年代測定対象に応じて、年輪読取機による計測手法、デジタル画像計測手法、マイクロフォーカス X 線 CT による非破壊年輪計測手法などを適材適所で選択し、効率的かつ効果的に研究を遂行した。 継続性: 年輪データを継続的に集積している。 正確性: 法隆寺金堂の事例のように、過去に行った年輪年代調査成果と本年度の調査結果が1年も違えることなく正確に合致するのが、年輪年代学研究の特質である。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	S	S				
備考 論文等件数・学会発表件数ともに、目標値と昨年度実績を上回っている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	定性的評価における6項目、及び定量的評価における2項目がいずれも S であることから、S と判断した。とりわけ、担当者の開発した年輪のデジタル画像計測に関する技術が特許取得を果たしたのは、当初の計画を上回る成果であり、今後、年輪年代学研究をさらに発展させる素地が整ったことになる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当該年度における調査研究事業は、その進捗度からみて、順調に実施できたと考えられる。本年度の目標達成に満足することなく、引き続き中期計画の遂行に邁進したい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4255-00

業務実績書

研究所 No32

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究 (2)-⑤)		
【事業概要】 動植物遺存体による環境考古学的研究の継続を行う。また、実験品や出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。さらに中国、韓国、台湾や、北米北西海岸の日本の先史時代の動植物利用と対比できる遺跡の発掘に積極的に参加し、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行い、東アジア、環太平洋世界の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	環境考古学研究室長 松井章
【スタッフ】 山崎健 [埋蔵文化財センター]、橋本裕子 [奈文研客員研究員]、樋廻理恵子、藤田英美 [以上、奈文研派遣職員]、丸山真史、菊地大樹、納屋内高史、ルブナ・オマル [以上、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程]、永井理恵、大和慎 [以上、京都大学大学院人間・環境学研究科博士前期課程]			
【主な成果】 国内外の学会、研究会において、これまでの環境考古学、特に貝塚、湿地遺跡、動物利用などの研究成果を発表し、研究交流を深めた。また、19年度から継続してきた奈良県橿原遺跡、佐賀県東名遺跡群などの分析を行い、発掘報告書を執筆した。			
【年度実績概要】 4月にセネガル国ダカールで開催された国際会議、Shell Energy, Prehistoric Coastal Resources Strategies で、日本の貝塚の特質とその研究成果について発表を行った。6月にはアイルランド共和国ダブリン大学で開催された世界考古学会議で、日本の湿地遺跡の研究成果について発表し、分科会の座長を務めた。7月は、縄文文化と北西海岸先史文化との比較研究のため、アメリカ合衆国ワシントン州マッド・ベイ遺跡の発掘に参加したほか、台湾国立大学朱有田(Yu-Ten Ju)准教授から招聘を受け、台湾における考古学とくにイノシシのDNA分析の国際共同研究について打合せを行った。9月には、日本哺乳類学会において、家畜に関する研究の発表を行った。11月は日本考古学協会において、弥生時代の狩猟・漁撈に関する発表を行い、シンポジウムの司会を務めた。 動物骨格標本は、ポニー、オオサンショウウオ、ウシ、クロコダイルなどの希少な骨格標本を製作または購入できた。また、これまで奈文研で作製・収集してきた現生動物骨格標本のうち、哺乳類のリストを『埋文ニュース』136号として刊行し、他の組織、研究者への公開を行った。この標本リストは、今後、他の種類を追加・増補していく予定である。 このほか、奈良県橿原遺跡、佐賀県東名遺跡などから出土した動物骨、鹿角に残る傷痕を観察、記録化に努め、傷痕を残す原因となった利器の判別を試み、成果を挙げつつある。あわせて、橿原遺跡から出土した骨角器の再整理を行い、骨角器の製作技術を復元するなどの成果も挙げた。また、動物解体技術の研究については、11月の動物考古学研究集会でモンゴルの動物解体に関する発表を行い、1月には北海道でエゾジカ猟に参加し、動物解体の調査を行った。			
 エゾジカ猟			
【実績値】 標本作製(収集)数：魚類 75点、鳥類 19点、哺乳類 23点、両生類／爬虫類 12点 論文等数：論文 2件、報告書 9件、その他 8件 発表件数：海外 2件、国内 14件			
【備考】 論文発表・学会発表等については別添統計表参照			



エゾジカ猟

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4255-00

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No32

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考 独創性：全時代、全社会階層をカバーする人間と動物の文化誌の考古学からの解明 発展性：動物考古学から出発し、歴史学、民俗学、民族学へと学問分野を拡大 継続性：19年度出版した『動物考古学』（京大出版会）に続き、20年度より『環境考古学8、標本リスト：哺乳類編』（埋文ニュース）を刊行、順次、種類別の標本リストを公開・刊行する計画						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考 国際学会2件（セネガル：発表、アイルランド：発表・座長）国内学会及び講演14件（日本考古学協会発表、座長ほか）を行ったことから、評価をAとする。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	プロジェクトの目的達成に対し十分な成果を挙げたことと、その成果を国内外の研究者、一般に公表し、さらに新しい研究の切り口を切り開くことができたため、Aとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	20年度も多くの国際学会、国内研究会などで研究発表を行い、これまで挙げた成果を紹介してきた。現生動物骨格標本の収集も、いよいよ絶滅種、希少種へと収集の目標が絞られ、いっそうの充実を見せつつある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の生物劣化対策の研究 ((3)-①)		
【事業概要】 歴史的建造物や彫刻等、屋外環境に近い空間にある文化財は、生物被害を受けやすい環境にあるが、その劣化の早期検出や被害防止対策について、研究はまだ十分な状況とはいえない。本プロジェクトでは、特に屋外に近い環境に置かれた文化財の生物劣化対策を確立することを目標に、生物による被害の現況について集約し、早期発見のためのシステム作りや劣化の防止手法の開発など、保存科学的研究を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	センター長 石崎武志
【スタッフ】 木川りか、佐野千絵、犬塚将英、吉田直人、間渕創、吉川也志保（以上、保存修復科学センター）、藤井義久（京都大学）、トム・ストラング（カナダ保存研究所）			
【主な成果】 歴史的建造物での生物被害状況調査では、日光輪王寺本堂の虫害を調査した結果、オオナガシバンムシによる被害であることが明らかになった。また、部材内部の状況を調べるために、レジストグラフやCTなどの手法を用いて、調査を行い、部分解体修理による調査の一助となった。また、調査手法および歴史的建造物などの維持管理をテーマとする研究会を開催し、今後取り組むべき問題点を明らかにした。			
【年度実績概要】 (1) 古墳や歴史的建造物など、屋外環境に近く、高湿度になる現場の生物被害状況調査 日光輪王寺本堂の修理において虫害が発見されたが、その周辺では今まで経験のない激しい被害であった。その加害虫を調査し、「オオナガシバンムシ」であることが明らかとなった。また、レジストグラフを使って、梁など重要な材の内部状況の調査を現地で行うとともに、一部の部材については、CTによって内部の状況を調査した。オオナガシバンムシは、わが国の歴史的建造物ではおそらく初めての発見例と考えられる。対策などについて調査結果に基づき協議を行った。 (2) 高湿度環境における文化財（木や紙などが材料のもの）についての試験 一時的に使用する防カビ剤について、作業員や観覧者に対して臭いや有害な揮発物質などの影響が少なく、効果があるかなどを検討した。また、文書などに出現して問題となるフォクシングについて、フォクシング部位から単離されたカビを用い、紙の上での生理的な性質を調査した。 (3) 害虫侵入早期検出のための基礎研究 害虫侵入の早期検出手法および、歴史的建造物などの維持管理について研究会を行い、今後の問題点を明らかにした。 テーマ：「屋外等の木質文化財の維持管理 問題点と今後」 平成20年10月6日（月）（参加者79名） ＜プログラム＞ 奈良県教育委員会 神田雅章氏 「寺社等建造物や木彫像などの管理と生物被害上の最近の問題点」 京都大学 藤井義久氏 「文化財建造物の劣化診断と維持管理体制の課題と展望」 九州国立博物館 本田光子氏「屋外で公開された文化財等を博物館内で展示、収蔵する際の対応について」 河上信行建築事務所 河上信行氏「弥生時代等の復元建物における維持管理の現状と課題」			
【実績値】 論文数 2件 (①, ②) 学会研究会等での発表件数 2件 (③, ④) 研究会 1回			
【備考】 ①日光山輪王寺本堂におけるオオナガシバンムシ <i>Priobium cylindricum</i> による被害事例について（小峰幸夫、木川りか、原田正彦、藤井義久、藤原裕子、川野邊渉）「保存科学」48、pp.207-214、09.03 ②古墳等の高湿度作業環境下での使用を想定した木材保存剤のかび抵抗性試験とTVOC測定（間渕創、佐野千絵、木川りか）「保存科学」48、pp.175-182、09.03 ③高松塚古墳発掘／石室解体作業に伴う取り合い部・断熱覆屋使用木材等の防カビ対策（木川りか、間渕創、高妻洋成、降幡順子、肥塚隆保）文化財保存修復学会第30回大会、08.5.17-18 ④Foxingが発生した紙試料からの真菌の分離および代謝物の蛍光に関する報告（吉川也志保、木川りか）文化財保存修復学会第30回大会、08.5.17-18			

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4315-00

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No33

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 歴史的建造物や古墳など、生物被害を受けやすい文化財の生物劣化対策は急務である。 本研究は時機を得たテーマであり、研究を進めるなかで現状での問題点が明らかになり、今後の方向性を示すことができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	研究発表件数	研究会			
判定	A	A	A			
備考 研究成果は、論文、学会での研究発表を通して、すみやかに公表することができた。 また、研究会では、79名の文化財関係者と問題点を共有し、議論をすることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現場調査、基礎研究の実施、専門研究者間の交流、すみやかな研究成果公開を果たし、本課題について必要不可欠な調査研究を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本課題において重要な劣化診断について現地で調査を行い、併行していた基礎研究の成果も取り入れて検討ができた。また、次年度の研究成果の普及に向けて、歴史的建造物などを対象とする維持管理についての議論を進めることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究 ((3)-②)		
【事業概要】 文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し改善することを目的として、様々な文化財を取り巻く環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究を行う。また、地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設に対して、その依頼に応じて環境調査を行い、専門的・技術的な援助・助言を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 佐野千絵、犬塚将英、早川泰弘、木川りか、吉田直人（以上、保存修復科学センター）、三浦定俊、呂俊民、カリル マグディ（以上、客員研究員）、小椋大輔、三村 衛（以上、京都大学）、白石靖幸（北九州市立大学）			
【主な成果】 文化財施設内の温湿度解析の対象として、静岡県立美術館のロダン館を選択し、熱・換気回路網計算プログラムを用いて温湿度解析を行った。空気汚染物質への対策研究としては、これまでの成果を学会等で報告すると共に、「文化財の保存環境を考慮した博物館の省エネ化」というテーマで研究会を開催した。			
【年度実績概要】 本年度は、文化財施設内の温湿度解析の対象として、静岡県立美術館のロダン館を選択し、熱・換気回路網計算プログラムを用いて温湿度解析を行い、実測した温湿度データとの比較を行った。今回作成した計算モデルから得られた計算結果と実測結果は概ね対応した。また、栗東歴史民俗博物館を解析対象として、省エネルギーを考えて一部の空調を停止した場合に、収蔵庫、展示室内の温湿度がどのように変化するかに関するシミュレーションを行った。7月10日に、「博物館での文化財の保存と活用に関する国際動向」というテーマで研究会を開催した。 博物館資料の保存のための空気汚染物質への対策研究としては、これまでの成果を学会等で報告すると共に、12月15-16日に「中級研修－博物館・美術館等の空気環境最適化のための基礎と実践－」を行った（参加者40名）。「汚染物質計測のための仕様書を策定し、報告書を読みとき結果を評価し、建築設計や空調設備技術者と対策について検討することができる力を身につける」を目的に、講義と実演で構成した。参加者アンケートでは、用語集の提供、必要な機器・スペース等の情報が得られたことについて評価が高く、必要な資材・機材に関する情報をネット上で公開して欲しいとの希望があった。 12月4日に開催した「文化財の保存環境を考慮した博物館の省エネ化」というテーマの研究会では、米国ゲティー保存研究所の前川信氏に「博物館・美術館・図書館・資料館での継続性を考えた環境管理方法」、北九州市立大学の白石靖幸氏に「建築物の総合環境性能評価手法と評価事例の紹介」の講演を頂きさらに九州国立博物館および埼玉県立歴史と民俗の博物館での保存環境を考慮した省エネ化の取り組みについて講演を頂くと共に討論を行った。			
【実績値】 論文等数 3件 (①,②,③) 研究会開催 2件 発表件数 3件 (④,⑤,⑥)			
【備考】 ①呂俊民、佐野千絵他：「ポーラ美術館における室内空気清浄化のための火山ガスの調査」『保存科学』48、pp.13-20、09.03 ②犬塚将英、福西大輔、石崎武志：「熊本城「細川家舟屋形」の保存環境調査」『保存科学』48、pp.147-152、09.03 ③T.Ishizaki, C. Sano and S. Miura: Non destructive investigation of water content profile of the lime plaster wall in tumulus. Proc. In Situ monitoring of Monumental Surfaces, pp.385-390, 08.10 ④犬塚将英、石崎武志、龍泉寺由佳：「石水博物館千歳文庫内の温湿度解析、文化財保存修復学会第30回大会、08.5.17-18 ⑤呂俊民、佐野千絵他：展示・保存環境の酸性雰囲気改善のための研究－実測データに基づく解析－、文化財保存修復学会第30回大会、08.5.17-18 ⑥呂俊民、佐野千絵他：ポーラ美術館における作品素材を用いた環境モニタリング、文化財保存修復学会第30回大会、08.5.17-18			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4325-00

自己点検評価調書

研究所 No34

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	学術雑誌等への 掲載論文等数	学会研究会等 での発表件数	研究会			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術館・博物館での環境調査、海外の研究者との情報交換、研究会の実施、学会や紀要での研究成果公表など予定通り実施し、高い調査研究水準を保つことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第3年度として、環境のシミュレーションに関する現地調査および基礎的な研究も行い、研究は予定通り進んでいる。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4335-00

(様式 1)

業務実績書

研究所 No35

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究 ((3)-③)		
【事業概要】 屋外に位置する美術工芸品、文化財建造物等は、周辺環境の変化が大きな劣化要因となる。本研究では、周辺環境が文化財に及ぼす影響を評価し、予測手法の確立や新たな保存修復技法や材料の開発を目的とする。また、石造文化財の保存修復に関して韓国・国立文化財研究所との共同研究を行う。詳細には双方で対象を設け（日本側：臼杵磨崖仏（大分県臼杵市）、韓国側：雲住寺）、現地観測や修復材料の試験などを行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター） 朽津信明（文化遺産国際協力センター）			
【主な成果】 石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について周辺環境の観測を行った。また、その結果に基づいて劣化要因を解明し、周辺環境の影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を行った。詳細には、(1) 臼杵磨崖仏・熊野磨崖仏における劣化要因調査、凍結防止策やクリーニング手法の検討、(2) 木造建造物の腐朽菌や藍藻類の生息分布と周辺環境の調査、(3) 大韓民国・国立文化財研究所との共同調査、共同研究発表会の実施を行った。			
【年度実績概要】 石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について、周辺環境の観測を行った。また、その結果に基づいて劣化要因を解明し、その影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を試みた。 今年度の主な成果は次の通りである。 (1) 臼杵磨崖仏では今後の修復事業のために、劣化機構の把握を目的とした気象や岩体水分などの長期連続観測を実施している。平成 20 年度は、臼杵磨崖仏古園石仏群、ホキ石仏第二群第一龕、熊野磨崖仏大日如来像を対象に、殺菌灯照射による着生生物のクリーニング施工および評価を実施した。また、ホキ石仏第二群の凍結破砕防止策として寒冷時の覆屋閉鎖実験を継続した。 (2) 木造建造物の腐朽に関して富貴寺大堂（豊後高田市）を対象に周辺環境調査を継続し、腐朽菌や藍藻類の生息分布と周辺環境の関係について把握を行った。 (3) 今年度の大韓民国・国立文化財研究所との共同研究は、2008（平成 20）年 11 月 6 日、国立文化財研究所講堂にて研究発表会を開催した。また、2009 年 2 月には、臼杵磨崖仏（日本）および雲住寺（韓国）に両国の研究者が集合し、寒冷時の石材凍結およびその周辺環境に関する調査を共同で実施した。			
【実績値】 報告書：1 件（①） 論文等：4 件（②～⑤） 発表等：5 件（⑥他）			
【備考】 ①日韓共同研究報告書 2008－文化財保存環境と復元技術研究－ 国立文化財研究所（韓国）／東京文化財研究所 102p 08.11 ②森井『臼杵磨崖仏における凍結劣化防止策の検討―予測とその評価―』 日韓共同研究報告書 2008 pp. 63-82 08.11 ③朽津『石塔で認められる彩色表現について』 日韓共同研究報告書 2008 pp. 15-26 08.11 ④森井・川野邊・山路・柏谷『紫外線照射装置を用いた磨崖仏着生生物の除去』 保存科学 48 pp.21-32 09.3 ⑤MORII, M “Conservation Environment and Conservation Studies for Stone Heritages in Japan” Proc. of the 2008 International Symposium on Conservation Science for Cultural Heritage, National Research Institute of Cultural Heritage, pp.25-27, 08.9 ⑥森井『臼杵磨崖仏における凍結破砕防止策の検討（3）―覆屋内温熱環境の予測と凍結防止策の提案―』 日本文化財科学会第 25 回大会 鹿児島国際大学 08.6.14-15 （他 4 件）			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4335-00

自己点検評価調書

研究所 No35

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究について、石造文化財を中心に劣化要因を解明し対策の提案が出来た。また、大韓民国・国立文化財研究所との共同研究では、情報交換のみならず共同成果を意識した研究交流を開始することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順 調	5年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。特に、石造文化財の保存修復では、凍結破砕や植物繁茂など主要な劣化要因に関して対策の立案が出来た。今後もこのペースを維持しつつ、必要な調査研究などを進めていきたい。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4335-01

(様式 1)

業務実績書

研究所 No36

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する調査研究 ((3)-③)		
【事業概要】 阪神淡路大震災などの大地震で被害を受けた文化財は数多く、また、平成 10 (1998) 年の台風 7 号による倒木被害を受けた室生寺五重塔など、自然災害による文化財被害の甚大さは記憶に新しい。本調査研究では、文化財防災情報システムから地震や台風など過去の災害を対象に調査を行うとともに、システムを活用して防災体制の整備に役立てる。さらに東大寺の塑像群の防災体制について基礎的調査を開始する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 中山俊介、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター） 二神葉子（文化遺産国際協力センター）			
【主な成果】 平成 20 年度は、(1) 地理情報システム (GIS) に基づいた文化財防災情報システムの改良：史跡や重伝建地区などの平面情報について入力が可能となるようにした。(2) 平成 19 年に発生した能登半島地震および新潟県中越沖地震により被災した文化財について、1 年経過後の保存修復状況の現地調査を実施した。(3) 東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるための基礎的調査を開始した。			
【年度実績概要】 平成 20 年度の成果は次の通りである。 (1) 地理情報システム (GIS) に基づいた文化財防災情報システムについて、史跡や重要伝統的建造物群保存地区など平面情報が必要なものにも対応可能のように改良を行った。また、平成 20 年 6 月 14 日に発生した岩手・宮城内陸地震では、震度速報値から被災が予測される文化財の抽出を行い実際の報告との比較を行った。さらに、三重県を対象に県指定まで含めた建造物文化財の所在地データベースを作成するとともに文化財防災情報システムへ反映させた。 (2) 平成 19 年に発生した能登半島地震および新潟県中越沖地震により被災した文化財について、1 年経過後の保存修復状況の現地調査を実施した。能登半島地震で被災した文化財の多くは既に修理工事を終えていたが、七尾城跡（国史跡）のような大規模史跡では現在でも整備工事が行われている現状を確認した。 (3) 東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるための基礎的調査を開始した。法華堂安置仏像群のほとんどは展示のために移動したことがなく重量などの情報が乏しいため、重量推定のための三次元計測を一部実施した。			
【実績値】 論文等：1 件 (①) 発表等：1 件 (②)			
【備考】 ①Yoko Futagami: An approach to disaster prevention and rescue of cultural properties by using GIS in Japan -example of the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo-. Expert Meeting on Cultural Heritage in Asia and the Pacific -Restoration and conservation of immovable heritage damaged by natural disasters-, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo and the Fine Arts Department, Ministry of Culture, Thailand, pp. 91-100, 09.01 ②二神葉子・隈元 崇・森井順之・高尾 曜『国指定文化財GISデータベースを用いた文化財の被害予測と災害レスキューへの活用』文化財保存修復学会第30回記念大会 九州国立博物館 08.5.17			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4335-01

自己点検評価調書

研究所 No36

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

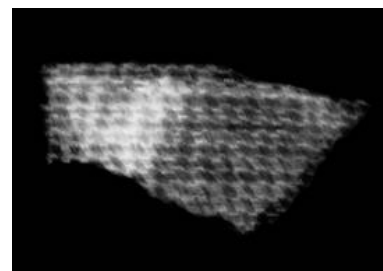
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の防災計画に関して、文化財防災情報システムの改良や大地震後の被災文化財の現状調査を行った。また、仏像群の耐震対策に関する研究を開始、基礎情報の収集を行った。今後は、仏像群の安置施設や仏像自身の耐震診断などを行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順 調	5年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。今年度、予定通り文化財防災情報システムの開発を終了し、今後は運用実験を進める予定である。今後もこのペースを維持しつつ、さらに仏像群の耐震対策に関する研究などを進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究 ((3)-④)		
【事業概要】 標記プロジェクトに関して、1) 考古遺物の完全非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、2) 高エネルギーX線CT法及びX線CR法の応用研究、3) 繊維製遺物や漆製遺物などの分析法の実用化とデータベース作成、4) 木製遺物に対する超臨界溶媒乾燥法の基礎的研究と実用化、5) 埋蔵文化財の露出展示に関する課題を広く検討するための保存科学研究集会の開催、に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子 [都城発掘調査部]、脇谷草一郎 [企画調整部]、大河内隆 [埋蔵文化財センター]、平澤毅、栗野隆 [以上、文化遺産部]、佐藤昌憲 [奈文研客員研究員]			
【主な成果】 1) ガラス製品のレーザーラマン分光分析に関する文献を収集し、標準試料のスペクトルを集積した。 2) 鉄製品に付着する繊維痕跡を XCR 撮影することにより、その製作技法を明らかにした。 3) 漆製遺物の分析において、有機溶剤への溶解性を利用した新たな分析手法を確立した。 4) リグノフェノール含浸処理後に超臨界溶媒乾燥を行う処理においてスケールアップを図った。 5) 遺跡整備研究室と合同で「埋蔵文化財の露出展示における成果と課題」の研究集会を開催した。			
【年度実績概要】 1) ガラス製品の製作技法の解明と劣化状態の診断法の確立を目的としたレーザーラマン分光分析法の応用研究に着手した。本年度は、既往の研究成果について文献資料を収集するとともに、ガラス標準試料のラマンスペクトルを取得・収集した。 2) 鉄製品に錆化・付着している繊維痕跡に対して、イメージングプレートを用いた高精細拡大撮影を行い、繊維構造・繊維密度・撚糸・繊維種等の製作技法に関する知見を得た。また、中世末の古活字を XCT により高精細撮影を行い、得られた断層画像から樹種を推定するとともに、墨の付着状況、木取りについて明らかにした。 3) 縄文時代の土器に残る漆と推定されていた黒色物質が、クロロホルムへの溶解性の違いと溶解残渣の FT-IR 分析から、漆、漆とアスファルトの混合物、アスファルトの3つに分けられることを明らかにした。また、絹製品の錆化機構について、シンクロトロン顕微赤外分析法による分析を進めた。 4) リグノフェノール含浸処理後に超臨海溶媒乾燥を行う処理において、木材試料のサイズを大きくし、乾燥効率などに関する検討を行った。また、マンニトール含浸後、貧溶媒として第3ブチルアルコールに投入し、マンニトールを材内において析出させる予備実験を行った。 5) 遺跡整備研究室と合同で「埋蔵文化財の露出展示における成果と課題」と題した研究集会を開催し、遺跡の露出展示の事例紹介、遺跡露出展示における調査法などの技術報告と総合討議を行い、問題点の共有化と今後の課題について議論した。			
【実績値】 発表件数： 8 件 論文等数： 10 件			
【備考】 論文発表・学会発表等については別添統計表参照			



鉄製品付着繊維痕跡のXCR像

【書式B】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4345-00

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No37

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 レーザーラマン分光分析の応用研究の一環としてガラス製遺物への応用に着手し、標準試料のラマンスペクトルの蓄積を開始した。木製品の保存処理法の開発研究では、継続して超臨界溶媒乾燥法の開発に取り組み、スケールアップを行うことができた。また、継続して遺物の調査分析を行い、多くの遺物について重要な知見を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会参加者数		
判定	A	A	A		
備考 文化財保存修復学会での発表4件、日本文化財科学会での発表6件、合計10件の学会発表を行い、文化財保存修復学会研究発表要旨集に4件、日本文化財科学会研究発表要旨集に4件、マテリアル学会誌に1件、木質炭化学会誌に1件、合計10件の論文を発表した。また、研究集会では185名の参加者を得て、事例報告や技術報告に加え、総合討議において活発な議論を行うことができた。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価をAと判定した。次年度はこのペースを維持しつつ、とくにレーザーラマン分光分析法を用いたガラス製遺物の調査分析法の確立を進める予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	20年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調であると判定した。19年度は、このペースを維持しつつ、特に遺物の材質構造調査法の開発研究におけるガラス製遺物のレーザーラマン分光分析について、データの蓄積と応用開発を進める予定である。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4355-00

(様式 1)

業務実績書

研究所 No38

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究 ((3)・⑤)		
【事業概要】 本プロジェクトでは、文化財修復材料について、製造法・適用法などを調査研究し、適正な文化財修復を行うための基礎を築くことを目的とする。伝統的修復材料に関しては、製法・使用技法・材料物性などを研究することにより、伝統技術を記録し、その有効性を科学的に検証する。一方、近年文化財に使用されるようになった合成樹脂に関して、その使用事例を再確認する。さらに、これらの調査や研究から得られた結果をもとに、現在の環境も踏まえ、より文化財修復に適した技術や材料を開発することをも目的とする。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 北野信彦、加藤雅人、早川典子、坪倉早智子（以上、保存修復科学センター）			
【主な成果】 建造物などに使用する漆塗装の耐候性向上に向けた基礎実験を継続するとともに、漆工品生産に関する伝統技術の調査を行い、その内容を報告書に掲載した。また、紙に関しては、基礎データの集積と整理作業を行い、その内容も報告書に掲載した。また、本研究所が携わった修復事業のうち研究所が所蔵する資料の目録作成化作業を継続し、ネガフィルムなどの資料に関しては、デジタルデータ化も継続した。また第2回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会を開催してのべ107名の出席を得た。			
【年度実績概要】 伝統的修復材料と技術に関して、調査研究を行った。具体的には、昨年度から行っている建造物などに使用する漆塗装の耐候性向上に向けた基礎実験を継続し、収集された実験データの整理と検討を行った。さらに、漆塗料および漆工品生産に関する伝統技術の調査では、岩手県二戸市浄法寺地区周辺にわずかに残された漆室の漆工材料と用具（民俗資料）の整理を実施するとともに、歴史的な漆塗料の分析調査を行った。 また、紙に関しては、収集した試料の繊維組成分析を行ない、適切な紙を選ぶための基礎データを集積し、データベース化に向けた整理を行った。 また、本研究所が携わった修復事業のうち、研究所が所蔵する資料を分類整理した目録作成を継続した。さらに、ネガフィルムなどの資料に関しては、デジタルデータ化も継続して進めた。さらに、修復に用いられた合成樹脂に関する調査を行った。 また、「漆を通じてみた日本と海外との交流 ―漆文化財の調査と保存修復の現状と課題―」というテーマで、第2回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会を開催した。 日時：2008年（平成20）年11月27日 13:20～17:40 会場：東京文化財研究所 地階セミナー室 講演：1,北野信彦（東京文化財研究所）「輸入漆塗料の流通と使用（文化財科学の立場から）」、2,日高薫（国立歴史民俗博物館）「輸出漆器の歴史と性格（漆工史の立場から）」、3,宮腰哲雄（明治大学理工学部）「漆工品と漆塗料の分析（分析化学の立場から）」、4,山下好彦（漆工品修復技術者）「輸出漆器の保存修復作業の問題点（修復技術の立場から）」、5,参加者全員「総合討論」			
【実績値】 発表件数 2件（①,②） 論文数 1件（③） 報告書刊行数 1件（④） 研究会 1件（⑤）			
【備考】 ①北野信彦・窪寺茂「明治期修理における建築塗装の一方法」文化財保存修復学会第30回記念大会 太宰府市中央公民館 2008.5.17 ②北野信彦「輸入漆の流通と使用」第2回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会「漆を通じてみた日本と海外との交流-漆文化財の調査と保存修復の現状と課題-」 2008.11.27 ③北野信彦・小檜山一良・木下保明・竜子正彦・本多貴之・宮腰哲雄「桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査(Ⅱ)」『保存科学 第48号』p.133-146 東京文化財研究所 ④『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書 2008年度』p.123 東京文化財研究所 2009.3 ⑤第2回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会「漆を通じてみた日本と海外との交流」 2008.11.27 開催			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4355-00

自己点検評価調書

研究所 No38

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	発表件数	刊行書発行数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	建造物などに使用する屋外漆塗装の耐候性や漆に関する伝統技術の基礎資料の蓄積、紙の分析手法など、文化財の修復材料に関して有益な基礎的知見を収集することができた。本研究所が携わった修復事業のうち、研究所が所蔵する資料を分類整理し、目録作成を継続した。これにより次年度以降には成果の公開が容易になると考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順 調	本プロジェクトで実行してきた手法の有効性が明らかになってきており、それに伴い重要な知見も蓄積されつつあることから、計画の実施状況は順調である。次年度以降も引き続き、基礎的知見の収集と資料目録化を推進する予定である。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4355-01

(様式 1)

業務実績書

研究所 No39

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	国際研修「紙の保存と修復」((3)-⑤)		
【事業概要】 日本絵画などの日本の紙本文化財は海外の美術館・博物館で所蔵され公開されている。所蔵館には修復部門が存在するものの、日本の紙本文化財の修復の専門家が所属していることは稀であり、そのため海外の保存担当者や学芸員、修復技術者からの修復についての問い合わせも多い。そこで文化財研究所は、ICCROMと共同で10カ国10人の参加者を募り国際研修会を開催し、日本紙本文化財の保存と修復についての研修を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 北野信彦、加藤雅人、坪倉早智子、早川典子（以上、保存修復科学センター）			
【主な成果】 2008年9月8日～26日の期間で10カ国から10名を迎え入れて研修を行った。2時間を1コマとし、講義4コマ、実習19コマ行った。紙本文化財の修復理念、材料学の講義を行った。実習では、掛軸修復、和綴じ冊子製作、屏風・掛け軸の取扱などを行った。またスタディーツアーでは美濃を訪れ、和紙の原料・製造から流通までを和紙産地の歴史とともに学習した。また、日本の修復工房を訪れ現状を視察した。また報告書を作製した。			
【年度実績概要】 期間：2008年9月8日（月曜日）～26日（金曜日） 場所：東京文化財研究所 参加者（研修生）：Ingrid SEGEBARTH・ラカンブル国立美術学校（ベルギー）、Maria Soledad CORREA SALAS・国立保存修復センター（チリ）、Shan WANG・中国文化遺産研究院（中国）、Jan HYBNER・プラハ芸術建築デザイン大学（チェコ）、Johanna Magdalena WEIDRINGER・ヘルツォークアウグスト図書館（ドイツ）、Caroline DE STEFANI・大英図書館（英国）、Maria Luisa GIORGI・国立東洋美術館ローマ（イタリア）、Mony CHHOUN・カンボジア国立図書館（カンボジア）、Naiyana YAMSAKA・タイ国立公文書館（タイ）、Marie-France LEMAY・イェール大学図書館附属ベインック貴重図書写本図書館（米国）、以上計10名 研修内容： ・講義「紙の基礎知識・加藤雅人（東京文化財研究所）」「文化財修復に用いられる接着材について・川野邊渉（東京文化財研究所）」「東洋絵画書跡の材料とその使い方・山本記子（株式会社文化財保存）」「日本の紙文化財の保存と修復・池田寿（文化庁）」 ・実習「装幀概論」「掛軸修理（補紙・裏打・折伏入れ・軸装）」「和綴じ冊子製作」「構造と取り扱い（屏風・掛軸）」（有限中間責任法人 国宝修理装幀師連盟） ・スタディーツアー「美濃（長谷川和紙工房、和紙の里会館、美濃史料館、上有知湊）」「京都（岡墨光堂・本社工房、光影堂・本社工房、修美・京都国立博物館修理所工房、松鶴堂・京都国立博物館修理所工房）」 アンケート：回収率100%、満足度100%。 報告書：上記内容について、英文和文併記の報告書を作製した。			
【実績値】 研修開催数 1回 報告書数 1件（①）			
【備考】 ①「International Course on Conservation of Japanese Paper 2008」155p 2009.3			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4355-01

自己点検評価調書

研究所 No39

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研修会開催数	報告書刊行数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	紙文化財の修復技術者、保存担当（責任）学芸員、文化財保存修復系教育機関の教員などを、海外から 10 名招いて研修を行ったが、アンケート結果から満足度が高いとの評価を得ている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度は漆工芸品に関する研修であるので内容は変更するが、本年度のコンセプトを引き継ぎ研修生に有益な研修を行うこととする。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4355-02

(様式 1)

業務実績書

研究所 No40

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	在外日本古美術品保存修復協力事業 ((3)-(5))		
【事業概要】 海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。この事業により修復した作品の公開によって、わが国の修復技術に対する理解が深まり交流が促進されている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 中山俊介、北野信明、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）、佐野智典、高橋直久（以上、管理部）、中野照男(副所長)、津田徹英、塩谷 純、綿田 稔、江村知子、城野誠治、勝木言一郎、皿井 舞（以上、企画情報部）、清水真一（文化遺産国際協力センター）			
【主な成果】 平成 20 年度は、10 館 10 点の作品（絵画 5 点、工芸品 5 点）を修復した。うち 1 点(工芸品 1 点が 19 年度からの継続、2 点（絵画 1 点、工芸品 1 点）を海外で修復した。工芸品の事前調査はチェコ外務省、チェコ国立美術館、国立ナープルステク博物館、デンマーク国立博物館などヨーロッパで 8 館 21 点の調査を行った。また、平成 19 年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 平成 20 年度は、10 館 10 点の作品を修復した（うち 1 点が 19 年度からの継続、2 点が海外での修復（◆印））。 ＜絵画＞ 1) 「松に孔雀図屏風」 6 曲 1 隻 グレーター・ビクトリア美術館 2) 「星曼荼羅図」 1 幅 バンクーバー博物館 3) 「虫歌合絵巻」 1 巻 ローマ国立東洋美術館 4) 「遊女立姿図」（宮川長春筆） 1 面 キョッソーネ東洋美術館 5) ◆「達磨図」 1 幅 ケルン東洋美術館 （2 年計画の 1 年目） ＜工芸品＞ 1) 「住吉蒔絵文台」 1 基 ヴィクトリア&アルバート美術館 2) 「花鳥紋章蒔絵楯」 1 基 アシュモリアン美術館 3) 「近江八景蒔絵香棚」 1 対 市立ヴェルク・メディジチ博物館 （2 年計画の 1 年目） 4) 「楼閣山水蒔絵箱」 1 合 オーストリー応用美術博物館 （2 年計画の 2 年目） 5) ◆「花樹鳥獣蒔絵螺鈿洋櫃」 1 基 ケルン東洋美術館 （3 年計画の 3 年目） 平成 20 年度、工芸品の事前調査はチェコ外務省、チェコ国立美術館、国立ナープルステク博物館、デンマーク国立博物館、ベルリン東洋美術館、ケルン東洋美術館などヨーロッパで 10 館 29 点の調査を行った。また、平成 19 年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。			
【実績値】 事前調査 1 件 、 修復件数 10 件 ケルンにおけるワークショップ 1 件 ベルリンにおける講演会 1 件 報告書刊行数 1 件①			
【備考】 ①『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書 平成 20 年度（絵画／工芸品）』 235p 東京文化財研究所 09.3			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4355-02

自己点検評価調書

研究所 No40

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査件数	修復件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は10館、10点の作品の修復を実施した。海外においても、修復家を派遣し、修復作業を実施したとともに海外の修復家、学芸員などを対象にしたワークショップを開催した。このように海外における日本絵画や工芸品を修復したり、ワークショップを開催することによりその技術、取扱い方法を伝えるだけでなく再び展示することができるようになりその価値を高めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も引き続き、事前調査を実施しており、来年度、再来年度に向けて、修復する候補作品を抽出している。今後はより広範囲な美術館、博物館から、収蔵庫に眠っている価値ある日本絵画と工芸品を修復し、再度展示可能な姿にするべく努力を重ねる。また、海外において修復技術を伝えることにもなお一層の努力を傾注する。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究 ((3)-⑥)		
【事業概要】 近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物など従来の文化財とは、規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長 中山俊介
【スタッフ】 川野邊渉、森井順之、中村明子（以上、保存修復科学センター）、朽津信明（文化遺産国際協力センター）、小堀信幸、横山晋太郎、長島宏行（以上、客員研究員）			
【主な成果】 今年度は近代化遺産の利活用をテーマとして研究を行った。鉄構造物の保存に関する関係者を招き、研究会を開催しそれぞれの立場から鉄構造物の保存と活用に関する発表を行った。また、設計図面などに多く使われている青図の再発色に関する研究も実施した。屋外展示されている鉄道車両や航空機などの文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外暴露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても検討している。昨年度の研究会をまとめた報告書も刊行した。			
【年度実績概要】 今年度は近代化遺産の中でも鉄構造物の利活用に関する手法や問題点をテーマとして研究を行った。国内において、屋外に保管されている鉄構造物の保存修復に実際に携わっている担当者の方お二人と塗料メーカーの方を招き、屋外展示されている鉄構造物の利活用を考えた保存と修復方法に関する手法や問題点に関する検討会を平成 20 年 11 月 21 日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。さらに、ドイツ技術博物館の主任学芸員とともに屋外展示されている鉄構造物（高炉やシップリフト等）について現地にて情報交換を実施した。また国内においては福岡県北九州市の新日鉄東田第 1 高炉跡や関連施設、群馬県富岡市の富岡製糸場に保存されている鉄水槽、熊本県荒尾市の三井万田坑跡などの現地調査を実施した。さらに、屋外展示されている鉄道車両や航空機等の金属を主体とした文化財に関しても同様に現地調査を実施した。加えてそのような屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために各種サンプルを作成し小樽市総合博物館、船の科学館、かかみがはら航空宇宙科学博物館、大樹町多目的航空公園、海上自衛隊鹿屋航空基地での曝露実験も継続して実施している。これらの地点では、試料の受けた紫外線量をはじめ、温度、湿度などの測定も行い、これらの塗装仕様と劣化速度の相関についても検討している。屋外展示航空機の環境測定も継続している。			
【実績値】 論文数 4 件 (①～④) 発表件数 2 件 (⑤～⑥) 報告書刊行数 3 件 (⑦～⑨)			
【備考】 ① 中山俊介 「Issues Concerning the conservation of Steel Vessels in Japan」 Issues Surrounding the Conservation of Modern Heritage、pp.39-43、09.3 ② 中山俊介 「On the utilization of Railway Cultural Properties」 Utilization of Railway Cultural Properties、pp.6-10、09.3 ③ 中山俊介 「On the Operation of Tramcars and the Conservation of Cultural Properties」 Utilization of Railway Cultural Properties、pp.42-48、09.3 ④ 中山俊介 「航空機の保存修復と活用」 航空機遺産の保存と活用、pp.5-13 09.3 ⑤ 中山俊介 「鉄構造物の保存と修復」 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会、東京文化財研究所、08.11.21 ⑥ 中山俊介 「近代化遺産の保存と活用」 シンポジウム「日本の技術史を見る眼」第 2 7 回 中部産業遺産研究会、09.2.28 ⑦ 『Issues Surrounding the Conservation of Modern Heritage』 東京文化財研究所 44p 09.3、 ⑧ 『Utilization of Railway Cultural Properties』 東京文化財研究所 95p 09.3、 ⑨ 『航空機遺産の保存と活用』 東京文化財研究所 57p 09.3			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4365-00

自己点検評価調書

研究所 No41

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存と活用について、各種の調査及び関係する専門家を招いた研究会を開催した。今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事が出来た。また、現地調査や研究会を通じて近代文化遺産の重要性を多くの方々に認識いただいた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第三年次として、継続している現地調査から重要な調査結果を収集することが出来、また、研究会を通じて多くの研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次年度以降も今年度の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

【書式B】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4415-00

(様式 1)

業務実績書

研究所 No42

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力 ((4)-①)		
【事業概要】 キトラ古墳：石室内の環境調査と壁画の取り外し作業を実施 高松塚古墳：壁画の修理及び修理環境の保全並びに壁画の劣化原因及び劣化防止対策措置などの調査・研究を実施			
【担当部課】	保存修復科学センター（東文研）、 都城発掘調査部（飛鳥藤原地区）、埋蔵文化財センター、文化遺産部（奈文研）	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志（東文研） 埋蔵文化財センター長 肥塚隆保（奈文研）
【スタッフ】 佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英、間渕創、川野辺渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人、坪倉早智子（以上、東文研）松村恵司、廣瀬覚、内田和伸、井上直夫、中村一郎、岡田愛、石田由紀子、玉田芳英、高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎、（以上、奈文研）、宮原晋一（奈良県教育委員会）、水野敏典（奈良県立橿原考古学研究所）、相原嘉之、長谷川透（明日香村教育委員会）、花谷浩（出雲市教育委員会）高橋克壽（花園大学）片山一道（京都大学大学院理学研究科）			
【主な成果】 キトラ古墳では、4月に月像を剥ぎ取り、11月にはすべての天文図の剥ぎ取りを完了して天井無地部分の剥ぎ取りに着手し、北壁の一部も剥ぎ取った。石室内の点検及びカビ処置も定期的に行った。また、石室内微生物調査および環境調査は継続して行った。高松塚古墳では、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。また、壁画の処置方法について模擬壁にてテストを行いバイオフィルムによる汚れのクリーニング方法などを確立した。			
【年度実績概要】 キトラ古墳 4月に「月像」を剥ぎ取り、11月にはすべての天文図の剥ぎ取りを完了して天井無地部分の剥ぎ取りに着手し、北壁の一部も剥ぎ取った。石室内の点検及びカビ処置も定期的に行った。これまでに取り外した漆喰片については随時経過観察と処置を行っている。「子・丑・寅」については平成20年5月の公開のための額装を完成させ、平成21年度の公開に向けて「青龍」の処置を行った。 6月に石室内の微生物調査を実施した。8箇所のサンプルから菌類約80株が分離されたが、今回石室内で新たに検出された属は見当たらなかった。バクテリアについては、8箇所のうち、3箇所のサンプルから酢酸菌の一種が分離、同定された。また、石室内および周辺の環境管理は継続して行っている。 高松塚古墳 昨年度に引き続き、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天3、東女子については昨年度中に完成しており、今年度は残りの9面全63項目中、45項目の図面を完成させた。壁画の処置方法について模擬壁にてテストを行い、布海苔水溶液による漆喰の強化、次亜塩素酸ナトリウム水溶液を用いたバイオフィルムによる汚れのクリーニング方法などを確立した。 石室解体中に採取した試料について、微生物の分離と同定を行った。次年度の近辺土壌の微生物の解析とあわせて石室の微生物との関連を調査する予定である。また、石室や取り合い部でこれまで使用された履歴のある樹脂などの材料について、石室から分離された主要なカビの生育の度合いを調査した。 劣化原因調査および保存修復処理の実施に有用な情報を得るため、主に「白虎」の分析・調査を実施した。実施に先立ち、分析用フレームを作成し、このフレームに測定機器を取り付け分析作業を行った。蛍光X線分析では漆喰から検出される鉛の分布状況などを確認した。また顕微鏡を用いた描線部分の詳細な表面観察を行い、白虎の描線部分を覆う白色物質が存在することがわかった。 発掘調査の結果、古墳南端で2条の石詰め暗渠を新たに検出した。また、墳丘の形状については、直径23mの円墳とする従来の復元案が妥当であることが確認できた。			
【実績値】 論文 4件（①,②,③,④）			
【備考】 ①国宝高松塚古墳壁画の材料調査の変遷（佐野千絵、他）「保存科学」48、pp.119-132、09.03 ②国宝高松塚古墳壁画修理作業室の一般公開時における環境測定（犬塚将英、他）「保存科学」48、pp.153-158、09.03 ③キトラ古墳保護覆屋内の環境について（4）（森井順之、他）「保存科学」48、pp.159-166、09.03 ④キトラ古墳の微生物等の状況報告（2008）（木川りか、他）「保存科学」48、pp.167-174、09.03			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京文化財研究所

処理番号

4415-00

自己点検評価調書

研究所 No42

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	援助・助言 実施件数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	キトラ古墳、高松塚古墳ともに、本年度の計画を予定通り遂行し、良好な成果を上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い調査研究の水準で事業を進めることができた。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4415-01

業務実績書

研究所 No43

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力 ((4)-①)		
【事業概要】 本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力を行った。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 松村恵司、高田貫太、丹羽崇史〔以上、都城発掘調査部〕、井上直夫、中村一郎、岡田 愛、加藤真二、石村 智〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 高松塚古墳石室解体にともなうフォトマップ作製の手順、及び方法を取りまとめた『高松塚古墳壁画フォトマップ資料』の出版。フォトマップを基にしたブルーレイハイビジョンディスク動画に対する、英語・中国語・韓国語版のナレーションを追加し、『高松塚古墳壁画フォトマップ資料』に添付して、高松塚古墳壁画の理解の深化、公開・普及に努めた。			
【年度実績概要】 高松塚古墳石室解体にともなうフォトマップ作製の手順、及び方法を取りまとめ、『高松塚古墳壁画フォトマップ資料』（奈良文化財研究所史料第 81 冊）を出版した。フォトマップを基にしたブルーレイハイビジョンディスク・ショートバージョン（10 分）、ロングバージョン（50 分）の 2 種類の動画に対して、日本語のナレーションに対応して、英語、中国語、韓国語のナレーションを追加し、日本語を含めて 4 カ国語の選択可能なものとした。			
【実績値】 出版物等 1 件（①） ブルーレイハイビジョンディスク・ナレーション翻訳 1 件（②）			
【備考】 ① 奈良文化財研究所『高松塚古墳フォトマップ資料』奈良文化財研究所史料第 81 冊 2009.3 ② 奈良文化財研究所『ブルーレイハイビジョンディスク 高松塚古墳 2006（日・英・中・韓国語）』2009.3			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

4415-01

自己点検評価調書

研究所 No43

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 フォトマップデータの撮影手順と編集方法を紹介した『高松塚古墳壁画フォトマップ資料』の公刊により、解体された石室と壁画の正確な記録を公開し、後世に残すことができた。これは、国宝高松塚古墳壁画の恒久保存対策に対する国民の理解を得るうえで、きわめて重要な公開普及活動といえる。また、高品質なフォトマップデータの利用により、正確な色と形のハイビジョン動画製作が可能となり、新たな文化財の記録・公開方法を提示することができた。						

2. 定量的評価

観点	出版等数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	実測図にかわる精度のきわめて高い古墳壁画フォトマップの公刊は、今後の古墳壁画研究の重要な基礎資料となるものである。また、考古学では、はじめて制作を試みた正確なハイビジョン動画は、高松塚古墳壁画の理解の深化や、多様な文化財の新たな記録、公開手法として注目されるものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今後も多様な文化財の記録、公開方法としてフォトマップと動画の作製の需要が増すものと予想され、それに向けて機材の改善を行うことが期待される。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-01

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 特別調査法隆寺献納宝物 (第 30 次)「聖徳太子絵伝」第 4 回 ((5)-①-iii)
【事業概要】 聖徳太子の事績を描いた日本最古の遺品である「聖徳太子絵伝」(もと法隆寺絵殿の障子絵)の制作について、本紙(立涌文綾)、彩色など、制作当初(1069 年)の姿がどのようなものであったかを、肉眼観察および科学的な分析によって調査研究する。科学研究費補助金(基盤研究 A)による「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝の調査研究」とリンクさせる。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	上席研究員 原田一敏
【スタッフ】 松原茂(上席研究員 9 月迄)、澤田むつ代(上席研究員)、島谷弘幸(学芸研究部長)、神庭信幸(保存修復課長)、救仁郷秀明(企画課特別展室長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、沖松健次郎(企画課出版企画室主任研究員)、松嶋雅人(列品管理課平常展調整室主任研究員)、小林達朗(調査研究課絵画・彫刻室主任研究員)、小山弓弦葉(調査研究課工芸・考古室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室研究員)、若杉準治(京都国立博物館学芸部列品管理室長)、谷口耕生(奈良国立博物館学芸部保存修理指導室研究員)、中野照男(東京文化財研究所副所長)、村重寧(早稲田大学名誉教授)、東野治之(奈良大学文学部教授)、早川泰弘(東京文化財研究所保存修復科学センター分析科学研究室長)、朝賀浩(文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官)	
【主な成果】 本太子絵伝の本紙(画絹)は、平絹のほか、立涌文様の綾が使用されていたことが知られていたが、今回の調査によって新たに花菱文様の綾布があることがわかった。また、図様については天明 6 年、吉村周圭によって描かれた現舍利殿壁面のいわゆる天明模本から推測することが多かったが、今回は現本を精査することによって、各図様の内容についても明らかになった。	
【年度実績概要】 5 年計画の第 4 年目。10 面のうち第 7 面と第 8 面について、外部の研究者も交え、絵画および染織の専門家が肉眼および拡大写真による入念な調査を行い、まず現状の図様が聖徳太子の事蹟のどの場面をどのように表しているのかを検討し、内容を特定した。また、第 1 年度に調査した第 1・2 面に引き続いて今年度は第 3・4 面の図様の紹介と内容の検討を詳細に示した概報を公刊した。科研の補助金により、第 7 面から第 10 面までの各面を 32 分割(レンズの収差を補正するため、実際は各面 153 カット)で撮影した高精彩デジタル画像を連結して 6 面分の大画像を製作した。18 年度までにデジタル化した X 線写真を同様に連結し、第 1～10 各面の大画像を製作した。	
【実績値】 調査および検討会 5 回(内 4 回は科研費による) 収集資料点数 デジタル高精細画像 616 点(科研費による) デジタル高精細連結大画像 4 点(科研費による) デジタル X 線連結大画像 4 点(科研費による) 4×5 スチール写真画像 30 点(科研費による) 調査概報の刊行 2 冊	
 高精細デジタル画像を連結して作成した第 5・6 面	
【備考】	

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-01

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝」の調査研究の成果として、17年度に調査した第1,2面、18年度に調査した第3,4面の調査概報を刊行する作業の中で、調査方針を確立し、それにしたがって今年度はポイントを絞った調査を進めることができた。また高精細デジタル画像は10面すべてを撮影することができた。多方面の研究者の知見を得ることができ、今後の成果の公刊に反映することが可能となった。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 科学研究費補助金を活用して、調査検討会を6回開催し、充実した調査および内容の検討ができた。また、デジタルによる撮影を10面すべての撮影が完了した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	法隆寺献納宝物の「聖徳太子絵伝」は、美術史上重要な作品であるにもかかわらず、従来、10面からなる特大画面の詳細な図版が公刊されていなかった。19年度から始まった概報公刊は今年度で4面まで終えることができ、美術史研究に寄与するところは大きい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	5年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。概報の公刊が2年ずつずれるのは当初からの予定である。今後もこのペースを維持しつつ、高精彩デジタル撮影は完了したので、今後は赤外線撮影、顔料分析など科学的な調査の充実をはかりたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 特別調査「書跡」第5回, 第6回 ((5)-①-iii)
【事業概要】 平成 20 年 7 月 9 日(水)～11 日(金), 平成 20 年 12 月 10 日(水)～12 日(金) 東京国立博物館における文化財の中の書跡の特別調査。今後の展示や研究の進展の向上に結びつけることを目的とする。昨年度に引き続き当館書跡収蔵品の中の古文書について抽出して調査を 2 回実施した。古文書学に基づき、記載内容の検討、形式・様式の分類、使用された料紙の素材分析を行い、1 通ごとの古文書名称の特定作業を行い、法量計測、写真撮影など基礎データを収集した。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 島谷弘幸
【スタッフ】 松原茂（上席研究員 9 月迄）、高橋裕次（博物館情報課長）、富田淳（調査研究課長）、田良島哲（列品管理課登録室長）、富坂賢（保存修復課保存修復室長）、丸山猶計（企画課特別展室研究員）、高梨真行（調査研究課書跡・歴史室研究員）、赤尾栄慶（京都国立博物館学芸部企画室長）、羽田聡（京都国立博物館学芸部企画室研究員）、湯山賢一（奈良国立博物館長）、西山厚（奈良国立博物館学芸部長）、野尻忠（奈良国立博物館学芸部情報サービス室研究員）、藤田励夫（九州国立博物館学芸部博物館科学課保存修復室長）、荒木和憲（九州国立博物館学芸部文化財課資料登録室研究員）、池田寿（文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官）、横内裕人（文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官）、地主智彦（文化庁文化財部美術学芸課歴史資料部門調査官）、梅澤亜希子（文化庁文化財部美術学芸課文部科学技官）	
【主な成果】 収蔵古文書のうち、徳川斉昭筆とされる鉛筆書きの書簡について、他機関収蔵の書状と比較して筆跡を検討した結果、紛れもなく斉昭自筆であることが判明した。鉛筆を利用した書状・書付類は幕末に輸入され明治期に入って普及することになるが、幕末と推定される本書簡も時代相を反映したもので貴重である。	
【年度実績概要】 昨年度の調査が、家伝文書を中心とした群単位の古文書を対象としたのに対し、本年度は卷子・掛幅や、「マクリ」と呼ばれる非表装の古文書を主な対象として調査を実施した。基本的には、当館の列品番号ごとを単位として、1 通ごとの古文書について法量を計測し、差出・宛所の特定から内容を解析し、無記年の古文書については年代推定を試みた。1 通ごとに古文書の名称を付し、写真をデジタル撮影した。そして可能な限り文字の解読を実施した。また特色ある花押・印判(朱印・黒印)や署名などについては関連する他機関所蔵の古文書との比較検討もあわせて内容解析の一助とした。料紙については、顕微鏡や厚さ計などを用いて使用された原料分析も行った。この調査の結果は当館「情報アーカイブス」を介して、本年度より開始された文部科学省科学研究補助金公開促進費による事業「東京国立博物館古文書データベース」に反映させる（平成 21 年 6 月頃公開予定）。	
【実績値】 第 1 回 平成 20 年 7 月 9 日(水)～11 日(金) 【調査日数】 3 日間 【調査員・調査補助員】 のべ 42 人 【調査数】 列品数 69 件(古文書数 121 通) 【作成画像数】 381 カット 第 2 回 平成 20 年 12 月 10 日(水)～12 日(金) 【調査日数】 3 日間 【調査員・調査補助員】 のべ 46 人 【調査数】 列品数 73 件(古文書数 198 通) 【作成画像数】 758 カット	
   B1932 書状 徳川家斉筆 1 通  B1722 尼妙海寄進状 1 通	
【備考】	

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-02

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	A	A	
備考 書跡の列品として分類されている古文書について、差出や筆者内容等について新しい情報を付加することに成功した。また所在確認の意味からも1通ごとの写真の撮影によってそれぞれの保存状態の把握にもつながった。他機関研究者を含めての調査により分野・時代を超えた学際的な検討が可能となった。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査資料数	撮影画像数			
判定	A	A	A			
備考 本年度2回の実施により、所蔵する古文書の約4割の調査が完了したことになる。前年度に対し調査件数(本年度142件)、撮影画像数(本年度1139カット)の大幅な増加となった。 また本年度より開始した文部科学省科学研究補助金公開促進費による事業「東京国立博物館古文書データベース」による公開の為の情報基盤の確保にもつながり、国内外の研究者への提供が可能となる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	古文書の内容については今後の平常陳列のキャプションや解説での新たな情報提供のために、より多くのテキストデータの形での解説が必要である。特に次年度以降の対照となるものが中世から近世にかけての書状であるため、文字の解説と内容の把握は必須となることが想定される。 文化庁ならびに国立博物館の専門研究者が一堂に集まり、調査を行い、新発見も得られた。各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有でき、今後の研究および陳列に寄与する点が多い。21年度以降も継続する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来水準を維持しつつ17・18年度の写経に引き続き、昨年、本年の古文書調査について順調に実現できたと考える。 調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開にむけて努力し、さらに調査研究の成果を展示に反映することにも力を注ぎたい。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-03

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究—尾形光琳風神雷神屏風を中心に ((5)-①-iii)		
【事業概要】 尾形光琳の「紅白梅図屏風」(MOA 美術館蔵)の金地が金箔ではなく、金泥によるものだという調査結果が注目されている。これをうけて、当館が収蔵する光琳の「風神雷神図屏風」をはじめ、各派各時代の金地屏風を、同条件の下で調査し、金地についての客観性のあるデータを蓄積することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 松原茂(上席研究員 9月迄)、神庭信幸(保存修復課長)、松嶋雅人(列品管理課平常展調整室主任研究員)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室研究員)			
【主な成果】 当館収蔵の尾形光琳筆「風神雷神図屏風」を対象として、蛍光エックス線と実体顕微鏡による分析調査を行ない、データの集積を進めた。			
【年度実績概要】 当館収蔵の絵画作品の中から、尾形光琳筆の「風神雷神図屏風」を選んで金色部分の化学分析を行なった。本年度は2回実施。 第1回目の調査では、肉眼観察で金箔の厚さが異なって見える部分数箇所を選んで、蛍光エックス線により金箔と想定される部分のサンプル調査・成分分析を行なった。 第2回目の調査では、第1回目の調査と同一箇所を選んで、実体顕微鏡による、観察調査を行なった。第3回目は、これまでの2回の調査結果をふまえて分析結果の検討を行い、調査箇所によるFeの含有比率に違いのあること、顕微鏡写真により紙の繊維の見え方に違いのあることが判明した。			
【実績値】 調査回数 化学分析調査 2回 蛍光エックス線調査 4ヶ所 顕微鏡写真 5ヶ所 28カット撮影 分析結果検討会 1回 収集資料数 蛍光エックス線調査 4ヶ所 顕微鏡写真 5ヶ所 28カット撮影  金箔地調査風景			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-03

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	B	B	
備考 本調査は、現在注目されている金地作品の箔使用に関する調査で、多くのサンプルからデータを集めることで、各時代のさまざまな流派の絵画制作上の特徴をより客観的に研究する基礎調査としてきわめて重要なものである。20年度は、主要作品である尾形光琳筆「風神雷神図屏風」の調査を行なったが、サンプルの収集法などの検討に時間を多く費やした。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	B	B				
備考 他の業務との組織的調整が難しく、計画的に調査を組むことが出来なかったものの、実作品を対象とした調査を2度行なうことができた。21年度には、他業務との調整を図り、十分な作業時間を確保することで、より多くの作品を対象とした調査を計画的に実施し、客観的なサンプリング調査となるような量のデータを集めていきたい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	20年度の2回の調査により、一応の方法論確立とデータ集積をはじめることが出来た。ただし、分析に十分な時間が割けなかったのが今後の課題である。21年度は、より多くの作品を対象とした調査を実施することで、客観性のあるデータ集積をめざしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	担当者が大きな展覧会準備にかかわって、時間的な余裕がなかったこともあり、年度内の調査時期が遅れ、十分なデータ集積が果たせなかった。業務を整理し、時間を有効に活用できるよう、綿密な計画を立てて調査回数を増やすことで、データ集積をさらに進める必要がある。 今後は、調査・データ集積範囲を光琳以外の作品や、金箔など素材そのものに広げることで調査の充実をはかりたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-04

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 応挙館障壁画の復元に関する調査研究（今年度は、主に修理未了（まくりの壁画）の障壁画について検討）（(5)・①・v）		
【事業概要】 大日本印刷株式会社の特別協力を得て、応挙館の一の間、二の間の障壁画をすべて、デジタル画像処理によって複製するための調査研究を行い、その成果として複製を完成させ、応挙館の室内空間を復元することによって、一般に公開する。 とりはずした障壁画については、必要な修理を行い、随時、平常展において一般公開する予定である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室 主任研究員 松嶋雅人
【スタッフ】 松原茂（上席研究員 9月迄）、神庭信幸（保存修復課長）、救仁郷秀明（企画課特別展室長）、田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、須賀信介（研究支援者・経理課係長（設備担当））			
【主な成果】 現在まくりの状態である壁面の現状を調査検討し、その概要を把握することで、適切な修理方法を決定するための重要な参考資料を得ることができた。			
【年度実績概要】 大日本印刷株式会社の特別協力を得て、応挙館の一の間、二の間の障壁画をすべて、デジタル画像処理によって複製するための調査研究を行い、その成果として全画面の複製を完成させた。これによって応挙館の室内空間が復元されることによって、一般に公開することが可能となった。 今年度は、とりはずした障壁画の必要な修理を行い、随時、平常展において一般公開を可能とする適切な修理方法を検討するため、まくりの状態である壁面の調査を行った。			
【実績値】 調査回数： 1回 まくりの壁画についての全体的な状態を把握：33枚  竹図壁貼付(書院一之間北側邊棚左)  竹図壁貼付(書院一之間北側邊棚中)			
【備考】			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-04

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	B	B	A	
備考 まくりの状態の画面を調査検討することで、江戸後期の水墨画作品にみられる墨、和紙等の素材についての知見が新たに得られた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	B					
備考 今年度は作品調査の回数を十分に確保できなかったため、来年度はより十全な調査を重ねて、修理計画に遺漏ないようデータをさらに収集していきたい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	まくりの壁画の調査研究を重ねたことにより、とりはずした障壁画の修理実施の方針を立てる上で、重要な参考資料とすることができた。この調査研究により、建築物に付随する障壁画の保存と公開について、汎用できる方法論とデータを得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今後は、とりはずした障壁画の修理計画の立案、実施のため、適切な修理方法を決定するため、まくりの壁画の調査研究を多角的な方法によって、さらに進めていく。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-05

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に、文部省より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群よりなっている。また洋書にはドイツ人医師シーボルトより献納された数百冊を含んでいる。詳細調査を実施し、その学術的意義を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 田良島哲（列品管理課登録室長）、松田清（客員研究員、京都大学大学院）			
【主な成果】 ＊ 江戸時代末から明治時代前期の洋書のうち、歴史的意義の深いものについて、調査を行った。 ＊ 前年度に調査を行ったオランダ語書籍を中心に、特集陳列を企画して展示するとともに、学術的意義を紹介したパンフレットを作成、配布した。			
【年度実績概要】 ＊ 前年度のオランダ語書籍に引き続き、本年度は、主として博物館の創始者の一人である田中芳男に関連したフランス語を中心とする洋書の調査を行った。 ＊ 平成 20 年 10 月 28 日から 12 月 7 日まで本館第 16 室を会場として、特集陳列「世界への扉—東京国立博物館の洋書コレクション—」を開催し、調査を行った洋書 16 件を公開した。 ＊ 特集陳列にあわせて、陳列の内容を紹介するパンフレット（カラー、4 ページ）を刊行した。刊行した 5000 部は会期中に品切れとなった。			
【実績値】 調査回数 1 回 論文掲載数 1 件：田良島哲「世界への扉—東京国立博物館の洋書コレクション—」（特集陳列リーフレット 平成 20 年 11 月 28 日）			
 メーリアン『スリナム産昆虫変態図譜』			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-05

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本調査は江戸幕府旧蔵資料の総合的研究と並行して行っており、特に江戸時代伝来の書籍については伝来を詳細に確認できたことが大きな成果である。今後は、フランス、イギリス、ロシアなどの洋書について、引き続き、詳細調査を実施する予定である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	B					
備考 調査成果の公開に重点をおいたこともあり、本年度は集中的な調査が1回であった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	洋書のうち、オランダ関係についてその全貌を把握した上、その成果を展示の形で公開することができた。調査体制など調査を促進する体制作りを検討したい。また、公開については引き続き実施したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	館内に専門担当者がないため客員研究員が主体となっているが、可能な範囲での調査は実施できている。今後は公開成果を基盤に、競争的資金の獲得によるより詳細な調査を促進する方策を検討する。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-06

業務実績書

中期計画の項目	4	文化財に関する調査及び研究の推進	
プロジェクト名称	6)	ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究 ((5)-①-ii)	
【事業概要】 1992 年～2000 年に東京国立博物館で実施したパキスタンにおける考古学調査の成果を総括し、最終的に調査報告書を作成する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長 小泉恵英
【スタッフ】 望月幹夫（特任研究員）			
【主な成果】 1995～99 年に実施したザールデリー遺跡の発掘調査の一部を「Zar Dheri: A Buddhist Temple in Hazara Division, Pakistan」、「The finds from Zar Dheri」として発表した。 また、同遺跡の発掘調査報告書を現在準備中である。さらに、本遺跡の遺物を中心とした特別展を米国において開催する計画をパキスタン考古局などと検討中である。			
【年度実績概要】 ザールデリー遺跡発掘調査の成果の一部を以下の形で刊行した。 1) 「Zar Dheri: A Buddhist Temple in Hazara Division, Pakistan」 『Orientations』 vol. 39, no. 7, October 2008 (Orientations Magazine Ltd.) 2) 「The finds from Zar Dheri」 『Gandhara -The Buddhist Heritage of Pakistan- Legend, Monasteries, and Paradise』 November 2008, (Verlag Philipp von Zabern, Mainz) ザールデリー遺跡の発掘調査報告書を現在準備中である。本年度は執筆ならびに図版作成を進めた。 また、この調査の成果を示す将来的な計画として、本遺跡の遺物を中心とした特別展を米国において開催する計画をパキスタン考古局などと共同で検討中である。 さらに、1992～96 年までのパキスタン、ハザーラ地方の遺跡踏査の成果について、以下の研究会において口頭発表した。 「パキスタン、ハザーラ地方の仏教遺跡」（「ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究」第 3 回研究会・研究代表者：宮治昭龍谷大学教授）。			
【実績値】 論文 1) 「Zar Dheri: A Buddhist Temple in Hazara Division, Pakistan」 『Orientations』 vol. 39, no. 7, October 2008 (Orientations Magazine Ltd.) 2) 「The finds from Zar Dheri」 『Gandhara -The Buddhist Heritage of Pakistan- Legend, Monasteries, and Paradise』 November 2008, (Verlag Philipp von Zabern, Mainz) 口頭発表 「パキスタン、ハザーラ地方の仏教遺跡」（「ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究」第 3 回研究会・研究代表者：宮治昭龍谷大学教授）。			
【備考】 1) 「Zar Dheri: A Buddhist Temple in Hazara Division, Pakistan」 『Orientations』 vol. 39, no. 7, October 2008 (Orientations Magazine Ltd.) 2) 「The finds from Zar Dheri」 『Gandhara -The Buddhist Heritage of Pakistan- Legend, Monasteries, and Paradise』 November 2008, (Verlag Philipp von Zabern, Mainz)			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-06

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 当館の実施した海外調査で考古学的な成果も大きく、諸外国の学界からの注目度も高い。						

2. 定量的評価

観点	論文発表数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	報告作成に向けて、関連論文作成にも大いに成果を示している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	遺構、遺物の研究についての研究成果を示している。報告書作成準備についても進行中であるが、当初計画よりもやや遅れが出ている。

【書式B】

施設名

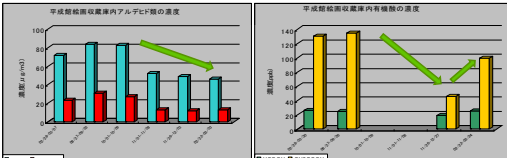
東京国立博物館

処理番号

4511-07

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 博物館の環境保存に関する研究 ((5)-①-i)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】 塚田全彦（保存修復課環境保存室長、7月迄）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員、11月から）、和田浩（保存修復課環境保存室研究員）			
【主な成果】 館内の展示ケースで発見された紙魚に端を発し、全館的な駆除を緊急かつ段階的に実施することができた。緊急性と周辺への影響を考慮しつつ1）紙魚を発見した展示ケースおよび展示室の薫蒸、2）講堂およびロビーなどの周辺施設の清掃・薫蒸、3）特別展示室全域の清掃・薫蒸、4）考古展示室の清掃・薫蒸、5）全館的な清掃を段階的に施工し、緊急の防虫対策とした。			
【年度実績概要】 ホルムアルデヒドなどのアルデヒド類、酢酸などの有機酸や大気汚染物質である窒素酸化物などに関して、博物館内の空気成分の調査研究を実施し、現状の正確な把握を目指した。アルデヒド類の濃度に関して危険性が高い箇所に関し、その除去法について具体的な検討と部分的な対処を試行的に実施した。温湿度に関しては、測定結果に対応した湿度分布地図を作成し、注意を要する区域の視覚化を行った。輸送中の梱包ケース内の振動・衝撃について、実際の輸送に関して調査を行い、得られた結果を解析して問題点を明らかにした。生物生息に関しては、展示室で発見された紙魚に対する対処から、作品、展示ケース、展示室の殺虫薫蒸および全館清掃を実施した。			
【実績値】 研究会発表件数 2件 文化財保存修復学会国際学会 「収蔵庫内の空気成分に関する長期的なモニタリング」 「温湿度データ管理と自動化のポイント」 論文掲載数 1件 学会予稿集 1篇所載 調査回数 生物生息調査1回、空気環境調査2回、 外、全館的な湿度調査を継続的に実施			
		 吸着剤の交換と濃度変化	
【備考】 神庭信幸、塚田全彦、和田浩、市川佐織、金鐘旭：収蔵庫内の空気成分に関する長期的なモニタリング、文化財保存修復学会第30回大会、福岡、2008 神庭信幸、和田浩：温湿度データ管理と自動化のポイント、文化財保存修復学会第30回大会、福岡、2008			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-07

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 温湿度、生物生息、振動・衝撃、空気成分に関する計測と、その結果に対応した環境整備を実施した。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	A	A	A			
備考 文化財保存修復学会第30回大会（福岡）において研究成果を公表し、活発な質疑応答を行った。生物生息調査1回、空気環境調査2回の外、全館的な湿度調査を継続的に実施。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財を取り巻くさまざまな環境因子について、現実的な状況を具体的かつ正確に把握することが可能になり、事業の改善に役立てながら文化財の安全の確立に寄与している。今後は更なる調査の実施と、現象のメカニズムの解明にも発展させていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-08

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 東洋民族資料に関する調査研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究をおこなう。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほかに、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報を従来より充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課長 谷 豊信
【スタッフ】 澤田むつ代（上席研究員）、小山弓弦葉（調査研究課工芸・考古室主任研究員）、土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）、日高慎（保存修復課保存修復室主任研究員）、猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室研究員）、川村佳男（調査研究課東洋室研究員）、三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）、丸山清志（客員研究員）			
【主な成果】 当館所蔵の東洋民族資料に対する総合的な調査を通して、主に 3 つの成果があった。①箱書きや付札の内容などを含む総合的なデータベースの作成により、研究・展示・保存などに必要な基礎情報が従来よりも一層充実した形で整備された。②保存状態も記録したことにより、脆弱な材質でできた資料や劣化しつつある資料のより安全な保管、および遊離していた部分の本体への接合に寄与した。③とくに南太平洋の資料について、民族誌や最新の研究成果と照合することで、過去の台帳の記載内容を補足、修正することができた。			
【年度実績概要】 約 3500 件の東洋民族資料のうち、本年度は約 6 割分の調査を完了した。データベースには、各資料の計測値・員数・形状・材質・所在・画像などに加えて、保存状態も入力した。これにより、紙・毛皮・鉄など劣化や錆による変形や損壊がとくに懸念される材質の資料に対して、現状よりもさらに適切な保管方法を考える基礎データが整った。また、当館の東洋民族資料は大部分が明治から昭和初期にかけて入ったため、歴史資料としての側面も具えている。そこで当館収蔵以前の箱書きや札が添えてあれば逐一その内容を記録し、伝来や年代の解明に役立てるようにした。例えば、明治年間の「東宮御下附」による資料には、献納者が採集した場所と年代が附属の箱や札などに記されていることがある。また徳川頼貞寄贈の資料には、京都にあった銅駄人類学研究室の札が掛けられているものが多い。これらの内容を記録することで、資料が皇室や銅駄人類学研究室に入る以前の来歴だけでなく、資料の年代を知る有力な手がかりにもなる。そのうえ、銅駄人類学研究室の札にはかつての登録番号も残されていることが多いので、この番号を記録することにより、同研究室のコレクションが形成されていく過程を復元するためのきっかけにもなる。 東洋民族資料のうち南太平洋の資料については、客員研究員の丸山清志氏の協力のもと民族誌や最新の考古学的成果と照合しながら、より詳細に調査を進めた。当館の東洋民族資料は大部分が明治時代から昭和初期にかけて収蔵されたものであり、収蔵時点で作成された調書にもとづいて編まれた台帳の知見は、当然ながら収蔵当時の情報量や研究水準を超えるものではなかった。そのため、その内容には現在からみると不備や誤りも少なくない。南太平洋の民族資料に対する本年度の調査を通して、帳簿に記載された内容のうち、特に名称と用途に関して補足、修正を加えて一層の充実を目指した。			
【実績値】 調査件数 約 2000 件、調書作成点数 約 2000 点、データ入力点数 300 点、 台帳の記載内容に補足・修正を加えた件数 139 件、保管状況を改善した件数 58 件			
【備考】			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-08

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 東洋民族資料が数年以内に東洋館から移動する可能性を見据えて、保存状態・付属品を含む網羅的な調査研究に踏み切った。結果的に来年度からの東洋館耐震補強工事にともなう移動が決定し、時宜に適った調査研究となった。しかし、効率的な調査研究方法の確立に時間がかかった。採集地や材質の異なる資料が混在しているが、館内スタッフや客員研究員の協力を得て、調査研究の正確性を実現することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 東洋民族資料の6割(2000点)程度を調査した。東洋館の耐震補強工事に備えた業務や特別展の準備などの緊急課題や日常業務と平行しながら、ほぼ週1回のペースで実施した。資料の点数と調査のペースを考慮すれば、調査結果についてはデータベース入力までが初年度の限界であり、概報の刊行まではとても手が回らなかった。しかし、調査の主眼を置いた南太平洋の民族資料については、来年度の特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」で成果の一部を還元する。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東洋民族は当館に専門の担当者がいなかったため、一部を除いて長らく展示も調査も行われなかった。担当者がいたとしても、地域や材質が多岐に渡る同資料を一人で網羅的に調査することは極めて困難だった。幸いにして館内外の専門家の協力のもとグループ体制を整えることで、東洋民族の系統的な調査研究が可能となった意義は大きい。しかし、秋季以降は他業務との関連から週1回の調査ペースを維持するのが精一杯となった。調査成果の刊行とあわせて、調査回数の維持・増加と作業の一層の効率化が次年度の課題である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	他の業務との兼ね合いを計りながら、調査研究は順調に進んでいる。成果報告の公刊は次年度以降とするのは当初からの予定である。来年度夏以降に予定されている東洋館の耐震補強工事に伴う収蔵品の移動、およびその後の保管状況により、今後もこのペースを維持できるか不安はあるが、調査の一層の効率化と充実をはかりたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-09

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 耐震性の高い展示手法に関する調査研究 ((5)-①-i)		
【事業概要】 考古・工芸分野の器物の展示手法を中心に、地震による転倒などに関する安全性の見直しを行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】 塚田全彦（保存修復課環境保存室長、7月迄）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員、11月から）、和田浩（保存修復課環境保存室研究員）			
【主な成果】 特別展覧会（「国宝 薬師寺展」「福沢諭吉展」「妙心寺展」）において展示デザインの立案段階から参画し、地震発生時に転倒、落下が生じて損傷を受ける危険性の高い文化財を安全に陳列する手法を提案し、実現化した。 「文化財建造物等の地震対策に関する日中専門家ワークショップ」（文化庁主催、於中国四川省成都市）に参加し当館の活動を報告するとともに、中国国内の地震対策の現状に関する情報収集を行った。			
【年度実績概要】 平成館および表慶館における特別展に出品される大型文化財の転倒対策を研究し、実際に安定台を製作して適用した。特に表慶館での特別展においては建造物床下基礎部分の構造調査を行った。調査結果を基に重量の大きい作品を陳列する際の展示プランの立案を行い、作品と展示台とを強固に一体化する工夫を提案し、地震による転倒を予防するための展示を実現化した。平成館での特別展においては免震装置上に陳列される立体物を展示台に固定するための施工管理を中心に活動を行った。 「文化財建造物等の地震対策に関する日中専門家ワークショップ」（文化庁主催、於中国四川省成都市）に参加し「博物館の地震対策」を講演した。講演により当館の活動を報告後、現地博物館職員との討議を通じて中国国内の地震対策の現状に関する情報収集を行った。また、成都市内の三星堆博物館、金沙博物館を見学し、青銅器や土器の展示における耐震対策の現状を視察した。			
【実績値】 調査回数 4回、施工回数 5回 「国宝 薬師寺展」『日光菩薩像』『月光菩薩像』、「福沢諭吉展」『手古奈』、「妙心寺展」『玩具船』、「阿修羅」『阿修羅像』など、4回の調査及び5件の施工に関し展示支持具設計に対する助言を行い、地震発生時における転倒防止策を講じた。 「文化財建造物等の地震対策に関する日中専門家ワークショップ」（於中国四川省成都市）にて「博物館の地震対策」を講演。三星堆博物館、金沙博物館の見学。			
			
「福沢諭吉展」『手古奈』の展示台			
【備考】			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-09

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 作品を保全するために安全な展示は欠くことができない。一方見やすい展示デザインの追及も必要である。転倒防止のための支持具は両者を併せもつものを目指して検討・製作を行った。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	施工回数				
判定	A	A				
備考 作品ごとに形状や状態が異なることから、それぞれの状態に合わせながらの製作になる。特に、特別展展示における転倒防止策の検討を具体的に実施した。 当館の上記活動を海外において報告し、他館の現状を視察するとともに情報収集を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	転倒を防止する保存安定台を展示室に設置して、安全性の向上を図ることができた。こうした取り組みに関し、今後は検討過程や結果を他館や関連分野の研究者にも公開できるように改善していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-10

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 大型油彩画のロール状保存と木枠に張り込まない展示手法の開発に関する調査研究 ((5)-①-vi)		
【事業概要】 大型油彩画を数多く扱うルーブル美術館及びフランスの保存専門家と共同で、科学的な裏づけに基づき、木枠に張り込むことなく、同時に絵具にかかる負担を最小限に抑えながら、場所をとらないようにロール状に巻いて保存する方法の開発と、必要に応じて安全に展示する方法の開発である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 塚田全彦（保存修復課環境保存室長、7月迄）、土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）、木島隆康（東京藝術大学大学院教授）、山梨絵美子（東京文化財研究所企画情報部文化財アーカイブス研究室長）			
【主な成果】 京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵および京都川島織物資料館所蔵の「武士の山狩」に関する下絵、織見本などの調査を通じ、作品の成立に関する基礎的な情報の収集を行った。また、紙製太巻き軸の開発から得られた方法論が油彩画のロール状保存にも有効であることが確認できた。			
【年度実績概要】 - 大型キャンバスを支持体とする油彩画「武士の山狩」の制作技術に関する調査。 「武士の山狩」2枚の光学調査（普通光、斜光線、紫外線蛍光、赤外線反射写真撮影）およびそのデータ整理と分析			
【実績値】 調査回数 京都工芸繊維大学工芸資料館における資料調査 1回 京都川島織物資料館における資料調査 1回 研究会発表件数 1回 文化財保存修復学会 30回大会 「簡易万能型の太巻芯の活用—博物館における対症修理」 論文掲載数 文化財保存修復学会 30回大会予稿集 1篇所載  京都工芸繊維大学工芸資料館における資料調査			
【備考】 鈴木晴彦、本多聡、米倉乙世、神庭信幸、土屋裕子、松田麻美：簡易万能型の太巻芯の活用—博物館における対症修理、文化財保存修復学会 30回大会予稿集、2008年5月17・18日、福岡			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-10

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 国内の残る「武士の山狩り」に関する関連資料の調査を通じ、作品の制作技術に関する基礎的情報の収集を行うことができた。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	A	A	A			
備考 昨年度の撮影によって得た高精度デジタル映像の合成を行い、作品の制作技術や保存状態に関する解析を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	作品の対症修理を実施しながら、本格修理に必要な修理設計の検討を行った。作品の状態、制作技術など種々の情報を得るための事前調査も予定通り進行している。調査検討結果に基づき、修理設計を行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-11

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 韓国国立中央博物館所蔵の高麗漆器の保存に関する国際共同研究 ((5)-①・ii)		
【事業概要】 韓日両国の国際共同研究による高麗螺鈿漆器の修理・復元事業は、劣化・崩壊した漆器に対して、両国で蓄積された研究および技術的ノウハウを適用し、漆器の本来的価値をだれもが認識可能な状態に回復し、公開することが目的である。本事業の研究プロセスは、高麗漆器の再評価にとどまらず、韓日の保存修理および復元複製に関し、理念と技術の両面において一層の発展をもたらす。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】 北村謙一（重要無形文化財保持者・漆工品修理）、室瀬和美（重要無形文化財保持者・目白漆芸文化財研究所代表）、岡田文男（京都造形芸術大学教授）			
【主な成果】 数百の小片に分かれた断片の詳細な観察を通じて、各小片の位置、箱の形状及び寸法、木地及び塗膜の構造、顔料の種類、螺鈿・描金の組成などについて多数の知見を得ることができた。			
【年度実績概要】 科学調査の実施：破損した漆器に対して、可能な限りの科学的調査と分析を実施し、制作材料および方法などを明確化する。 調査結果の評価：調査結果を分析・検討し、崩壊以前の寸法や表現などの状態の正確な推定、制作材料および技法の全容の解明、精度の高い制作年代の推定を行う。中央博と日本側が共同で行う。 修理仕様の策定：調査結果に基づき、修理後の外観をどの程度まで復元するか、断片の強化・クリーニング・変形修整の方法、強化後の断片の接合方法、接合した断片を箱状に保持する方法など、修理仕様を策定する。			
【実績値】 現地ソウルにて漆器現品の詳細調査 1 回、国内での検討会 1 回、京都にて関連作品の修理に関する調査 1 回を開催。日本側の検討結果をまとめた中間報告書を韓国中央博物館に提出。			
			
高麗螺鈿漆器の調査			
【備考】			

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-11

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 極めて希少な漆工品遺物である高麗漆器の破片残片に関して、漆工品の保存修理および分析の国際専門家チームによって共同調査及び研究を行い、遺物の保存指針のみならず、具体的な修理について検討を実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
備考 現地ソウルにて漆器現品の詳細調査1回、国内でのこれまでの調査の総括のための検討会1回を開催。また、京都にて関連作品の修理に関する調査を1回開催。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査成果は中間報告書として次年度に韓国中央博物館から刊行の予定である。漆塗膜、顔料、描金、螺鈿、木地、下地、布などについて詳細なデータを得ることができ、劣化以前の状態の復元が可能になりつつある。また、修理および復元製作のための方法論、材料などの検討も進み、具体的な修理着手への準備は整いつつある。次年度では、修理仕様の確定を目指している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進				
プロジェクト名称	12) 法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝の調査研究 (科学研究費補助金) ((5)-①-iii) [1] 特別調査法隆寺献納宝物 (第 30 次)「聖徳太子絵伝」第 4 回 ((5)-①-iii) と共同で実施]				
【事業概要】 聖徳太子の事績を描いた日本最古の遺品である「聖徳太子絵伝」(もと法隆寺絵殿の障子絵)の制作について、本紙(立涌文綾)、彩色など、制作当初(1069 年)の姿がどのようなものであったかを、肉眼観察および科学的な分析によって調査研究する。科学研究費補助金(基盤研究 A)による「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝の調査研究」とリンクさせる。					
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 原田一敏		
【スタッフ】 松原茂(上席研究員 9 月迄)、澤田むつ代(上席研究員)、島谷弘幸(学芸研究部長)、神庭信幸(保存修復課長)、救仁郷秀明(企画課特別展室長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、沖松健次郎(企画課出版企画室主任研究員)、松嶋雅人(列品管理課平常展調整室主任研究員)、小林達朗(調査研究課絵画・彫刻室主任研究員)、小山弓弦葉(調査研究課工芸・考古室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室研究員)、若杉準治(京都国立博物館学芸部列品管理室長)、谷口耕生(奈良国立博物館学芸部保存修理指導室研究員)、中野照男(東京文化財研究所副所長)、村重寧(早稲田大学名誉教授)、東野治之(奈良大学文学部教授)、早川泰弘(東京文化財研究所保存修復科学センター分析科学研究室長)、朝賀浩(文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官)					
【主な成果】 本太子絵伝の本紙(画絹)は、平絹のほか、立涌文様の綾が使用されていたことが知られていたが、今回の調査によって新たに花菱文様の綾布があることがわかった。また、図様については天明 6 年、吉村周圭によって描かれた現舍利殿壁面のいわゆる天明模本から推測することが多かったが、今回は現本を精査することによって、各図様の内容についても明らかになった。					
【年度実績概要】 5 年計画の第 4 年目。10 面のうち第 7 面と第 8 面について、外部の研究者も交え、絵画および染織の専門家が肉眼および拡大写真による入念な調査を行い、まず現状の図様が聖徳太子の事蹟のどの場面をどのように表しているのかを検討し、内容を特定した。また、第 1 年度に調査した第 1・2 面に引き続いて今年度は第 3・4 面の図様の紹介と内容の検討を詳細に示した概報を公刊した。科研の補助金により、第 7 面から第 10 面までの各面を 32 分割(レンズの収差を補正するため、実際は各面 153 カット)で撮影した高精細デジタル画像を連結して 6 面分の大画像を製作した。18 年度までにデジタル化した X 線写真を同様に連結し、第 1～10 各面の大画像を製作した。					
【実績値】 調査および検討会 5 回(内 4 回は科研費による) 収集資料点数 デジタル高精細画像 616 点(科研費による) デジタル高精細連結大画像 4 点(科研費による) デジタル X 線連結大画像 4 点(科研費による) 4×5 スチール写真画像 30 点(科研費による) 調査概報の刊行 2 冊					
高精細デジタル画像を連結して作成した第5・6面					
【備考】					

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-12

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝」の調査研究の成果として、17年度に調査した第1,2面、18年度に調査した第3,4面の調査概報を刊行する作業の中で、調査方針を確立し、それにしたがって今年度はポイントを絞った調査を進めることができた。また高精細デジタル画像は10面すべてを撮影することができた。多方面の研究者の知見を得ることができ、今後の成果の公刊に反映することが可能となった。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 科学研究費補助金を活用して、調査検討会を6回開催し、充実した調査および内容の検討ができた。また、デジタルによる撮影を10面すべての撮影が完了した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	法隆寺献納宝物の「聖徳太子絵伝」は、美術史上重要な作品であるにもかかわらず、従来、10面からなる特大画面の詳細な図版が公刊されていなかった。19年度から始まった概報公刊は今年度で4面まで終えることができ、美術史研究に寄与するところは大きい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	5年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。概報の公刊が2年ずつずれるのは当初からの予定である。今後もこのペースを維持しつつ、高精彩デジタル撮影は完了したので、今後は赤外線撮影、顔料分析など科学的な調査の充実をはかりたい。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-13

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究 (科学研究費補助金) (5)-①-ii)		
【事業概要】 日本に現存する仏像、神像等の木彫像の樹種について調査研究し、日本特有の木の文化、歴史の理解を深めることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 金子啓明
【スタッフ】 浅見龍介 (企画課出版企画室長)、丸山士郎 (博物館情報課情報管理室長)、和田浩 (保存修復課環境保存室研究員)、能城修一 (森林総合研究所木材特性研究領域樹種識別担当チーム長)、藤井智之 (森林総合研究所関西支所長)			
【主な成果】 今年度は岐阜県の神社3カ所に所蔵される神像を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。韓国では木彫像を見学し、国立中央博物館の研究員と調査を実施する方法について協議した。			
【年度実績概要】 岐阜県関市高賀神社の平安時代の神像 16 躯、高山市の飛騨一宮水無神社の平安から室町時代の神像 50 躯、高山市荒城神社の神像 3 躯を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。樹種の分析については森林総合研究所の能城が担当し、現在分析中である。これらの神像は、いずれも様式的には京都の像の作風を反映しながら、やや簡素化しており都との距離を示している。森林も近く、地域的な特色もあるだろうが、3カ所の異なる神社において多数の神像を調査したことにより、美濃、飛騨地方については把握できたと言ってよい。樹種の分析結果を待って、成果を発表したい。 韓国には木彫像が少ないこともあって、従来研究が進んでいない。植生が異なるので単純に比較できないが、周辺国として把握しておきたい。彫刻に適した材として日本から輸出した木材を使用している可能性もある。韓国の木彫像の多くが寺院所蔵であるため、日本の研究者だけでは調査することは不可能である。国立中央博物館と連携して実施する方向で協議を開始した。			
【実績値】 調査作品件数 全 68 件 神像 64 件 仏像 4 件 写真データ 830 点 木片資料 120 点 論文掲載数 1 件 金子啓明「日本の木彫像の樹種と用材観」 (『木の文化と科学』海青社 平成 20 年 4 月 30 日)			
【備考】			



女神坐像(岐阜・高賀神社)

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-13

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 神像彫刻は非公開のものが多く、近年神社側の方針転換により調査を受け容れる神社も出てきた。日本固有の文化としての神の研究が求められているのであろう。神と木は密接な関係があり、神像の調査研究は今後注目を集めると考えられる。ただし、調査の許可を得るまでに時間がかかるため、調査日程に非効率なところがあるのは否めない。早い段階での所蔵者との交渉が必要である。						

2. 定量的評価

観点	調査作品件数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 神像彫刻は非公開のものが多く、調査も困難である。神像調査の64件は異例の数字といえる。また、各像について詳細な写真データと、木片資料が得られた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	神像彫刻については所蔵者が非公開とする例が多く、美術史的調査が充分には行き届いていない。また、樹種の科学的識別についてはほとんど実施されていない状況にある。今回は昨年とは異なる地域に調査を設定し、これまで調査が充分でない作品について実地調査し、木片資料を得ることが可能となった。これまでの調査の蓄積に基づき21年度には成果を詳細に分析し、公表する必要があると認識している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	4年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。今後もこのペースを維持しつつ、さらに年輪年代分析なども取り入れ、科学的な調査の充実をはかりたい。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-14

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 書画料紙の加工法及び保存に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-①-v)		
【事業概要】 国内外に所蔵される東アジアの書道史に関わる作品について、1点ごとに詳細な書誌や伝来などの情報と、デジタル画像を収集する。さらに、科学機器を用いて、料紙の技法、変遷、使用法を実証するとともに、時代による書風の特徴やその変化などを調査研究する。また、作品の修理にともなうカルテなどの情報から、さらに詳しい分析を行う。これらによって、書の作品の存在意義を、料紙と書風という二つの側面から科学的に解明し、料紙と書風の相関関係をも考察する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 島谷弘幸
【スタッフ】 松原茂(上席研究員 9月迄)、高橋裕次(博物館情報課長)、富田淳(調査研究課長)、神庭信幸(保存修復課長)、丸山猶計(企画課特別展室研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室研究員)、赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部企画室長)			
【主な成果】 東京国立博物館・陽明文庫・大阪市立美術館などに収蔵されている作品で、装飾料紙を用いた写経・古筆・典籍を中心に、一部古文書なども含め、展示履歴などによって把握できる情報をもとに、調査対象となる作品のリスト作成と調査対象の絞り込みを行った。今年度の主な調査対象は、写経と古筆であり、作成したリストをもとにデジタル写真撮影と、作品の筆跡および料紙に関する基礎調査を実施した。また、入木道関係の古文献資料のデジタル化を行った。			
【年度実績概要】 1. 東京国立博物館所蔵の装飾料紙作品の調査とデータ化 昨年度に引き続き、東京国立博物館が所蔵する装飾料紙作品の調査とデータ化を行った。今年度は、その成果をもとに、特集陳列「装飾料紙と鑑賞料紙」と題して本館特別1室を使って約20件の代表的な作品の展示を行い、配布資料も作成してデータの公開をはかった。 2. 特別展に係る作品の調査とデータ化 本年度、東京国立博物館で開催した特別展「大琳派展」においては、本研究と関係の深い作品が一堂に展示された。それらの作品についても、詳細なデータを収集した。 3. 他機関への調査 今年度は、京都・陽明文庫、大阪・大阪市立美術館、韓国・中央博物館、台湾などに出張し、他期間の所蔵する装飾料紙を用いた写経・古筆・典籍等の調査を行なった。許可の出た作品に関しては、東京国立博物館内部での調査と同様に、顕微鏡による料紙の拡大画像の撮影を行い、データの充実をはかった。			
【実績値】 特集陳列「装飾料紙と鑑賞料紙」(本館特別1室、平成20年11月5日～12月14日)を開催 研究会などでの発表 島谷弘幸「仮名の成立と古筆の美」社団法人 日本交通協会 平成20年7月4日 ほか全7件 論文掲載数 島谷弘幸『文人の書』(『日本の美術』504号、至文堂、平成20年5月10日) ほか全7件 調査件数 50件、写真撮影点数 150点、データ入力点数 300点、文献資料のデジタル化 5件			
【備考】			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-14

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本研究は2年目にあたり、調査方針の再検討も行ったが、その調査方法は確立してきたと言える。その方法にしたがって他機関においてもすみやかに調査を進めることができた。科学研究費を使用して、協力者を増やし、より多くの情報を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 科学研究費補助金を活用して、国内での出張調査に加えて、韓国や台湾への調査が実施できた。さらに、他機関においても、ほとんどの場合顕微鏡による料紙の拡大写真を撮影し、装飾料紙に関するより詳細なデータを得ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東アジアの書道史に関わる膨大な資料を有する博物館の特徴を生かした調査を実施して、その成果を特集陳列で公開した。光学顕微鏡などの科学機器を用いた客観的なデータを広く収集して、調査の内容をさらに充実したものとすると同時に、さらなる成果を刊行物などで公開していく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中国、韓国など、これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、海外においても、東アジアの書道史に関わる資料の調査を今年度は行うことができた。その調査を継続的に行っていく必要がある。また、今後も所在情報や、調査方法について、相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-15

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15) 目録学の構築と古典学の再生 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 日本古典学の研究基盤再生のための新しい学問領域として、日本独自の「目録学」を構築し、天皇家・主要公家文庫のデジタル画像を蔵書群毎に集積し、蔵書目録等を利用してその旧蔵形態を共時的に復原するとともに、伝統的な知識体系の構造や具体相を解明することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室長 田良島哲
【スタッフ】 島谷弘幸 (学芸研究部長)、福原紗綾香 (調査研究課研究支援者)			
【主な成果】 1 明治時代に館蔵となった菊亭家 (今出川家) 旧蔵の古典籍類について、前年度に引き続き調査を行い、詳細な目録を作成した。 2 館蔵の歴史資料を精査し、特に公家文化の実態を示す画像資料の残存状況を確認した。これらについては、次年度以降詳細な調査やデジタル画像作成を計画している。			
【年度実績概要】 1 菊亭家旧蔵古典籍類は、明治 26 年 (1893) に同家から博物館が入手したもので、歌書、史書、日記類、部類記など 100 余件、約 780 点が含まれる。多くは蔵書印からその伝来が知られていたが、今回の調査で館史資料に含まれていた受入時の目録と照合し、蔵書印のないものも含め、現存する菊亭本の全貌を明らかにすることができた。さらに形状、寸法、本奥書を含む奥書等をすべて調査し、基礎的な情報を確定した。いずれも江戸時代の良質の写本であり、本研究に寄与するところ大である。 2 館蔵に含まれる歴史資料のうち、公家の儀式や調度に関する画像資料を調査した。これまで確認したところでは、江戸時代から明治時代にかけての装束、輿車、舞楽等に関する写生図類が多く見られる。次年度はこれらの資料について詳細な調査を行う予定である。			
【実績値】 菊亭家旧蔵古典籍 110 件 787 点について詳細目録作成。 歴史資料のうち画像資料類 116 件について、現状を確認。			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-15

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本創成研究にふさわしい素材を選定し、古典籍の研究として必要十分な基礎情報を蓄積し、今後の発展的研究に備えることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査資料数				
判定	A	A				
備考 研究支援者が日常的に目録の作成支援に従事し、目標とした菊亭家旧蔵古典籍類の目録を完成することができた。目録については刊行に向けて、原稿を準備した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の歴史資料・和書類は多数にのぼるが、詳細な調査が行われたものは少なく、今回の科学研究費による調査を通じて、詳細情報を蓄積することができた。同時に本創成研究に対して、その趣旨にふさわしい基礎的な知見を提供した。次年度以降も関連する歴史資料・和書について積極的に調査を進める体制を作ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画どおり推移している。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-16

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) 国立博物館の機能と役割の変遷に関する基礎的研究－館史資料の分析を中心に－ (科学研究費補助金) ((5)-①・iii)		
【事業概要】 東京国立博物館では、2,046 件が館史資料として登録されている。内容は日本における博物館の歴史そのものであり、昭和 25 年(1950)に文化財保護法が施行され、文化財保護委員会が設置されるまで、日本の文化財保護行政の中心に位置した博物館のあり方を検討する際の貴重な資料である。本研究では、これらの資料について調査を実施し、その細目などを明らかにして、今後の博物館学研究の指針となるべき資料を整理、分類、分析し、研究の成果を一般に公開していくことを目標とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 丸山士郎
【スタッフ】 島谷弘幸（学芸研究部長）、高橋裕次（博物館情報課長）、木下史青（企画課デザイン室長）、鬼頭智美（企画課国際交流室長）、白井克也（博物館教育課教育講座室長）、伊藤嘉章（九州国立博物館学芸部企画課長）			
【主な成果】 東京国立博物館が保管している、列品録、列品台帳、収蔵品目録、東京国立博物館刊行物を中心に、館蔵品の収蔵にかかわる経緯等の調査を実施した。また、収蔵作品の調査を実施した。			
【年度実績概要】 1. 東京国立博物館館蔵品の収蔵にかかわる経緯等の調査 館蔵品の中でもとくに、近代彫刻の収蔵経緯等について、東京国立博物館が保管している資料を使用して、調査を行なった。その成果は、来年度発行予定の刊行物にて報告する予定である。また、東京国立博物館の歴史に深く関わりを持つ作品の収蔵経緯等の調査も行なった。たとえば、明治 20 年代に博物館も関係し臨時全国宝物取調が行なわれたが、その際に博物館が宝物取調の結果から模写・模造作品を制作した。それらの模写・模造の多くが現在東京国立博物館に保管されており、彫刻では竹内久一、森川杜園など、絵画では横山大観、菱田春草などの現在は大家とされる作家の模写・模造作品で貴重である。これらの収蔵経緯等を調査し、データ化を行なっている。 2. 収蔵作品の調査 館蔵品の収蔵経緯等を調査すると同時に、作品本体の調査も行なった。近代彫刻に関する作品の調査は、やはり来年度発行の刊行物にその成果を反映させる予定である。また、東京国立博物館が開館と定める明治 5 年（1872）に行なわれた湯島聖堂博覧会には、当時博物館に勤めていた蜷川式胤による模写作品がたくさん出品された。それらの模写作品の多くは、博覧会の時点で博物館に寄贈されている。これら蜷川の模写作品には、いつどこで模写したものなのか記載されていることが多いため、作品本体の調査を行なうとともに、それらをデータ化している。それは、初期の博物館職員がどのような活動を行なっていたのかを知る上で重要なデータとなるであろう。			
【実績値】 作品調査 15 件 列品録 デジタル化 30 件 刊行物のデジタル化 63 冊			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-16

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	B	
備考 デジタル化した文字データについては、さらに校正の必要がある。						

2. 定量的評価

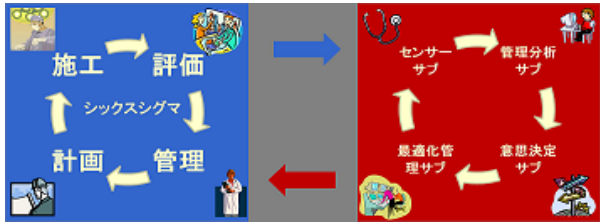
観点	調査件数	デジタル化件数				
判定	A	A				
備考 列品録等の文献調査、作品調査は随時おこなっている。作品の写真は、当館ホームページのカラーフィルム検索でも公開した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の収蔵品の収蔵に関する情報はこれまでほとんど調査されてこなかったが、当研究によって一部ではあるが明らかとなった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	3年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。来年度は成果をまとめた報告書を刊行する。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究 (科学研究費補助金) ((5)-①-iv)		
【事業概要】			
保存と公開という博物館の使命を持続的なものとするためには、あらゆるリスクを予測し、リスクを回避するための対策を事前に講じることによって、高い安全性に裏付けられた活動へと博物館を質的に転換する必要がある。そのためには、従来行われてきた基礎研究及び個別的対処を統合し、機動的かつ実効的な臨床保存学を確立する必要がある。その具体的な方法論としてトータルケアシステムの構築について研究を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】			
塚田全彦 (保存修復課環境保存室長、7 月迄)、荒木臣紀 (環境保存室主任研究員、11 月から)、土屋裕子 (保存修復課保存修復室主任研究員)、和田浩 (保存修復課環境保存室研究員)			
【主な成果】			
これまでに集積した各種のデータを博物館の空間と関連付けて保存・検索できるデータ活用システムの構築に着手した。具体的には、1) 作品の状態に関わる保存カルテ、貸与点検調書、修理報告書、2) 作品の組成に関わる X 線透過写真、蛍光 X 線分析データ、顕微鏡写真、3) 作品を保管・展示する環境に関わる温湿度、生物生息、空気環境、4) 作品や関連資料の所在情報のデータベース化である。			
【年度実績概要】			
東京国立博物館が所蔵する文化財コレクションに対して、基礎研究に留まらず、臨床研究としての保存科学を実践するため、平成 10 年度からさまざまな手段、方法論、処置法、装置類 (コンサーヴェーション・ツール) を開発・整備してきた。それらは測定 (Measure)、分析 (Analysis)、改善 (Improve)、管理 (Control) という 4 つの段階に分類される。これまでに開発した保存管理手法は、1) 履歴・環境情報の収集と解析に時間を要する、2) 将来予測と改善策の立案が困難であり、その結果として正確かつ円滑な実践を阻害する。本年度は履歴・環境情報の収集と解析に関して、データの意味づけ、保管・活用の仕方について、実践を通じた研究を行った。			
【実績値】			
研究会発表件数 2 件			
国際学会「IIC2008 on Conservation and Access, London」1 回			
「Measurement and Analysis of Global Transport Environment Of Packing Cases for Cultural Properties」			
国際学会「ISTA 2008, Beijing」1 回			
「Transportation of Cultural Properties」			
論文掲載数			
書籍共著「臨床保存学について」1 篇所載			
国際学会予稿集 2 篇所載			
			
臨床保存学支援システムの概念図			
【備考】			
Nobuyuki Kamba, Hiroshi Wada, Masahiko Tsukada, Yoshihiro Takagi, and Ken Imakita : Measurement and Analysis of Global Transport Environment Of Packing Cases for Cultural Properties, IIC London Conference 2008, Conservation and Access, 15-19 September, 2008			
Nobuyuki Kamba, Masahiro Takagi: Transportation of Cultural Properties, 2008 ISTA-China Packaging Symposium, Beijing, October 20-22, 2008			
神庭信幸：臨床保存学について、『博物館への挑戦一何がどこまでできたのか』、日高真吾・園田直子編、p34-44、三好企画、2008			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-17

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 作品の状態、履歴及び環境の情報の収集と解析に関して、実践を通じた研究を行った。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	研究計画・方法			
判定	A	A	A			
備考 科学研究費補助金（基盤（S）（平成20年～24年））を活用して、データ管理サブシステム構築のために集積したデータの規格化、データ分析サブシステム構築のためにシステム設計、センサーサブシステム構築のために二次元バーコードによる所在管理手法の導入を実施。また、一部成果を共著にて刊行および国際学会にて2回の発表を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	保存と公開を実践しつつ、安全性をより向上させるために、現状の解析と改善を具体的に実施し、臨床保存学の具体的な機能が明確化できた。現在構築中の支援システムの精度の向上を図ると同時に、将来予測に立脚した現状判断が可能ないように、目標とするシステムの確立を目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	18) 東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究(科学研究費補助金)((5)-①-iii)
【事業概要】 東京国立博物館(以下、東博)が所蔵する約 1,300 点の正倉院の染織品(以下、正倉院裂)(一部法隆寺の染織品を含む)である正倉院裂の調査とデータ収集を目標とする。東博は、明治 5 年(1872)の正倉院開封以来、昭和 22 年(1947)まで正倉院宝物の管理に関わってきたため、明治時代の正倉院宝物の修理に関する資料等、正倉院宝物の模写・模造、古写真、展覧会の記録、出版物を所蔵する。それら東博所蔵資料の調査や、宮内庁書陵部・奈良国立博物館(以下、奈良博)等の所蔵する関係資料も調査とデータ収集を行なう。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	上席研究員 澤田 むつ代
【スタッフ】 高橋裕次(博物館情報課長)、浅見龍介(学企画課出版企画室長)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、西山厚(奈良国立博物館学芸部長)	
【主な成果】 東博が所蔵する正倉院裂の全体の約 8 割の写真撮影を行なった。写真撮影はデジタルカメラで行ない、全体と一部の作品については拡大画像を撮影している。また、正倉院関係資料の調査も行なった。東博所蔵の資料のデータ収集と、奈良博が所蔵する関係資料のデータを収集した。	
【年度実績概要】 1. 東博が所蔵する正倉院裂の調査・データ収集 東博が所蔵する約 1,300 点(一部法隆寺裂を含む)の正倉院裂のうち、全体の 3 割まで、現状、法量、品質形状、銘記、修理等の調査と記録を行なった。また調査と同時に、デジタルカメラによる写真撮影(全体図、拡大図)を行ない、公開に備えている。 2. 東博他で所蔵する正倉院関係資料の全体像の把握 東博においては、その草創期から現在にいたるまで、正倉院に関わる様々な資料を保管している。まずは、それらの資料の全体像の把握につとめた。東博所蔵の関連資料に関しては、デジタルカメラによる記録写真の撮影を始め、その資料の概要に関するデータも収集し始めている。 さらに、東博以外の機関が所蔵する正倉院関係資料に関しての把握も行なった。とくに奈良博においては、その歴史においても正倉院との関連が深く、まずは、明治時代の古い資料に関するデータ收拾を行なった。同じく、宮内庁書陵部が所蔵する関係資料の全体像の確認を行なった。	
【実績値】 1. 写真撮影 正倉院裂の新規デジタル写真撮影 1150 枚 正倉院関係資料 記録写真撮影 150 枚 2. 研究発表数 1 件 講演会：澤田むつ代「飛鳥・奈良時代のさまざまな染織技法ー現在の染織技法の基ー」(平成 21 年 2 月 28 日、於：九州国立博物館)	
【備考】	



正倉院御物写より

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-18

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 代表者澤田が以前執筆した論文「正倉院頒布裂」のデータをもとに、効率よく正倉院裂の調査を行なうことができた。科学研究費補助金によって、奈良博の研究者の協力を得ることができ、奈良博での調査もすみやかに進めることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 科学研究費補助金を活用して、正倉院裂や模造品等の調査を8回以上行ない、充実した調査および内容の検討ができた。また、デジタルによる新規撮影が順調に進んでいる。さらに、東博・奈良博所蔵の関係資料のデータ収集も進めることができた（一部21年度に継続）。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東博所蔵の正倉院裂は、美術史・染織史上重要な作品であるにもかかわらず、従来、詳細な図版が公刊されておらず、その存在もほとんど知られてこなかった。本研究では、その多くのデータを収集しているところである。正倉院裂の調査の回数を増やし、全体像を把握するとともに、類裂との照合、模造品との対比等を行ない、図版の公開に備える。同時に正倉院に関わる資料等も一括してまとめることが今後の課題である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	3年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。正倉院裂の図版と資料の公開を目指すとともに、今後もこのペースを維持しつつ、さらに関係資料のデータの充実をはかりたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	19) 東京国立博物館所蔵写真資料データベース (科学研究費補助金) ((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館では、江戸時代末から昭和初期にかけて撮影された 15,000 点余りにのぼる写真資料を所蔵している。これらの写真資料については、以前より外部の機関や研究者から利用の要望があるにもかかわらず、画像を簡単に確認するすべがなかった。本事業では画像データベースを作成し、各分野に寄与できる研究資料としてウェブ上で一般に公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 富田 淳
【スタッフ】 富坂賢 (保存修復課保存修復室長)、高梨真行(調査研究課書跡・歴史室研究員)、藤瀬雄輔 (列品管理課映像作製室員)			
【主な成果】 『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真目録』の刊行により、鶏卵紙による主要な写真の公開は行われているが、この目録には収録されておらず、貴重でありながらほとんど知れることのなかった写真を整理し、公開することができた。その中で小川一真撮影による「北京城写真」の公開では「紫禁城写真展」(東京都写真美術館・平成 20 年 3 月 29 日～5 月 18 日)の開催にあたり、大きな役割を果たした。			
【年度実績概要】 『東京皇室博物館美術課列品写真目録』(大正 8 年刊行)、『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真資料目録 1～3』(平成 11・12・14 年刊行)に基づき、写真資料の撮影およびデータ入力を行った。今年度は文久 2 年(1862)、江戸幕府がオランダに派遣した内田正雄によって将来された『万国写真帖 (PHOTOGRAPHISCH WERRELD ALBUM)』(全 21 冊)を中心に、明治 29 年(1896)に日本の宝物写真と交換に、ルーブル博物館から寄贈された「ミロのヴィーナス」やミレー「落穂拾い」などの博物館の収蔵品の写真や、明治 8 年(1875)、暹国博覧会事務局から引き継いだフランスやイタリアの景観写真『仏国写真帖 (VUES DE PARIS)』、『北伊太利写真帖 (NORTHERN ITALY)』、『南伊太利写真帖 (SOUTHERN ITALY)』など、主に諸外国で撮影された文化財、景観、風俗写真を対象とした。撮影は写真資料の体裁、装丁を明らかにするため、全紙撮影、台紙の裏面、またアルバム等では表紙、見返し、白紙を含む全頁撮影を原則とし、文字データは画像番号、名称、撮影者、法量、品質形状、時代、員数、墨書、備考(題箋、付箋、印章、特記事項)について制作した。また、検索システムでは、上記の項目による詳細検索のほか、新たに分類別検索を設け、撮影場所、アルバム名、撮影者からの検索を可能とした。			
【実績値】 写真撮影およびデータ作成資料点数 約 4,600 件 (内訳) 万国写真帖 約 2,300 件 ルーブル美術館寄贈写真 約 100 点 伊国威内スヘネーシック夜景・ヴェニス風景 約 30 件 北伊太利・南伊太利写真帖 約 300 件 仏国写真帖 約 90 件 その他風景写真 約 20 件 文化財写真 約 1760 件 公開画像 約 10,700 画像 調査回数 撮影日数 80 日、データ整理 52 日			
【備考】 「東京国立博物館情報アーカイブ」(http://webarchives.tnm.jp/archives/)、東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」(http://dbs.tnm.jp/kaken/oldphotos.html)			



「水晶宮の気球下部」『万国写真帖』より

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-19

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 台紙全紙、裏面、表紙、見返し等の撮影も行い、これまで問い合わせが多かった台紙張りの状態やアルバムの装丁、文字データの確認ができるよう、撮影に配慮した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 今年度は 4600 件のデータを扱った。(撮影日数 80 日。データ整理 52 日)						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ウェブ上での画像データベースの公開も一般に知られるようになり、館外からの問い合わせも増えつつある。検索システムでは、新たに分類別検索として撮影場所、アルバム名、撮影者からの検索が可能となった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	4 年計画で、画像の公開は概ね順調に進んでいる。 21 年度もこのペースを維持しつつ、撮影をすすめ、あわせて諸データの充実をはかり、より完備されたデータベースとして公開したい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	20) 東京国立博物館所蔵古文書データベース (科学研究費補助金) ((5)-①-iii)		
【事業概要】 文部科学省科学研究費補助金(公開促進費データベース)を利用して、東京国立博物館で所蔵する古文書について、とくに書跡に分類される収蔵品の中から抽出して調査を実施した。古文書学に基づき、記載内容の検討、形式・様式の分類、使用された料紙の素材分析を行い、1通ごとの古文書名称の特定作業を行い、法量計測、写真撮影など基礎データを収集した。また可能な限り古文書に記載された文字を翻刻し、差出・宛所や記載人物の特定作業を行った。最終的に画像とテキストを統合したデータベースを東京国立博物館情報アーカイブスで公開する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室研究員 高梨 真行
【スタッフ】 高橋裕次 (博物館情報課長)、丸山猶計 (企画課特別展室研究員)			
【主な成果】 B-1253 土佐家文書 全10巻についての上記事業概要で記した調査の実施とデータベース化 B-1721 諸寺院文書 全2巻についての上記事業概要で記した調査の実施とデータベース化 B-2060 香宗我部文書 全6巻についての上記事業概要で記した調査の実施とデータベース化			
【年度実績概要】 下記収蔵古文書の調査・研究の上データベース化 B-1253 土佐家文書 全10巻 B-1721 諸寺院文書 全2巻 B-2060 香宗我部文書 全6巻 平成20年7月9日(水)～11日(金)、12月10日(水)～12日(金)の2期間にわたって当館で実施された特別調査「書跡」の古文書調査の成果を取り入れ、下記収蔵古文書についての調査・研究の実施 B-1760 日御碕神社文書(写) 全2巻 B-1854～1875 白河結城文書各通 全1幅 22枚 B-1773 里見家伝来文書 全8巻 2枚 B-1372 画家手簡帖 13幅 3巻の調査・研究を実施し、特集陳列「画家の手紙」平成21年2月3日～3月15日にて展示し、成果の一部を図録にて公表			
【実績値】 B-1253 土佐家文書 全10巻→古文書125通+目録のデータベース(画像約150カット撮影) B-1721 諸寺院文書 全2巻→古文書42通のデータベース(画像約50カット撮影) B-2060 香宗我部文書 全6巻→古文書60通のデータベース化(画像約100カット撮影) B-1760 日御碕神社文書(写) 全2巻→実施中 B-1854～1875 白河結城文書各通 全1幅 22枚→古文書22通の調査(画像約70カット撮影) B-1773 里見家伝来文書 全8巻 2枚→古文書11通の調査(画像約30カット撮影) B-1372 画家手簡帖 13幅 3巻→図録「特集陳列 画家の手紙」刊行(丸山研究員執筆)			
  			
土佐家文書巻2(後柏原天皇綸旨) 香宗我部文書巻3(足利義昭御内書) 諸寺院文書(東宮量仁親王令旨)			
論文掲載数 1件: 東京国立博物館所蔵徳川家康書状(はりま殿宛)―自署「大ふ」の表記をめぐる― (『MUSEUM6』613号 平成20年4月)			
【備考】 本成果は当館情報アーカイブス上「東京国立博物館所蔵古文書データベース」にて2009年6月頃公開予定			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-20

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	B	A	
備考 古文書の重要な項目である文書名の付与と文字内容のテキスト化に成功した。また公開を前提とした比較的精細度の高い画像による撮影が実施し得た。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 科学研究費補助金を活用して、恒常的に調査・研究を行うとともに、博物館において年度内2期間実施された特別調査「書跡」(古文書)の成果も取り入れ、公開の促進につながったことは大きい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	歴史学を中心とした文献を利用する諸学において古文書の需要は大きい。特に当館では特別観覧等の形で利用者に対し提供を行ってきたが、一定数の古文書のデータベース化に伴う情報アーカイブスでの公開によって、画像・テキスト双方の比較的容易なアクセスが可能となる。本年度は複数単位の家伝文書を中心にデータベース化を進めてきたが、次年度は1紙物や掛幅装の書状類、また明治期の良質な古文書写についても調査・研究を進めて行きたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨今、韓国において各機関で所蔵する朝鮮王朝時代に出された古文書の研究進展には目覚ましいものがある。本年度、漢字を利用した古文書というアジア圏に共通する題材を、科学研究補助金の導入によって調査・研究を実施し、データベースという形で公開する前提が整備できたことは、法人全体としての計画にある「我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化」および当館の年度計画にある「博物館情報アーカイブを運用し、収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る」という事項に対応した、一定の成果として位置づけられるのではないかと考えている。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-21

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	21) 大航海時代以降の東西交流が中国・日本の陶磁器に与えた影響について ((5)-①-ii)		
【事業概要】 本調査は、東西の人的・物的交流が、ヨーロッパや中国、朝鮮半島、日本の陶磁器、金銀器、漆器、ガラス、染織等の造形、またその需要に与えた影響に関する研究の一環である。今回は、いわゆる大航海時代、つまり 16 世紀を前後した時期に中国から貿易品として日本に将来された中国陶磁を取り上げ、調査を試みた。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課 三笠景子
【スタッフ】			
【主な成果】 平成20年9月9日～10月19日 東京国立博物館 特集陳列「茶人好みのデザイン～彦根更紗と景德鎮」開催 平成20年9月20日 東京国立博物館月例講演会 三館（五島美術館・大倉集古館）合同企画「更紗を語る」開催 平成20年11月29日 茶の湯文化学会 東京例会発表「特集陳列 茶人好みのデザイン～彦根更紗と景德鎮を振り返って一茶陶としての明の五彩・染付の位置づけを考える」 平成20年12月13・14日 愛知県陶磁資料館シンポジウム「海のシルクロードとアジア」出席 平成20年1月23日・24日 京都国立博物館・大阪市立東洋陶磁美術館にて作品調査			
【年度実績概要】 平成20年9月9日～10月19日に、東京国立博物館平成館企画展示室において、特集陳列「茶人好みのデザイン～彦根更紗と景德鎮」を開催し、17～18世紀に生産され、日本に将来された中国景德鎮の五彩と青花磁器を取り上げた。これを受け、9月20日の当館の月例講演会では、「更紗を語る」と題して染織の専門研究者を招聘した。また11月に茶の湯文化学会東京例会にて口頭発表「特集陳列 茶人好みのデザイン～彦根更紗と景德鎮を振り返って一茶陶としての明の五彩・染付の位置づけを考える」を行った。特集陳列の成果として、当時日本に将来された中国陶磁のうち、日本からの注文制作があったと考えられている一群について、その注文の背景には茶の湯・懷石という日本独自の文化があり、同じく貿易品であり上流階級者たちに親しまれたインドや中国の染織の文様やその配置に関連があるのではないかという試論をたてた。 この試論に関連しては、平成19年度に新収品となった「瑠璃釉白花花文大皿」を取りあげ、その研究史の位置づけを見直し、当時の染織品との技術的な関連を指摘する論考をMUSEUMに発表する予定である。			
【実績値】 平成20年9月9日～10月19日 東京国立博物館 特集陳列「茶人好みのデザイン～彦根更紗と景德鎮」開催 平成20年9月20日 東京国立博物館月例講演会 三館（五島美術館・大倉集古館）合同企画「更紗を語る」開催 平成20年11月29日 茶の湯文化学会 東京例会発表（口頭）「特集陳列 茶人好みのデザイン～彦根更紗と景德鎮を振り返って一茶陶としての明の五彩・染付の位置づけを考える」 平成21年1月23日・24日 京都国立博物館・大阪市立東洋陶磁美術館にて作品調査 ・京都国立博物館所蔵 東福寺出土 青白磁香炉 ・大阪市立東洋陶磁美術館所蔵 青花龍波涛文扁壺、国宝油滴天目ほか			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-21

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 中国陶磁研究は、近年、中国国内および東南アジア諸国を中心に、各地で発掘調査が進んでいる。その結果、膨大な出土資料に恵まれたが、造形の根拠や日本に見られるような注文制作の可能性のある作品に関する研究は進展をみていない。よって、物流に着目し、他の工芸品との関連から考察を試みる本研究には意義があると考ええる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	B	A				
備考 今年度で開催された愛知県陶磁資料館（平成 20 年 12 月 13・14 日）のシンポジウムに出席し、調査予定地にはいくつか変更が生じた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	多少の変更は生じたが、展示および講演会の企画、学会での発表、そして論文の投稿（予定）など、調査を活かし、研究成果として公にすることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	すでに公に発表できたもの、またそれを予定しているもののほかに、平成 21 年夏には当館において特別展「染付～藍が彩る器」の開催を予定しており、本助成による研究成果を大いに活かすことができると考える。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-22

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	22) 平成 21 年度 特集陳列「趙之謙」に関する調査研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 2009 年 8 月から 9 月にかけて、東京国立博物館と台東区立書道博物館は、中国の清時代を代表する書家・趙之謙（1829～84）の生誕 180 年を記念して、表記の特集陳列を共同で企画し、同時期に開催する。この事業は、開催に先立ち、内外に所蔵される趙之謙作品および関連作品を調査し、その成果を展示および出版物に反映させようとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 富田淳
【スタッフ】 鍋島稲子（台東区立書道博物館研究員）			
【主な成果】 北京故宮博物院、京都国立博物館、大阪市立美術館所蔵の趙之謙および関連作品の調査を行った。国内の個人が所蔵する一部の作品についても、出品の承諾を得た。関連資料を収集し、趙之謙の事跡をまとめ、年表に整理した。また未発表の趙之謙尺牘を調査、その内容を読み進めている。			
【年度実績概要】 1 下記機関の所蔵する趙之謙および関連作品の調査を行い、法量、品質、所用印などを記録した。他作品との比較検討のため、デジタルカメラによる撮影も行った。 ①北京故宮博物院所蔵品 ②京都国立博物館所蔵品 ③大阪市立美術館所蔵品 2 個人所蔵作品の調査 国内で開催された趙之謙展には、 ①趙撫叔先生遺作展覧会(1942 年・美術倶楽部) ②趙之謙没後七十年記念特別陳列(1954 年・東京国立博物館) ③趙之謙没後八〇年記念特別陳列(1964 年・東京国立博物館) ④逝世百年趙之謙記念展(1985 年・美術倶楽部) などがある。 当時の出品資料をもとに、現在個人が所蔵する趙之謙作品を付き止め、出品の承諾を得た。			
【実績値】 ・国内調査：京都国立博物館・大阪市立美術館・台東区立書道博物館 ・国外調査：北京故宮博物院 上記機関の趙之謙および関連作品を調査、約 500 カットの画像を撮影した。 資料収集：国内個人所蔵作品画像データ約 200 カットを収集した。また、趙之謙の行略を含む『悲盒賸墨』等の基本資料を入手した。			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-22

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 内外の美術館・博物館に連絡をとり、効率よく作品を調査することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 助成金を活用することによって、内外の趙之謙および関連作品の調査を行い、趙之謙作品の編年を補完することができた。また未発表の尺牘資料についても、画像を入手することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国内に所蔵される趙之謙の作品は、公的機関の所蔵分はある程度調査が進んでいたが、個人蔵については十分に把握されていない状況にあった。今回の調査では、個人蔵についても昨今の所蔵状況を確認できた。また未公開の資料を調査したことは、資料を読み進めることによって、今後の趙之謙究に寄与しうることが期待される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の予定に従って、調査研究は順調に進んでいる。個人の所蔵については、まだ確認できない作品もあるので、今後それらの状況についても情報を収集し、調査を進めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	23) 明治時代の宝物調査における写真資料に関する調査—横山松三郎、小川一真、早崎稗吉、安村喜当の事跡を中心に—((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館では江戸末から昭和初期にかけて撮影された写真資料を 15,000 件あまり収蔵する。『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真目録』の刊行や古写真WEBデータベースにより、多くの写真が公開されるにいたったが、未だ十分な調査研究が進んでいない状況にある。本事業では当館が収蔵する写真資料のうち、横山松三郎、小川一真、早崎稗吉、安村喜当の 4 人の写真師に焦点をあて、彼らが手掛けた宝物調査に関する撮影についての調査を進め、特集陳列や図版目録の作成に寄与できる研究を目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室長 富坂 賢
【スタッフ】 関紀子（調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員）			
【主な成果】 北京と西安で現地調査を行い、宝物調査で撮影された写真資料と対照できる画像を撮影した。また、早崎稗吉が同行した調査では、写真の受け入れ経緯をたどる過程で、館蔵品に同宝物調査で蒐集された拓本資料があることが明らかとなったことは大きな成果であった。			
【年度実績概要】 本事業では、明治時代に行われた文化財調査での記録写真に注目し、本館収蔵写真に関わる横山松三郎、小川一真、早崎稗吉、安村喜当の事績を追う。今年度は、明治 34 年(1901)に東京帝国大学の調査で北京城を撮影した小川一真と、明治 26 年(1893)に岡倉天心の清国美術調査に同行して龍門石窟や西安周辺寺院や史跡の撮影を行った早崎稗吉、元当館職員であり明治 30 年代に近畿から関東の宝物写真を撮影、後に自費で中国に渡り、北京、上海、南京、杭州の写真撮影を行った安村喜当が撮影した写真のうち、北京、西安で撮影された写真について実地調査し、撮影された場所の特定と現状との比較を行い、写真撮影を行った。 北京は地壇・前門・故宮・景山公園・北山公園・頤和園（小川一真）、碧雲寺（安村喜当）、天寧寺（早崎稗吉、安村喜当）、天壇（小川一真、早崎稗吉、安村喜当）を調査し写真撮影を行った。 西安は安房宮・順陵・崇文寺塔・精進寺塔・西岳廟・華山・臥龍寺・興教寺・大雁塔、宝慶寺・碑林（早崎稗吉）を調査し写真撮影を行った。			
【実績値】 調査回数：国内調査 1 回、中国調査 2 回 国内調査：京都・奈良 北京調査：地壇、前門、故宮、景山、北山公園、頤和園、碧雲寺、天寧寺、天壇を調査 約 450 画像撮影 西安調査：安房宮、順陵、崇文寺塔、精進寺塔・西岳廟・華山、臥龍寺、興教寺・大雁塔、宝慶寺塔・碑林を調査 約 700 画像撮影			
			
		小川一真 明治 34 年(1901)撮影 「北京城写真 正陽門」	
		平成 20 年 11 月 13 日現在	
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-23

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 これまで、あまり知られていなかった写真資料に注目し、同宝物調査で蒐集された当館の収蔵品との関連性を見い出すことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 国内での調査を1回、中国での調査を2回行い、写真資料と対比できる画像を撮影した。また、同宝物調査で蒐集された当館の収蔵品の調査も行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現地調査によって、すでに失われたものや、撮影当初とは異なる状況など、被写体の現状を確認することができた。また、写真資料の当館への受け入れ経緯をたどる過程で、関係資料に関しても調査の幅を広げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	2年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。今後は、調査の範囲を広げるとともに、当館が収蔵する関連資料にとどまらず、他機関が収蔵する写真資料および関連資料の調査を行い、データの充実をはかりたい。

(様式 1)

東京国立博物館

4511-24

業務実績書

中期計画の項目	4	文化財に関する調査及び研究の推進	
プロジェクト名称	24)	朝鮮王朝時代の工芸作品に関する調査、研究((5)-①-ii)	
【事業概要】			
従来、調査が不十分であった朝鮮王朝時代に関する列品を再調査し、今後朝鮮王朝時代の工芸作品の展示を充実させるため、専門の研究者を外部から招聘し、当館所蔵の作品（染織、漆工の列品を中心に）の共同調査を行う。同時に、より専門的な情報の提供を受け、今後の展示・研究に生かす。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室長 今井 敦
【スタッフ】			
澤田むつ代（上席研究員）、小山弓弦葉（調査研究課工芸・考古室主任研究員）、三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）			
【主な成果】			
2008 年秋、10 日間、研修のため韓国ソウルへ赴き、朝鮮王朝時代の皇帝・后妃の衣裳に関する研究史・同時代の建築史・絵画史・科学史等の講義を受けた。また、現地において当館の展示・研究に活用するための書籍を購入した。列品の調査については、日本女子大学の鄭銀志氏を招聘し、主に染織品の制作年代や造形的な特徴、関連する研究書・論文等について具体的な教示を受けた。			
【年度実績概要】			
2008 年東洋館第 10 室 朝鮮工芸の展示において、2 度の特集陳列の企画を行った。 ソウル研修では、国立古宮博物館、国立中央博物館における作品の展示方法、展示内容を見学し、衣服や簪、王冠などそれぞれの作品の形態に適した展示具、展示台を調査した。この成果を次年度の当館の展示に活かす予定である。 列品の調査では、日本女子大学で朝鮮通信使に関する文献・絵画史料をもとに、朝鮮王朝時代の服飾を研究している鄭銀志氏の立会い、協力のもと、朝鮮工芸の列品の調査、撮影を行い、調書を作成している。			
【実績値】			
平成 20 年 特集陳列			
①「朝鮮染織・装身具Ⅰ	朝鮮王朝時代の女性の生活と美」	5 月 20 日（火）～7 月 6 日（日）	
① 朝鮮染織・装身具Ⅱ	朝鮮王朝時代の文人の生活」	7 月 8 日（火）～8 月 24 日（日）	
列品調査（平成 21 年 2 月現在）			
調査回数	3 回		
調査点数	32 点	TI-428／429／430／431／432／433／434／435／436／437／438	
		440／441①②／442／443／444／445／446／447／448／449	
		TK-926／1170／1171／1172／1236／1237①②／1325／1667	
		TG-2878	
平成 21 年 特集陳列（予定）			
①「朝鮮染織・装身具Ⅰ	タイトル未定」	4 月 28 日（火）～6 月 7 日（日）	
【備考】			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-24

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	A	A	B	A	
備考 宮廷文化を取り上げた2008年の韓国国際交流財団のワークショップにおいて、韓国で染織や歴史、工芸、建築などの専門家の話を聞くことができ、より専門的で、新しい研究状況を知ることができた。外部からの招聘研究者に関しては、選定に時間がかかったが、高度な知見に基づく具体的な教示を得ることができ、今後より正確な研究および展示が期待できる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 3回の調査では、当館東洋染織小倉コレクションの列品のうち、展示可能な作品をすべて調査し終えた。またこの調査において、これまで未整理であった東洋民族の列品のなかで、展示可能な作品の調査を行い、その歴史的位置づけが明らかになった。この成果を今後の展示に反映させたい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示スペースや方法上の問題があったことや、詳細な調査が行われていなかったことから、これまで十分に活用されていなかった列品を展示に活かすことができるようになった。また調査によって、列品の具体的な制作年代や位置づけが明らかになり、研究資料としても注目すべき稀少な作品が含まれていることがわかった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	日本国内には数少ない朝鮮王朝時代の服飾の研究者を招聘し、教示を受け、次年度の展示に活かすことができた。ひきつづき、定期的な調査の機会をもうけながら、東洋民族の列品を中心に、調査を続けたい。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-25

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	25) 中国宋時代の越州窯青磁が、その後の青磁生産の展開、中国国内の生活文化に与えた影響についての調査((5)-①-ii)		
【事業概要】 中国国内および日本から出土した越州窯青磁に関する調査、日本の博物館・美術館に所蔵されている越州窯青磁に関する調査			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室研究員 三笠景子
【スタッフ】			
【主な成果】 諸事情により、中国における調査は変更、延期せざるを得なかったが、博多から出土した越州窯青磁、およびその周辺窯に位置づけられる青磁と、国内の博物館・美術館に所蔵されている完形の越州窯青磁の調査を行うことができた。 さらに、宋時代の越州窯の動向を考えるうえで欠かすことのできない、唐宋時代の金属器、漆器および龍泉窯青磁等の作品の調査も行うことができた。			
【年度実績概要】 申請者は、大学在学中より中国越州窯青磁の研究を続けており、平成 16 年に修士論文「北宋期越州窯青磁に関する再考察～その貿易陶磁的性格と日本における受容の様相」を提出した。今回は福岡市埋蔵文化財センターにおける調査において、博多における平成 16 年以降の最新の発掘情報を得ることができた。それに基づき、貿易窓口であった博多からの越州窯青磁の出土傾向を整理する。 また、作品調査、見学に関しては、出光美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、和泉市久保惣記念美術館、藤井斉成会有鄰館、沖縄県立埋蔵文化財センター、福岡市立埋蔵文化財センターにて、越州窯青磁およびその関連作品、資料を調査、見学することができた。			
【実績値】 平成 20 年 9 月 1 日 出光美術館（有楽町） フスタート出土越州窯青磁陶片調査 平成 20 年 10 月 17 日～19 日 和泉市久保惣記念美術館、藤井斉成会有鄰館 金属器、漆器調査 平成 20 年 12 月 19 日 出光美術館（中近東文化センター）越州窯青磁紀年銘「蓮弁文四耳壺」調査 平成 21 年 1 月 30 日 大阪市立東洋陶磁美術館 「李秉昌博士記念公開講座 高麗翡色の秘密を探る」シンポジウム参加 平成 21 年 2 月 6 日～8 日 沖縄県立埋蔵文化財センター 「土でつくられた緑の宝石『小型青磁』」展見学 福岡市立埋蔵文化財センター 博多出土越州窯青磁陶片、その他中国・東南アジア・朝鮮陶磁陶片調査、資料収集 収集資料数 主に 2004 年以降の発掘調査報告書（福岡市教育委員会 編） 鴻臚館跡 15 号、16 号、17 号 博多 96～117 号 箱崎 24 号、25 号、29 号、30 号、31 号等 計 30 冊分			
【備考】			

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-25

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 越州窯青磁の貿易陶磁的性格を考えるうえで、博多における出土状況を把握することはきわめて重要である と考える。さらに、中国唐宋時代に青磁を中心にして、陶磁器が人々の日常生活のうえで欠かすことので きない器としてその位置を確立していくことを考えると、金属器、漆器との造形上、および受容面での影響 関係を探る本調査は、今後の中国工芸の研究において有効であると考ええる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	B				
備考 今回の調査で、日本国内の博物館・美術館所蔵の越州窯青磁の完形作品をほぼ把握することができた。ま た、近年の博多における発掘報告情報を整理し、最新の情報に基づいて、越州窯青磁の出土傾向、受容の状 況を整理することが可能になった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本国内から出土する唐宋時代の越州窯青磁について、その生産年代や生産地を特定する のにきわめて重要と思われる、浙江省慈溪市寺龍口窯址出土資料に関する全容を得ることが 困難な状況である。ひきつづき、国内における出土状況の整理と、金属器・漆器等、他工芸 との関連から、越州窯青磁の興隆と衰退までの経過と、その後の中国、朝鮮半島で生産され た青磁への影響について考察していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	金属器、漆器の中国国内における使用状況（発掘報告書に基づいて、出土遺物の情報整理） および日本における越州窯青磁の出土状況を整理し、これらの事実と、今年度の作品調査で 得られた事実とを比較検討した内容を、論文もしくは口頭発表等の機会をもうけ発表する予 定である。

中期計画の項目	4	文化財に関する調査及び研究の推進	
プロジェクト名称	26) 金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究((5)-①-ii)		
【事業概要】 文部科学省科学研究補助金基盤 (C) 金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究 (研究代表 金沢文庫主任学芸員永井晋) の研究分担者として、室町時代以降の文献収集を担当。下総国下河辺庄の文献研究・地誌研究を行う。同地に関しての古文書・記録等の写真撮影と編年的整理。近世・近代に伝わる中世文書に関しての地誌類の精査。寺社・城館跡・遺跡・文化財・古地図・航空写真・都市計画図などによる中世的景観の復元。中世利根川の流路・水路・水量・水運・に関する調査と分析などを行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室研究員 高梨真行
【スタッフ】			
【主な成果】 室町から江戸時代(15～17世紀)にかけての下総国下河辺庄の支配に関連する古文書・古記録など文献資料の収集。特に在地領主戸張氏にかかわる古文書の収集・確認。			
【年度実績概要】 下総国下河辺庄に関する中世(戦国～安土桃山時代)の文献収集 下総国下河辺庄(現埼玉県吉川市周辺)の現地調査 平成20年11月30日実施 埼玉県吉川市、越谷市、松伏町の関連史跡について文献上で認知される場所の現地での確認作業。 下総国下河辺庄に関する勉強会・検討会 平成21年2月23日 於吉川市市民交流センターおあしす			
【実績値】 収集・整理文献史料 古文書 23 通(「梁田文書」「戸張文書」) 系図 2 件(「戸張滉家由緒書」 戸張滉家文書の内) 調査内容の概報 高梨真行「中近世移行期の戸張氏 一市域の在地領主層の動向と変遷」(『吉川市史編さんだより』15号, 2008年10月, 吉川市教育委員会) 11月30日(水)旧下河辺庄域実地調査 大相模郷大聖寺(越谷市相模町)→増森・徳川家康鷹狩の地(越谷市増森) →下河辺庄赤岩郷赤岩新宿(松伏町)赤岩→戸張氏館跡・芳川神社(吉川市吉川) →下河辺庄河辺三ヶ寺・延命寺(吉川市吉川) →旧下妻街道(草加市柿木) 記録事項:54項目 撮影画像 80カット			
 大相模不動堂  戸張館跡(現芳川神社)  旧下妻街道(草加市柿木付近)			
3月8日(日) 旧風早庄域実地調査 根木内歴史公園(根木内城跡)→慶林寺→平賀本土寺→大谷口歴史公園(小金城跡)(以上全て松戸市内) 記録事項:23項目 撮影画像 104カット			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-26

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	B	
備考 文献収集だけではなく、実地調査の実施によって対象地域の現状の把握も可能となり、文献読解の進展に大いに役立った。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	B				
備考 年度2回の実地調査によって、下河辺庄に属した現在の地勢についての大まかな理解につながった。また戸張氏という同地域内に室町時代から江戸時代にかけて活躍した在地領主の調査・研究が進められ、自治体における編纂事業（吉川市）への反映も可能となった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現地調査を実施して、文献上では確認できない環境および地勢的な情報が得られたものの、基本となる文献資料の収集を増やす必要性を感じた。次年度は下河辺庄の中心となる吉川市、吉川市、松伏町とともに、新たに関宿(野田市)や古河(古河市)など文献の収集範囲を拡大させたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の主眼は、文献史料と地域・環境との総合研究により、中世における下河辺庄領域の復元が目的である。次年度は計画の最終年度にあたるため、研究報告 論文を予定している。本年度実施した現地と密接につながる文献資料の収集から、現環境の把握によって地域の変遷を分析する有効な指標を入手することができたと判断される。

【書式B】

施設名

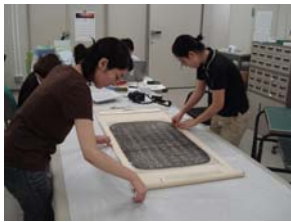
東京国立博物館

処理番号

4511-27

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	27) 歴史資料調査((5)-①-iii)
【事業概要】 第1回 平成 20 年8月4日(月)～8 日(金), 11 日(月)～15日(金) 当館収蔵品の内、歴史資料に分類される拓本類の調査。法量計測、銘文確認・翻刻・検討、年代推定、内容検討、原典（現物の碑その他の所在地等）の確認を実施 第2回 平成 21 年 1 月 20 日(火)・21 日(水)・30日(金)・2日(月)～6日(金)・9日(月)・10日(火)・12日(木)・13 日(金) 当館収蔵品の内、歴史資料に分類される明治期に実施された国内寺社宝物類の調査にかかる描画、有職故実関係資料についての法量計測、内容確認・検討、筆者（模写者）の確認、年代推定、原典（現物のその他の所有者等）の確認を実施	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室長 富坂 賢
【スタッフ】 高梨真行（調査研究課書跡・歴史室研究員）	
【主な成果】 当館で所蔵する歴史資料のうち、P1～570 番台までの上記調査の実施。P500 番までの当館列品への編入完了。特に書家市河米庵の拓本類は市河寛斎・米庵父子によって収集されたことが判明し、また短期間に全国的な古碑等の採拓作業が展開されていた事実が、採拓年代の検討により浮かび上がってきた。ここに市河父子の背景に存在した全国に影響を及ぼし得る有力者による支援活動が推測されるに至った。	
【年度実績概要】 第 1 回の調査では、歴史資料に含まれる拓本類の調査を実施した。国内外の有名な古碑などを中心としたもので、元弘板碑、多賀城碑拓本、那須国造碑や、高句麗広開土王碑や寺院の鐘銘、墓誌銘、瓦銘、石造物銘や仏像の光背や仏具の銘などにもわたった。こうした拓本について、法量計測、銘文の翻刻、採拓年代、採拓者推定、採拓状況の考察、原典の所在地と内容の検討などを行った。	
【実績値】 第 1 回 平成 20 年8月4日(月)～8 日(金), 11 日(月)～15日(金) 【調査日数】 10 日間 【調査員・調査補助員】 延べ 22 人 【調査数】 列品数 214 件（240 点）※形態は掛幅装、卷子装、鋪、枚等 【作成画像数】 1,052 カット	
  P-13 那須国造碑拓本 	
第 2 回 平成 21 年 1 月 20 日(火)・21 日(水)・30日(金)・2 月2日(月)～6日(金)・9日(月)・10日(火)・12日(木)・13 日(金) 【調査日数】 14 日間 【調査員・調査補助員】 のべ 28 人 【調査数】 列品数 240 件(383 点) 【作成画像数】 863 カット	
【備考】	

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-27

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	B				
備考 年度内2回の調査であり、調査した資料数は収蔵資料数と比較すると限定的な数値であった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵資料の基礎となるデータの収集と資料名称の確定が可能となった。また、蔵書印や落款等から可能な限り各点の来歴復元を試みて成果が得られた。年度2期間の調査が資料確認の機会であるが、調査可能な資料数には限界があり、次年度からは恒常的な調査実施と整理に努力したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	歴史資料収蔵品の調査・研究は、法人の中期計画における「3 我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与（1）収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー、シンポジウムを開催する。」とする目的に一致し、館蔵品として列品への編入作業は基本的な成果として位置づけられる。また、歴史資料に含まれる国内外所在古碑などの拓本類の調査成果の展開によって「4 文化財に関する調査及び研究の推進（1）文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 ②我が国の有形文化財及びそれに係る諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。iv 古都所在寺社所蔵の歴史資料・書跡資料等に関する原本調査を通じた日本の歴史、文化の研究」とする計画の更なる向上に発展する可能性を有していると判断される。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-28

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	28) 有形文化財に係る調査研究		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 富田淳
【スタッフ】 原田一敏（上席研究員）、後藤健（上席研究員）、澤田むつ代(上席研究員)、松本伸之(学芸企画部長)、加島勝（博物館教育課長）、谷豊信（列品管理課長）、救仁郷秀明(学芸企画部企画課特別室長)、浅見龍介（企画課出版企画室長）、鬼頭智美（企画課国際交流室長）、白井克也（博物館教育課教育講座室長）、田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、古谷毅(調査研究課工芸・考古室長)、今井敦（調査研究課東洋室長）、竹内奈美子(企画課特別展室主任研究員)、沖松健次郎(企画課出版企画室主任研究員)、松嶋雅人（列品管理課平常展調整室主任研究員）、小山弓弦葉(調査研究課工芸・考古室主任研究員)、日高慎（保存修復課保存修復室主任研究員）神辺知加（博物館教育課教育講座室研究員）、猪熊兼樹(列品管理課貸与特別観覧室研究員)、川村佳男（調査研究課東洋室研究員）、三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）、植田彩芳子（企画課特別展室任期付研究員）			
【主な成果】 館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財と、その周辺領域に関して、美術史・考古学・博物館学の各見地から学会・研究会・学術雑誌上で各種の発表をした。			
【年度実績概要】 ・内外の学会・研究会で、各種の発表をした。 ・学術雑誌に各種の論考を発表し、著書を刊行した。			
【実績値】 学会・研究会等発表件数：12 名 15 回 「ラピスラズリの道、王の道、絹の道」後藤健ほか 論文等掲載数：20 名 39 編 『中国の文房具—文房四宝を中心に』至文堂・日本の美術No.504 松本伸之ほか			
【備考】			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4511-28

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 東京国立博物館『MUSEUM』をはじめとする各種学会誌・紀要等の学術誌や学会・研究会において、平素の調査研究で得た成果、あるいは平常陳列・特別展に係る業務・他館への協力の中で得た最新の学術情報を、多岐の分野にわたって発表しえた。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載数				
判定	A	A				
備考 学会・研究会等発表件は海外を含み 12 名 16 回、論文等の発表は 19 名 68 編。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	絵画・書跡・工芸・考古などの各ジャンルにわたり、最新の学術情報を盛り込んだ情報を発信しえた。特別展や通常業務などを通して研究成果は蓄積されているが、今後はよりすみやかな公開につとめるようにしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画に基づき順調に進捗している。

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-01

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究 ((5)-①-iv)		
【事業概要】 京都を中心とした近畿地方の社寺のうち、文化財がある程度集中して所蔵され、かつ近年学術調査が行われていない社寺を採り上げ、所蔵文化財を悉皆調査する。 調査は、各分野の専門研究員が同時に参加し、相互に情報交換しながら進め、調書の作成、写真撮影を行う。今回は、禅林寺の調査を行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長 若杉準治
【スタッフ】 西上実（上席研究員）、山下善也（連携協力室長）山本英男（美術室長）、赤尾栄慶（企画室長）、久保智康（工芸室長）、浅湫毅（主任研究員）、中村康（文化財管理監）、尾野善裕（主任研究員）、山川暁（主任研究員）、永島明子（主任研究員）、羽田聡（研究員）、大原嘉豊（研究員）、比嘉飛鳥			
【主な成果】 禅林寺にて行った今回の調査では、応永九年の銘を持つ銅製の花瓶が、すでに当館に寄託されている個人蔵の物と対であったことが判明したことや、また未指定の仏涅槃図が、重要文化財に指定されているものより時代的にさかのぼる優品であること、また近世末期から近代にかけて原派の手になる歴代門主の肖像画が多く伝存しており近世画壇の一端を知ることができたことなどの成果を得た。			
【年度実績概要】 禅林寺は浄土宗西山禅林寺派の本山として、これまでも文化財調査や古文書調査がおこなわれ、また所蔵文化財の展覧会も開催されているが、分野的にかたよったものであり、悉皆調査はおそらくこれが初めてである。 調査は平成21年2月16日（月）～20日（金）の5日間、禅林寺の鶴寿台に調査場所を設定し、2棟の収蔵庫に保管されている文化財について、寺の宝物台帳を参考に実施した。また、障壁画、仏像、仏具等、諸堂に保管されている文化財については、現地ないし調査場所へ移動して調査した。 調査は上記博物館の各担当研究員のほか、当館の客員研究員、調査員、さらに京都大学に設けられている当館の客員講座である博物館文化財学講座の大学院生等を加えたメンバーで実施した。 総調査件数は、絵画90件、書跡64件、彫刻21件、陶磁20件、染織9件、漆工24件、金工34件の計262件であった。また撮影は約350カットであった。 調査は悉皆を基本としているが、5日間という限られた時間であったために、多量に伝存する書跡分野、拝観寺院であるために観覧時間には調査ができない仏像や障壁画については所在確認のみで、別日に補足調査を要するものが残っている。			
【実績値】 調査回数 1回（5日間） 調査件数 262件			
【備考】			

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-01

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 平成22年度に実施を予定している「法然展」にそなえて、浄土宗寺院を対象とした調査の一環として実施したもので、「源空」の所持署名のある当時の聖教の存在を確認したり、法然に先行する浄土教の僧としての永観関係資料を得るなどの成果を上げ、展覧会の充実が期待できた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査件数				
判定	A	A				
備考 現今なかなか日程調整の難しい研究員の一週間という限られた時間での同時調査という方法は、年一回が限界である。またそのなかで260余件を調査し、資料（調書、写真）を収集できた。現在は調査カードと紙焼き写真を揃えている段階である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	浄土宗西山禅林寺派総本山である禅林寺の文化財の全容を把握し、その大部分について調査データを得られた。また、予定されている「法然」展に関して、新たに加えるべき出品候補を得たこと、また寺院との良好な関係を築けたことで大きな意義がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画では、具体的対象寺院名はあげられていないが、予定されている展覧会を視野に入れながら個別計画を立て、調査を進めることで中期計画の目標を実現できる。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-02

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 平安仏教とその造形に関する調査研究 (京都) ((5)-①-v)		
【事業概要】 平安仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備する。 報告書の刊行、シンポジウム (研究座談会) の開催により、成果を公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 西上実
【スタッフ】 若杉準治 (列品管理室長)、山本英男 (美術室長)、山下善也 (連携協力室長)、大原嘉豊 (研究員)、赤尾栄慶 (企画室長)、羽田 聡 (研究員)、浅湫 毅 (主任研究員)、久保智康 (工芸室長)、尾野善裕 (主任研究員)、山川 暁 (主任研究員)、永島明子 (主任研究員)、宮川禎一 (考古室長)、中村 康 (文化財管理監)、金井杜男 (調査員)			
【主な成果】 「撰関期にみる美術の諸相」という研究発表と座談会を開催し、その報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 特集陳列「平安時代の考古遺物―源氏物語の時代―」を見学の後、「撰関期の訓点資料」(大阪大谷大学 宇都宮啓吾教授)・「道長時代の仏画」(当館 大原嘉豊研究員)・「上東門院彰子埋納の金銀鍍宝相華唐草文経箱をめぐる二、三の問題」(東京国立博物館 加島勝博物館教育課長)の研究発表があり、それに引き続いて「撰関期にみる美術の諸相」という座談会を開催した。			
【実績値】 ・研究発表及び座談会参加者 79 名 ・仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第 36 冊「研究発表と座談会 撰関期にみる美術の諸相」を編集集中			
【備考】			

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-02

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 平安仏教の美術について多面的に調査研究し、多岐にわたる資料を収集し、展覧会や特集陳列などに関連した研究発表と座談会を開催した。						

2. 定量的評価

観点	参加者数					
判定	A					
備考 研究発表及び座談会「摂関期にみる美術の諸相」を開催し、79名の参加者を得て活発な討論がなされた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4カ年の継続事業のうち、最終年次の事業計画について達成できた。 本調査研究の蓄積は、当館の展観事業及び関連資料の収集に大いに資するものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	多岐にわたる分野の資料について収集・整備ができ、また、研究資料を広く公開することで、仏教美術研究の発展に資することができた。最終年度には、これまでの研究であまり触れられなかった平安時代の訓点資料や工芸分野の研究発表を行い、全体を通して平安仏教とその造形というテーマを見通せるようにした。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-03

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察 (科学研究費補助金 ((5)-①-ii))		
【事業概要】 先史時代より明治時代に至るまでの、樹木を素材・主題とした美術工芸遺品を通じて、従来蓄積されてきた歴史学の諸成果をフィードバックしながら、日本の木の文化を、他の東アジア諸国との比較史的視座を援用しつつ、跡づけることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	館長 佐々木 丞平
【スタッフ】 西上実 (上席研究員)、若杉準治 (列品管理室長)、山本英男 (美術室長)、山下善也 (連携協力室長)、大原嘉豊 (研究員)、赤尾栄慶 (企画室長)、羽田聡 (研究員)、浅湊毅 (主任研究員)、中村康 (文化財管理監)、小松大秀 (学芸部長)、久保智康 (工芸室長)、尾野善裕 (主任研究員)、山川暁 (主任研究員)、永島明子 (主任研究員)、宮川禎一 (考古室長)、村上隆 (保存修理指導室長)			
【主な成果】 平成 19 年度に調査を行なった八坂神社随神像についての調査報告を当館発行の『学叢』第 30 号 (平成 20 年 5 月発行) に発表した。香川県与田寺の不動明王立像に関して三次元計測を行ない、当初の首の向きを復元的に考察した。浜松市の黄檗寺院、大雄寺と宝林寺において予備調査を行ない、黄檗宗本山の萬福寺にも無い、貴重な初期史料が伝存することがわかった。			
【年度実績概要】 事業2年度の本年は、昨年度の調査をふまえて引き続き調査を行なうとともに、次年度以降の調査について、4ヶ所の社寺および地元教育委員会との間で、連携に関する協議を行なった。 昨年度に続き、これまで京都国立博物館が収集してきた京都社寺の所蔵品に関するデータの再整理および、昨年度あらたに調査で得られたデータを、事業目的に即して順次データベース化していった。 また、事業目的に即した社寺調査を行なうための、マイクロスコープを購入した。これにより、肉眼では確認困難な、書画や染織品の細部構造等の観察が可能となり、大きく調査に寄与した。 社寺調査の候補目的地としては、引き続き静岡県に焦点をあて、浜松市の黄檗寺院で事前調査を行なうとともに、京都からみて静岡と対称的な位置にある、島根県出雲市において事前調査を実施した。 研究分担者は、各自事業目的にそって個人研究を遂行した。個人研究においては海外との比較も視野に置き 3 件の海外調査も行なった。また、国内においては、京都・法界寺の秘仏十二神将を調査した。その際には専門の撮影技師が同行し、大判カメラでの撮影を行なうとともに、デジタルカメラによる撮影も行なった。			
【実績値】 調査実績データベース化 2,525 点 (1 月末の暫定数) 調査機材整備 1 件 個人研究出張調査 国内 6 件・海外 3 件 科研調査による成果の公表 2 件			
【備考】			

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-03

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	A	A	B	A	
備考 適時性については博物館事業における公開性及び緊張性を増す環境問題と絡む点、独創性・発展性については適時性での理由をもとにした人文系では先駆的総合研究である点、効率性に関しては各研究分担者の本務である博物館事業との兼ね合いにおける時間的投資量という点、正確性についてはデータの収集という点からみて、それぞれ評価を下した。						

2. 定量的評価

観点	調査実績 データベース化	調査機材 整備	共同調査のため の事前予備調査	研究分担者による 個人研究（出張調査）		
判定	A	A	A	B		
備考 事業初年度として、目標は概ね達成されている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第2年度にあたる20年度は、昨年度の調査によって得られた成果を基に、さらに知見を深める方向で、発展的調査を行なった。それとともに、次年度以降の充実した調査のために、調査候補となっている社寺および地元の教育委員会等関係諸機関との連携を深めることを視野に置き、本調査および事前調査を行なった。その目標はほぼ達成されたが、博物館業務の多様化にともなう時間的制約の中で、21年度以降はより効率的、組織的に研究を深め、さらに充実した成果の公表へとつなげる努力が一層必要であると考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全研究職員を研究分担者とする競争的資金の導入によって、館全体の研究を活性化している点で意義が深いと思料するが、緊密な研究上の連携を更に行う必要がある。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-04

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類を順次調査し、それらの調書を作成し、それらの目録を作成する (科学研究費)。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 羽田 聡 (研究員)、西上 実 (上席研究員)、山本英男 (美術室長) (外部研究者) 興膳 宏、米谷 均、山城喜憲、藤本幸夫、井上 進、川本慎自、堀川貴司、宇都宮啓吾、梶浦晋、金 文京、柳田征司、住吉朋彦			
【主な成果】 都合4回の調査を実施し、全体180箱のうち、第101箱から第140箱までの調査をほぼ終了している。			
【年度実績概要】 全体180箱のうち、第101箱から第140箱までの調査を実施し、各々の箱に納められている書跡・典籍類に関して、一冊ごとにその書名・法量・装訂・外題・首題・尾題・版式・行数・訓点・奥書・刊記などの書誌学的調査と内容に関する調査を実施し、それぞれを調書に記入した。			
【実績値】 全体180箱のうち、第101箱から第140箱までの約40箱についての調査をほぼ終了し、調書を作成した。			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-04

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査終了箱数					
判定	A					
備考 調査終了箱数は40箱となった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4カ年の継続事業のうち、第2年度の事業計画について達成できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	年次計画を予定通り実施した。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-05

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 ((5)-①-v)		
【事業概要】 文化財保存修理所において修復が行われている文化財に関して情報を収集する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 村上隆
【スタッフ】 浅湫毅（主任研究員）、伊東史朗（調査員）			
【主な成果】 平成 20 年度に新規搬入された作品の「修理計画書（設計書）」にもとづき、データを入力し、平成 19 年度に完成、搬出した作品については、各工房より提出された「修理解説書（報告書）」にもとづき、データを追加、更新した。また、平成十四・五年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第 4 号に掲載した。また、修理時に発見された銘文 6 件を「銘文集成」として報告した。			
【年度実績概要】 文化財保存修理所の工房に搬入される新規修理作品に関して、データを収集し、データベースに登録した。過去の修理作品に関してもデータの更新、整理作業を行なった。 毎月行っている文化財保存修理における修理工房の巡回時のほか、適宜工房において、修復中にしか得ることの出来ない情報（作品の構造や使用材料、内部納入品や銘文など）を収集し、分析を行なった。 『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 4 号に掲載する平成 14・15 年度修理作品のデータを整理するとともに、同年の修理で発見された銘文の解読作業を行なった。 また、これらの業務に調査員伊東史朗氏の協力を得た。			
【実績値】 20 年度は 112 件の新規修復文化財の搬入があり、これらの作品に関してデータを収集するとともに、データベースへの登録を行なった。（3 月末日） 過去のデータに関して 2641 回追加、更新を行なった。（同上） 修理所の巡回を 12 回行なった。その他、新発見の事実や銘文の調査を適宜行なった。 21 年 3 月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 4 号（14・15 年度分）を発行した。			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-05

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 限られた期間中にあらゆる側面からの調査を行い、データ収集に努めた。						

2. 定量的評価

観点	データ収集件数	データ追加更新件数			
判定	A	A			
備考 目標件数は達成されている。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行なわれる修理作品から得られる情報はおおむね収集できた。 また、その成果を報告書に反映した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	20 年度に収集された情報をさらに充実させる為、他年度と関連づけながらさらなる情報の収集をはかりたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-06

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 等伯に関する調査研究 (客員研究員) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 全国の美術館・博物館、社寺に遺る長谷川等伯関連の作品および資料の調査研究を行う。社寺調査への参加と協力を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長 山本英男
【スタッフ】 奥平俊六 (客員研究員)			
【主な成果】 長谷川等伯展に出品する候補作品のうちのおよそ半数を調査し、新たな視点からの検討を加えた。その中には新発見の作品も含まれている。その成果は当該年度発行の当館研究紀要に掲載予定である。			
【年度実績概要】 長谷川等伯の出身地である石川県の寺院や美術館に所蔵される作品 (約 30 件) を調査するとともに、京都や東京に所在する作品 (25 件) を調査し、整理分類した。 さらに、京都禅林寺における社寺悉皆調査に参加、協力した。			
【実績値】 石川県の寺院や美術館に所蔵される作品を調査した。(約 30 件) また、京都や東京に所在する作品を調査した。(25 件) 調査件数 約 55 件			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-06

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 長谷川等伯関連の作品調査の成果として、徹底した作品資料の調査と、綿密な分析を行うことができた。それにより、これまで曖昧な状況にあった等伯の画風展開を明確にするための基礎作りができたといえる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数					
判定	A					
備考 長谷川等伯関連作品の所在と保存状況、伝来など詳細なデータの記録と整理を行えたことで、特別展覧会「長谷川等伯」開催のための基礎が確立された。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	長谷川等伯は桃山時代の巨匠だが、その遺作が各地に分蔵されるため、その詳細な整理分類はなかなか行えない状況にあった。それだけに、悉皆調査に近い形での本調査は等伯研究にとって価値のあるものといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は順調に進展している。来年度も同じ主旨により、調査研究を進めていく予定であり、平成23年度の特別展覧会においてその成果が披瀝されることになる。

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-07

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 近世絵画に関する調査研究（客員研究員） ((5)-①-iv)		
【事業概要】 京都文化の一端を明らかにすることを目的として、客員研究員である同志社大学教授狩野博幸氏に、京都を中心とした近世絵画に関する作家研究、作品研究の実施を依頼した。あわせて、平成 20 年 4 月 8 日～5 月 11 日に開催される京都国立博物館の自主企画、特別展覧会「絵画の冒険者 暁斎 Kyosai」の監修を依頼し、当館連携協力室長と協力して展覧会に関わる研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 山下 善也
【スタッフ】 狩野博幸（客員研究員）			
【主な成果】 京都を中心とした近世絵画に関する作家研究、作品研究については、着々と研究が進んでいる。特別展覧会「絵画の冒険者 暁斎 Kyosai」は予想以上の反響を呼んだが、準備期間における節目節目での客員研究員の監修・アドバイスは、きわめて有効・適切なものであり、連携協力室長および客員研究員の有機的な連携が功を奏して、展示計画・図録作成をはじめ同展のさまざまな内容充実を実現、結果、同展成功に結びついた。			
【年度実績概要】 自主企画の特別展覧会「絵画の冒険者 暁斎 Kyosai」の客員研究員による監修、近世絵画担当研究員による企画実施という連携は、同展成功に不可欠なものであった。 狩野博幸客員研究員の洛中洛外図、伊藤若冲、曾我蕭白をはじめとする近世絵画研究は年々深化しているが、それを通じ、京都国立博物館館蔵品・寄託品の価値がいっそう高まってきている。とともに、客員研究員から当館近世絵画担当研究員への適切な指導・助言が連携協力室長の調査研究の諸活動に対して実に大きな刺激と力を与えていることは、特筆しなければならない。さらに、同客員研究員および近世絵画担当研究員の著作活動をつうじて、一般の人々の京都文化に対する興味を喚起し、ひいては博物館に対する理解を深めている。			
【実績値】 『特別展覧会 絵画の冒険者 暁斎 Kyosai』展図録 京都国立博物館 2008 年 調査回数 12 回 収集資料数 320 点 調査概報 4 件			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-07

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会「絵画の冒険者 暁斎 Kyosai」は、国内外から高い評価をいただき（年末の朝日新聞ベスト展覧会のひとつにもあげられた）、成功をおさめた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	客員研究員の京都国立博物館の諸活動に対する指導・助言等及び近世絵画担当研究員と同客員研究員との協力により、近世絵画に関する調査研究は順調に進んでいる。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-08

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 文化財情報に関する調査研究 (客員研究員) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 当館のホームページや文化財情報システムに関する調査研究を実施した。(客員研究員)。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 山田奨治 (客員研究員)			
【主な成果】 ほぼ各月ごとに研究打合会を実施し、これに基づいてシステム全体における問題点を抽出し、その見直しや改良を行った。			
【年度実績概要】 ほぼ各月ごとに研究打合会を実施し、これに基づいてシステム全体における問題点を抽出し、緊急性の高い事項から、その見直しや改良を行った。平常展示館が立て替えのため、閉鎖されていることから、それに伴う機材の移行措置なども行った。			
【実績値】 ほぼ各月ごとに研究打合会を実施し、これに基づいてシステム全体における問題点を抽出し、緊急性の高い事項から検討し、可能な限り、その見直しや改良を行った。平常展示館が立て替えのため、12月7日をもって閉鎖されたことから、それに伴う機材の移動なども行った。 研究打合会 11回			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-08

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	打合会					
判定	A					
備考 定期的に調査研究会を実施している。(合計 11 回)						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定期的に調査研究会を実施し、実績として、「KNM Gallery」を 6 カ国語対応（日本語、英語、韓国語、スペイン語、フランス語、中国語）で閲覧できるように改良した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	緊急性の高い事項から、順次検討を行っており、予算を勘案しながら実施している。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-09

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 訓点資料としての典籍に関する調査研究 (客員研究員) ((5)-①-iii)		
【事業概要】 訓点資料のうち、平安時代の古写経や漢籍に付された訓点に関する調査研究を実施した。(客員研究員)。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 羽田 聡 (研究員) 宇都宮啓吾 (客員研究員)			
【主な成果】 平安時代の古写経の訓点については、その成果の一部を仏教美術研究上野記念財団のシンポジウムで研究発表を行った (宇都宮氏)。加えて当館に保管されている漢籍のうち、世説新書や玉篇、及びそれらの紙背聖教に付された訓点の調査を行った。			
【年度実績概要】 従来は古写経の訓点を中心としたが、本年度は訓点資料の中でも漢籍を中心に、本文及びその紙背聖教に付された平安時代の訓点を調査研究した。			
【実績値】 研究発表も行い、新出資料である玉篇の断簡については、書誌学的調査を行い、その紙背聖教の訓点も詳しく調査した。 研究発表 1 回			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-09

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研究発表					
判定	A					
備考 研究発表を1回開催した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	古写経のみならず、漢籍の写本の訓点を詳しく調査した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	館蔵品の訓点資料を順次、調査している。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-10

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 彫刻に関する調査研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 当館に保管および寄託される仏像を中心とした彫刻作品の調査、研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 浅湊 毅
【スタッフ】 井上一稔 (客員研究員)			
【主な成果】 特別展覧会「妙心寺」展出品の棄丸坐像に関して研究を進めたところ、新たな事実が判明し、その成果を同展目録に「ふたつの棄丸像一天正十九年の豊臣秀吉一」と題して発表した。また、平成十九年度に開催した特別展覧会「藤原道長」出品作である即成院観音菩薩像に関し、開催時の調査で得られた成果を『鳳翔学叢』第5号(平成二十一年三月発行)に論文として発表した。			
【年度実績概要】 当館が保管、あるいは当館が社寺より寄託を受けている彫刻作品の調査および写真資料の収集を、新たに行なった。 社寺、個人宅など、館外に所在する彫刻作品の調査・撮影を行ない、一部作品は寄託いただいた。 上記調査作品の関連文献、史料の収集および研究を行なった。 これらの調査に際し、客員研究員の井上一稔氏の協力を得た。 過去の研究データに基づき特別展覧会および特集陳列、平常陳列の作品選定、展示、解説を行なった。 平常展示館の閉館にともなう作品の移動を行なった。			
【実績値】 特別展覧会『京都御所ゆかりの至宝』を開催にあたり、図録に作品解説の執筆を行なった。 将来の特別展準備のための調査を妙心寺塔頭(妙心寺展)および松前・法華寺(日蓮展)で行なった。 永観堂禅林寺において社寺調査を行ない、彫刻作品の調査を担当した。 その他、出雲市・大寺薬師、京都・法界寺において彫刻作品の調査・撮影を行なった。また昨年度調査を行なった静岡・建徳寺の調査結果を21年5月発行の『学叢』(京都国立博物館発行)に掲載する予定である。 論文 「定朝第三世代の作風に関する一試論」(『鳳翔学叢』5号)他1篇 報告 「増上寺三解脱門の釈迦三尊像および十六羅漢像について」(『学叢』30号)他2篇			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-10

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 彫刻作品の調査の成果を、特別展覧会、平常展示等の作品展示および、図録、解説等により公開できた。 次年度以降の展観事業の準備として継続的に調査・研究を行っている。						

2. 定量的評価

観点	論文数					
判定	A					
備考 計画的に調査を行い、論文に反映させることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の所蔵、寄託作品に関する情報は順調に得られており、館外での作品調査に際しても重要な情報が収集された。引き続き特別展覧会等で成果を公開したい。 一方、平常展示館が長期閉館することにより、平常展示においてこれまで行ってきた成果の公開が難しくなるが、報告書、論文等それにかわる成果公開を考えたい

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	継続的に、順次彫刻作品に関する情報は、順調に収集されている。 本研究によって得られた情報を将来の展覧会に生かせるよう、さらなる情報の収集を図りたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-11

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 西域出土文献に関する調査研究 ((5)-①-ii)		
【事業概要】 サнктペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の中央アジアおよびその周辺の文献に関する調査研究を行った。(調査員)。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 羽田 聡 (研究員)、高田時雄 (調査員)			
【主な成果】 サнктペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の東洋写本コレクションの調査を実施した。			
【年度実績概要】 サнктペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の東洋写本コレクションの調査を実施し、次年度に開催予定の特別展覧会の事前調査とした。			
【実績値】 サнктペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の東洋写本コレクションの調査を実施し、次年度に開催予定の特別展覧会の作品リストを作成し、中央アジア周辺の文献を中心に 151 件を選定した。 また、平成 21 年 2 月 9 日～14 日に、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所イリナ・ポポヴァ所長を招へいし、打ち合わせを行った。 事前調査回数 2 回			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-11

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	事前調査					
判定	A					
備考 事前調査を2回実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の東洋写本コレクションの調査を実施し、次年度に開催予定の特別展覧会の作品リストを作成した。 同研究所の所長を招聘し、打合会を実施した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	事前調査を実施し、次年度開催予定の特別展覧会の準備を行った。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-12

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 中・近世の金属工芸品の製作と受用にみる江南、嶺・湖南、瀬戸内の地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究（トヨタ財団研究助成）((5)-①・ii)		
【事業概要】 中世・近世の交易の要であった中国の江南、韓国の嶺・湖南、日本の瀬戸内という3地域において、製作あるいは受用された金属工芸品を調査して、製作技術・意匠・用途などの地域間交流の実態を解明し、それを惹起した地域相互の文化認識のあり方、それらを媒介した人や組織などを解明する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 久保智康
【スタッフ】 王牧（中国浙江省文物鑑定中心研究員）、崔應天（韓国東国大学校教授）、金恩愛（韓国 AMORE 美術館研究員）、羽田聡（京都国立博物館研究員）、塚本鷹充（大和文華館学芸員）、上里隆史（法政大学沖縄学研究所研究員）、三笠景子（東京国立博物館研究員）、多比羅菜美子（根津美術館学芸員）、家塚智子（京都市芸術大学講師）、服部敦子（帝塚山大学講師）			
【主な成果】 中国・韓国の博物館、大学などが所蔵する銅器の共同調査を、現地の分担者と進めた。その結果、これまで日本でほとんど紹介されてこなかった銅器類の情報を多く得ることができ、また分担者や所蔵館の研究者との議論を通して、相互の問題意識を高めることができた。日本国内に所在する銅器類とその関連資料・絵画・文献等についても、個別調査を各分担者で進めた。さらに国内分担者が参加して研究会を行い、問題意識の共有と情報交換を行った。			
【年度実績概要】 中国における共同調査：杭州市歴史博物館所蔵の銅器類の調査、福建省福建博物館所蔵の同省南平市窖蔵出土の元代倣古銅器の一括資料約 50 点の詳細調査、江西省宜春市博物館所蔵の宜春窖蔵出土の銅器 30 点の詳細調査を行い、宜春窖蔵一括品が南平窖蔵一括品よりも微妙に古い銅器群である可能性が確認された。今後このような一括銅器群の下限を比較し、組列していくことで、倣古銅器（日本における唐物銅器）の実質的な編年がはじめて可能となることを予想させしめた。 韓国における調査：東国大学校、高麗大学校、仏教中央博物館所蔵の高麗・朝鮮時代の銅器について基礎的な情報収集を行い、詳細調査の準備を進めた。とりわけ東国大学校には、中国および日本を源流とした仏具が数点所蔵されており注目された。 国内調査：大分県日出町沖嶋神社のクリス剣、新潟県十日町市伊達八幡館遺跡ほか新潟県下出土の銅器、福岡市誓願寺伝来の舶載仏具、長浜城博物館所蔵の中世仏具、三重県津市養徳寺跡出土中世仏具などの調査を行った。これらの成果と、妙心寺展事前調査で得られた山内諸寺伝来仏具の調査成果を合わせて、唐物仏具が室町時代において、擬唐物仏具へと展開する過程で、いかなる特色が発現していったかを検討した。 このほか、各研究分担者が栃木、沖縄、福岡、大阪において関連作品、文献の調査を進めた。 2月には、全分担者が集まり研究会を開催し、成果の中間発表を行った。			
【実績値】 研究会発表 分担者 8 名による発表（2月15日） 論文発表 久保智康「新安沈船に積載された金属工芸品―その性格と新安船の回航性をめぐって―」『九州と東アジアの考古学』5月 久保智康「唐物銅器とその「和物下」―妙心寺伝来品を中心に―」『妙心寺』（展覧会図録）1月			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-12

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

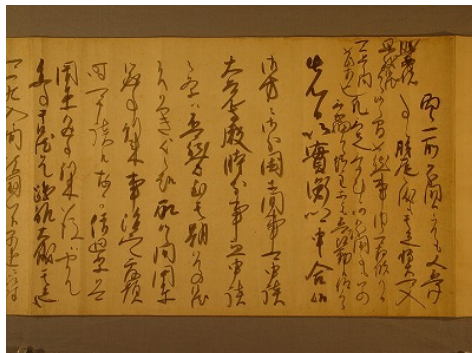
観点	調査回数	発表回数				
判定	A	B				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国内外の関係作品の調査を積極的に行い、その成果は自治体の文化財保護行政にも活用された。国内外の研究者と共同調査を行い、問題意識の共有を進めることが出来た。国内分担者による研究会を行い、成果の中間的な確認を行うことが出来た。また『京都御所ゆかりの至宝』『妙心寺展』の展覧会図録において、研究成果の一部を反映することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は21年10月で終了する。これまでの調査頻度をさらに高めて、できる限り綿密な調査データを構築する。10月初旬には中国・韓国・国内の全分担者によって、公開のセミナーを開催し、成果を公表したい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 宸翰（天皇の書）の歴史学的見地からみた調査・研究（(5)-①-iii）		
【事業概要】 宸翰（天皇の書）は、京都国立博物館の書跡部門における館蔵品および寄託品をふくめた収蔵品において、質・量ともに他館に誇るべき大きなコレクションを形成している。本事業は、これまで書道史の側面から語られることの多かった宸翰について、「その発生から多様化までを歴史学に立脚して解釈する」という問題意識のもと、収蔵品を中心に調査し、情報を蓄積することを目的とする。また、調査の成果は誌上での公開や講座をつうじて還元し、なおかつ将来的にはこれらを取り入れた特別展覧会の開催も目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	研究員 羽田 聡
【スタッフ】			
【主な成果】 調査に基づく研究成果としては、「妙心寺本坊、塔頭に所蔵されている文化財の調査研究」((5)-②-iv)との関係で、当館の所蔵する重要文化財「花園天皇宸翰消息 1 幅」の資料としての位置づけを明らかにし、論文を発表した。関係資料の館外調査では、これまで展示に供されたことのない重要文化財「後伏見天皇宸翰御消息 1 巻」（個人蔵）を精査する機会を得、本事業の趣旨を披瀝したところ、これを新たに寄託品として加えることができた。			
			
		重要文化財「後伏見天皇宸翰御消息 1 巻」（個人蔵、部分）	
【年度実績概要】 宸翰とひとくちにいても、内容的には日記・文書・詠草・懷紙・經典から画賛や額字まで作品に多様性があり、時代幅もかなりある。かような点にかんがみ、本事業は年度ごとに分野や時代を区切って調査を実施している。 平成 20 度は前年度に引き続き、いわゆる宸翰様が大成した鎌倉時代末期から南北朝時代の宸翰のうち、①とくに鎌倉時代末期における持明院統、具体的には伏見・後伏見・花園天皇宸翰の調査をおこなった。また、新規の作業として、②宸翰のうち和歌懷紙の調査を実施した。さらに、付随する情報のみでは判断できない作品の来歴、あるいは戦災などにより現存しない、散逸した可能性のある宸翰について知るため、③売立目録に掲載された宸翰の情報収集もあわせておこなった。 調査の方針として、①および②は一点ごとに調書を作成し、デジタルカメラで撮影のうえ、解読した本文をテキストデータとして入力し、撮影した画像とともに保管した。また、③売立目録の情報収集に関しては、当館はかなりの数の目録を所蔵しているので、それらを一冊ずつ総まくりしたうえ、関係資料があれば一点ごとにコピーをとり、ひとまず時代ごとにファイルを作成した。			
【実績値】 掲載論文数 羽田聡「京都国立博物館所蔵「花園天皇宸翰消息」について」（『学叢』第 30 号、2008 年 5 月） 羽田聡「紙背に經典の書写された和歌懷紙」（『年報三田中世史研究』第 15 号、2008 年 10 月） 羽田聡「売立目録と近世天皇の宸翰」（京都国立博物館編『京都御所ゆかりの至宝一甞る宮廷文化の美一』、2009 年 1 月） 3 篇 講座数 羽田聡「近世天皇の書一和歌懷紙の不思議一」（京都国立博物館土曜講座、2009 年 1 月 17 日） 羽田聡「行海の懷紙」（長野県立歴史館講演会、2009 年 2 月 6 日） 2 回 調査点数 資料約 30 点 売立目録約 30 冊 調書作成点数 約 30 点 撮影資料枚数 約 120 枚（1 点あたり、平均 4 カット）			
【備考】			

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-13

(様式2)

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 本事業は宸翰を歴史学の見地に立脚して見直す、というこれまでにない発想に基づいており、応用性が見込まれる。現在のところ、ほかの事業と兼ね合いながらも効率よく、かつ継続的に調査が実施され、収蔵品に関してはデータの蓄積が進みつつある。また、将来的には展覧会の開催という公共性および公開性という側面も持ち合わせる。						

2. 定量的評価

観点	論文掲載数	講演数	調査点数	調書作成点数	撮影資料点数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 年度の計画としてあげた持明院統天皇の宸翰、および和歌懐紙の調査および撮影については、19年度とおなじ水準を維持しつつ、詳細な調書を作成した。売立目録の総まくりについては、全体の十分の一程度を終了させ、限られた時間を有効に使いデータを集めている。また、調査の成果をふまえた研究論文3篇が公開され、かつ一般にむけた講座2回を行うことで、本事業の目的の一つとする成果の還元という点においても十分な実績をあげることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	持明院統天皇の宸翰、および和歌懐紙の調査および撮影については、19年度とおなじ水準を維持しつつ細な調書を作成し、売立目録の総まくりとあわせてデータの収集および蓄積につとめた。また、本事業に対する理解が得られたことで、重要な作品が寄託品として加わり、当館の根幹事業たりうる収蔵品の増加にもつながった。この点を考慮するならば、館外の関連作品も視野に入れながら、調査を継続するようつとめたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本事業において、【年度実績概要】に計画としてかかげた3つの作業は、ほかの事業と兼ね合いながらも滞りなく実施されたと考える。なおかつ、誌上での公開や講座をつうじて、成果を還元することにも十分に配慮した。21年度もこの3点を継続して行うことで、状態の維持につとめるとともに、具体的な展覧会の開催時期についても検討したい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-14

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 瑞光寺ならびに建仁寺両足院所蔵陶磁の調査研究 ((5)-①- ii)		
【事業概要】 伝世陶磁を多数所蔵している京都の瑞光寺と建仁寺の塔頭である両足院所蔵陶磁器の調査を実施し、寄託品の充実を図ると同時に、近い将来に開催を計画中の特別展覧会の充実を図る			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 尾野善裕
【スタッフ】 谷口愛子（調査員） 橘 倫子（調査・研究支援ボランティア） 森下愛子（調査・研究支援ボランティア）			
【主な成果】 のべ 91 件の伝世陶磁器の調書を作成し、伝世陶磁器研究ではこれまであまり注目されていなかった種類の中国陶磁をはじめとして、多数の寄託品候補を見いだすことができた。			
【年度実績概要】 瑞光寺に関しては、のべ 2 日間の調査を実施し、悉皆調査（調書作成）を完了。 建仁寺両足院についても、1 月末現在で 2 日間の調査を行い、48 件分の調書を作成した。悉皆調査は未了であるが、既調査分の中から寄託候補品を本年度末頃に博物館へ搬入の予定。			
【実績値】 調査回数 4 回 調書作成件数 91 件（瑞光寺 43 件、建仁寺両足院 48 件）			
【備考】			

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4512-14

(様式2)

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 地元社寺からの依頼を受けて、速やかに実施することができた。調査方法については、過去に開催した「京焼」「憧れのヨーロッパ陶磁」展の準備に際してとった方法を踏襲しており、今後新たな特別展開催に向けての基礎資料を蓄積することができた。また、調査に際しては、京都国立博物館の独自の制度である調査研究支援ボランティア2名の参加を得ることができ、低廉な調査経費であったにもかかわらず、質の高い調査の作成ができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 建仁寺両足院の調査を完遂できなかったが、のべ4日間の現地調査は、昨今の博物館の著しい業務繁忙化の中では、ほとんど確保できる上限数値である。調査作成件数は、1日あたり20件強であり、一見少なく思われるかもしれないが、これは調査に際して洗浄・クリーニングを会わせて実施していることによるもので、作業効率は極めて高いといえる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで未公表であった伝世文化財の調査を行い、博物館への寄託候補品多数を見いだすとともに、地元社寺との信頼関係の緊密化を図ることができた。建仁寺両足院については、調査を完遂できていないため、来年度も調査を継続して実施し、新たな作品の発見に努める予定であり、既に先方の内諾を得ている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年度当初に計画していなかった事業であるが、多数の寄託候補品を見いだすとともに、近い将来に計画している特別展覧会に向けての基礎資料を蓄積することができ、中期計画に対して順調に成果を挙げることができた。

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-01

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施 ((5)-①-ii)		
【事業概要】 近隣社寺へ奈良国立博物館に対する積極的な協力の働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業（展示等）に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】 鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、中島博（情報サービス室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室員）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、永井洋之（企画室員）、北澤菜月（企画室員）			
【主な成果】 法隆寺、西国三十三所霊場及び関連文化財を蔵する諸寺、円教寺、金峯山寺、春日大社等への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を特別展・特別陳列に反映させるとともに、報道発表などを通して発信した。			
【年度実績概要】 ① 法隆寺金堂四天王像（国宝）について、赤外線写真による制作当初の彩色確認などの調査を実施し、その成果を特別展「国宝 法隆寺金堂展」の展示解説パネル、展覧会図録等に反映させた。 ② 奈良県を中心とする地域の西国三十三所霊場札所が蔵する主要な文化財、また長谷寺式十一面観音像及び興福寺南円堂式不空罽索観音像に関連する文化財の調査を実施し、その成果を特別展「西国三十三所観音霊場の祈りと美」に反映させた。 ③ 特別展「西国三十三所 観音霊場の祈りと美」に出陳された円教寺（兵庫県姫路市）所蔵・性空上人像の X 線撮影を行って像内納入品の存在を確認し、報道発表を行った。画期的成果として多くのメディアで取り上げられ、同像は本年度、重要文化財に指定されるに至った。 ④ 当館修理所にて修理が完了した兵庫県所蔵の天部像が奈良・金峯山寺所蔵釈迦如来像と酷似することに着目して比較研究を行い、釈迦像を借用して「とてもよく似た二つの仏像」と題する特集展示を開催した。比較研究の成果は報道発表で公表し、展示解説パネル等にも反映させた。 ⑤ 春日若宮おん祭に関する文化財調査を実施し、その成果を特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映した。 ⑥ 唐招提寺の収蔵品及び同寺金堂基壇発掘時における出土品（橿原考古学研究所所管）の調査を行った。その成果を 21 年度春季特別展「国宝鑑真和上展」に反映させた。			
【実績値】 社寺調査対象数 14 論文掲載件数 5 件			
【備考】			

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-01

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 南都諸社寺等に所蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
備考 展覧会企画に沿った調査研究が中心になっており、その点では必要十分な条件を満たしている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展「国宝 法隆寺金堂展」、同「西国三十三所一観音霊場の祈りと美」に出陳した近隣社寺を中心とした所蔵品の事前調査の成果は展示及び展覧会図録に反映され、高い評価を得た。春日大社の若宮おん祭に関する文化財調査の成果は特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映された。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。20年度も東大寺や春日大社を初めとする社寺の宝物調査を行うことにより、展覧会を活性化させ、学術的成果をあげることもできた。

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-02

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 普段は法隆寺の金堂内に安置されているため全く調査の機会がなかった釈迦三尊像・薬師如来坐像の台座に、初めて本格的な光学調査を実施することができた。また、東京文化財研究所が春日権現験記絵巻の調査を継続的に実施していることを踏まえ、当初一具だった披見台の調査を実施した。いずれも展覧会出陳というまたとない機会を捉えた調査対象の選択だった。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	B	A	B			
備考 前年度には1週間程度の調査日程を2回確保できていたにもかかわらず、本年度は1回しか確保することができなかった。両機関ともに多岐にわたる業務が増える中、長期にわたる調査日程を調整することが極めて困難になっていることが背景にある。そうした状況下で3件の重要作品を調査できた実績は評価すべきであるが、収集したデータの処理・分析に時間がかかっており、年度内の成果報告はできなかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	最新鋭の光学機器を用いた調査の実施により、従来は不明だった文化財の材質や構造を明らかにすることができ、また文化財の保存・修理を将来行う上での指針となる詳細な現状記録を残すことができた。特に本年度は飛鳥時代と鎌倉時代の重要絵画作品について詳細な調査を実施し、共同研究のメンバー以外にも当該作品を総合的に評価するために外部の研究者を招聘して調査を実施することができた。ただし調査データの解析にあたっては、未だデータの蓄積が十分でないために判断を保留せざるを得ない部分もあり、特に春日権現験記絵巻について、当初一具だった春日権現験記絵巻との比較検討も実施できておらず、次年度以降も同様の調査を重ねていくことで、分析の精度を高めていきたい。また調査前・調査後の検討会をより綿密に行う一方、現在は1週間程度かかる1回あたりの調査実施期間を圧縮して、スムーズな日程調整を実現するとともに、作品自体への負担を軽減したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 仏教美術写真収集及びその調査研究 ((5)-①・ii)		
【事業概要】 収蔵品・寄託品および館外から借用した仏教美術を中心とする文化財の写真撮影をおこなう。その際、文化財の基本情報を整備するとともに情報システムへ登録をおこない利活用できる体制を整える。特にカタログや美術書などには掲載されていない、作品の側面、背面、内側などの撮影を多数おこない、構造理解や製作技法の解明に資する貴重な写真を豊富に蓄積し、学術研究や保存を目的とした利用に資する資料として整備することを主要な目的とする。			
【担当部課】	学芸部資料室	【プロジェクト責任者】	資料室長 宮崎 幹子
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】 鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、中島博（情報サービス室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室員）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、永井洋之（企画室員）、北澤菜月（企画室員）、森村欣司（資料室員）			
【主な成果】 館内外の貴重な文化財の撮影をおこない、カラーおよびモノクロ・フィルムを多数蓄積し、基本情報を整備することができた。これらは情報システムへ登録をおこなって検索利用を可能とし、さらに別途公開台紙を作成して一般の閲覧に供している。			
【年度実績概要】 今年度の撮影では、移動の困難な仏像の写真や内部構造の X 線写真など貴重な資料が多く蓄積できた。特筆すべきものとしては、特別展『西国三十三所一観音霊場の祈りと美』に際して、観音信仰にかかわる多数の文化財の撮影を集中的におこなった。特に圓教寺所蔵・性空上人坐像については、カラーおよびモノクロ撮影によって像のありようを多面的に記録すると同時に、X 線撮影により像内の瑠璃壺と見られる納入物の存在を明らかにすることができた。 さらに来年度の特別展『聖地寧波ー日本仏教 1300 年の源流～すべてはここからやって来た』の開催に向けて、出陳予定の大徳寺所蔵・五百羅漢像（八十二幅のうちの四十二幅）の撮影をおこなった。中国宋時代の仏教絵画の傑作である本画像の重要かつ貴重な資料を多数蓄積することができた。 また収蔵品、寄託品の国宝などを中心に写真のデジタル化を推進し、ガラス乾板についても館の歴史資料として重要な写真を中心にデジタル化をおこなった。			
【実績値】 収集した写真枚数は以下の通り。 カラー・ポジ（4×5） 3,079 枚、カラー・ブローニ 312 枚 モノクロ 2,965 枚、ブローニ 4 枚、X 線 97 枚			
【備考】			

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-03

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	B	A	A	A	
備考 この事業は継続性の高いものであり、短期的な成果や画期性を期待すべきでなく、間断なく質の高い資料を蓄積できた点を評価したい。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	B	A			
備考 回数や収集資料数は多ければ良いわけではないが、質や継続性を勘案しても、本年度は十分な調査をこなしており、収集資料も豊富であったと評価したい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	過去5年間の平均撮影枚数は約7千枚であるのに対して、単純な撮影枚数では若干下回っている。しかしながら実績概要でも述べたとおり、歴史的に重要であり、撮影および調査の機会を得ることが通常では困難な文化財について、調査を実施して質の高い資料の収集が叶い、学術研究の利用に資することのできた意義は大変大きい。今後とも調査研究や展覧会の開催と密接に連携した資料の蓄積を続けたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨今の写真のデジタル化の勢いを鑑みた場合、機材と人材の確保を含めた長期的な展望が今後とも必要であると思われる。

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-04

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究 (5)-①- ii)		
【事業概要】 仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、中島博（情報サービス室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室員）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、永井洋之（企画室員）、北澤菜月（企画室員）			
【主な成果】 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究の成果を、展示及び図録等に反映させることができた。			
【年度実績概要】 ① 学術交流協定を結んでいる中国・上海博物館に3名、同・中国国家博物館に2名、韓国・国立慶州博物館に1名を派遣した。また、中国・河南博物院から2名、中国国家博物館から2名、慶州博物館から1名の研究員を受け入れた。 ② 特別展「天馬—シルクロードを翔ける夢の馬」では、仏教と天馬の関係にも留意しつつ、中国からの借用品を含む、中国で制作された関連作品群の展示を行い、展覧会図録にも調査研究の成果を反映させた。 ③ 特別展「国宝 法隆寺金堂展」開催にあたり、法隆寺の出陳文化財と中国・朝鮮半島の文物の比較検討を行って、展覧会図録等に調査研究の成果を反映させた。 ④ 特別展「第60回正倉院展」では、東アジア文化圏の中で正倉院宝物の意義を考察し、展示及び展覧会図録に反映した。また正倉院宝物の源流をシルクロードに探る取材のため研究員を派遣し、パネル展示や連載記事に協力した。 ⑤ 中国宋元時代及び日本中世における東アジア海域交流に関連する作品調査を行うためにアメリカ及び中国に1名を派遣した。その成果は21年度特別展「憧憬の中国仏教—聖地寧波をめぐる人と美術」に反映させる予定である。 ⑥ 22年度春季特別展「平城遷都1300年記念大遣唐使展」開催の事前調査のため中国にのべ2名、米国に1名の研究員を派遣し、中国で制作された関連作品を主たる対象とした事前調査・資料収集を行った。			
【実績値】 研究員の派遣 12名 研究員の受入 5名 学会、研究会等発表件数 7件 論文掲載件数 4件			
【備考】			

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-04

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 我が国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の特別展等に反映させるように努めている。						

2. 定量的評価

観点	研究員の派遣人数	研究員の受入人数	学会、研究会等発表件数	論文掲載件数	
判定	A	A	A	A	
備考 展覧会企画に沿った調査研究ができ、その点では必要十分な条件を満たしている。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上海博物館（中国）・河南博物院（中国）・中国国家博物館（中国）・国立慶州博物館（韓国）の四館と研究員の交流を行うことで、広くアジア諸国を視野に入れた調査研究を行うことができた。特別展「天馬」では、東西交渉史を考える上で非常に重要なモチーフである天馬に関連する作品を展示し、高い評価を得た。その中には、中国で制作された品も多数含まれる。「第60回正倉院展」においても、正倉院宝物の源流をシルクロードで調査した成果をパネル展示などに活用した。また中国・アメリカでの中国文物の調査を展開し、その成果は21年度特別展「聖地寧波ー日本仏教1300年の源流～すべてはここからやって来た」及び22年度特別展「平城遷都1300年記念大遣唐使展」の内容を充実させることになった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって21年度特別展「聖地寧波ー日本仏教1300年の源流～すべてはここからやって来た」及び22年度特別展「平城遷都1300年記念大遣唐使展」の内容を充実させることができた。23年度以降も中国との交流をメインテーマとする複数の特別展を計画中で、今後も引き続き調査研究を続けていく必要がある。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-05

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 当館所蔵品についての調査研究(客員研究員) ((5)-①-iii)		
【事業概要】 従来からの収蔵品について継続的に調査研究を実施する。なお、新収蔵品については具体的な公開等を見越して重点的にこれを行う。調査研究の成果は、展覧会、印刷物、インターネット等を通じて公表し、広く斯界の学術的発展に資する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】 鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稲本泰生(企画室長)、中島博(情報サービス室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室員)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、永井洋之(企画室員)、北澤菜月(企画室員)			
【主な成果】 新収蔵品に対する調査研究を重点的に実施し、平常展での公開と併行して研究成果を広く発信することができた。従来からの収蔵品についても継続的に調査研究を行い、その成果を展示及び刊行物などに反映することができた。			
【年度実績概要】 ① 前年度購入した越中国射水郡鳴門村壱田図についての調査研究の成果を、平常展での初公開と連動させて「日本歴史」、「奈良国立博物館だより」等各種メディアで詳しく紹介した。 ② 五條市猫塚古墳出土品に関して、細かな観察に基づく再検討を実施した。 ③ 特別展「天馬ーシルクロードを翔ける夢の馬」、特別陳列「建築を表現するー弥生時代から平安時代まで」開催に向けて行った関連収蔵品調査(前者の実施は前年度)の成果を、展示及び展覧会図録に反映した。			
【実績値】 展覧会図録 2冊 新収蔵品の調査研究成果の学術雑誌、新聞、館の刊行物等への掲載 5回			
【備考】			

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-05

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 収蔵品の調査研究は各部門による定期的継続的な点検調査を通して、平常展をはじめとして新たな成果を公開している。また、新収蔵品等についても集中的な調査を実施しており、この成果を公開しているのは前述の通りである。						

2. 定量的評価

観点	図録の作成	学術雑誌等への掲載				
判定	A	A				
備考 調査研究成果について、質の高い図録等として発表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新収蔵品となった作品の調査研究を進め、その成果を平常展及び各種刊行物等に反映させた。また事前調査としての様々な館蔵品調査の成果は、特別展「天馬」及び特別陳列「建築を表現する」に反映され、高い評価を得た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	従来からの収蔵品及び新収蔵品についての調査が継続的に実施され、その成果は評価の高い展覧会を生み、また展覧会図録等の出版物やインターネット等を通じて公表された。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-06

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 統一新羅期の道具瓦集成 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 日本の瓦生産において大きく影響を与えたと考えられる朝鮮半島の様相を日本と比較検討することを目的として、特に研究が遅れている道具瓦を取り上げる。これまでと描く文様に偏りがちだった鬼瓦と鴟尾について出土数が多い統一新羅の資料を対象に集成を行い、これまで研究を進め明らかにしてきた日本での鬼瓦の技術的観点を援用しつつ、製作技術など技術的観点にもとづくデータを採取し、基礎的資料を作成する。			
【担当部課】	学芸部工芸考古室	【プロジェクト責任者】	工芸考古室員 岩戸 晶子
【スタッフ】			
【主な成果】 昨年度から3ヵ年の計画で、韓国国内で最も多い所蔵資料数を誇る韓国国立慶州博物館（以下、慶州博）ほか、韓国国立中央博物館や東国大学校博物館などの所蔵資料を中心に、実測や写真撮影、熟覧を行い、資料化を進めている。			
【年度実績概要】 今年度は8～9月と2月に韓国での調査を行い、昨年に引き続いて慶州博にて調査を実施したほか、新たに東国大学校博物館にて調査を行った。東国大学校では慶州各地で出土した鬼瓦とその範を調査し、特に出土資料としての鬼瓦範は日本で出土を見ず、韓国国内でも非常に珍しいものである。これまでの調査ではこの範による製品の調査も行っており、今回の調査によって鬼瓦製作技術に関する非常に多くの知見が得られた。慶州博では昨年度に引き続き雁鴨池出土の鬼瓦の調査を行っている。とくに8月には緑釉鬼瓦について集中的な調査を行った。日本では平安時代になって初めて登場する緑釉鬼瓦であるが、調査の結果統一新羅の緑釉鬼瓦は初期段階に限定されることが新たに判明した。2月の調査は現在進行中であるが、同範関係の確認や改範の可能性のある資料を集中的に調査している。 昨年度の予定では、日本にあるコレクション内に含まれる統一新羅道具瓦についても調査する予定であったが、最大のコレクションであった井内コレクションが全て韓国の柳琴瓦当博物館に寄贈されるという予期できない事態が起こり、現在、計画の変更を余儀なくされている。年度内には天理参考館所蔵の鬼瓦も調査予定である。			
【実績値】 調査日数は延べ32日。			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-06

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 韓国における古代瓦の研究は文様を対象としたものに偏重しており、道具瓦も例外ではなかった。そういった意味では、独創的であり、基礎データを提示することによってこれからの研究の進展が期待できるものである。また、本調査は、プロジェクト責任者のこれまでの研究成果を基にして、奈良国立博物館における慶州博との学術交流などの人的交流の成果を基に、可能となったものである。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	B	B				
備考 科学研究費を活用し、韓国での調査は着実にすすめている。国内の資料に対する調査が既述のとおり予定変更を余儀なくされており、今年度は捗らなかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	最も対象資料を多く所蔵する慶州博では担当者が異動によって交代するなどのハプニングもあったが、密に連絡を取り合い、当初の予定通りの計画で調査を遂行できている（現在進行中。）当初日本国内で調査予定であった資料の大部分が韓国に移動したため、次年度はこの調査をどうするかについて早急に検討・交渉することが課題である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	3年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。今後もこのペースを維持しつつ、さらに調査の充実をはかりたい。次年度は最終年度ということもあり、調査だけでなく分析も含めて研究を進めたい。

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-07

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 古墳時代中期における対外交渉の特質と地域圏の形成・展開過程（科学研究費補助金）((5)-①・ii)		
【事業概要】 本研究は、日本の国家形成をみる上で基点となる古墳時代中期に焦点をあて、外来的な文化要素を徹底して検討することを目的としている。ケース・スタディとして奈良県五条猫塚古墳の出土品を選定しており、その再整理と詳細検討を行う中から生じた問題を、他の地域や遺跡出土の資料に当てはめ、新たな視点から外来的要素の発現メカニズムを探る計画である。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 吉澤 悟
【スタッフ】 研究分担者 ；岩戸晶子（当館 工芸考古室員）、魚津知克（大手前大学講師） 研究協力者 ；岩本崇（大手前大学史学研究所）、加藤一郎（宮内庁書陵部）、阪口英毅（京都大学文学部）、川畑純（京都大学大学院）、初村武寛（京都府立大学大学院生）			
【主な成果】 19年度の作業に引き続き、五条猫塚古墳の出土品の実測図作成を推進した。さらに、これまでに蓄積したX線写真や図面の画像データをパソコンに取り込み、個々の遺物に関する法量や形態、出土位置などの基礎的項目をデータベースに入力し、これらに予備的な検討を行った。来年度以降の本格的な検討・比較研究に必要な基礎的作業を大幅に推進することができた。			
【年度実績概要】 平成 19 年度は、五条猫塚古墳の出土品の再整理とそこから抽出される技術的特性な何かという問題を考えることを主目的とした。甲冑や鉄製武具、埴輪などを専門的に研究している大学研究者、大学院生の精鋭を集めて整理チームを作り、数多くの実測図やX線写真を作成し、数回の検討会を開催し、問題点の整理を行った。 平成 20 年度は、前年度の作業を受けて、前半期は不足の情報を補うために実測作業を進めた。特に挂甲小札と鉄鏃は大量にありながらも種類が多岐にわたるため、その分類と正確な図化が必要であり、主戦力をここに注ぐことにした。結果、今年度にほぼ図化を完成させることができた。 後半期は、主にパソコンへ画像を取り込み、基礎データ入力などを進めて、研究スタッフ全員が出土品の全貌を見通すことができ、かつ共通の問題意識のもとに検討を進められる環境作りを推進した。当年度の作業の中からもいくつかも新発見と問題点が表れ、これを話し合う場を数回設けることにした。 未だ文章報告のかたちにはなっていないが、これまでの整理・検討から以下の内容に高い蓋然性が指摘できる段階に至っている。すなわち、金銅製帯金具や鉄製武器・武具など本古墳の出土品は、形態や製作技法などに大陸や半島からの技術的影響が強く看取されるが、その実態は、渡来した工人による直接の作品ではなく、わが国の在来技術や生産体制に技術指導が行われたもの、あるいは少数グループによる技術的交流をうかがわせるものであり、大陸・半島の単純な模倣ではなかった。これが単一氏族による自己完結的な現象であるとは考え難く、本古墳を営んだ勢力が大陸・半島技術の窓口となり、周辺地域の技術レベルを牽引する役割を果たし、ひいては列島全体に起きている国家形成の胎動の基盤を支えるものとなったと考えられる。 最終年度の平成 21 年度には、これまで蓄積した基礎情報と上記の検討成果をより深化させ、個々のスタッフが推進する研究成果を取りまとめる準備をすすめる予定である。同時に、その概要をまとめて公表すべくレポート作成を計画している。			
【実績値】 五条猫塚古墳の武具、農耕具、埴輪ほかの実測図を通算で約 7 0 0 枚。遺物の 8 ～ 9 割を実測図化し得た。実測図およびX線写真の約 7 割を画像データ化した。 寸法や形態分類、出土位置などの基礎情報を入力したデータベースを作成した。 小検討会 期間中 2 回、全体会議 1 回開催。			
【備考】			

【書式B】

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4513-07

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本古墳の出土品は日本国内の研究者はもとより、韓国研究者にも大いに注目されている。ことに技術交流に関する研究論文も昨今は頻繁であり、基礎情報の整理は周囲に囑望されているものである。また、腐食・崩壊によって失われつつある鉄製品の情報を、可能なかぎり正確に記録化しておくことは、当該分野の将来的な研究においても大きな寄与をもたらすものと思われる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 大量の実測図や基礎情報を収集し得た。報告は来年度以降の作業である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎資料の蓄積と整理を果たした点で、今年度は相応の評価が得られると思われる。次年度はこの成果をもとにした内外スタッフの検討会を増やし、研究の深化をはかり、同時に概要を公表する準備をすすめて行きたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は、古代東アジアの対外交流史において重要な位置を占めると考えている。特に仏教美術を専門とする当館の活動においては、中国や韓国からもたらされた外来文化の受容形態を考える本研究は基幹的な役割を果たすはずである。本研究は3ヶ年の時限をもってなされるが、その成果は中・長期的な活動において発展的に継承されるべき内容である。今年度は重要な基礎情報を蓄積と整理ができ、問題点を見出すことができたことは、次年度以降への発展につながるものであろう。年度実績としては「順調」とするのが穏当と思われる。

【書式B】

(様式 1)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-01

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究 ((5)-①- ii)		
【事業概要】 JICA 草の根技術協力事業「文化財の保存と観光資源としての利活用」として、タイにおいて、文化財の保存活用センターとしての役割をになう博物館としての立場から専門家派遣、研修生受入を実施。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長 伊藤 嘉章
【スタッフ】 森田 稔 (学芸部長)、原田あゆみ (企画課研究員)、赤司善彦 (展示課長)			
【主な成果】 JICA の草の根技術協力事業で「文化財の保存と地域の活性化」をテーマにタイ王国芸術局国立博物館事務局と共同研究を行った。7/21～29 に研究員 3 名を派遣、日本での無形文化財と保存の取り組み、遺跡の市民共生等発表。9/25～10/16 バンコク国立博物館等の研究員 3 名を受入れ、文化財保存と平常展示、特別展示による活用、遺跡の保存と地域共生などについての研修を行った。この事業は 21 年度も継続し、日本・タイの文化を比較する展覧会の開催を計画。			
【年度実績概要】 九博は JICA の草の根技術協力事業として「文化財の保存と地域の活性化」をテーマにタイ王国芸術局国立博物館事務局と共同研究を行った。 7/21～29 に研究員 3 名を派遣、タイ・バンコク国立博物館にてセミナーを開催。日本側からは、日本での無形文化財と保存の取り組み、遺跡の市民共生などについて発表を行なった。タイ側からは、タイの国立博物館事務局の業務についての紹介とタイの博物館活動の状況説明、平成 19 年度の日本での研修の報告があった。 9/25～10/16 バンコク国立博物館等の研究員 3 名を受入れた。博物館における文化財保存と平常展示、特別展示による活用、遺跡の保存と地域共生、無形文化財としての工芸技術の保存などについての研修を行った。また、タイ研究員によるタイの文化財、及び博物館の置かれている状況などの報告会を開催した。 この事業は 21 年度も継続される。さらにその相互研修の成果をもととして、数年後にタイにおいて日本とタイとの共同で、相互の文化を比較するという視点での展覧会の開催を計画。その予備調査としてタイ・バンコクの博物館・美術館の状況調査を実施した。			
【実績値】 7/21～29 タイへの研究員 3 名 派遣 9/25～10/16 バンコク国立博物館などの研究員 3 名を受け入れ、研修の実施。 2/14～17 タイへの調査員 4 名 派遣			
【備考】			

研修風景

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-01

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本事業は、文化財が持つ様々な可能性という面に着目し、その保存と活用が単に文化財を守るという意味を超えた役割を果たしうるということを示すものである。日本国内で行うこうした文化財の「活用」を交流によって伝えることが、アジア諸国における文化財行政について新たな展開を促すものとなる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 招聘は文化財保存・活用の現場に携わる方々とし、実質的な研修を行った。その滞在日数も実質的かつ参加型の研修を多方面から行いうるものとして3週間弱という日程とし、効果を挙げている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の保存と活用というテーマ設定は、従来の枠を越えた取り組みであり、国立博物館が海外に対して大きな貢献をするひとつの道が出来上がった点は大きく評価される。その成果を両国共同で作上げる展覧会に向けて、タイでの展覧会開催に向けての枠組み、内容等のついでに共通理解も形成されつつある。次年度は JICA 研修の最終年度であり、それに向けての調整も進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館が主体となる文化財を通じた交流では、従来は一方的な方向となることが多かったのに対して、双方向を企図し、それに向けて順調に進展をしつつある。今後については、これらの交流の成果を実践するものとして、展覧会の実施等に向けて、博物館以外の協力体制をも模索しながら、より大きな成果を目指すものとする。

【書式B】

(様式 1)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-02

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((5)-①-vi)		
【事業概要】 九州国立博物館において、X 線 CT を用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の健康状態や制作技法を理解し、得られた成果を展示に活用することを目的とする。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長 今津 節生
【スタッフ】 臺信祐爾（文化財課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元晃（文化財課研究員）、楠井隆志（展示課主任研究員）、松川博一（展示課研究員）			
【主な成果】 平成 20 年度から泉屋博古館の所有する中国青銅器のコレクションについて、継続的な展示と X 線 CT スキャナを中心とする科学的な調査を実施することになった。科学的な調査結果と実物展示を通して広く観覧者に公開できる体制が整った。			
【年度実績概要】 九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、1 年間で約 300 件の CT 調査を実施した。得られた成果は、常設展での展示の際に活用している。また、特別展で借用した陶磁器の調査で、江戸時代の有田焼の人形の製作工程などが明らかになった。 外部との連携としては、住友コレクションとして世界的に著名な泉屋博古館の所有する中国青銅器について中国古代青銅器の展示に合わせ X 線 CT スキャナを中心とする科学的な調査を実施した。その結果、中国古代青銅器の製作技術を非接触非破壊で解明することができた。この研究成果は日本文化材科学会と文化財保存修復学会で発表した。			
【実績値】 調査件数 約 200 件 日本文化材科学会での発表 10 件 文化財保存修復学会での発表 1 件			
			
X 線 CT 画像による青銅器の技法解明			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-02

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 効率性では、安全・敏速に撮像できる体制が整った。国内各博物館等からの調査要請が多く、我が国の文化財科学情報のセンターとしての期待が高まっている。今後は、得られたデータを共同利用するための工夫が必要である。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	学会発表数				
判定	A	A				
備考 保存修復学会には約 900 名の研究者が参加した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財用の X 線 CT としては、世界的で最も優れた装置の一つであり、研究者の間からその有用性について高い評価をいただいた。21 年度は、より幅広い他機関との連携を目指しデータの活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	九州国立博物館では展示に際し文化財を常に借用するため、X 線 CT スキャナ装置で文化財所蔵者と共同調査し成果を上げることで、他の博物館との連携が進みつつある。21 年度は、得られた成果を本博物館の展示へ公開し観覧者に供したい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-03

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館における文化財保存修復に関する研究 (客員研究員) ((5)-①- i)		
【事業概要】 当館文化財保存修復施設の機能と利点を活かし、西日本地域の大学で文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	研究員 志賀 智史
【スタッフ】 篠崎悠美子 (客員研究員)、藤田励夫 (保存修復室長)、松尾かをる (研究補佐員)、藤岡春樹 (国宝修理装こう師連盟九州支部長)、田畔徳一 (国宝修理装こう師連盟九州支部顧問)、小笠原温 (国宝修理装こう師連盟九州支部主任技師)			
【主な成果】 吉備国際大学から 2 名、九州産業大学から 2 名、別府大学から 3 名の合計 7 名が参加した。少人数のため、実践的な研修が実施できた。			
【年度実績概要】 別府大学篠崎悠美子教授を客員研究員とし、保存修復施設を利用し、地域の大学との協業を果たすことを目的とした短期インターンシップ研修プログラムを17～19年度の実績を踏まえ検討、改善した。成果は8月4日から5日間にわたり国宝修理装こう師連盟の協力を受け、吉備国際大学と九州産業大学、別府大学の学生7名に対して、装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」として開催した。研修では障壁画下貼り作製に関する講義と実習を通して、文化財保存修復についての理解と研鑽を深めた。			
【実績値】			
研修開催実績	平成 17 年度より 4 回目		
今年度研修参加学生	吉備国際大学	2 名	
	九州産業大学	2 名	
	別府大学	3 名	
	計	7 名	
			
研修風景			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-03

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	参加者数					
判定	A					
備考 実習としては適切な数である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財を伝えるため修復技術者の育成は必要不可欠であるが、このような研修を行っている機関は極めて少ない。少数の研修生で毎年継続することに意味のある事業であり、平成21年度以降も実施する計画である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館における文化財保存修復のあり方について、一定の方向性が示せたのではないかと考える。対象を大学・大学院で文化財保存修復を学ぶ学生に限定すべきかどうかは21年度以降の検討課題である。

【書式B】

(様式 1)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-04

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 彩色水浸文物の保存科学的研究 —中国江蘇省泗水王陵出土文物の保存— (科学研究費補助金) ((5)・①・i)		
【事業概要】 中国江蘇省泗水の前漢墓から発見された彩色水浸文物の保存を通して、文化財保存に関する国際的な研究 交流と技術開発を行うと共に、文化財保存技術に関する日本の技術を中国に移転することで、九州国立博物 館による国際的な研究交流に貢献する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長 今津 節生
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、鳥越俊行（博物館科学課研究員）、西浦忠輝（国士舘大学教授）、伊藤幸司（財団法人 大阪市文化財協会研究員）、沢田正昭（国士舘大学教授）、ANDRAS MORGOS（筑波大学教授）、張 金萍（南京博物院研究員）			
【主な成果】 インド・ニューデリー市で開催された国際博物館会議文化財保存部門 ICOM-CC (International Council of Museums) において、研究成果を発表した。また、中国南京博物院と共同で研究報告書を製作した。			
【年度実績概要】 泗水王陵出土の水浸出土の保存科学的な研究を経て、以下のことが判明した。 ① 泗水王陵墓から発見された飽水状態の水浸出土木材は、腐朽度にはばらつきが大きい。出土木材の腐朽度 を示す含水率は 150～1600%に達し、収縮率も 8～90%にも及ぶ。 ② 化学分析の結果、腐朽度の増加に伴って、水浸出土木材から 1%NaOH 溶液への抽出量は増加した。 ③ 水浸出土木材の赤外分光分析 (FTIR) の結果、木材の腐朽が進むにしたがって、セルロースとヘミセル ロースの分解が顕著であることが判明した。 ④ 樹種の違いによる糖アルコール溶液の拡散の違いを検討した結果、含浸時間の増加に伴って溶液の 木材内部への拡散は進むが、樹種の違いによる拡散の差が極めて大きいことが判明した。 これらの研究成果をもとに、南京博物院では実際に文物の保存処理をおこない、九州国立博物館では 保存処理技術の技術移転を進めた。今年度は研究の最終年度にあたるので、南京博物院と共同で研究報 告書を作成した。			
【実績値】 学会研究発表 国内学会 文化財保存修復学会第 29 回大 1 回 国際学会 国際博物館会議文化財保存部門 ICOM-CC 1 回			
 保存処理を終えた犬形木製品			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-04

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 文化財保存を通じた具体的な国際貢献として国際性・適時性に富む研究であり、中国側の評価も高く十分な成果が認められる。研究成果の技術移転を通じて今後の発展性も高く、十分に成果が認められる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 文化財保存の世界で最大級の国際会議である国際博物館会議文化財保存部門 ICOM-CC において、研究発表を行った（ニューデリー、2000 名参加）。また、国内では文化財保存修復学会で研究発表を行った（福岡、900 名参加）。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	発見間もない貴重な文化財を日中の研究協力によって保存方法を開発し技術移転しようとする点において、適時性、独創性、発展性において目標を達成した。実際の保存処理は中国で実施しているので今後はさらに効率的な研究をおこなえるように改善を進めてゆきたい。保存処理の文物の公開にあたっては、日本の展示技術を技術移転すると共に、日本での初公開に向けて努力してゆきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施されており当該年度計画を 100%達成して順調に研究を進めている。 本研究は文化財の保存技術の向上や国際貢献に結びついた研究として、中期計画にそった研究内容である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5) VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築(科学研究費補助金) (5)-①-i)
【事業概要】	
本研究では、日本列島に分布する装飾古墳を対象とし、写真測量技術を応用して壁画に影響を与えることなく、石室全体を客観的に記録する方法を開発した。この技術を活用して装飾古墳の記録・管理の事業を展開し、博物館や web 上で展示・公開するためのデジタルアーカイブを構築する。これにより装飾古墳を3次元的に記録する研究基盤を確立する。また、装飾古墳の現状記録としては、石室構造や文様の写真を高精細画像として撮影する。	
【担当部課】	企画課
【プロジェクト責任者】	文化交流展示室長 河野 一隆
【スタッフ】	
研究分担者 赤司善彦(九州国立博物館) 研究協力者 池田朋生(熊本県装飾古墳館)・西住欣一郎・木村龍生(熊本県教育委員会) 宮崎歩(山鹿市教育委員会)・矢羽田幸宏(日田市教育委員会) 武廣正純・天賀光広・村上浩明(株)とっぺん) 牛嶋茂(奈良文化財研究所)・南部裕樹(立命館大学)・下森弘之(別府市教育委員会)	
【主な成果】	
今年度の研究では、装飾古墳のうち石室2基(日田市ガランドヤ1・2号墳)、横穴墓4基(山鹿市小原大塚横穴墓・山鹿市小原浦田横穴墓)を対象とした。その結果、本研究でデジタルアーカイブされた装飾古墳の総数は、石室8基・横穴墓4基で、福岡・大分・熊本県に亘った。特に横穴墓は前面が開放空間のため画像調整に困難が予測されたが、おおむね良好な成果を得た。また、装飾古墳撮影も、別府市鬼の岩屋1・2号墳で実施した。	
【年度実績概要】	
本研究では、福岡県に隣接する筑後川水系の大分県日田市ガランドヤ1・2号墳、菊池川水系の熊本県山鹿市小原大塚横穴墓・小原浦田横穴墓を対象としてVR画像を作成した。この研究は、人手による実測図や写真によって記録・管理されてきた装飾古墳に対して、写真測量技術を応用し、非接触によって壁画に影響を与えることなくVR画像を作成し、石室全体を客観的に記録するための方法の開発と実践の研究である。これにより、石室と壁画の記録方法が従来の実測図の作成と比べて飛躍的にスピードアップしただけでなく、壁画とカビ等の汚損や石室の崩壊などの石室内における位置関係を3次元的に記録できるようになり、装飾古墳の保存のためのデータ基盤が確立した。また、今年度は横穴墓のVR化作業にも挑戦した。横穴墓は前面が開放空間となっており、精確な形状取得や画像調整の作業にも困難が予測されたが、試行錯誤の結果、石室と変わらない程度の良好な成果を得ることができた。この方法で製作したVR画像データは、通常は内部に立ち入れない装飾古墳を博物館で展示することにも活用できる。VR画像は文化財の保存・普及に新しくかつ最適な記録手段であることを提言したい。 また、大分県別府市鬼の岩屋1・2号墳を対象として、4×5フィルムおよび6×6フィルムによる写真撮影を実施した。両古墳とも、現時点での鮮明な記録写真が無く、50枚以上の良好な文様の全体およびアップの撮影に成功し、装飾古墳の現状を記録した貴重な資料となった。 これらの成果の一部は、文化財保存修復学会・日本文化財科学会をはじめとする関連諸学会や月刊文化財などの学術誌、福岡県装飾古墳連絡協議会などの行政研究会などで発表・公開し、普及啓蒙に努めた。	
【実績値】	
- VR画像の製作を行った装飾古墳は、石室墳2基(日田市ガランドヤ1・2号墳)および横穴墓4基(山鹿市小原大塚横穴2基・小原浦田横穴2基)の計6基である。通算の蓄積された古墳数は12基となった。 - 横穴墓のVR画像化にはじめて成功した。 - 写真撮影を行った古墳は2基(別府市鬼の岩屋1・2号墳)である。通算の撮影された古墳数は4基となった。	
	
ガランドヤ1号墳 VR 画像	
【備考】	

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-05

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 ・年度当初の計画通り実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	B	A	A			
備考 ・昨年度に比べると調査の着手が少し遅れ、調査した古墳基数は変わらないが、現場への訪問数がやや減少した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	おおむね、年度当初に描いた通りの計画が遂行できた。装飾古墳に対する立ち入り制限については自治体ごとに差があり、それが一部の調査着手の遅れにも繋がった。調査の安全性に対する理解を共有させるためにも来年度には調査のガイドラインを策定したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨年からの蓄積では、調査基数・地域とも順調な拡大を続けている。来年度には、九州外への展開も一部見据えて、調査を遂行していきたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-06

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 近代工芸の美術史・産業史・地域史の基礎資料としての内国勸業博覧会出品作品の研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 日本の近代史の展開に大きな意味を持った工芸の展開について、その展開の契機となった内国勸業博覧会の出品作を中心とした基礎資料を整備する。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長 伊藤 嘉章
【スタッフ】 小川幹生(名古屋市博物館学芸課学芸員)、土井久美子(大阪市立美術館学芸課学芸員)、高橋美奈子(山種美術館学芸部長)			
【主な成果】 第一回内国勸業博覧会、第二回内国勸業博覧会について、それぞれの出品写真帖のデータを文字・画像データベースを作成した。これに第二回内国勸業博覧会については帝国博物館購入品のデータベースと、それに対応し、現存する作品の画像データベースの作成を進めつつある。 内国勸業博覧会を紹介する絵画資料を収集しつつある。			
【年度実績概要】 調査方針の検討と現状の情報整理のために、各研究協力者によってデータ集成を進め、これとともに研究会を開催した。工芸の分野別によるデータ整理の分担及び、情報収集、整理作業について協議するとともに、これまでの調査成果を共有することとした。関連すると思われる近代工芸を所蔵する機関・個人について、作品の調査を実施した。国会図書館の所蔵する近代新聞・雑誌資料から、関係記事について収拾した。内国勸業博覧会出品が明らかな作品について新たな撮影を実施した。地域の研究者に研究データの一部を提供し、新たなデータを入手した。			
【実績値】 研究会開催 第一回内国勸業博覧会・・・写真帖データ、褒章授与人データの複合データベースによりデータ化。 第二回内国勸業博覧会・・・第一回に、帝室博物館購入データを加えてデータ化を進めている。 第三回以降 内国勸業博覧会 関連絵画資料の収集。 地域研究者との情報交換によるデータ収集			
【備考】			



鹿児島県に残る馬尾掛管

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-06

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本研究は、今後の研究の基礎となるデータを集成するものであり、従来の文字情報のみに頼るものから、実際の作品にまで迫ることを目的とすることに独創性がある。これによって当時の評価も研究の対象とすることが可能となる。						

2. 定量的評価

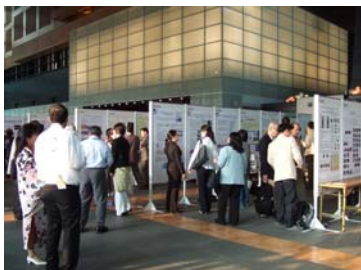
観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	—			
備考 第一回内国勸業博覧会については写真帖データ、褒章授与人データの複合データベースによりデータ化し、第二回内国勸業博覧会についてはこれに加えて、帝室博物館購入データを加えてデータ化を進めている。地域研究者との情報交換を進めつつある。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	従来、別個に存在していたデータを有機的に結合させ、さらに実作品との結合を進めている。帝室博物館購入品を加えたことにより、現存品についての検討も踏まえる必要が生れ、これにより近代における工芸の位置づけの展開も検討の対象となってきた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現時点で、データ化が進みつつある。今後としてはその成果を暫時公開することで、より多くの情報を得る方策を考える必要がある。これにより多角的な研究の展開が可能となっていく。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 博物館危機管理としての市民協同型 IPM システム構築に向けての基礎研究 (科学研究費補助金) ((5)・①・i)		
【事業概要】 九州国立博物館では文化財環境の保全については IPM（総合的有害生物管理）による体制で生物被害対策など一連の活動を行なっているが、その根幹となる日常管理の一部に、ボランティアや NPO 法人による市民の直接参加をすすめるための基礎研究を行なう。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	博物館科学課長 本田 光子
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、今津節生（環境保全室長）、藤田励夫（保存修復室長）、鳥越俊行（博物館科学課研究員）、志賀智史（博物館科学課研究員）			
【主な成果】 博物館における IPM 体制維持のためのボランティア活動についてのプログラム作りができ、また、地元 NPO 法人の導入も順調にすすみ、直接参加型市民活動としての IPM による博物館危機管理システムの構築に向けての計画を着実に進めることができた。研究会の成果については、収録 DVD によりボランティア研修会等市民向けに活用、普及をはかっている。			
【年度実績概要】 市民による IPM 活動のモデル構築の一環として、4 回にわたり、「市民協同型 IPM 研究会」を開催した。一般公開は 1 回とし、基本的には九州国立博物館ボランティアや地元 NPO 法人等既に何らかの IPM 活動経験者に絞り、実践的なテーマで 3 回実施した。その結果、昨年に引き続き、同研究会参加者の中から、今後の研究活動の実質的作業を進める市民グループが形成される地盤が整ってきた。 こうした活動の指針となる関連機関の IPM に関する取り組みについてヒアリング調査を実施し、さらに IPM 活動の実務に深い関心を寄せる市民に対して、より実務的な研究会（IPM 活動ワークショップ）を開催した。このワークショップ参加者の中で形成されたワーキンググループを市民レベルでの実践的研究活動母体へと指導育成し、今後の連携・協同を目指す課題を導きだした。			
			
			第 2 回市民協同型 IPM 研究会
【実績値】 ・市民協同型 IPM 研究会（4 回:目標 4 回）を開催した。 参加者 延 230 名（目標 190 名毎回 30×3、100×1） ・関連機関のヒアリング調査（2 機関） ・ワークショップの開催（2 回:目標 2 回） 受講者（30 名:目標 30 名） ・研究発表 文化財保存修復学会 5 月 17 日～18 日（5 件:目標 5 件）			
			
			文化財保存修復学会 ポスターセッション
【備考】			

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-07

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 文化財保護活動への市民の直接参加は、極めて時勢に適ったテーマであり、しかも、文化財保護の枠組みの中で比較的浸透の遅い IPM 活動をこれまでと違った観点から取り組んでいるので、適時性・独創性は A とした。発展性、効率性、正確性については、今後の成果をみなければ評価の難しいところであるが、現時点で、新しい活動の展開がみえてきたこと、研究の一部がすでに的確、正確な内容で業務に反映されていること。などから、発展性、効率性、正確性においては A とした。						

2. 定量的評価

観点	研究会 開催回数	研究会 参加者人数	ヒアリング 回数	ワークショップ 開催回数	ワークショップ 受講者数	研究発表 件数
判定	A	A	A	A	A	A
備考 市民ボランティア、地元 NPO 法人など対象の研究会、ワークショップとも、熱心な参加者（延 230 名）、受講者（延 30 名）により各回充実した内容であった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究会などへの参加者数などからみても、テーマおよびその実践当初計画の社会的妥当性が確認できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館における IPM 体制維持のためのボランティアや NPO 法人の導入（直接参加型市民活動）を着実に進めることができた。

【書式B】

(様式 1)

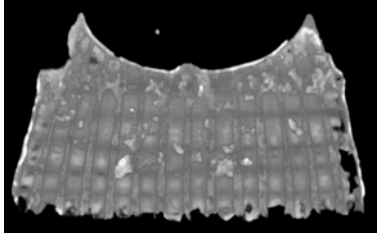
施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-08

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 博物館におけるX線CTスキャンデータの活用(科学研究費補助金)((5)-①-vi)		
【事業概要】 九州国立博物館において、X線CTを用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の状態調査や製作技法を理解し、得られた成果を文化財の保存や展示へ活用することを目的とする。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	研究員 鳥越 俊行
【スタッフ】 臺信祐爾(文化財課長)、今津節生(博物館科学課環境保全室長)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、市元壘(企画課研究員)			
【主な成果】 本年度から、泉屋博古館の中国古代青銅器のコレクションを借用し調査を進めている。また、春日市の出土銅戈の調査を実施し、新たな成果を上げてきた。これらの成果については、日本文化財科学会にて発表した。			
【年度実績概要】 九州国立博物館の展示で借用する文化財、他の博物館や大学、県や市町村の教育委員会などから調査依頼のあった文化財を中心に、一年間で約300件のX線CT調査を実施した。得られた成果は、展示で活用したり、所蔵者に資料の状態を説明したりする際に用いている。 本年度は、文化交流展示で借用している京都の泉屋博古館が所有する中国古代青銅器のコレクションについて、製作技法の調査を実施した。装置の調整と測定条件の最適化によって、これまで困難であった青銅器の内部構造や製作技法の一端を明らかにした。 また、外部からの依頼調査の例では、元興寺文化財研究所から持ち込まれた福井県坂井市大善寺の本尊の調査がある。18世紀中頃の木造十一面観音像の体内に、別の銅像の頭部が納められていたことを明らかにした。 さらに、佐賀県の九州陶磁文化館の依頼で陶磁器5点を調査し、その成果を九州陶磁文化館の夏の企画展「やきもののかたち 人と動物」で展示解説に用いた。 これらの調査の成果は、文化財保存修復学会と日本文化財科学会で発表した。			
【実績値】 調査件数 約300件 文化財保存修復学会での発表 2件 日本文化財科学会での発表 8件			
			
縄文時代の漆塗櫛のCT断面像			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-08

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	B	
備考 正確性では、一部の測定に不具合が生じたため、装置の更なる調整を進めデータが正確に得られるよう調整を進めていく。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会発表件数				
判定	A	B				
備考 国内の学会ではポスター発表を行ったが、国際会議でも発表をしていきたい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の X 線 CT としては、世界で最も優れた装置の一つであり、研究者の間からその有用性について高い評価を頂いた。博物館や大学、県や市町村の教育委員会など文化財関係者との連携を今後も進めていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	九州国立博物館では、展示に際し文化財を常に借用するため、X 線 CT スキャナで文化財の所蔵者と共同調査を実施している。調査の成果は、展示での活用や製作技法の解明に向け今後も調査を継続していく。

【書式B】

(様式 1)

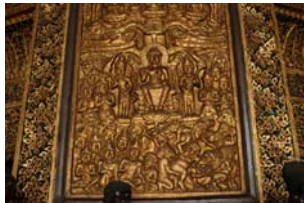
施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-09

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 古代東南アジアにおける三尊像図像の研究－タイ・ミャンマーの図像を中心に－ (科学研究費補助金) ((5)・①・ii)		
【事業概要】 古代東南アジアの三尊像図像の成立と展開について明らかにするための基礎データの構築。主な対象はミャンマーのモン、ピューの造形とタイのドヴァーラヴァティーが中心になる。なお、古代東南アジアの三尊像図像の出現については、インドパーラ朝下の様々な文物との比較が必要であるため、調査地としてインドも視野にいれ、基礎資料を作成する。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 原田 あゆみ
【スタッフ】 協力者：藤田励夫（九州国立博物館博物館科学課保存修復室長） Dr. Sakchai Saisingha（シラパコーン大学東南アジア美術史） Mr. Rungroot Thamrungruan シラパコーン大学東南アジア美術史）			
【主な成果】 昨年度までの調査成果に加え、新たに収集した資料のデータ整理をファイルメーカーで進めた。データ整理を通して三尊像図像とそれに付随する装飾文様の地域を越えた共通性が見えてきた。三尊像とそれに関連する図像全体についてもデータ化し比較検討を行った。			
【年度実績概要】 古代東南アジアの三尊像図像の成立と展開について明らかにするための基礎データを構築しようとする本調査研究では、上座仏教下にあつて判然としなかった大乘仏教の図像を掘り起こすことを主要な課題として、下記の成果を得た。 （１） タイを調査実施国とし、上座部仏教以外のヒンドゥー、大乘仏教に関する資料を調査した。特に、東南アジア大陸部に共通してみられる装飾文様も含め比較研究する上で有益な資料を得ることができた。 （２） 三尊像図像がテキストとどう関係したかを探るために、特にドヴァーラヴァティーの法輪とそれに付随した三尊像図像に注目し、ディヴィヤ・アヴァダーナ中にみられる五趣輪廻図の描き方について検討した。			
			
			タイ王国ワット・スタット内 2008.7.
【実績値】 論文掲載数 1. 「ドヴァーラヴァティー時代の法輪図像－パナッサボーディーに乗る三尊像の成立と展開－」 2007 年度『鹿島美術研究』第 25 号			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-09

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	A	A	B	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	B	A	B			
備考 当初予定のインド国内における調査は、インド国内におけるテロ事件発生により、調査を延期した。 また、本研究の協力者を、日本国内の資料を調査、意見交換をすることを目的とし、招聘予定だったが、 11月にタイの空港占拠が発生、非常事態宣言により渡航が見合わせられた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究の調査対象であるミャンマーのモン、ピューとタイのドヴァーラヴァティーの三尊像図像とそれに関する資料については、予定通り調査収集がなかった。また、三尊像図像がテキストとどう関係したかを探るため、先学の研究を基礎とし、ディヴィヤ・アヴァダーナと図像の比較検討を行うことができた。今後、ミャンマーのこれまでの図像研究をさらに検討し、テキスト研究を続けていく必要を感じている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	当初予定していた調査、および協力者との意見交換が、テロおよび政治的混乱のため、かなわなかった。ただし、本調査および意見交換は次年度に繰り越しを申請し実施を希望している。

【書式B】

(様式 1)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-10

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 超高精細大容量画像の安全・ダイナミック表示総合システムの開発 (科学技術振興機構) ((5)-①-i)		
【事業概要】 京都大学との共同研究によって、文化財のデジタル化に適用する入力装置及びソフトウェア開発を目指した研究開発をおこなう。その画像データを用いて、科学情報を備えた文化財のコンテンツ化を行い、同時に新しい展示手法を提案する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長 今津 節生
【スタッフ】 赤司善彦（展示課長）、藤田励夫（保存修復室長）、井手 亜里（京都大学教授）、大島 寧（エステナイン 京都（株）部長）			
【主な成果】 伊能忠敬が作成した日本地図はすなわち伊能図副本の九州六箇国沿海地図の高精細デジタル化を実施した。9億画素にもおよぶ高精細デジタルデータを斜光線・赤外線で取得して解析した。その結果、伊能図副本の特徴とされる針穴を明瞭に検出した。この結果を一般市民に公開すべく、来年度に向けて、スーパーハイビジョン（4000本）の番組製作を計画中である。			
【年度実績概要】 デジタルアーカイブが文化財保存に必要かつ有効な手段であると一般的にも認識され、国内外様々な分野からのデジタル化依頼が活発化してきている。文化財や知的財産のデジタル化には、セキュリティ対策が重要事項であることから、本課題である「安全」かつ「ダイナミック」で、新規性に富んだ展示手法の提案・確立に対する要求も多く集まっている。 20年度は、19年度末に常設した大型入力装置をつかって、本館所蔵品の絵画作品、染色製品、古地図、および漆芸作品などの高精細デジタル化を中心に高精細デジタル化を進めた。また、新規性に富んだ展示手法の提案を目指して、バックヤードツアーにおけるデジタル情報の展示を実施した。			
【実績値】 国内学会 文化財保存修復学会第30回大会 1回			
 伊能図副本の高精細デジタル化 桜島付近			
【備考】			

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-10

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 世界最先端の超高画質デジタル撮影技術を文化財へ応用する独創的な研究である。研究の発展性・正確性に関して十分に成果が認められる。将来の継続性については、再現性のある高精細のデジタル情報を有しており、今後の継続的な情報蓄積によって大きな成果が期待できる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 学会発表件数としては適切であり、保存修復学会には約 900 名の研究者が参加した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	デジタルアーカイブが文化財保存に必要かつ有効な手段であることは一般的にも認識され、国内外様々な分野からのデジタル化依頼が活発化してきている。文化財や知的財産のデジタル化には、セキュリティ対策が重要事項であることから、本課題である「安全」かつ「ダイナミック」で、新規性に富んだ展示手法の提案・確立に対する要求は大きい。 本研究の独創性・適時性は内外から高く評価され発展性も大きい。本年度に設置された高精細大型平面スキャナを活用して、効率性、正確性を追求した文化財の高精細デジタル化が進められている。21年度はこの成果を一般市民に還元するための共同研究をおこなえるように改善を進めてゆきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財保存におけるデジタルアーカイブの有効活用は、今後の文化財保存や展示の向上にむけた重要課題である。

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-11

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 近世初期日本絵画における粉本使用例の基礎調査 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 粉本の流通過程と使用法に注目することで、16世紀日本において、新興絵師がいかに旧勢力の中に進出していったかを明らかにする。具体的には、粉本をどのように入手し、使用したかを、従来美術史研究の対象から外されていたレベルの作品を含めて網羅的に調査し、その図様の継承を追うことで、従来の文字史料に依存した絵師のネットワークの再構築を行う。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 金井 裕子
【スタッフ】			
【主な成果】 昨年度までの調査成果に加え、新たに収集した資料のデータ整理とデータベース化を進めた。また東京国立博物館や東京藝術大学が所蔵する粉本調査や、粉本利用の明らかな「北野天神縁起絵巻」作品群の調査を遂行した。			
【年度実績概要】 2008年度では、主に過去の調査データの整理と、新規調査のための機器の準備、および本研究の中核を成す作品である「大原御幸図屏風」作品群のうち、未調査の国内外作品の調査研究を行った。またこれを補完する文字史料として、東京国立博物館所蔵『土佐家文書』と東京藝術大学附属図書館所蔵『住吉家鑑定控』を活用した。 これら基礎史料の収集に併せ、粉本を利用し転写されたとと思われる作品群の調査を行った。特に鎌倉時代に描かれた「北野天神縁起絵巻」(弘安本、京都・北野天満宮)、室町時代後期の「北野天神縁起絵巻」(文亀本、京都・北野天満宮)、江戸時代初期の「北野天神縁起絵巻」(元和本、福岡・太宰府天満宮)、江戸時代中期の「天満宮縁起」(鳥飼本、福岡・鳥飼八幡宮)の4作品について重点的に調査を行った。これらは時代を超えてほぼ同じ図様が忠実に継承された典型例の一つであり、その転写方法や経緯を探ることで、粉本の流通と図様継承について具体的な知見を得た。 またこれに加え、江戸時代における図様の継承を大局的に考察するために、近年注目が集まっている中国絵画や朝鮮絵画と日本絵画の関係性に焦点をあて、朝鮮絵画調査を大和文華館と栃木県立美術館で、中国絵画調査を徳川美術館で行い、具体的な知見を得た。 なお以上の研究成果を報告するため、九州国立博物館特別展「国宝 天神さま」に関連するシンポジウム「北野天神縁起絵巻」において発表を行った。			
【実績値】 <論文掲載数> 特別展「国宝 天神さま」展覧会カタログ 1回 特集陳列カタログ『博物館と文化財修理』1回 シンポジウム報告書『北野天神縁起絵巻』1回 <調査> 2008/10/17 東京国立博物館調査 2008/11/8～9 大和文華館および徳川美術館調査 2008/12/12 栃木県立美術館調査			
【備考】			

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-11

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本研究は昨今の研究動向を意識しつつ、現在注目を集めている近世の朝鮮絵画と日本海画の比較からその影響関係について考察を行っている。また本研究における粉本調査は大画面絵画だけでなく卷子や軸装作品についても応用できる概念であり、発展性・拡張性が極めて高く、上記項目についていずれも十分な成果を挙げることができたと考えられる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	B	A	B			
備考 通常業務の繁忙と先方の都合のため、今年度予定していた海外学術調査が制約された。しかし、今年度の研究に最低限必要な調査は実施でき、「調査概報」にかかる目標値である「論文掲載数」1回をこえる実績値を残し、十分な成果を挙げることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定していた調査のうち海外分が制約されたものの、国内調査において十分な成果を挙げることができた。次年度においては今年度調査の結果を踏まえた上で、延期した海外調査を実施する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できたと考える。

【書式B】

(様式 1)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-12

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究(科学研究費補助金)((5)・①・ii)		
【事業概要】 埴輪に認められる赤色顔料について、粒子の形態分類や組成分類を行い、編年と地域性を検討することを目的として実施する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	研究員 志賀 智史
【スタッフ】			
【主な成果】 今年度は九州地方の教育委員会を中心に訪問し調査をおこない、調査資料は約 150 点となった。埴輪に認められる赤色顔料は全てベンガラであったが、調査後、埴輪に使用されるベンガラに地域性が認められる見通しがついた。この地域性は墳墓で使われていたベンガラの地域性とも一致しているようである。			
【年度実績概要】 今年度は九州地方の教育委員会を中心に訪問し調査をおこなった。調査資料は約 150 点となった。埴輪に認められる赤色顔料は全てベンガラであった。出土ベンガラは直径約 1 μ m のパイプ状の粒子を含むものと含まないものに大別されるが、調査を終えた九州地方北部のベンガラには、玄界灘沿岸ではパイプ状の粒子を含まないベンガラを用い、筑後川流域ではパイプ状の粒子を含むベンガラが用いられていた。過去に行った調査では近畿地方北半の埴輪の赤色顔料も全てベンガラであり、パイプ状の粒子を含んでいた。埴輪に使用されるベンガラに地域性が認められる見通しがついた。この地域性は墳墓で使われていたベンガラの地域性とも一致しているようである。来年度は、近畿、中国、四国地方の埴輪の調査を継続しておこなう予定である。			
【実績値】 論文 1 件 ・志賀智史 2009 「墳墓に用いられた赤色顔料の一樣相」『東風西声』1-13 頁, 九州国立博物館			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-12

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	分析結果を元に考古学的な検討を行うという独創的な研究である。今年度の調査結果から埴輪のベンガラに地域性が認められる見通しがついたため、最終年度の調査結果が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	平成 20 年度新規で採択された科学研究費である。来年度も継続して調査を行い、最終年度の平成 22 年に成果をまとめたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	13) 被災した近現代歴史資料の救済のための簡便な真空凍結乾燥法の開発 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)
【事業概要】 可搬式の簡便な真空凍結乾燥装置を開発、作製して、被災時の文化財救済の一方法としての真空凍結乾燥法の応用の可能性を探る。とりわけ、水濡れ資料や、劣化のために頁が固着した資料を対象に本装置の機能性や安全性を確認し、災害時での活用に備える。	
【担当部課】	博物館科学課
【プロジェクト責任者】	特任研究員 村田 忠繁
【スタッフ】 川本耕三 (元興寺文化財研究所) 井上美知子 (元興寺文化財研究所) 大久保治 (元興寺文化財研究所) 藤田浩明 (大阪市文化財協会) 中村晋也 (金沢学院大学) 中越一成 (金沢文化財保存修復研究所)	
【主な成果】 昨年度作製した簡便な真空凍結乾燥装置を用いて、歴史資料での応用を試みた。資料は、金沢文化財保存修復研究所からの提供で、水濡れ古文書および固着した古文書を使い復元試験を行った。試験日数は 20 日余りを要したが、概ね良好な復元が可能となった。装置では、トラップの容量が不足して改善の必要が確認できた。	
【年度実績概要】 昨年度、元興寺文化財研究所 (奈良県) において作成した簡便な真空凍結乾燥装置を実務として応用すべく、金沢学院大学、金沢文化財保存修復研究所 (石川県) の協力で古文書を用いて試験を実施した。装置は自家用車で搬送し可搬型装置の利便性を確認できた。現地では、ほぼ半日で装置の組み立てが完了し、予備凍結、減圧試験を行い、本試験に臨んだ。資料は 3 種類を選定し、状態記録および重量測定を行った後に資料への加水をした。加水後の重量を測定し、冷凍庫で予備凍結を行った。資料の凍結が確認できた翌日より真空乾燥を行い、定期的に重量を測定しながら資料観察をした。 試験開始後、乾燥速度が速いのとトラップのフラスコの管の径が小さいために、トラップの管の部分で凍結し減圧に不具合を生じた。20 日余りの試験で、水濡れ文書の解消や、頁固着の乖離ができた。 本試験により、自然災害での被災における歴史資料救済の一方法として応用可能であることが確認できた。	
	
真空凍結乾燥装置での試験 (金沢文化財保存修復研究所)	
【実績値】 真空凍結乾燥装置搬送試験 (奈良—金沢) 劣化した紙資料の真空凍結乾燥試験 学会研究発表 文化財保存修復学会第 30 回大会	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-13

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	B	
備考 既存の装置ではなく簡便で可搬型の装置を作成し、災害に備えるべく試験を実施したことは、文化財の災害対策が急がれる今、適時性や発展性が認められる。コンパクトで使いやすい装置開発においては、その独創性が有効である。 試験において改善点が認められたことは、今後の研究課題として更なる効率性や正確性を求めている。						

2. 定量的評価

観点	試験回数	試験資料数	研究発表件数			
判定	A	B	A			
備考 装置を使い本資料で試験したことは評価できる。データを整備するには、より多くの資料数が望まれる。研究発表は、順当なものといえる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	初年度の装置開発に続き、遠隔地での試験実施、試験の完了、問題点の発見等、今年度の研究課題を、成果をもって進めることができている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	遠隔地での試験実施、試験の完了、問題点の発見等、文化財救済方法を実用化するうえでの過程を順調に踏まえることができている研究である。

【書式B】

(様式 1)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-14

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 近世初期対馬藩の政治構造と日朝交流 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 本研究の目的は、中近世日朝交流史を「偽使」「偽書」というキーワードによって連続的にとらえるとともに、とかく日朝外交事件としての側面が注目されがちである「柳川一件」について、対馬藩の御家騒動としての側面に重点をおいて再検討することである。具体的な研究テーマとしては、(1)「中近世日朝交流と偽使・偽書」、(2)「柳川一件の政治史的分析」を設定している。			
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	研究員 荒木 和憲
【スタッフ】			
【主な成果】 今年度は研究テーマ「中近世日朝交流と偽使・偽書」の遂行に重点をおき、下記の研究成果を得た。 ①荒木和憲「十六世紀末期対馬宗氏領国における柳川氏の台頭」(九州史学会編『境界からみた内と外』岩田書院、2009年) ②荒木和憲「対馬宗氏の対朝鮮外交戦術」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係』5、吉川弘文館、刊期未定)			
【年度実績概要】 本研究は研究テーマ(1)「中近世日朝交流と偽使・偽書」、(2)「柳川一件の政治史的分析」からなり、本年度は(1)の遂行に重点をおいた。より具体的には、小テーマ(i)「偽日本国王使・偽造国書の通時的把握」、(ii)「宗氏領国・対馬藩の外交担当者」を設定して研究を遂行した。 小テーマ(i)については、中世から近世初期にかけて宗氏領国・対馬藩が創出した偽日本国王使(室町将軍・豊臣秀吉・徳川将軍名義の偽使)、および偽造国書に関する通時的な検討を試みた。その結果、従来の研究では等閑視されがちであった豊臣政権期の偽使・偽書の問題を適切に位置づけることができ、さらに室町政権期から徳川政権期にいたるまでの偽使・偽書の問題についても通時的に把握することができた。この研究成果については、荒木和憲「対馬宗氏の対朝鮮外交戦術」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係』5、吉川弘文館、刊期未定)にまとめている。 小テーマ(ii)については、中世末期から近世初期にかけての宗氏領国・対馬藩において外交担当者として活躍した柳川氏の事蹟について、同時代史料にもとづく再検討を試みた。その結果、近世中期以降に成立した編纂物に依拠してきた通説は大幅に修正されるべきであることが明らかとなり、柳川氏が宗氏領国・対馬藩のなかで台頭し、近世初期の対朝鮮外交に強大な影響力をもつことになった過程を再構成することができた。この研究成果については、荒木和憲「十六世紀末期対馬宗氏領国における柳川氏の台頭」(九州史学会編『境界からみた外』岩田書院、2009年)にまとめている。 なお、本年度の学術調査については、国立国会図書館・国立公文書館において中近世日朝交流関係史料を中心とした史料の調査・収集作業を実施した。			
【実績値】 調査回数 2 回 論文数 2 本			
【備考】 荒木和憲「十六世紀末期対馬宗氏領国における柳川氏の台頭」 荒木和憲「対馬宗氏の対朝鮮外交戦術」			

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-14

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 近年、中近世日朝交流史研究の進展はめざましく、「偽使」「偽書」という視角から再検討がおこなわれ、従来の歴史像が修正されつつある。本研究は昨今の研究動向を意識しつつ、日朝交流と宗氏領国・対馬藩の内部構造との連関を重視したものであり、適時性および独創性・発展性が認められる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報	学術論文		
判定	B	B	—	A		
備考 通常業務の繁忙のため、学術調査のための出張が大幅に制約され、調査回数および収集資料数が当初の計画を下回った。しかし、今年度の研究に最低限必要な調査は実施でき、学術論文2本を作成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	科研費申請書に記載した今年度の研究課題をすべてクリアし、その成果として論文2本を執筆することができた。ただし、通常業務の都合に制約され、調査回数が少なかったため、次年度は調査回数を増やせるよう年度計画を改善する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度の研究課題をすべてクリアしており、進捗状況は順調である。次年度は学術調査の機会を十分に確保し、より充実した研究成果をあげられるよう計画を策定する。

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-15

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15) 室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 室町時代に政治権力者や有力寺院が関与して制作・受容された仏教絵画について基礎的な調査研究を行い、その造形的・文化的な意義を中国・朝鮮を含めた東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的として実施する。			
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	研究員 畑 靖紀
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は当該のテーマについて次の二つの観点から研究対象とし、下記の成果を得た。 (1) 東福寺の画僧・明兆の作品のうち、足利将軍家の関与が想定される三十三観音図(東福寺)の図像と表現について基礎的な知見を得ることが出来た。 (2) 足利将軍家をめぐる時代状況を考察し、かつ東アジアの観音変相図を検討することを通じて、三十三観音図の造像目的を考察するための資料を収集した。			
【年度実績概要】 従来、研究成果の非常に少ない室町時代の仏教絵画を主要な対象として基礎的なデータを収集して作品の歴史的な意義を考察し、それらを東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的とする本調査研究では、足利将軍家が関与する寺院、特に禅宗における造像を研究対象とした。その理由は公武関係や対外関係を尊重する同家が宗教政策上、禅宗を重視するため、この環境で時代を代表する仏教絵画が制作されたと考えるためである。本年度は東福寺で活躍した画僧・明兆(1352-1431)の現存作例に注目し、特に足利義持の関与が想定される三十三観音図(東福寺)を考察の対象とした。 まず本図の図像について典拠とされる『出相観音経』洪武 28 年(1395)版を検討し、さらに雪舟筆観音図(個人蔵ほか)や鶴洲筆木庵性瑫・高泉性激・千呆性佞賛観音変相図(東京国立博物館)、朝鮮仏画の観音三十二応現図(知恩院)と比較をすることを通じて、その図像および表現の特質について具体的な知見を得た。 また本図の造像目的について同時代の足利将軍家をめぐる状況を文献から検討し、加えて雪舟筆観音図(個人蔵ほか)や観音三十二応現図(知恩院)に関する先行研究なども参照しながら、信仰の側面から作品を理解するための基礎的な資料を収集した。 なお以上の研究成果を公開するため、上記作品のうち数件を含む仏教絵画を、申請者が企画担当した九州国立博物館文化交流展示トピック展示「変化する観音」において展示した。			
【実績値】 論文掲載数 国際シンポジウム報告書 『東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成』 1 回 特集陳列カタログ『博物館と文化財修理』 1 回 展覧会カタログ 『特別展国宝天神さま』 1 回 (計 3 回) 展示公開数 九州国立博物館文化交流展示トピック展示 「変化する観音」 1 回 (計 1 回)			
			
		展示公開風景	
【備考】			

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-15

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 定性的評価については、国際性・オリジナリティ・多様性・人的投資・基礎性・達成値の観点から、十分な成果が認められると判断される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 定量的評価については、「調査概報」にかかる目標値である「論文掲載数」1回をこえる実績値をのこしている点が特筆され、十分な成果と判断される。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価については特に国際性とオリジナリティの観点から、定量的評価については国際シンポジウムの成果から、別記の総合的判断が妥当であると考ええる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できたと考える。 科学研究費による本事業については、今後も外部資金などを積極的に活用する方法により、調査研究を継続してゆきたいと考える。

【書式B】

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-16

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）((5)・①・iii)		
【事業概要】 907 年の唐滅亡後、遼、宋、高麗、日本の諸国は、唐の制度・文化を規範としつつ、それぞれに独自の文化を醸成してきたことはよく知られている。まだ十分な基礎的研究条件が整っていなかった遼代文化についても、ようやく近年、内蒙古自治区トルキ山遼墓など、各地で重要な発掘が相次ぎ、考古学的情報を伴う実物資料が飛躍的に増えた。現地で調査研究を実施している内蒙古文物考古研究所と工芸技術の変遷を軸に遼代文化研究の基礎固めとなる共同研究を実施するものである。			
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	文化財課長 臺信 祐爾
【スタッフ】 今津節生（当館博物館科学課環境保全室長）、伊藤信二（当館企画課特別展室長）、市元墨（当館企画課特別展室研究員）			
【主な成果】 フフホトの内蒙古文物考古研究所および内蒙古博物館の作品資料調査 3 回（延べ 7 名）と内蒙古自治区内の博物館資料調査（延べ 2 名）を実施したほか、内蒙古研究所研究員を招聘し、当館、徳島県立鳥居記念館および東京国立博物館の資料調査および関係機関見学および遼代墓葬文化および遼代工芸に関する講演会を実施した。また、当館保管の重要文化財遼代千仏石幢について、三次元立体測量を実施した。			
【年度実績概要】 7 月に、スタッフ 2 名がフフホトの内蒙古文物考古研究所に赴き、本科研調査の内容と進め方について協議した。次いで遼の故地である巴林右旗・巴林左旗・敖漢旗・赤峰に設置された博物館において資料調査と意見交換を実施した。 8 月には、スタッフ 3 名および研究協力者 1 名が内蒙古文物考古研究所・博物館に赴き、作品調査および意見交換を実施した。 11 月には、文化庁の外国人芸術家・文化財専門家招へい事業枠による同研究所所長塔拉氏来日にあわせて、内蒙古文物考古研究所研究員ら 2 名を招聘し、当館において遼代並行期である平安時代工芸品（螺鈿鞍など）の共同調査を実施するとともに、遼代墓葬文化と遼代工芸に関する講演会を企画した。考古・人類学者鳥居龍蔵を顕彰する徳島県立鳥居記念館で、遼代関連資料を調査し、徳島県立博物館担当者らと意見交換した。その後、東京国立博物館で平安時代および遼代の工芸品（鏡、鉢、染織品、陶磁器など）を調査した。馬の博物館において遼代馬具を中心に調査した。横浜ユーラシア文化館を見学した。 1 月には、スタッフ 2 名が文物考古研究所で、遼代工芸作品を中心に調査と意見交換をした。 12 月から 1 月にかけて、当館が保管し、現在 4 階の文化交流展示室に展示している、重要文化財遼代千仏石幢について、九州大学芸術工科学部都共同で、高さ 5.5m の石幢について詳細な三次元測量を実施した。測量データについて現在整理中であるが、高すぎたり、暗くてよく見えない細部についても明快な情報が利用できるようになると期待される。			
【実績値】 遼・契丹文化研究講演会 内蒙古文物考古研究所所長塔拉 「遼代都城とトルキ山遼墓の考古発見と研究」 内蒙古文物考古研究所研究員孫建華 「内蒙古地区遼代墓葬の発見と研究」 参加者 約 30 名 （目標値 15 名） 発表 今津節生ほか 「内蒙古自治区トルキ山遼墓出土彩色木棺の保存」 保存修復学会（会場九州国立博物館）  慶陵発掘緑釉軒平瓦			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4514-16

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 近年の重要な発掘品についても、これらを保管研究している内蒙古文物考古研究所との共同研究体制が構築できたため、これまでにない成果が期待される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 今回購入した赤外線対応デジタルカメラによって、木棺に描かれた絵画作品下絵の墨線を検出し、完成画面との比較検討などに役立てることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	内蒙古文物考古研究所関係者との共同研究体制が構築でき、現地調査および国内共同調査についても実施することができたため、順調な滑り出しといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は中期計画に沿った内容として遂行できたと考える。 次年度も現地調査および、国内共同調査を実施して、本研究の基礎的資料収集を継続する。 遼代文化に関する講演会についても、継続して企画実施したいと考えている。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 博物館環境デザインに関する調査研究 ((5)-②-i)
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示環境について調査研究し、今後の展示環境の向上に結びつけることを目的として実施する。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青
【スタッフ】 矢野賀一（企画課デザイン室研究員）	
【主な成果】 展示のデザインのクオリティの向上を成立させるための設計技術や、デザインを実現・維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、過去の事例や、他館における具体的な事例を調査した。また以上の技術・手法を、当館においてどのようなシステムで導入・実施が可能なかを整理し、実現可能なものについては館内の展示において実施した。	
【年度実績概要】 ① 特別展『スリランカー輝く島の美に出会う』 9月17日～11月30日（写真） ・ 歩くことの出来る床面下における展示手法 ・ 高単一指向性 LED 照明システムによる薄レリーフへの照明手法 ・ カラーチェンジング LED システムによる彫刻の背景へのライティング ② 特集陳列『六波羅蜜寺の仏像』7月10日～9月21日（写真） ・ 高色温度ダイクロハロゲン・カッタースポットライトによる彫刻への照明手法 ③ 本館 14 室工芸 特集陳列『自在置物—本物のように自由に動かせる昆虫や蛇』 2008年11月18日～2009年2月1日（写真） ・ 自在置物の姿勢を固定する展示具、照明効果を考慮したガラス展示台の作成 ・ 演出的な案内誘導サインの作成	
【実績値】 研究会発表件数 5 回 ・ 日本文化資源学会 ・ 総合地球環境学研究所 ・ じんもんこん 等 論文掲載数 4 回 ・ 日本写真学会誌、美術雑誌等 他館調査 国内外多数 ・ 大阪市立東洋陶磁美術館（大阪） ・ 沖縄県立博物館美術館（沖縄） ・ 東京大学総合研究博物館（東京） ・ ケ・ブランリー博物館（パリ） ・ ルーブル美術館（パリ） ・ 狩猟博物館（パリ） 等	
 ①特別展『スリランカー輝く島の美に出会う』  ②特集陳列『六波羅蜜寺の仏像』  ③特集陳列『自在置物—本物のように自由に動かせる昆虫や蛇』	
【備考】	

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-01

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 博物館における展示・公開は技術的な裏づけの調査研究に基づき、時代に合った見せ方と見え方の評価が求められる。またデザインのクオリティの向上を成立させるための設計技術や、デザインを実現・維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、他館における具体的な事例調査を行った。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載数				
判定	A	B				
備考 研究・調査によって明らかになった技術・手法を、当館の特別展および平常展において、どのようなシステムで導入・実施が可能かを整理し、研究会・論文等で発表した。また実現可能なものについては館内の展示において実施し、継続的に調査を行っている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画的に導入を継続している、質の高い展示・照明システムにより、展示のバリエーションが広がったといえる。さらに照明器具の問題点についてメーカーと改良を進めている。具体的には 21 年度予定の特別展・平常展への導入・実施に向け、デザインを進めている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、独創的アイデアの創出と技術開発および館内展示システムの充実に力を注ぎたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-02

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館美術教育に関する調査研究 ((5)-②-iii)		
【事業概要】 当館表慶館に教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」を表慶館から本館 20 室へ移設し、平常展示と密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施し、その内容は韓国国立中央博物館で開催された博物館教育国際シンポジウム等で発表した。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 加島 勝
【スタッフ】 鈴木みどり（博物館教育課教育普及室主任研究員）			
【主な成果】 本館 20 室「みどりのライオン」での博物館ガイダンスやハンズオン体験コーナー、制作工程模型展示は開始から一年間で 10 万人を超える利用者があり、当館における博物館教育プログラムとして定着した館がある。加島及び鈴木は、このプログラムを博物館教育の見地から調査研究し口頭発表した。			
【年度実績概要】 - 当館表慶館に教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」を表慶館から本館20室へ移設し、スライドショー「東京国立博物館ガイダンス」、ハンズオン体験コーナー「日本のもようデザインしよう!」、制作工程模型展示「押出仏ができるまで」の博物館教育事業を実施した。 - 上記事業を博物館教育の一事例として、その理論と実践について以下のように発表した。 加島勝「東京国立博物館の教育普及活動の方法」（平成20年度博物館職員研修。口頭発表） 鈴木みどり「東京国立博物館の教育普及事業—3つのアプローチ—」（韓国国立中央博物館博物館教育国際シンポジウム。口頭発表） 鈴木みどり「東京国立博物館の教育普及事業—平常陳列を念頭において—」（韓国国立中央博物館教育国際シンポジウム『The role and prospect of exhibition related education program』）			
【実績値】 論文掲載数 『The role and prospect of exhibition related education program』 所載 1 篇 研究会発表件数 平成 20 年度博物館職員研修 1 回 韓国国立中央博物館博物館教育国際シンポジウム 1 回			
【備考】			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-02

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」での平常展示と密接に関連した博物館教育事業を国際シンポジウムや国内の博物館職員研修で報告できたことは、今後の国内外の博物館教育研究に寄与するところがきわめて大きい。						

2. 定量的評価

観点	論文掲載数	研究会回数				
判定	A	A				
備考 これまで『MUSEUM』誌において博物館教育に関する論文は、個別的に掲載されることはあっても、特集号が組まれることはなかった。博物館教育関連論文5篇を掲載した同誌特集号によって、当館の博物館教育に関する情報がまとまって発信できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館表慶館に教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」を本館に移設したことで、博物館のガイダンス機能をもたせることができ、各種レクチャーや体験型プログラム、制作工程模型展示などを、一般から学校団体まで幅広い層に向けて展開することが可能となった。これは当館の博物館育を推進する上でも大きな成果といえる。またこの事業を通して博物館教育の理論と実践について、担当研究員が研究し、その内容を広く内外に発信できたと思う。したがってAと判定した。今後さらに研究を続け、博物館美術教育に関する情報発信を精力的に行っていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館美術教育に関する調査研究は、教育普及課の研究員を中心に概ね研究計画にそったかたちで順調に進められていると考える。今後も有形文化財を活用しながら博物館美術教育理論の構築ならびに実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-03

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築 (科学研究費補助金) ((5)-②-iii)		
【事業概要】 博物館教育・普及事業の事例分析を通して、日本の伝統文化に関する博物館における先駆的教育・普及理論を構築し、実践的プログラムを開発する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長 井上洋一
【スタッフ】 加島勝（博物館教育課長）、鬼頭智美（企画課国際交流室長）、小林牧（博物館教育課教育普及室長）、白井克也（博物館教育課教育講座室長）、鷺塚麻季（ボランティア室長）、田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、鈴木みどり（博物館教育課教育普及室主任研究員）、神辺知加（教育講座室研究員）、藤田千織（ボランティア室研究員）、遠藤楽子（広報室研究員）、高梨真行（調査研究課書跡・歴史室研究員）			
【主な成果】 現地調査のみならず海外における博物館教育に関する国際学会等にも出席。参考とすべき先進的な教育・普及プログラムに関する多くの情報を入手でき、さらに研究者間の交流も深めることができた。			
【年度実績概要】 現地調査の実施。今回海外では、この分野において積極的に教育普及理論や伝統文化をテーマにした事業を展開している韓国、中国、シンガポール、オーストラリア、イギリスの博物館・美術館を訪問し、直接教育普及担当者にインタビューを行い、各教育プログラムの理論とその実践活動について調査を行った。また、カナダで行われた国際学会にも参加。国内では九州・北陸地方を中心に同様の調査を行った。こうした現地調査等で得られたデータをもとに研究会で討議、分析を行った。			
【実績値】 現地調査実施館 韓国 5、中国 5、シンガポール 5、オーストラリア 5、イギリス 5、日本 5 研究会 6 回 研究発表 5 件			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-03

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本研究において現代的な教育普及事業のあり方について多方面から有益な情報を得るとともに、その情報をもとに研究会等での討議・分析を行い、その成果を実際の当館の教育普及事業に反映させている。						

2. 定量的評価

観点	現地調査実施館	研究会				
判定	A	A				
備考 適宜研究会を開催し、現地調査の事例報告・分析等を中心に行ってきた。また、当館招へい海外研究者を交えての意見交換も行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究会等の実施に関しては概ね良好。現地調査に関しても順調で、海外における博物館教育に関する国際学会等にも出席。参考とすべき先進的な教育・普及プログラムに関する多くの情報を入手でき、さらに研究者間の交流も深めることができた。 本研究の最終年度にあたる来年度は、これまでの研究成果をふまえ、シンポジウム等を開催し、博物館・美術館における意義深い教育・普及活動の実践のための理論と、それに基づいたプログラムの実践結果をまとめる予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本事業は、研究スタッフの協力の下、概ね研究計画にそったかたちで順調に進められていると考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、日本の伝統文化に関する博物館における先駆的教育・普及理論を構築し、実践的プログラムを開発すべく努力したい。

【書式B】

(様式 1)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-04

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究 ((5)-②-ii)		
【事業概要】 東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務情報の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理および蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 丸山士郎
【スタッフ】 村田良二（博物館情報課情報管理室研究員）			
【主な成果】 東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議管理機能の各機能を継続的に運用し、改善すべき課題を抽出するとともに随時改善を重ねて性能向上を図った。また、あらたに貸与管理機能について機能要件を調査のうえ実装し、運用を開始した。さらに、文化財移動情報登録システムと連動して、収蔵品の所在情報の一元管理に向けた試験的な機能の実装を行った。			
【年度実績概要】 収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、運用経験から改善のための課題を抽出した。これらの課題については、随時システムを更新することにより迅速に対応した。特に、平常展における陳列案作成機能に関して、より多くの研究員にとって利用しやすいようデータ作成のインターフェースを改善した。 収蔵品の貸与に関しては、データがこれまで統合されていなかったが、本年度は貸与業務の支援のための機能要件を調査し、既存のシステムに機能追加することで平常展等の他のデータと統合的に扱えるようになった。 収蔵品管理システムとは別に開発した文化財移動情報登録システム（プロトタイプ）と連動して、所在情報の一元管理に向けた機能を試験的に実装した。			
【実績値】 作品データ件数 179,156 件 平常展データ件数 1,722 件 鑑査会議データ件数 12 貸与データ件数 289 件 論文掲載数 5 件 研究発表数 6 件			
		収蔵品管理システム(プロトタイプ)	
【備考】			

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-04

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 博物館のシステムに必要な機能を着実に開発しており、業務の円滑化と情報の効果的な蓄積につながっている。最新の技術も取り入れており、博物館におけるシステムのあり方を先導的に示すものとなっている。						

2. 定量的評価

観点	収集データ件数					
判定	A					
備考 効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れのなかで効率的に無理のないデータ収集が可能になっている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品のデータ蓄積と業務支援を密接に連動させたシステムにおいて効果的にデータの蓄積を行えることが確認された。今後はこれまでに実装されていない業務支援機能、特に修理計画関連業務を支援する機能、長期・短期管理換業務を支援する機能等の開発を進め、さらに総合的な博物館情報システムとして発展させることが課題である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各分野の研究員、業務担当者との連携をとりながらシステム開発を継続し、博物館におけるシステムの参照実装となるよう、さらに調査研究を進めていく。

【書式B】

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-05

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究を実施する。((5)-②-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示環境について調査研究し、今後の展示環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 加島勝
【スタッフ】 金子啓明（特任研究員）、谷豊信（列品管理課長）、富田淳（調査研究課長）、丸山士郎（博物館情報課情報管理室長）、田良島哲（列品管理課登録室長）			
【主な成果】 東京国立博物館と凸版印刷のスタッフが共同で、本年度は東京国立博物館の収蔵品の中かから法隆寺献納宝物の国宝灌頂幡について①デジタルアーカイブによる情報蓄積、②VR（バーチャルリアリティ）手法を用いたコンテンツの開発、③ミュージアム・シアターでのコンテンツの一般公開に関する調査研究を行なった。			
【年度実績概要】 ① 法隆寺献納宝物国宝灌頂幡の既存フィルムから画像のデジタルアーカイブを行なった。 ② 灌頂幡が製作当初掲げられていた様子を再現するために、法隆寺西院伽藍（金堂、五重塔）の撮影取材を行なった。 ③ ①②でえられたデジタルデータをもとに、東京国立博物館と凸版印刷のスタッフが共同で調査研究を実施し、VR手法を用いて製作当初の灌頂幡の姿を復元し、当時の法隆寺で用いられていた様子を再現するコンテンツ「国宝金銅灌頂幡」を製作した。 ④ ③のコンテンツを館内のミュージアム・シアターで試験的に上映し、VR手法を用いたコンテンツ利用した常設展示品の新たな鑑賞法の開発に関する調査研究を行なった。 ⑤ ④の結果、VRでは展示では見えない個所、今は失われている個所、製作された当時の使用状況など具体的に再現できるので、VRを見た後での展示室での作品鑑賞することや、逆に展示室で作品鑑賞の後でVRを観ることによって、シアターと展示室を結ぶ双方向でのこれまでにない美術品鑑賞方法を提示することができた。			
【実績値】 コンテンツ作成数 1：「国宝金銅灌頂幡」			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

東京国立博物館

処理番号

4521-05

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	コンテンツ作成数					
判定	A					
備考 VR手法を用いて製作当初の灌頂幡姿を復元し、コンテンツ「国宝金銅灌頂幡」を製作した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収集したデジタルデータを基に製作した、コンテンツ「国宝金剛灌頂幡」を利用して、これまでになかった常設展示活用法に関する調査研究を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の最終年度である次年度に向けて順調に進捗している。

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4522-01

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 妙心寺本坊、塔頭に所蔵されている文化財の調査研究 ((5)-②-iv)		
【事業概要】 平成 21 年 3 月 24 日（火）から同年 5 月 10 日（日）まで開催される特別展覧会「開山無相大師 650 年遠諱記念 妙心寺」展を視野に入れつつ、妙心寺本坊および山内塔頭に所蔵される文化財を調査することを目的とする。あわせて、博物館の有する文化財に関する情報を蓄積するとともに、調査に基づく研究の成果を講座あるいは誌上で公開し、広く還元することも目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	研究員 羽田 聡
【スタッフ】 小松大秀（学芸部長）、山下善也（連携協力室長）、赤尾栄慶（企画室長）、浅湫 毅（主任研究員）、大原嘉豊（研究員）、尾野善裕（主任研究員）、久保智康（工芸室長）、永島明子（主任研究員）、西上 実（上席研究員）、山内麻衣子（研究員）、山川 暁（主任研究員）、山本英男（美術室長）、若杉準治（列品管理室長）			
【主な成果】 調査に基づく研究の成果としては、妙心寺本坊および退蔵院、慈恩寺の所蔵する重要文化財「花園天皇宸翰消息」が当館所蔵のものと本来は一具であることが判明したので、これらの位置づけや重要性について論文を執筆した。ほか、各分野の調査成果は、刊行された図録『妙心寺』に反映されている。			
【年度実績概要】 18 年度の妙心寺本坊・麟祥院（京都）・龍安寺、同 19 年度の衡梅院・隣華院・退蔵院・麟祥院（東京）の調査、ならびに本坊の追加調査につづき、本年度は残された妙心寺山内の塔頭、さらには京都市外の主たる妙心寺派寺院の調査に加え、展覧会での図録作成をみすえた写真撮影を重点的に行った。調査および撮影の日程は以下のとおり。 20 年 4 月 3 日（木） 慈恩寺（岐阜県郡上市）の調査 同年 7 月 3 日（木）～11 日（金） 東海庵・霊雲院・天球院・天授院・龍泉庵・大心院・春光院・智勝院・桂春院・長慶院・蟠桃院・金臺寺・海福院（以上、妙心寺山内）・龍潭寺（京都府亀岡市）の調査および撮影、妙心寺本坊・麟祥院・衡梅院・隣華院・退蔵院の追加調査および撮影 同年 8 月 27 日（水） 慈恩寺（岐阜県郡上市）の撮影 同年 10 月 15 日（水）～16 日（木） 梅龍寺（岐阜県関市）・大宝寺（長野県飯田市）の調査および撮影 同年 11 月 5 日（水）～6 日（木） 松蔭寺（静岡県沼津市）の調査および撮影 調査にあたっては、重要度の高い作品は調書を作成し、デジタルカメラで撮影した。また、確実に展覧会への出陳が見込まれるもの、それ以外でも重要と認められるものについてはアーカイブの構築を視野にいれつつ、より精度の高い機材による撮影を行った。 これらの作業と並行して、年度末に開催される特別展覧会「開山無相大師 650 年遠諱記念 妙心寺」展の出陳作品の選定、および図録の作成を行った。			
【実績値】 著作数 東京国立博物館・京都国立博物館・読売新聞社編『妙心寺』（読売新聞社、2009 年 1 月） 1 篇 論文掲載数 羽田聡「京都国立博物館所蔵「花園天皇宸翰消息」について」（『学叢』第 30 号、2008 年 5 月） 浅湫毅「ふたつの棄丸坐像—天正十九年の豊臣秀吉—」（『妙心寺』、2009 年 1 月） 久保智康「唐物銅器とその「和様化」—妙心寺伝来仏具を中心に—」（『妙心寺』、2009 年 1 月） 羽田聡「妙心寺の古文書」（『妙心寺』、2009 年 1 月） 山下善也「妙心寺屏風、友松・山楽絵画の輝き」（『妙心寺』、2009 年 1 月） 山本英男「妙心寺と狩野元信」（『妙心寺』、2009 年 1 月） 6 篇 調査資料点数 書画約 120 点 工芸約 50 点 彫刻約 10 点 調書作成点数 書画約 70 点 工芸約 30 点 彫刻約 4 点 撮影資料点数 書画約 70 点 工芸約 30 点 彫刻約 4 点			
【備考】			

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4522-02

(様式2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A
備考 展覧会という公共性および公開性の高さにも結びつく本事業は、これまで四箇年にわたり継続的に行うことができている。とくに、妙心寺本坊と山内塔頭については、人的および時間的な効率に配慮しつつ、所蔵する作品をかなり網羅的に調査したため、展覧会にとどまらず、将来的には博物館の有する文化財情報の蓄積に寄与するという汎用性も持ちあわせる。						

2. 定量的評価

観点	著作数	論文掲載数	調査資料点数	調書作成点数	撮影資料点数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 文化財調査、情報の蓄積という観点からみると、妙心寺本坊と山内塔頭については所蔵する作品をかなり網羅的に調査し、調書の作成、および撮影を行った。さらに、過去四箇年の調査をふまえた著作1篇、研究論文6篇が公刊されたことで、本事業の目的の一つである成果の還元という点においても十分な実績をあげることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	妙心寺本坊と山内塔頭については所蔵する作品をかなり網羅的に調査し、調書の作成、および撮影を行うことで情報の蓄積につとめた。また、京都市外の妙心寺派寺院についても調査を実施したことにより、作品の関係性などについて新たな知見を得て論文を発表した。かような調査の成果はすでに誌上での公開がなされており、展覧会開催後は講座での公開などを通じて還元の促進を図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	妙心寺本坊および山内塔頭に所蔵される文化財の調査研究事業は、19年度の水準を維持しつつ、計画通り実施されたと考える。なおかつ、年度末に開催をひかえた特別展覧会「開山無相大師 650 年遠諱記念 妙心寺」展の図録も刊行され、これまでの調査成果を誌上でひろく還元することにつとめた。これまでの蓄積したデータを展覧会終了後、博物館および所蔵者間でどのように活用してゆくか、より具体的に検討したい。

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4522-02

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 輸出漆器に関する調査研究により、特別展覧会「japan 蒔絵—宮殿を飾る 東洋の燦めき—」の開催に反映する。((5)・②・iv)		
【事業概要】 平成 20 年 10 月 18 日（土）～12 月 7 日（日）に開催される「「japan 蒔絵—宮殿を飾る 東洋の燦めき—」展の開催を視野に入れつつ、輸出漆器に関する調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 永島 明子
【スタッフ】 			
【主な成果】 本展は 12 月 23 日—1 月 26 日の会期で、東京のサントリー美術館へも巡回した。サントリー美術館では日頃多くて 8% 台の図録購入率が 11% まで伸びたとのことで、京都の文化を東京の人々により深く知っていただく機会を提供できた。			
【年度実績概要】 輸出漆器展に出陳予定であった作品を調査・採寸し写真撮影を行った。あわせて関連文献を読破し、一般の人にも興味を持ってもらえるような概論を 1 本、輸出漆器の通史がわかる 7 つの章解説、7 つのコレクションに関するコラム、284 件中 228 件の作品解説（残りは専門の各担当に依頼）、全作品の複数図版とそのキャプション、それぞれの完全英訳、参考文献 202 件などを 360 ページの図録にまとめ、海外の研究者からも高い評価を得た。 20 年度は 19 年暮れにオランダで発見された新資料や、パリ装飾美術館のジャパニングの作品のほか、国内においては国立歴史民俗博物館、日本文化研究センター、南蛮文化館、神戸市立博物館などで作品を実見した結果、展覧会図録のみならず、土曜講座や国際シンポジウムでも、京都で作られ、輸出された蒔絵の、ヨーロッパでの大きな反響について、公衆に理解しやすい内容を最新の研究成果として提供することができた。 本展は 12 月 23 日—1 月 26 日の会期で、東京のサントリー美術館へも巡回した。サントリー美術館では日頃多くて 8% 台の図録購入率が 11% まで伸びたとのことで、京都の文化を東京の人々により深く知っていただく機会を提供できた。 また、本展の解説文の一部は、アメリカのゲッティ美術館の展覧会にも採用され、本事業は、アメリカの公衆にも京都文化を知らせる結果となった。			
【実績値】 ・ 入場者 67,050 人 ・ 展覧会図録『japan 蒔絵—宮殿を飾る 東洋の燦めき— Export Lacquer : Reflection of the West in Black and Gold Makie』読売新聞大阪本社（バイリンガル・360 ページ） ・ 国際シンポジウム『輸出漆器が語る東西交流の 400 年』参加者 190 人 ・ 土曜講座『王様と漆』ほか各種講演。			
【備考】 			

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4522-02

(様式2)

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	S	A	B	A	
備考 輸出漆器の研究はこの10年で目覚しく発展している。その研究成果を注ぎ込んだ大型展は、世界でもはじめての試みであった。展覧会は海外の研究者からも高い評価を受け、はるばる見学に来た人もいたほか、図録の要望が数多く寄せられた。よって、適時性、独創性、発展性、正確性は、申し分ないといえる。						

2. 定量的評価

観点	入場者数	図録売上・配布数	シンポジウム	土曜講座など 講演聴講者数		
判定	A	A	A	A		
備考 10件近い大小の講演やテレビ出演を通じて多くの公衆に内容を伝えることができ、国の内外で高い評価を得た図録を執筆できたのでAとした。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	御所展、妙心寺展、日蓮展、ハブスブルク展のための調査出張や原稿執筆を進めつつ、本展のような海外所蔵が六割を占める大型展を実現するのは並大抵の仕事量ではない。その中で、完成した展覧会に対する一般来館者の満足度も高く、内外の研究者たちの反応も極めて良かった。インターネットのブログでの反響も顕著であり、京都で作られた蒔絵に対する関心を高めることができたと思う。図録を日英バイリンガルにしたため、海外からの反応が特に大きく、海外に向けても京都国立博物館の存在をアピールできたと思う。蒔絵の貿易や生産の現状はわからないことも多いので一層研究を深め、海外機関から提案のあった研究協力も強めて、新たなテーマを開拓していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	中期計画にかかげた入場者の目標値も達成し、来館者の満足度も高く、国の内外に京都文化の広がりや奥深さを伝えることができた。今後の研究につながる人脈も広がったため、非常に有意義な調査・研究ができたと思う。

【書式B】

(様式 1)

施設名

京都国立博物館

処理番号

4522-03

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 妙顕寺・本満寺・本圀寺などに所蔵される文化財の調査研究により、特別展覧会「日蓮展」(仮称)の開催に反映する ((5)-②-iv)		
【事業概要】 本圀寺・頂妙寺など京都十六本山に所蔵される文化財の調査研究により、特別展覧会「日蓮と法華の名宝」展の開催に反映することを目的とする(京都)。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	研究員 大原 嘉豊
【スタッフ】 小松大秀(学芸部長)、西上 実(上席研究員)、若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、山下善也(連携協力室長)、赤尾栄慶(企画室長)、羽田 聡(研究員)、浅湫 毅(主任研究員)、中村 康(文化財管理監)、久保智康(工芸室長)、尾野善裕(主任研究員)、山川 暁(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、宮川禎一(考古室長)、村上隆(保存修理指導室長)			
【主な成果】 京都日蓮法華宗関係資料を調査し、その歴史的位相を把握することができた。特に、新出資料または長年所在不明だった作品が多数発見されたことは特筆に値する。			
【年度実績概要】 1月22-24日 本圀寺調査を行った。同寺は近年退転し、六条の故地を離れ、山科に移転したが、寺宝はよく護持されていることが確認された。 3月5日 頂妙寺調査を行った。三十番神を巡る吉田神道関係文書が新たに確認されたのは、日蓮法華宗史の上で貴重な発見だった。 3月6日 妙伝寺調査を行った。 4月22日 南・北真経寺の御霊宝調査を行った。普段は他見が厳重に禁止されているものである。 6月19日 北野法華寺事前調査を行った。京都府指定法華曼荼羅の調査を行った。午後に寂光寺本因坊関係資料の調査を行った。 6月20日 大阪妙泉寺の日像坐像調査、大阪妙光寺の大覚大僧正坐像調査を行った。 7月25日 北海道松前法華寺 日蓮坐像調査を行った。 8月21日 本隆寺虫払いに合わせて調査を行った。 8月24日 立本寺虫払いに合わせて調査を行った。 8月25日 本隆寺虫払いに合わせて調査を行った。 10月31日 本能寺調査を行った。 11月17日 妙覚寺 華芳塔調査を行った。			
【実績値】 業務多端のおりから、15ヶ寺の調査を完遂することが出来た。調整に苦心したが、関係寺院ご協力のおかげだと考えている。 報告書類刊行の企画ではないが、展覧会図録においてこの成果は反映させる予定である。 収集資料数 200点			
【備考】			

【書式B】

施設名

京都国立博物館

処理番号

4522-03

(様式2)

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 平成 21 年の秋に予定されている展覧会の事前調査を兼ねており、時間的制約が多かったが、悉皆調査に準じた水準の高い調査も相当数こなすことができたのは、意義が大きかったと考えている。日蓮法華宗美術の研究はあまり進んでおらず、学術的にも意義が大きいと考える。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	S	S	B			
備考 本圀寺・頂妙寺という京都の屈指の由緒と寺宝数を誇る本山を調査できたのは、今後の博物館活動にとって意義が頗る大きい。15ヶ寺の調査というのは、年三度の特別展覧会及び平常展示をこなしつつ、関係寺院との調整を勘案すると、一展覧会の事前調査として国立博物館が一年に実施する回数としては限界に近い数値と考えている。当然ながら連動して収集資料数は多い。但し、調査概報については、公刊を予定しておらず、展覧会図録に適宜反映させるという形式をとるため、評価としては下げざるを得なかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会実施に向けた事前調査が計画の端緒にあるが、その時間的・規模的制約にもかかわらず、研究員全員による体制を敷き、悉皆調査に準じた調査を実施している。新出作品の発見はいうまでもなく、また、調査によって得られた文化財情報を調査先諸寺院に伝えることで、文化財保護の意識を高めることにも貢献しており、意義が頗る大きい。ことに、工芸関係は調査能力のある研究者が限られているため、価値の再認識という点で所蔵者には非常に感謝されている。完備した報告書刊行に連動させられないことが残念であるが、展覧会図録にその成果を盛り込むことで、研究者の関心を喚起することにつとめたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。平成 20 年度末までに、京都十六本山の調査を終えるべく予定している。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4523-01

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を「国宝法隆寺金堂展」並びに特別陳列「おん祭りの春日信仰の美術」及び「お水取り」に反映させる。(奈良) ((5)-②-vii)		
【事業概要】 近隣社寺へ奈良国立博物館に対する積極的な協力の働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業（展示等）に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】 鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、中島博（情報サービス室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室員）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、永井洋之（企画室員）、北澤菜月（企画室員）			
【主な成果】 法隆寺、西国三十三所霊場及び関連文化財を蔵する諸寺、円教寺、金峯山寺、春日大社等への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を特別展・特別陳列に反映させるとともに、報道発表などを通して発信した。			
【年度実績概要】 ① 法隆寺金堂四天王像（国宝）について、赤外線写真による制作当初の彩色確認などの調査を実施し、その成果を特別展「国宝 法隆寺金堂展」の展示解説パネル、展覧会図録等に反映させた。 ② 奈良県を中心とする地域の西国三十三所霊場札所が蔵する主要な文化財、また長谷寺式十一面観音像及び興福寺南円堂式不空罽索観音像に関連する文化財の調査を実施し、その成果を特別展「西国三十三所観音霊場の祈りと美」に反映させた。 ③ 特別展「西国三十三所 観音霊場の祈りと美」に出陳された円教寺（兵庫県姫路市）所蔵・性空上人像のX線撮影を行って像内納入品の存在を確認し、報道発表を行った。画期的成果として多くのメディアで取り上げられ、同像は本年度、重要文化財に指定されるに至った。 ④ 当館修理所にて修理が完了した兵庫県所蔵の天部像が奈良・金峯山寺所蔵釈迦如来像と酷似することに着目して比較研究を行い、釈迦像を借用して「とてもよく似た二つの仏像」と題する特集展示を開催した。比較研究の成果は報道発表で公表し、展示解説パネル等にも反映させた。 ⑤ 春日若宮おん祭に関する文化財調査を実施し、その成果を特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映した。 ⑥ 唐招提寺の収蔵品及び同寺金堂基植発掘時における出土品（橿原考古学研究所所管）の調査を行った。その成果を21年度春季特別展「国宝鑑真和上展」に反映させた。			
【実績値】 社寺調査対象数 14			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4523-01

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 南都諸社寺等に所蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
備考 展覧会企画に沿った調査研究が中心になっており、その点では必要十分な条件を満たしている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展「国宝 法隆寺金堂展」、同「西国三十三所一観音霊場の祈りと美」に出陳した近隣社寺を中心とした所蔵品の事前調査の成果は展示及び展覧会図録に反映され、高い評価を得た。春日大社の若宮おん祭に関する文化財調査の成果は特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映された。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。20 年度も東大寺や春日大社を初めとする社寺の宝物調査を行うことにより、展覧会を活性化させ、学術的成果をあげることもできた。

【書式B】

(様式 1)

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4523-02

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果の一部で平常展の充実を図る。(奈良) ((5)-②-vii)		
【事業概要】 仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】 鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、中島博（情報サービス室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室員）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、永井洋之（企画室員）、北澤菜月（企画室員）			
【主な成果】 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究の成果を、展示及び図録等に反映させることができた。			
①平常展工芸部門において中・韓・日の舍利容器・密教法具の比較研究の成果に基づき各地域の作例の比較展示構成をした。また絵画部門では中国・日本の羅漢図及び僧侶の肖像における図像の交流・系譜に関する調査研究に基づき、「注目の逸品」コーナーの絵画部門において館蔵品の「十六羅漢像」と「大道和尚像」を比較展示した。この研究成果は関連講座でも発表された（2009年2月15日サテライト・中島博「大道和尚像」）。 ②中国・韓国・日本の文化財における建築表現の比較研究の成果を、特別陳列「建築を表現する」の展示構成・解説及び展覧会図録等に反映させた。			
【実績値】 平常展への成果の反映 5回 企画展への成果の反映 1回			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

奈良国立博物館

処理番号

4523-02

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 我が国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の特別展等に反映させるように努めている。						

2. 定量的評価

観点	平常展への反映	企画展示への反映				
判定	A	A				
備考 調査研究の成果を積極的に反映させており、その点では必要十分な条件を満たしている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	学術交流協定を締結している上海博物館（中国）・河南博物院（中国）・中国国家博物館（中国）・国立慶州博物館（韓国）との研究員の交流などをおして行った、アジア諸国を視野に入れた調査研究の成果を平常展・企画展（特別陳列等）に反映させることができた。その過程で、中国・韓国・日本の三国の作例を比較展示してその共通点・相違点を浮き彫りにするなどの工夫を行った。また絵画部門では、東アジア全域にわたって展開した、山水を背景とする聖僧のイメージの系譜を実作品に即して紹介し、羅漢図と高僧の肖像画の相互関係を明らかにする展示を行った。この成果は展示期間中に行われた講座でも公表され、やや専門的とはいえ非常に意欲的な取り組みとして、高い評価を得た点も特筆される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって 20 年度平常展及び特別陳列「建築を表現する」の内容を充実させることができた。今後も引き続き調査研究を続け、その成果を展示に反映していく必要がある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 高齢者・障がい者・外国人の利用者に対しての、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの改善、改修方策についての調査研究 ((5)-②-i)		
【事業概要】 ユニバーサル・ミュージアムという観点から、高齢者・障害者・外国人等、多様なニーズを持った来館者に快適な鑑賞環境を提供するため、設備・サイン・演出・運営等、総合的に研究と実験を行い、すべての人が利用しやすい快適な観覧環境づくりを目指す。			
【担当部課】	総務課	【プロジェクト責任者】	総務課長 樋口理央
【スタッフ】 総務課施設係主任 安藤英崇			
【主な成果】 ベンチの設置により、お客様からのアンケートや、監視員に寄せられる意見で、「休憩場所が少ない」という意見が激減した。これは、お客様の満足度が向上したことであると判断している。また、スロープやオストメイト対応設備によるハード面の整備が、より一層進んだ。サインの改善についても、誘導性が向上したことはもとより、景観面の向上も図ることができた。			
【年度実績概要】 九州国立博物館は開館して3年目を迎えた。以前からお客様よりアンケートで寄せられる意見では、エントランスホールに休憩のためのスペースが少ないという意見が圧倒的に多かった。当館の1階エントランスホールは4層吹き抜けで床面積1500㎡を超える多目的利用可能な大空間であり、来館者が集い・交流するスペースであるため、休憩スペースの増設は急務の課題であった。既存のベンチが10台あったが、これらのベンチと場所を分離して、新たにベンチを10台増設した。これにより、約30人分の休憩スペースを新たに確保できた。これ以降、休憩場所が少ないというような声もほとんど聞かなくなった。利用状況は年配のお客様を中心に非常に多い。エントランスホールでのイベントが毎週のように行われているため、イベントのレイアウトにあわせて、ベンチの位置も適宜変更している。 館内には救護室が1階、3階、4階（お客様が利用するフロア）に配置されているが、4階の救護室は入り口の手前に階段があり、車椅子利用者に対してバリアフリーではなかった。当館は車椅子を利用するお客様が多いため、この段差を解消するためにスロープを設置した。 オストメイト（人工膀胱、人口肛門）対応の水栓器具を1階、3階、4階の多目的トイレに設置した。平成18年に改正されたバリアフリー法では、既存の博物館についても、バリアフリー法の基準に適合させるように努力義務が課せられており問題点を順次、改善している。 サインについては、開館以降お客様からの苦情や指摘がある都度、貼り紙やスタンドサインを場当たりに増やしてきた経緯があり、表現や色彩に統一感がなく、秩序立っていなかったが、それらのサインは一度全て撤去した。その上で、新たに設置するサインはデザインを、当館のイメージカラーに統一しているところである。また、今後は九州大学との共同研究等により、更なるサイン、利用者の視点に立ったレイアウト等順次改善していく予定である。			
【実績値】 お客様アンケートで寄せられた休憩場所に関する意見の件数 H18－15件 H19－13件 H20－5件			
			
			1F エントランスに設置したベンチ
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4524-01

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	—					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	快適性の向上を目指した取り組みにより、来館者の側に立った状況把握に努めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	施設のバリアフリー化が着実に進行した。入館者の立場に立ち、利用者の要望を取り入れながら、更に快適な観覧環境づくりを進めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 音声ガイドのコンテンツ評価と検証 ((5)-②-ii)		
【事業概要】 当館では外国人観覧者に対する展示解説は、音声ガイド（無料）により提供している。昨年度に来館者の利用実態や評価について追跡調査とアンケート調査を実施した。展示内容に対する理解度と満足度を向上させるためには、既存のコンテンツを改良することと、新しいコンテンツを作成することが考えられた。今年度は前年度の評価に基づいたコンテンツ案を試行し、さらにその評価と検証をおこなった。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示課長 赤司善彦
【スタッフ】 赤司善彦（展示課長）・河野一隆（文化交流展室長）・永野間一成（総務係長）、九州大学大学院芸術工学府金大雄研究室			
【主な成果】 展示解説コンテンツの改善を通じて来館者の満足度向上を試みた結果、来館者の展示物での滞在時間が前回の実験時より長くなり、また音声解説の聴取時間も長くなった。これまでの調査分析から問題点の見つけ出し、改善を行った結果、来館者の展示室滞在時間が長くなったことは、来館者の展示に対する理解と博物館体験の満足度向上に繋がったものと考えられる。			
【年度実績概要】 ・音声ガイドコンテンツの速度検証 被験者を対象に、それぞれ解説速度が異なる音声解説コンテンツを聴取し、聞き取りやすさに関するアンケート調査を実施した。韓国語の音声解説において多数が、適切な解説速度として、既存の解説速度（約245文字/分）より、1.2倍早い解説速度（約294文字/分）がもっとも好まれていることが分かった。以上の結果から、シナリオ作成後のナレーション収録において、聞き取りやすい適切な解説速度を十分に計画し、積極的に反映する必要があると考えられる。 ・BGMの検証 展示観覧において音声解説機器を利用した来館者に対し、BGM（背景音楽）のある解説コンテンツが展示鑑賞に与える影響を調べることにした。アンケート調査は、BGM付きの解説コンテンツに対する来館者の満足度、コンテンツとの調和性、観覧集中度に関する質問で構成。また、BGMを挿入した9件の解説コンテンツを聴いた外国人来館者とBGMが挿入されていないコンテンツを聞いた来館者の展示物での聴取時間を比較・分析し、展示集中度の差を調べた。 ・対話式シナリオの検証 携帯型音声解説機器による、展示解説の充実化を図るとともに、会話式解説コンテンツが来館者に与える影響について検討した。アンケート調査は、会話式解説コンテンツの分かりやすさに関する質問と説明式解説コンテンツとの選好度に関するアンケート調査を実施した。 ・来館者行動ログデータ取得システムによる評価 アンケート調査や追跡観察調査、そして赤外線システムからの来館者行動分析などの考察を踏まえて、改善された展示解説コンテンツに対して再評価を行った。			
【実績値】 ・音声ガイドコンテンツの速度検証 被験者25人（19才未満5名、20歳～35歳5名、36歳～50歳5名、51歳65歳5名、65歳以上5名） ・BGMの検証 アンケート参加者328人のうち、有効回答者数322人（外国人107人、日本人215人） ・対話式シナリオの検証 参加者・有効回答者数 同上 ・来館者行動ログデータ取得システムによる評価 携帯型音声解説機器を使用した外国人及び日本人の来館者。外国人来館者36人（英：16人、韓：12人、中：8人）、日本人来館者53人			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名

九州国立博物館

処理番号

4524-02

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 音声ガイド等の機器類に対する来館者の利用実態や評価について調査した例はこれまであまり知られていない。数多く展示作品情報の中から、文化的背景のちがう国の来館者に適切な解説情報を提供することが、来館者の満足度を向上させるには必要である。その点で本研究は大いに注目できる。						

2. 定量的評価

観点	音声ガイドコンテンツ の速度検証	BGMの検証	対話式シナリオの検証	来館者行動ログデータ 取得システムによる評価
判定	A	A	A	A
備考 アンケート参加者 328 人のうち、有効回答者数 322 人（外国人 107 人、日本人 215 人）から有益なデータを得ることができた。本調査の主旨からすれば、来館者のニーズを知る上で充分である。				

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	九州大学の研究者との活発な論議をベースに、魅力的なコンテンツを作成する方策として、これまでにない視点でコンテンツ作成を試行した。これを客観的に評価し、検証することができ、今後の魅力あるコンテンツ作成につなげるための研究を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は中期計画に沿った内容として遂行できたと考える。 21 年度以降この成果を活かした新しい音声ガイドコンテンツを制作することにしたい。